Linguistic Geography of Chinese Dialects by Use of a Newly Developed Computer System "PHD"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Iwata, Rei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034744

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中国語方言の言語地理学的研究

－新システムによる「漢語方言地図集」の作成－

Linguistic Geography of Chinese Dialects by Use of a Newly Developed Computer System "PHD"

平成16～18年度科学研究費基盤研究(B)
（課題番号：16320051）
研究成果報告書－第２分冊

Progressive Report, Vol.1, Project No.16320051, 2004-2006,
Grant-in-Aid for Scientific Research (B)

方言地図とその解釈（1）

Dialect Maps and their Interpretations (1)

平成18年3月
March, 2006

研究代表者　**岩田　礼**
（金沢大学文学部）

Director: Ray Iwata
Faculty of Letters, Kanazawa University, Japan

中国語方言の言語地理学的研究

-新システムによる「漢語方言地図集」の作成-

Linguistic Geography of Chinese Dialects by Use of a Newly Developed Computer System "PHD"

平成 16－18 年度 科学研究費 基盤研究(B)
(課題番号 16320051)
研究成果報告書-第 2 分冊

Progressive Report, Vol.1, Project No.16320051, 2004-2006,
Grant-in-Aid for Scientific Research (B)

方言地図とその解釈(1)

Dialect Maps and their Interpretations (1)

平成 18 年 3 月
March, 2006
研究代表者 岩 田 礼
(金沢大学文学部)
Director: Ray Iwata
Faculty of Letters, Kanazawa University, Japan

研究経費　平成 16 年度　5,600 千円
平成 17 年度　4,600 千円

研究組織

研究代表者　岩田　礼（金沢大学文学部教授）
研究分担者　太田　斎（神戸市外国語大学外国語学部教授）
木津佑子（京都大学大学院文学研究科助教授）
吉池孝一（愛知県立大学外国語学部教授）
佐藤　進（二松学舎大学大学院文学研究科教授）
松江　崇（北海道大学大学院文学研究科助教授）
平田昌司（京都大学大学院文学研究科教授）
LAMARRE, Christine（東京大学大学院総合文化研究科教授）
中川裕三（愛知大学現代中国学部助教授）
三木夏華（鹿児島大学法文学部助教授）
竹越美奈子（東邦学園大学経営学部講師）
遠藤光暁（青山学院大学経済学部教授）
樋口勇夫（名古屋学院大学外国語学部教授）
秋谷裕幸（愛媛大学法文学部助教授）
遠藤雅裕（中央大学法学部助教授）
村上之伸（流通経済大学経済学部助教授）
中西裕樹（京都大学人文科学研究所助手）
竹越　孝（愛知県立大学外国語学部助教授）

研究協力者　林　智、橋本貴子、王　周明、植屋高志、
根岸美聡、加納　巧、張盛開、鈴木史己、
八木堅司、小橋優子、冨永清美

平成17年度の研究会活動

第1回研究会　　会場:北海道大学文系共同研究棟W408室

9月9日(金) 15:00～18:00
林　智　「システム構築の現状と今後の予定」
研究打ち合わせ(Ⅰ):ユーザーからの要望、討議

9月10日(土) 9:15～18:00
[午前]
村上之伸 「ソラマメ」「エンドウ」「ダイズ」の地図
鈴木史己 「じゃがいも」「とうもろこし」「キャベツ」の地図
松江　崇 「太陽」「月」の地図
三木夏華 「歩く」「走る」の地図
[午後]
中西裕樹 「ヒル」の地図
橋本貴子 「カタツムリ」の地図
根岸美聡 「入声韻尾」の地図
竹越美奈子 「在」「着」の地図
樋口勇夫 「否定辞」「“牛”の語音」の地図

9月11日(日) 9:00～16:00
[午前]
中川裕三 「禽獣の類別詞とウマの類別詞の関係について」
山本恭子 “民俗境界線の試み:婚礼・葬礼の地図”
王周明 “「有」字比較文の成立に関わる諸要素”
岩田　礼 「マラリア」の地図
[午後]
研究打ち合わせ(Ⅱ)
① 地図作成項目と担当者
② 報告書の作成について

その他の出席者:　大田斎、遠藤光暁、木津裕子

第2回研究会
1月28日 9:00～16:00　　会場:金沢大学文学部会議室
乔全生 「晋方言(曾)梗通摄白读层的历史」*
刘勋宁 「一个中原官话中曾经存在过的语音层次」**
沈力 「北京话语气助词ZHE2的来源」***

秋谷裕幸「福建尤溪县中山方言简介」
村上之伸「調類の地図」
八木堅二「方言地図「虱子」(しらみ)の分析」
橋本貴子「论南方的“蜗牛”」
加納巧「“癞蛤蟆”的地图」

* 山西大学教授
** 筑波大学教授
*** 同志社大学助教授

その他の出席者：岩田礼、太田斎、遠藤光暁　中西裕樹

目　次

まえがき

1. 加納 巧
「がまがえる」の地図 ……2-10
2. 橋本貴子
「カタツムリ」を表す語形について ……11-25
3. 中西裕樹
「ヒル(水蛭)」の地図 …… 26-31
4. 八木堅司
方言地図「シラミ」の分析 ……32-41
5. 村上之伸
ダイズ、アズキ、ソラマメ、エンドウの語形中の“大”と“小”について …… 42-51
6. 鈴木史己
「ジャガイモ」「サツマイモ」の地図 …… 52-64
7. 小橋優子
「くるぶし」とその関連語彙 …… 65-74
8. 三木夏華
動詞「あるく」、「はしる」を表す語形について…… 65-76
9. 遠藤雅裕
漢語顔色詞的地理分布 …… …77-86
10. 中川裕三、冨永清美
漢語諸方言におけるウマの類別詞について
－禽獣類別タイプとの関係を中心に－ ……87-99
11. 竹越美奈子
進行・持続表現 …… 100-114
12. 山本恭子
民俗項目の地域差－安徽・江蘇・浙江三省の婚礼・葬礼を例として－ …… 123-149

---

*分担者以外の執筆者
加納巧、橋本貴子：神戸市外国語大学大学院外国語学研究科博士課程
八木堅司： 京都大学大学院人文科学研究科修士課程
鈴木史己：京都大学文学部学生
小橋優子：金沢大学文学部学生
冨永清美：愛知大学大学院中国研究科修士課程
山本恭子： 愛知県立大学大学院国際文化研究科修士課程

まえがき

本科研プロジェクトの目的と手法については、昨年度の「研究成果報告書－第1分冊」(2005年3月)収録の下記二編で略述した。

1. *Iwata, Ray*, Linguistic Geography of Chinese Dialects by Use of a Newly Developed Computor System "PHD" - History, Aim and some controversial issues -.
2. *Hayashi, Tomo*, Introduction to the PHD System.

1989年より着手した漢語方言地図の作成作業は、その後、平田科研、遠藤科研、太田科研と、テーマを異にするプロジェクトの中でも重要な一翼を担ったが、いわば"還暦"を迎えた今回、再び私が全体の指揮をとることになった。従って漢語方言地理学をテーマとした総合的なプロジェクトはこれが最後であり、この後はない。

三年前に研究の場を金沢に移した時、その中文研究室に林智君がいたことは、我々の研究手法の大転換を促した。彼の開発になる"PHD システム"は、XML ベースの先端技術を駆使したもので、すべてのデータ(方言資料データ、言語データ、地図データ)がサーバー蓄積される。ユーザーはネット環境さえあれば、世界のどこにいても、サーバーにアクセスし、作業を行なうことができる。しかしながら先端的手法の開発には困難とそれに伴うトラブルもつきものなのであろう。昨年来、サーバーOS の問題に起因して、リモートユーザー側との通信インターフェースが十全に機能していない。個々のツールはほとんど完成しているが、それらをいわばつぎはぎで使っているのが現状である。また開発、サポートスタッフが一人しかいないというのは致命的でさえある。

昨年度は、従来の科研プロジェクトで蓄積してきた方言資料データと言語データを基幹データベース群に組み込むのに相当の時間を費やした。しかしその結果、今年度はメンバーに言語データの入力作業と地図作成作業に集中していただくことができた。本書に収めた12篇の論考は、山本恭子氏のものを除き、PHD システムによる地図作成の実例である。今回は敢えて地図の「解釈」を展開することとした。それぞれなお premature な部分もあろうが、複数項目を一枚の地図に表現する、音声情報を十分に考慮する等、本システムの特性を生かした進展がある。山本氏の研究は、独自の地図を使用しているが、グロータース神父による民俗地理学と平田科研の精神を受け継ぐものである。

来年度はいよいよ最終年度となるので、言語データの充実となによりも言語地理学的な批判に耐えうるような地図の作成に努めたい。

岩田　礼

「がまがえる」の地図

加納　巧

1. はじめに

本稿では、「がまがえる」を指す語形を地図上に表示し、それぞれの語形の分布を概観する。また、「蛤蟆」系第一音節の声母の分布、および「格宝」系が「蛤蟆」系の南下によって分布地域が分断されABA分布を呈している様子も見る。

2. 分類の方法

本項目では、参考として「かえる」のデータから作成した地図1枚を含め、計5枚の地図を作成している。

地図1　がまがえる（がまがえるの語形分布一覧）

地図1では、各語形を以下の17類に分類した。

蛤蟆：癩蛤蟆、疥蛤蟆など
蟾蜍：蟾蜍
格宝：癩格宝など
蛤(kap)：蛤（[kap]もしくはこれに類似した音声形式）
Kamky/Kamsy：蟾螋もしくは蟾蜍
蛄子：癩蛄子など
巴子：癩巴子、疥巴(疤)子など
猴子：癩猴(猴)子など
疥蛤子：疥蛤子
癩団：癩団
癩白高：癩白高など
癩宝：癩宝(包)
癩司：癩司、癩死蛤宝など
癩漿宝：癩漿宝(包)
疥蛤子：疥蛤子
拐：麻拐、拐子など
気鼓：気鼓(鼓)

「蛤蟆」系の「蛤」にあたる部分の声母には、[x-]（[xa ma] 安徽省合肥市）、[ɣ-]（[læ ɣa mo] 湖南新化）[h-]（[lai ha ma] 江西南昌）[k-]（[ka ma] 湖南省長沙市）、[k^h-]（[k^hɤ ma]湖北省武漢市）、[g-]（[lɛ gɑ mɑ] 浙江常山）[ɕ-]（[lɛ ɕia ma] 江蘇南京）などが観察されるが、これらはいずれも同源のものと判断しひとつの記号で示した。地図2で蛤蟆系の「蛤」にあたる部分の声母に着目した地図を作成している。

「蛤蟆」系以外の語形については、基本的に語形そのものに着目している。たとえば、「蟾蜍」系の音声形式には[tsaŋ tsy]（福清）、[tsiũ tsi]（晋江、平和）などがあるが、これらはいずれも「蟾蜍」系としてまとめている。

また、蛤(kap)系に分類した語形は、すべて「蛤」が[kap]もしくはこれに類似した音声形式で表されているものである。

地図2　がまがえる蛤蟆系（「蛤蟆」系第一音節の声母の分布）

地図2では、「蛤蟆」系の第一音節の声母に着目し、その音声形式によって以下のように7類に分類した。

[x-]：第一音節の声母が[x-]のもの
[ɣ-]：第一音節の声母が[ɣ -]のもの
[h-]：第一音節の声母が[h-]のもの
[k-]：第一音節の声母が[k-]のもの
[k^h-]：第一音節の声母が[k^h-]のもの
[g-]：第一音節の声母が[g-]のもの
[ɕ-]：第一音節の声母が[ɕ-]のもの

地図3　かえる蛤蟆系（「かえる（青蛙）」における「蛤蟆」系第一音節の声母の分布）

『現代漢語辞典』では「蛤蟆」は“青蛙和蟾蜍的统称（p. 488）”とある。ただし、「がまがえる」を指す場合は「癩」もしくは「疥」を接頭辞として伴っている地点が大半である。この地図では、地図2をの空白部分を補うために、「かえる（青蛙）」における「蛤蟆」系第一音節の声母の分布を示した。

地図4　「蛤蟆」系と「格宝」系

地図4では、「蛤蟆」系と「格宝」系のみを表示することにより、「格宝」系が「蛤蟆」系によって分布地域が分断され、ABA分布を呈している様子を示した。

地図5　接頭辞「癩」と「疥」

地図5では、各語形につく接頭辞「癩」・「疥」について着目し、その分布を示した。

3. 地理的分布の特徴

3-1. 蛤蟆系

蛤蟆系は北方地域のほぼ全域と湖南省および江西省を中心にほぼ全国的に分布が見られる。

蛤蟆系の第一音節の声母の音声形式について、主な形式の分布は以下のとおりである。

[x-]：長江以北を中心にほぼ全国的に分布
[ɣ-]：湖南省に3地点（新化、祁陽、東安）
[h-]：江蘇省、浙江省、福建省西部、江西省、湖南省など
[k-]：浙江省、湖南省、山西省など
[k^h-]：安徽省・湖北省・湖南省の長江流域中心
[g-]：浙江省と江西省の境および江西省
[ɕ-]：南京および桂林

[h-]について、この形式を持つ方言は一般的に[x-]と[h-]の対立を持たない。このことから、[h-]と[x-]を同源とみなすことも可能であろう。しかしながら、江西省の[h-]型は、[k-]および[k^h-]型によって囲まれており、このことからこの変化は江西省の方言独自のものであり、北方の[x-]型の影響であるとは考えにくい。

また、同じ[h-]型の江蘇省南部および浙江省北部については江西省との間に[k-]、[g-]型が分布しており、このことから江西省での変化との関連は考えにくい。この地域には後述

するように「癩団」、「癩司」などの形式があり、本来はこれらのような形式が固有の形式としあったところに、蛤蟆系の語形が後になって標準語形として入ってきたものと考えられる。

[g-]で始まる形式を持つ地点のうち、江西省都昌、星子、永修について、この地方の特徴として有気音の声母を持たず、かわりに有声音で現れる。このため、これらの地方は実際には[kʰ-]に属すると考えることができる。

[kʰ-]型について、「かえる（青蛙）」における蛤蟆系の音声形式を見てみると、第一音節が[kʰ-]であるものがさらに西にまで分布しており、四川省・貴州省にまで及んでいることがわかる。

3-1-2. 「蛤」が有気音で現れることについて

「蛤」は普通話では[xa]と[kɤ]の二通りの音声形式があり、これらはそれぞれ中古音では匣母、見母に属する。これらの字母における声母の中古音での推定音価はそれぞれ[ɣ-]、[k-]であり、自然な音韻変化から[kʰ-]への変化を導き出すことは困難である。

では、なぜこれらの地域では「蛤蟆」系の「蛤」が有気音で現れるのであろうか。

地図2および3を見ると、「蛤」が[k-]型または[kʰ-]型などの閉鎖音で現れるのは、山西省を除けば長江以南である。長江以南には「格宝」系が分布しており、「蛤蟆」系が南下する過程において、「格宝」系との衝突があったであろうことは十分予想できる。

自然な音韻変化から[kʰ-]型を導き出そうとすれば、「蛤」の声母が[g-]型でしかも舒声で現れる必要があるが、匣母、見母から[g-]型への変化を導くのは困難であり、何かしらの特別な変化を設定する必要がある。

ここでは、「蛤蟆」系と「格宝」系との衝突による変化の可能性について考えたい。つまり、いずれの語形も「がまがえる」を指すことから、二つの語形が衝突した際に何らかの変化が起こって「蛤」の声母が[g-]型に変化したのではないかという仮説である。実際、浙江省の4地点（臨安、玉山、常山、開化）で「蛤」にあたる部分の声母が[g-]型で現れていることが、上述のような変化がまったく不可能ではないことを示唆しているものと思われる。

浙江臨安：癩司蛤蟆 [la sʅ gu mo?]
浙江玉山：癩皮蛤蟆 [lai bi gɑ mɑ]
浙江常山：癩蛤蟆 [lɛ gɑ mɑ]
浙江開化：□蛤蟆 [loŋ gɔ mɔ]

3-2. 蛤蟆系以外の語形（除「格宝系」）

南方に分布する蛤蟆系以外の語形は、格宝系を除き、ひとつの語形の分布が、ある特定の地域に集中している場合が多い。それぞれの分布状況は以下のとおりである。

巴子系：山東省東部および東北地方の一部に分布
猴子系：安徽省および江蘇省揚州、江都など
蛤子系：北京および武清（天津）

蛄子系：安徽省および江蘇省の長江付近から長江以北にかけて分布。

Kamky/Kamsy系および蛤(kap)系：広東省を中心に分布。Kamky/Kamsy系の両脇に蛤(kap)系が分布している。

拐　系：湖南省南部および江西省に分布が見られる

気鼓系：銅山（江蘇）、開化（浙江）、大理（雲南）。この語形は、おそらくはがまがえるが外敵を威嚇するために体を膨らませた様子から生まれたものであろうと思われる。この語形を持つ地点はかなり離れており、このためそれぞれの地域で独自に形成された語形がこれら三地点で偶然に一致したのではないかと思われる。

癩　司：浙江省北部。“癩司蛤蟆 [la sʅ kəʔ poʔ]（浙江余杭）”など格宝系の語形と合わさった形も見られる。

癩白高：江蘇省南部および西充（四川）。西充では、“癩狗巴[lɑi giu pa] / 癩巴狗 [lai pa kiəu]”という順番の入れ替わった二つの語形が記録されている。このことから推測すると、この語形は、後述する格宝系の語順が入れ替わった可能性がある。

癩　包：江蘇省南部のほぼ長江北岸沿いに分布

癩　団：江蘇省南部、長江以南の地域に分布。

江蘇省南部には、分布がそれぞれ特定の地域に固まっているが、「蛤蟆」、「癩格宝」、「**癩団**」、「**癩包**」、「**癩司**」、「癩白高」の合計6種類の語形がこの地域で見られることになる。

3-3. 格宝系について

この語形は浙江省、四川省・貴州省を中心に分布し、ABA分布を呈している。この語形は蛤(kap)系が何らかの理由で二音節化したものと思われる。広東澄海および潮州に、それぞれ“蛤婆 [kak po]”、“蛤婆 [kap po]”という語形があり、このようは形式から「格宝」のような形に発展したのであろう。ただし、「かえる（青蛙）」では「格宝」のような語形は見られない。

また、江蘇省南部および浙江省に見られる格宝系の語形は、“格宝 [kə pau]”（浙江金華）よりも、“癩蛤巴 [lɑ kAʔ po]”（浙江嘉興）“癩个巴 [lA kəʔ po]”（上海嘉定）など、「蛤巴」の形式のほうが優勢である。「格宝」と「蛤巴」を異なる語形として判断することもできるが、浙江省永康に“蛤巴 [kə paU]”、江蘇省江陰に“癩狗包 [læ kei pɔ]”という語形が見られることから、「蛤巴」形式も「格宝」と同源であると判断した。

格宝系がABA分布を呈していることについて、長江以南の広い地域に分布していたのが、北方からの蛤蟆系の進出に伴い、湖北・湖南・江西などの地域での分布が塗り替えられ、現在のような構成になったのであろう。湖北省や江西省の一部に格宝系の語形が見られることも、上述の推定を支持するものとおもわれる。

湖北安陸：癩格宝 [nai kə pau]
江西峡県：癩家坡 [lai ka pʰɔ]

格宝系の最後の音節が [pau] で現れるのは主に中国西南部であり、東南部では現れない。中国には「三本足の金のがまがえるは銭を吐く（三脚金蟾会吐钱）」という伝承があり、がまがえるは富をもたらす縁起物となっている。

格宝系において、主に中国西南部において [pau] となるのは、格宝系が蛤蟆系に分断されて以降、中国西南部においてがまがえるが縁起物であるという民間信仰から最後の音節が [po] から [pau] へと変化したのではないかと考えられる。山東省牟平の「蛤巴子财主 [ciar pɑ tə tsʰai tɕy]」、雲南省の「癩漿宝」系、江蘇省南部に分布する「癩宝」系なども、同じような発想から生まれてきたものと思われる。

上述の議論から、蛤(kap)系から格宝系にいたるまでの変化の過程は以下のように推測できる。

蛤[kəp] → 蛤婆[kəp po] → 癩蛤巴 [lai kə po] → 癩蛤宝[lai kə pau]

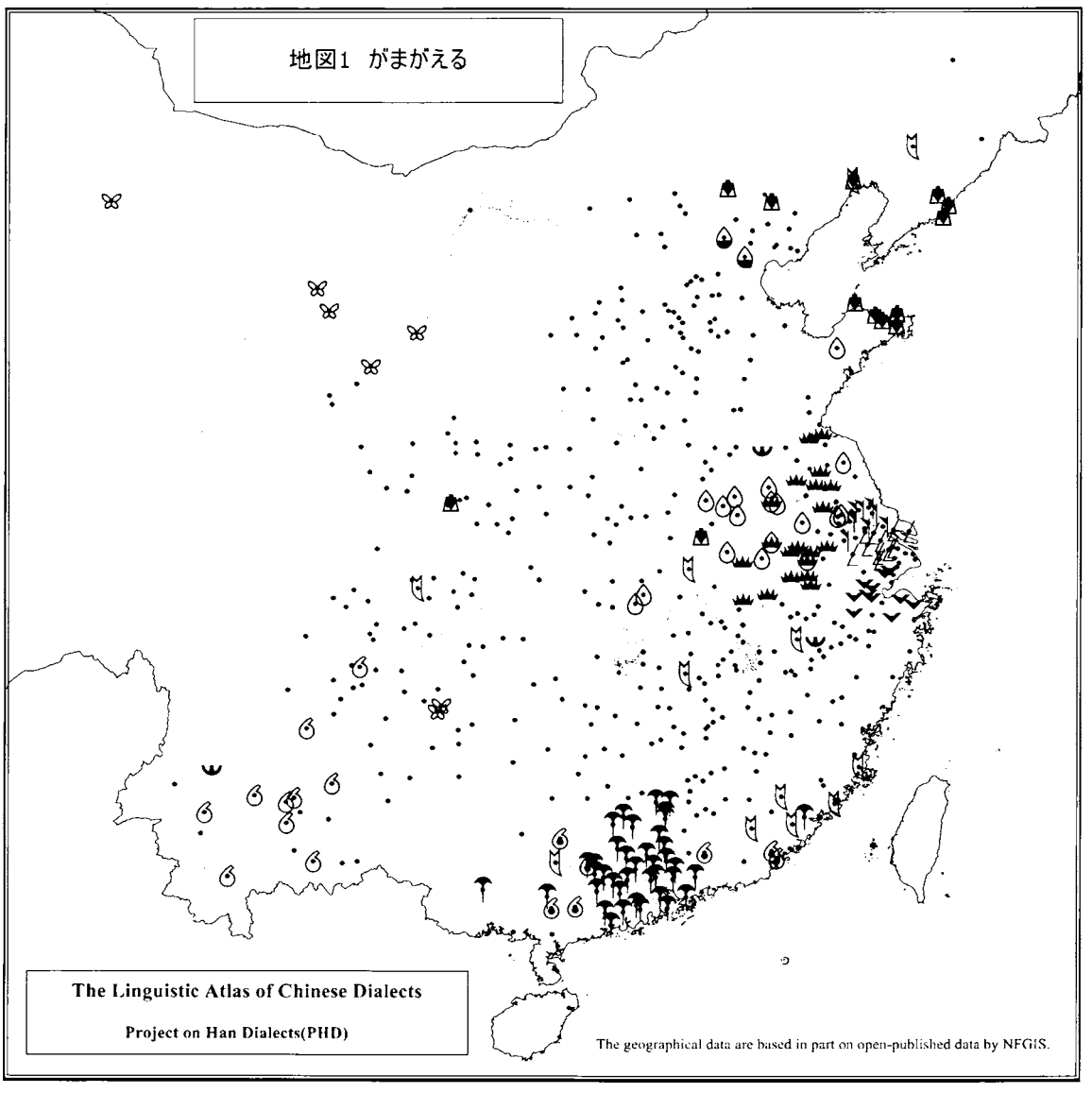
3-4. 接頭辞「癩」と「疥」について

接頭辞は、「癩」、「疥」もしくはこのような接頭辞がつかない形式（ゼロ形式）である場合がほとんどである。それぞれの分布は黄河を中心にして「癩」と「疥」の分布が分かれていることが伺える。このうち、「癩」は標準語形に現れるため、黄河以北の地域、例えば東北・西北地域にも分布が見られる。これに対して「疥」は河北・山西・山東省および陝西省南部に分布している。

また、「癩疥蛤蟆」のように、癩・疥の両方がついている形式は、湖南省瀏陽・江西省萍郷および浙江省臨安において観察される。この地域の接頭辞は「癩」が優勢であり、なぜこの2地点にのみ「疥」が観察されるかはわからない。また、いずれの地点においても「癩」・「疥」の順序であり、「疥癩」の形式は見られない。このことから、このような形式が現れる地域では、「疥蛤蟆」が初めにあり、この形式が「疥＋蛤蟆」ではなく固定した表現としてとらえられ、その上にさらに「癩」がついたものと予想される。しかしながら、上述のとおり「癩疥蛤蟆」が現れる地点の周辺には「疥蛤蟆」という語形は現れないため、先にこの地点で「疥」が現れる原因を明らかにしなければならないが、これについては明らかにすることができなかった。

参考文献

现代汉语词典（2002年增补本），中国社会科学院语言研究所词典编辑室编，商务印书馆，2002年



- 蛤蟆
- 蝲蛄
- 格宝
- 癞浆宝
- 蛤（ kap ）
- 癞白高
- kamsy/kamky
- 蛄子
- 巴子
- 猴子
- 疥蛤子
- 癞团
- 癞宝
- 癞司
- 癞呱呱
- 气鼓

地図2 がまがえる蛤蟆系
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

x-

ɣ-

h-

k-

kh-

g-

ɕ-

地図3 かえる蛤蟆系
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

x-

h-

k-

kh-

g-

ɕ-

地図4 蛤蟆系と格宝系
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

蛤蟆

格宝

蛤

「カタツムリ」を表す語形について

橋本貴子

０．はじめに

「カタツムリ」“蜗牛”は高温多湿の季節に現われる、有肺類に属する軟体動物の一種である。体の表面は粘液で湿り、頭上に二本の長い触角を持ち、巻いた貝を背負っている。その形状から「カタツムリ」の語形には、「ウシ」や「タニシ」「ナメクジ」などの要素が現われることが多い。しかもそれは南北によって異なり、北方であれば「ウシ」、南方であれば「タニシ」や「ナメクジ」となる。このように「カタツムリ」の語形には南北の対立を見ることができるので、北方の語形と南方の語形とに分けて地図を作成した。以下では、各地図における分布状況から若干の解釈を試みたいと思う。

１．北方の語形について

１．１．地図Ａ、地図Ｂの説明

まず、北方の語形における修飾成分について論じる。北方では普通話の語形“蜗牛”のように、語幹“牛”に修飾成分を付加するタイプの語形が圧倒的である。地図Aは語幹“牛”を持つ語形およびその関連語形の修飾成分について、中でも声母に着目して作成した地図である。比較的多数を占めるのは、やはり「修飾成分＋牛」というタイプであるが、山西省や河北省の一部の地域では、「牛＋修飾成分」のように修飾成分を後置するタイプの語形も見られる。地図ではこれらを分けて示すことにした。また“毛牛儿蜗”、“水牛蜗儿”、“水牛盘盘” などのように、修飾成分を一つに限定できない場合は、はんこを重ねて示しておいた。以下、各種語形の表示に当り、“蜗(k-)”で蜗の声母が k-であるもの、“蜗(-u-)”で蜗がゼロ声母で介音-u-で始るもの（及びそれに類するもの）を示した。“p-牛”、“m-牛”は第一音節がそれぞれ、p-声母のもの、m-声母のものを意味し、“牛 p-”、“牛 m-”は第二音節がそれぞれ、 p -声母、m-声母のものを意味している。“s-n 牛” は第一音節声母が s -系で、かつ鼻音韻尾を有するものを示す。他、これに順ずる。

＜地図A＞

蜗(k-)牛：　蜗牛 [kua ȵiəu]、呱牛、緺牛、锅牛、蜗牛长角、蜗蜗牛[kua kua ȵiu]、挂挂牛、呱呱牛、瓜瓜牛、卦卦牛、光光牛、冠牛、官牛、水观牛　など

牛蜗(k-)：　牛牛刮、牛牛根儿、牛牛哥　など

蜗(-u-)牛：　蜗牛[uɔ niəu]、蛙牛、蛙挠儿、瓦牛子、洼流儿、蜗蜗牛　など

牛蜗(-u-)：　牛牛蜗儿

p-牛：　巴牛、巴巴牛儿、拔牛儿、毒八牛子、水搬板牛儿　など

牛 p-：　牛胖胖、水牛盘盘、牛包儿

m-牛：　牤牛儿、虻牛、蟆牛、水摸牛、马牛、牤牤牛　など

牛 m-：　牛口儿[niou mər]、牛牛出门儿、牛咩咩、牛牛曼儿　など

s-n 牛: 桑牛、香牛豹得、商牛、想牛牛、相蚰儿、伤牛蛋、伤狗 など
p-l-: 波螺牛子、巴拉牛子、笆箩牛子、脖拉牛子、瘪拉牛儿、包唠鱼子、棒螺螺牛、抱螺螺、角波螺、刺尿波罗、土波螺、毒布螺 など
k-l-: 蛤拉牛儿、蛤蜊蚰、嘎拉牛、蛤螺出角、草蛞蝓 など
u-l-: 蜗拉牛子、屋楼牛、乌老牛子、屋拉牛、乌老牛子、雾露牛子、旱屋蝓など
m-l-: 磨郎牛、摸楼浆子
牛(その他): 牛、牛儿、牛子、牛牛儿、水牛、旱牛牛、天牛
(ɣ)ə: (2 章を参照)

地図Bは地図Aの蜗(k)牛、牛蜗(k)、蜗(u)牛、牛蜗(u)の"蜗"について、その声母と韻母に着目して作成した地図である。韻母に関しては、主母音の開口度および鼻音韻尾の有無を分類の基準にしている。

＜地図B＞

蜗 kua : 蜗牛[kua ȵiəu]、牛牛刮[niou niou kua]、地蜗牛[ti kva ȵiəu] など
蜗 kuaN : 蜗牛[kuæ̃ ȵiəu]、冠牛[kuæ̃ ȵiəu]、光光牛[kuaŋ kuaŋ ɣou] など
蜗 kuə : 蜗牛[kuo ȵiou]、蜗牛[ku ȵiɯ]、牛牛根儿[niou niou kər] など
蜗 uə : 蜗牛[uo niəu]、蜗蜗牛[və və niou]、牛牛蜗儿[niɐu niɐu uor] など
蜗 ua : 蛙牛[uɑ niɵ]、打碗牛牛[tɑ vɛ niɤ niɤ]、注流儿 [uɑ liour] など

1．2．"蝸牛"の"蝸"

○蜗(k-)牛、牛蜗(k-)

"蝸牛"の"蝸"は『広韻』で二音あり、一つは「古蛙切(佳韻)」、もう一つは「古華切(麻韻)」で、いずれも見母である。訓釈はどちらも"蝸牛小螺"となっている。『十韻彙編』によれば、"蝸"は切三において麻韻にのみ所属し、佳韻には見えない。後の王二、王三では佳韻にも所属している。"蝸"が佳・麻韻の両方に所属するようになったのは後の増補によるもので、原本『切韻』の段階では麻韻にのみ所属していたものと思われる[1]。

"蝸"が古くから麻韻相当の音であったことは、魏の頃の隠者、焦先の庵の名前"瓜牛廬"が即ち"蝸牛廬"であることからも分かる[2]。『博雅音』にも「蝸 瓜」という音注が見える。慧琳『一切経音義』では「寡華反」、「古華反」、「寡花反」と麻韻相当の反切ばかりであり、佳韻に相当する反切は見られない。

なお、現代方言における"蝸"の韻母であるが、地図Bによれば、西北地方では多くがkuaである。中には太田2002が指摘するように、直後の音節"牛"の声母(n-、ȵ-、ŋ-等の鼻音)の影響によるサンディで、"蝸"が鼻音韻尾を有する、または鼻母音化した語形(漢字表記のみ記すと、例えば、光光牛、冠牛、官牛、水观牛など) も存在する[3]。一方、長江下流域および山西省中部～河

[1] 『集韻』では「古禾切(戈韻)」の音もある。
[2] 『爾雅翼』、巻 30"蝸牛"の項を参照。
[3] 太田2002、p.85の注(18)を参照。また「フンコロガシ」の連音変化については太田2003、p.35の注(1)にも例が挙げられている。

北省にかけてはkuəが分布する。

地図Aによれば牛蜗(k)が山西省、河北省に分布する(牛牛刮、牛牛根儿、牛牛哥など)。"刮"、"根儿"、"哥"はいずれも"蜗"に由来し、民間語源によってこのように解釈されたものであろう。

○蜗(u)牛、牛蜗(u)

普通話では"蜗"に対して/wō/[4]を採用している。これに類する発音の修飾成分を持つ語形を蜗(u)牛、牛蜗(u)とした。しかしながら、/wō/に相当する発音は、『広韻』や『集韻』などの韻書には存在しない。これらの語形は地図上では明瞭な分布を示さないので本来どのあたりを発祥地とする語形なのか分かりにくい。地図Bを見ると、uəは広い地域に点在しているが、南方における「カタツムリ」は、後で述べるように「タニシ」や「ナメクジ」と関係のある語形が優勢なので、南方に点在する"蜗(u)牛"は恐らく多くが普通話語形を記録した結果であると思われる。

1．3．「ウシ」との関係

○m 牛、牛 m

地図Aのm牛の中で比較的多いのは"牡牛"[5]である。これは本来「(去勢していない)オウシ」を意味する語形であるが、「カタツムリ」をも指すようになったのである。

	「カタツムリ」		「オウシ」	
邯郸	虻牛	←	犍子、虻牛、虻犍	市志 893
汤阴	牡牡牛	←	牡子	县志 558
武陟	牡牛儿[mɒʔ ɣə]	←	牡牛[mɒʔ ɣou]	县志 514
镇平	虻牛[maŋ ɣɯr]	←	牡牛[maŋ ɣou]	县志 942-943
山西陵川	牡牛[mɑŋ ɣəu]	←	牡[mɑŋ]	方言志 46

牛 m-は河北省から山西省北部にかけて分布している。

获鹿	牛口儿[niou mɐr]、牛牛出门儿[niou niou tʂʰuo mər]	方言志 118
平谷	牛咩咩[niou miɛ miɛ]	方言研究 180
唐县	牛牛曼儿[ȵiou ȵiou mʌ ɚ]	县志 749

河北省、山西省には見当たらないが、山東省では「コウシ」"牛犊"を以下のように呼ぶことがあるので、牛 m-が「コウシ」の語形に由来している可能性も考えられる。

莱西	牛咪儿[ȵiəu mir]	县志 871
莘县	牛妈儿[ȵiə mar]	县志 528
招远	牛咩子[niəu mie tsɿ]	县志 821

○水牛、s-n 牛

山西省南部の"商牛""想牛""桑牛"などは、"水牛"または「メウシ」"牝牛"を意味する"ʂʅ 牛、ʂa

[4] ピンイン表記の場合は/ /で括ることにする。以下同様。

[5] 「オウシ」"牡牛"を"牡牛"と呼ぶ地域は多いが、『広韻』、『集韻』に"牡"は収録されていない。

牛”に由来すると思われる。例えば山西陵川では「メウシ」を善牛[ʂɜ̃ ɣəu]と言う(方言志 p.46)。修飾成分“商”、“想”、“桑”が鼻音韻尾を持つのは、すでに述べたように“牛”の声母の影響でサンディを起こしたためである。

1．4．山東省の x-l-型

山東省ではほとんどが x-l-型修飾成分の語形で、北半分に p-l-、南半分に u-l-が分布しており、時折 k-l-が見られる。

○p-l-

山東省の北半分に分布するp-lは『爾雅』巻九・釋魚・第 16「蚹蠃、蜾蠃(郭璞注:即蝸牛也)」[6]の「蚹蠃」に由来するものであろうか。『広韻』において“蚹”は符遇切(御韻並母)なので、規則的な変化に従えば、“蚹”は軽唇音化してfuのようになるところである。もしp-lが“蚹蠃”に由来すると言えるのであれば、常用語彙であることによって軽唇音化をまぬがれたことになる。

○k-l-

「カタツムリ」、「タニシ」、「貝」を表す語形の指示対象に混乱が見られることは、太田 2003 に指摘されている通りである[7]。ここでは「カタツムリ」k-lの例を挙げておく。

	「カタツムリ」		「タニシ」や「貝」	
临清	蛤拉牛儿 kə la niəur	⇔	蛤拉 kə la (蚌类通称)	方言志 104
景县	嘎拉牛	=	嘎拉牛(哈蜊)	县志 818

地図Aによれば、k-l-は p-l-の分布域にいくらか点在している。この k-l-は本来 p-l-だったのが、「タニシ」や「貝」(ハマグリ等)を意味する“蛤蜊”、“蛤蜊”との混交によって、声母が p-から k-に変化したのではないだろうか。

蜗(k-)牛と p-l-の接触によって k-l-が発生したという解釈ではどうか。k-l-の k-に当る音節は、多くが合口介音を脱落させ、しかも主母音が広く、ka (la)となっている。周辺に存在する蜗(k)牛は二地点のみで、いずれも kuə であるから(地図B)、k-l-と蜗(k-)牛に連続性を考えることは難しい。

よって現時点で考え得るこの二つの解釈を比較すれば、前者に圧倒的に説得力がある。

○u-l-

u-l-は山東省南部、河南省東側の一部に分布する。その中に、“雾露牛子”という語形があるが、本来 p-l-牛であったのが、民間語源によって「こぬか雨」を意味する“雾露毛(子)”に関連付けられたものと思われる。

	「カタツムリ」		「こぬか雨」	
沂南	雾露牛子[u lu ȵiəu tθɿ]	←	雾露毛[u lu mɔ]	县志 609
沂水	雾露牛子	←	雾露毛	省志 298、354

---

[6] 周祖謨『爾雅校箋』江蘇教育出版社 1984 年、p.142。

[7] 太田 2003、pp.107-108 を参照。

u-l-が k-l-からの変化である可能性については、青島“草咕嚕”、膠南“草蛄蝼”という語形があるが、他に報告例がないので、u-l の前段階の語形に k-l-を考えるのは難しい。

１．５．地図Ｃ、地図Ｄの説明

北方では“牛”という要素が「ずんぐりした虫」、「丸くうずくまった虫」を指す傾向があり、「カタツムリ」を表す語形に「ウシ」“牛”が含まれるのも、その一つの例と考えられる[8]。更に、二本の角を出した様子が「ウシ」“牛”に似ていることも大いに関係あるものと思われる。

本節では“牛”について論じるにあたり、「カタツムリ」を表す語形に見られる“牛”の発音、更に「ウシ」“牛”について、それぞれ方言地図を作成した。以下では二つの地図を比較することによって、“牛”の音変化の理由について考察を試みようと思う。

＜地図Ｃ＞

ŋiəu: [ŋiʌu]、[ŋi]

niəu: [niou]、[ɳiəu]、[niʌ]、[niɐu]、[niəɯ]、[ɳiɯ]、[niei]、[ɳiɤu]、[niaɔ]、[ɳiɵ]、[ɳiəʊ]、[ɳøʏ]、[ɳʏ]、[ɳɛɤ] など

liəu: [liəu]、[liɤɯ]、[liou]、[lieu]、[liɵ] など

iəu: “牛” …[iəu]、[iou]、[io]
“蚰”・“油” …[iou]、[iəu]

ŋəu: [ŋəu]、[ŋou]、[ŋu]、[ŋai]、[ʊ ŋe]、[ŋau]、[ŋɐu]、[ŋʌu] など

ɣəu: [ɣəu]、[ɣou]、[ɣə]

əu: [əu]、[ou]

(ɣ)ə: 恶子 [ɣɤ tsɿ]、恶支[₌ɣər tʂɿ]、恶蛭/ē zhí/、蛾子[₌ɣə tsɿ]、蛾蛭儿/e zhir/、蛾老支/é lǎo zhī/、阿子[₌ɤ tsɿ]、旱鹅 [xæ̃ ɣɤ]、蜗儿蜗儿[ɣəɯ ɣəɯ] など

＜地図Ｄ＞

ŋiəu: [ŋi]、[ŋiɛ]、[ŋiɛi]、[ŋieu]、[ŋiɛu]、[ŋiəu]、[ŋiu]、[ŋiʌ]、[ŋiʌu]

niəu: [ɳi]、[ɳiau]、[ɳiəu]、[ɳiøʏ]、[ɳiʏ]、[ɳy]、[ɲiəu]、[ɲiau]、[ɲiou]、[ni]、[niəu]、[niau]、[niei]、[nʏ]、[ɳəu]、[ɳou]、[ɳɤɯ]、[ɲəu]、 など

liəu: [liəɯ]、[lieu]、[liəu]、[liɤ]、[liɤɯ]、[liɤu]、[liɯ]、[liɵ]、[liou]、[liu]、[liʌu]

iəu: [ie]、[iəɯ]、[iəu]、[iɯ]、[in]、[io]、[iou]、[iu]、[iʊ]、[iʌu]、[jo:u]

giəu: [giau]、[giu]

ŋəu: [ŋ] [ŋai] [ŋau] [ŋəɯ] [ŋəu] [ŋœø] [ŋu] など

nəu: [nɑu]、[nɛu]、[nəu]、[nʉ]

ɣəu: [ɣɐu]、[ɣəu]、[ɣou]

əu: [əu]、[ɔou]、[ɤ]、[ɤəu]、[ɤɯ]、[ɤu]、[ou]

gəu: [gu]

---

[8] W.A.グロータース 1994、p.142 およびp.164 の訳注 13 を参照。

1．6．“蝸牛”の“牛”

○iəu について

「ウシ」“牛”は本来疑母字であり、中古音は ŋiəu（尤韻）と推定される。一般に疑母の場合、規則的な変化に従えば、現代北京語では ŋ-が脱落するはずである。しかし例外的に語頭に n-が現われることもあり、“牛”niú もその例外の一つと考えられる。平山 1993 によれば、少数の疑母字の語頭に n-が現われるのは、呉方言からの借用によるものであり、“牛”に関しては“油”yóu との同音衝突を避けようとする意識が働いたため、とされている。

地図によれば、iəu は山西、山東、湖北省に河南省を取り巻く形で分布する。周辺分布の原則に従えば、iəu の方が古く、語頭に鼻音 n-またはɲ-が立つタイプは新しい発音ということになる。但し、音声学的な見地から考えて iəu＞niəu という変化が自然に起こったとは考えにくく、この場合は iəu の地域に niəu が外部から借用されたことによる変化と考えるべきである。

山東省の黄河下流域および南東部における iəu の例を以下に挙げる。参考として、「ウシ」“牛”の発音を括弧内に示しておいた。「カタツムリ」における“牛”と「ウシ」“牛”とでは声母に違いが見られることが分かる。

淄博	巴拉牛子[pa la iəu tsɿ]	(“牛”niəu、iəu)	市志 2260
寿光	笸箩牛子[pə luə iəu tsɿ]	(“牛”niəu)	方言志 130

以上の例において、単に「ウシ」“牛”と言う場合は語頭に鼻音 n-またはɲ-が立つのに対し、「カタツムリ」の“牛”は鼻音が立たず、iəu、iou となっている。また淄博では niəu、iəu のどちらも“牛”の発音として認めている。iəu の方が土地固有の発音で、もう一方の niəu は借用層の発音である。

「カタツムリ」は常用語彙であるため、語中の「ウシ」に相当する成分が「ウシ」の意味を離れやすく、地点によっては iəu の音に「蚰」「油」などの字が当てられていることがある。

利津	笸箩蚰子[pə luə iou tsɿ]	(“牛”niou)	方言志 98
新泰	巴拉蚰子[pa la iou tθɿ]	(“牛”ɲiou)	方言志 111

常用語彙は古い発音を残す傾向があり、地図を比較してみると、「ウシ」“牛”の地図における iəu は niəu に圧倒されているのに対し、「カタツムリ」の“牛”の地図における iəu は分布域が広く、土地固有の発音をよく残していることが分かる。また江蘇省、山東省に分布する niəu は、呉方言地区から運河沿いに n-が北上したと推測される。

○河南省における“牛”と(ɣ)ə

河南省に分布する(ɣ)ə は“蛾”、“恶”、“阿”という字が当てられている。「タニシ」や「貝」の語形にも現われることがある。

泌阳	恶蛭	田螺	县志 681
镇平	蛾蛭儿[ɤ tʂi ər]	河蚌	县志 943

この語形の由来については、“牛（子）”の可能性を考えた。地図Dの分布状況から、河南方言の固有層では“牛”ŋəu ＞ɣəu＞əu と変化を遂げたと推測される。この変化の中で、「ウシ」という意識が薄れ、民間語源によって音声的に近い「ガ」“蛾”や「悪い～」“恶～”などに寄せつけて考えるようになったために韻母が単母音化したのではないか。洛阳“蜗子/ ē z /”（洛阳方言词汇）、“蜗儿蜗儿 ɣəɯ ɣəɯ”（洛阳方言志）のように“蜗”と見なされている(ɣ)ə も同様に“牛”に由来すると考える。河南省に“牛子*(ɣ)əu tsɿ”、“牛蛭*(ɣ)əu tʂɿ”などの形式が見られないのが難点であるが、上

記例のうち“蛾”、“阿”のいくつかが陽平調であることや、[(ɣ)ə]の周辺には「オウシ」から意味を拡張させた“牡牛”が分布することも、[(ɣ)ə]が“牛”由来である可能性を示唆する。

２．南方の語形について

２．１．地図Ｅ、地図Ｆの説明

南方における「カタツムリ」の語形は「タニシ」や「ナメクジ」の語形に由来するものが多い。「タニシ」に由来する語形は大体の傾向として、「タニシ」を意味する“螺蛳”や“田螺”などの前に“山”、“旱”、“干”、“天”などの修飾成分を付けてカタツムリを指す語としている。「ナメクジ」に由来する語形は“蜒蚰”とその変異形、また“蜒蚰”に「タニシ」を意味する“螺”や“螺蛳”を付加した語形の二種類である。

地図Eは語幹部分に着目して作成した。

＜地図E＞

“蜒蚰”：　蜒蚰、带壳蜒蚰、盐牛、盐油、延油、粘蚰、耶耶虫、鸟蚰、泥蚰　など

“蜒(蚰)+螺(蛳)”系：　蜒蚰螺、带壳蜒蚰螺、液螺、蜒蜒螺、沿沿螺、屋檐螺、牙螺子、粘鱼螺、夜液螺、涎螺、蜒螺蛳、蚰蚰螺、盐泥螺、盐油螺　など

“螺(蛳)”系：　干螺蛳、山螺、山螺蛳、天螺、天螺蛳、旱螺、旱螺蛳、罗汉　など

“田螺”系：　干田螺、旱田螺、沙田螺仔、山田螺、天田螺、千田螺、田螺丝、田子螺、田几螺、田鸡螺、田丝闰、铁朱螺　など

“螺头”系：　天螺头、天螺陀、田螺头

“食螺”系：　食螺子、什罗哩、蛇螺子、湿螺、千升罗、天蛇螺、虫螺仂　など

“蜞”系：　蜞螺、猢蜞螺、钳螺、赖奇、南蛘、冷蛘　など

“露螺”系：　露螺、麻露螺、犁螺、过路螺　など

“鼻涕虫”系：　鼻涕虫、鼻涕蛆螺、小牛儿鼻涕

なお江西省南部および福建省西部に数地点分布する“蜞”系の“蜞”はこの辺りで「ヒル」を意味する語形である。

地図Fは地図Eと比較するために作成した「タニシ」の地図である。「カタツムリ」と関係のある語形のみに絞り、それ以外の語形、特に北方の語形については扱わなかった。

＜地図F＞

螺(蛳)：　螺蛳、螺蛳圪虫儿、螺蛳转儿、螺蛳蚂儿、螺蛳头　など

田螺：　田螺、田螺固、田螺蛳　など

螺头：　螺头、螺陀、田螺头

石螺：　石螺

水螺：　水螺

蛳螺：　蛳螺、割蛳螺、海蛳螺

螺：　螺

２．２．「タニシ」、「ナメクジ」との関係

地図Eと地図Fの比較によれば、「カタツムリ」と「タニシ」との間に、次のような対応関係を見出すことができる。大体において「カタツムリ」の語形が「タニシ」の語形を基にしていることは明瞭である。

地点	“タニシ”	“カタツムリ”
安徽、湖北 湖南北部、江西北部	螺蛳	“螺(蛳)”系
江西中部～湖南中部	田螺	“田螺”系
江西南部	田螺、石螺	“食螺”系
湖南東北部	螺头	“螺头”系

○“田螺”系に見られる metathesis

語幹“田螺”に修飾成分を付加するタイプの他に、“田子螺”(安福)のように、“田螺子”の第二音節と第三音節が metathesis を起こした形式が存在する。『江西方言土语汇编・第 7 册』(音声情報なし)によれば、江西省西部に分布する“田螺”系の中には“田子螺”の他に、“田鸡螺”(吉安、井冈山)、“田几螺”(永新)、“田丝闰”(永丰)、“千鸡老”(吉水)、“铁朱螺”(莲花)等の語形が見られる。他の語彙に平行する形式を見出せないため、「カタツムリ」を表す語形においてのみ個別的な変化を経たものと考えられる。

『江西方言土语汇编・第 7 册』によると、莲花、安福の二地点において接尾辞“几”が現われることがある。例えば“兔几”,“燕几”,“吊几(鸟)”(莲花)。“鸽 ji”,“袜几”,“门几(蚊子)”(安福)等。なお『客赣方言调查报告』によれば、この辺りの方言において“鸡”および“几”は tɕi と発音される。よって、本来の語形として“田螺几”が想定される。“田鸡螺”は「カエル」を意味する“田鸡”への意味的な関連付けによって metathesis を起こしたのであろう。ちなみに吉安、莲花、安福では“カエル”を“田鸡”という(他に“蛤蟆”等の並存語形も見られる)。“千鸡老”、“铁朱螺”、“田丝闰”については metathesis の理由は明らかにできないが、それぞれ“田鸡螺”(或いは“天鸡螺”)、“田子螺”、“田螺蛳”などから、更に民間語源によって変化したものであろう。

○ “食螺” 系の由来

“食螺”系は地図Eにおいて江西省南部に分布している。『江西方言土语汇编・第 7 册』によれば、具体的な語形は以下のようになっている。“食螺子”(万安、于都、宁都)、“千升罗”(万安)、“仟罗哩”(万安)、“虫螺仂”(兴国)、“蛇螺子”(赣县)、“湿螺”(崇义)。これらは地図Fの「タニシ」を意味する“石螺”に由来する可能性を考えた。上掲の語形については音声情報が記されていないのだが、“食”、“升”、“仟”、“虫”、“蛇”、“湿”は“石”と同音か、または近い発音と考えられる。ちなみに、この地域において「食べる」は“食”と言う。

地図Eにおける“食螺”系の分布域と、地図Fにおける“石螺”の分布域は大変近い。すでに述べたように、南方の「カタツムリ」の語形の多くが「タニシ」の語形を基にしている点を考慮すれば、“食螺”系が「タニシ」を意味する“石螺”に由来する可能性は十分にあると言えよう。地図Fによれば江西省南部では“田螺”の勢力が強く、“石螺”はまばらにしか見られないが、一部の方言では、

“石螺”が指示対象を「タニシ」から「カタツムリ」へと移し、民間語源によって“食螺子”、“湿螺”、“蛇螺子”等となったのではないか。

大余	石螺 [sa lo]	客赣方言调查报告 258
南丰琴城	石螺 [sak lo]	〃

○“蜒蚰”系と“蜒(蚰)+螺(蛳)”系

“蜒蚰”系および“蜒(蚰)+螺(蛳)”系が分布する地域では、「カタツムリ」と「ナメクジ」の両方の語形が同一資料に記載されることは少なく、この地域における「カタツムリ」と「ナメクジ」の区別の有無について確かなことが言えるわけではない。だが、「ナメクジ」を意味する“蜒蚰”が現われることから考えて、恐らくこの地域では本来「カタツムリ」と「ナメクジ」を区別しないのであろう。南方の湿潤な気候下では「ナメクジ」の方を目にすることが比較的多く、「カタツムリ」は「ナメクジ」の一種として認識されているものと思われる。両方とも“蜒蚰”と呼んでいたのが、後で両者を区別する必要がでてきて「カタツムリ」を表す場合に「タニシ」を意味する“螺(蛳)”を付けたのであろう。

3．まとめ

以上、「カタツムリ」の語形について論じてきた。要点をまとめると、以下の通りである。

北方では語幹“牛”に修飾成分を付加したものが多い。時には「オウシ」や「メウシ」などの語形が「カタツムリ」にまで意味を拡張させたものもある。修飾成分は地域ごとにまとまりが見られた。例えば、山東省では修飾成分がx-l型であるタイプ、山西省から河北省にかけては修飾成分を後置するタイプ、西北地方では“牛”の声母の影響を受けて修飾成分が鼻音韻尾を有するタイプ、等。“蜗牛”の“蜗”は声母がk-のタイプとゼロ声母(またはv-)のタイプとがあり、後者に関しては南京周辺の発音であると考えた。また「カタツムリ」の語形中に現われる“牛”の発音と単に「ウシ」という場合の“牛”の発音を比較したところ、常用語彙である「カタツムリ」の方が古い発音を残しており、niəu は呉方言地区から運河沿いに北上した発音であると推測した。

南方は「タニシ」や「ナメクジ」との関係が密接である。特に安徽、湖北、湖南、江西では「タニシ」の語形との間に対応関係が見られ、「カタツムリ」の語形が「タニシ」の語形を基にしていることが分かる。江西省南部に分布する“食螺”系については「タニシ」の地図との比較から、江西省南部あたりで「タニシ」を意味する“石螺”に由来する可能性を考えた。東南部に分布する“蜒蚰”系および“蜒(蚰)+螺(蛳)”系は「カタツムリ」と「ナメクジ」の区別がない、或いは過去に区別がなかったことを意味すると考えられる。

[参考文献]

羅願 1991. 《爾雅翼》, 黄山書社. .(石雲孫點校).

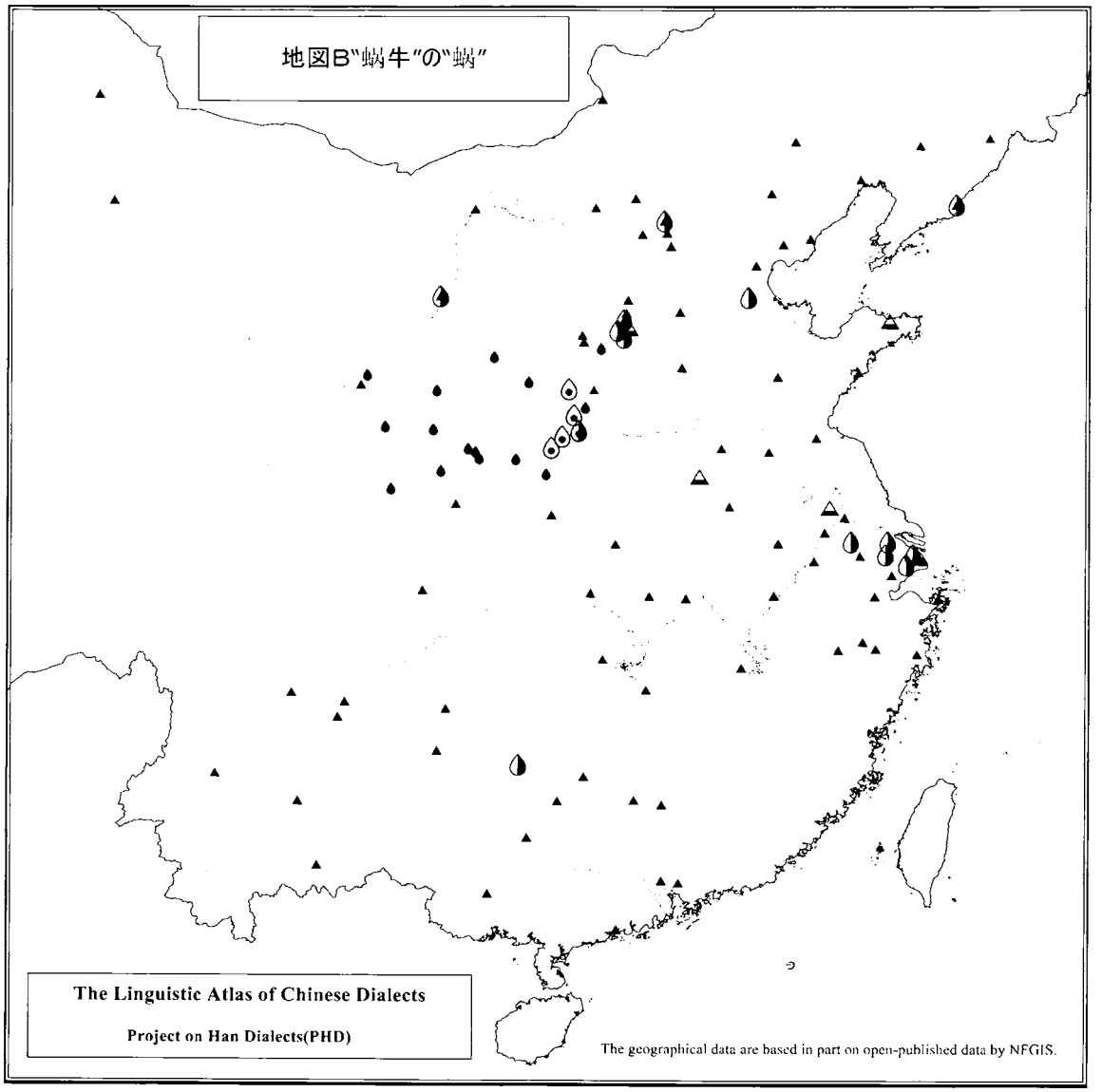
太田斎 2002. 錯綜した「混交」—中国西北方言の「コウモリ」、「ヤモリ」、「アリ」、「ハチ」—. 《慶谷壽信教授記念中国語学論集》, 好文出版, pp.. 51-92.

——— 2002. 漢語の身体名称に見られる特殊変化(1)—「踝」の諸語形をめぐる臆説—. 《神戸外大論叢》, 53-1、pp.. 17-36.

——— 2003. 漢語の身体名称に見られる特殊変化(3)—「踝」の諸語形をめぐる臆説—. 《神戸外大論叢》, 54-3、pp.. 105-123.

W.A.グロータース 1994. 《中国の方言地理学のために》, 好文出版. (岩田礼、橋爪正子訳) .

- 蜗 (k-) 牛
- 牛蜗 (k-)
- 蜗 (-u-) 牛
- 牛蜗 (-u-)
- p- 牛
- 牛 p-
- m- 牛
- 牛 m-
- s-n 牛
- p-l-
- k-l-
- u-l-
- m-l-
- 牛（その他）
- (ɣ)ə



蜗 kua

蜗 kuaN

蜗 kuə

蜗 uə

蜗 ua

▲ ŋiəu

△ niəu

▲ liəu

◬ iəu

● ŋəu

◎ ɣəu

◉ əu

☼ (ɣ)ə

▲ ŋiəu

△ niəu

▲ liəu

◬ iəu

● ŋəu

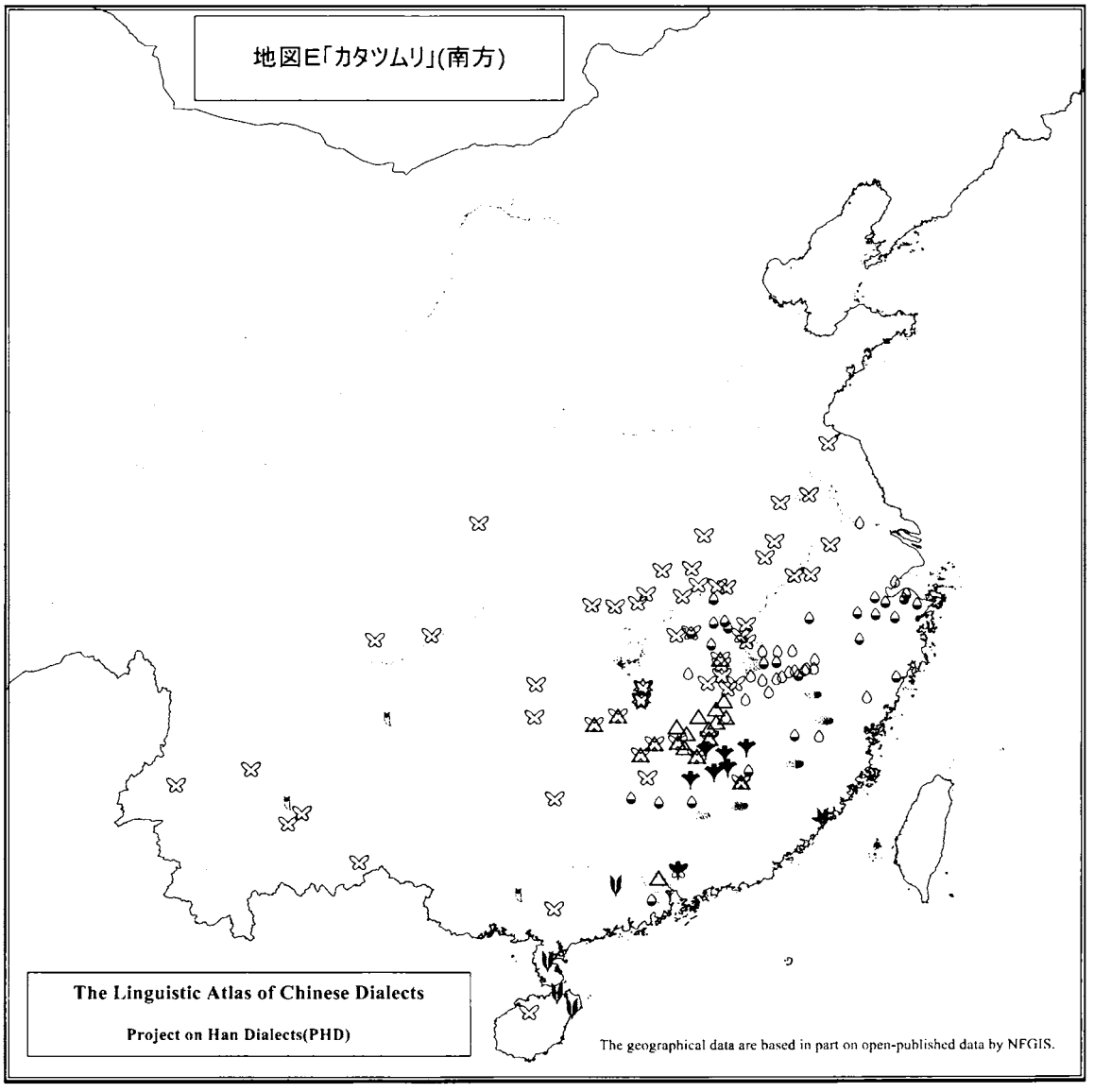
◒ nəu

◎ ɣəu

◉ əu

ɡ g

k k



“蜒蚰” 系

“蜒蚰 + 螺(蛳)” 系

“螺(蛳)” 系

“田螺” 系

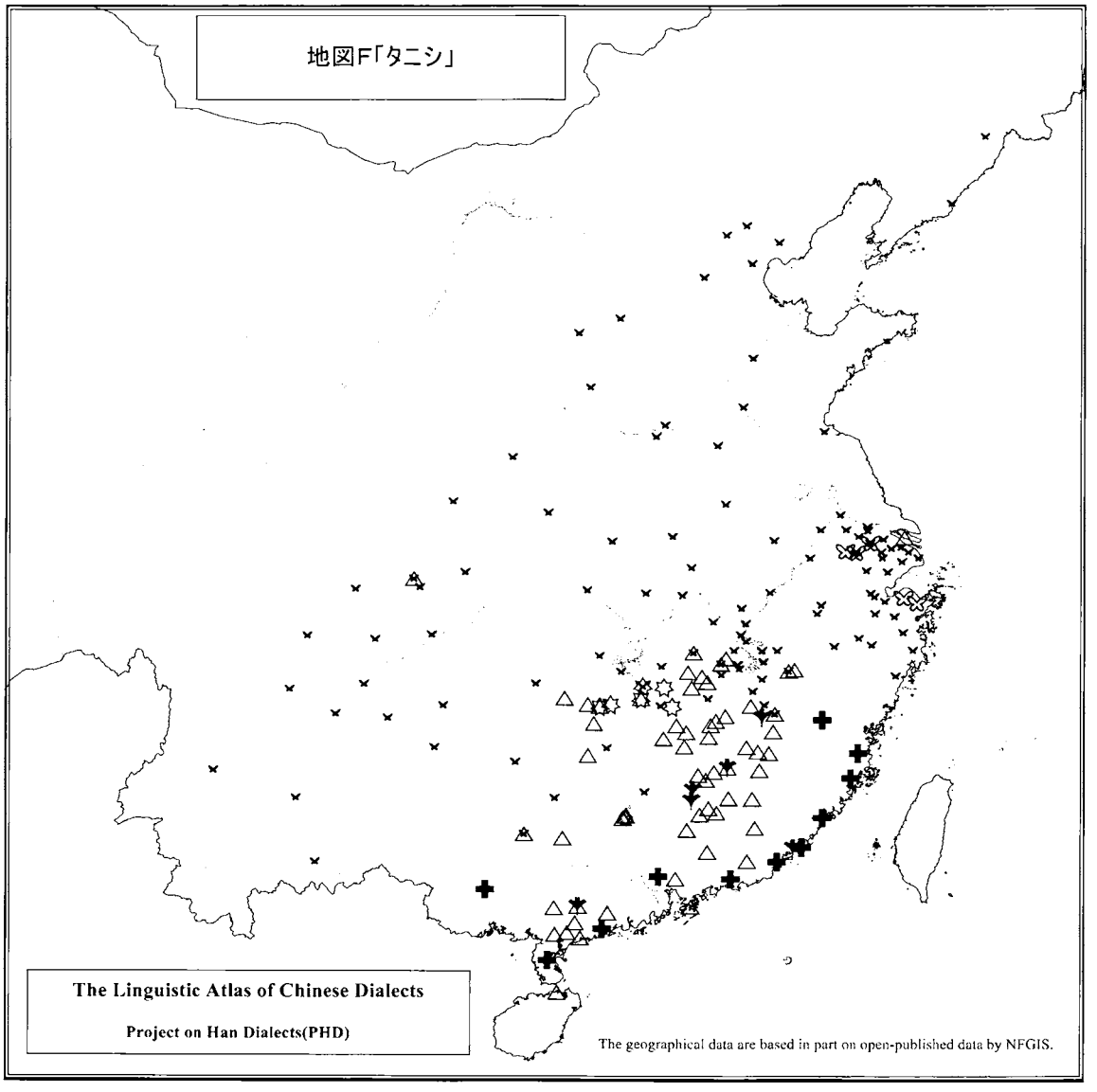
“螺头” 系

“食螺” 系

“蜞” 系

“露螺” 系

“鼻涕虫” 系



螺蛳

田螺

螺头

石螺

水螺

蛳螺

螺

「ヒル(水蛭)」の地図

中西 裕樹

1、地図作成の目的

「ヒル」を表す語の地理的分布を概観する。

2、語形分類の方法

ヒルを採録している資料がそれほど多くないので、語形分類に際してあまり細かい音声の違いにまでこだわると、分布がわかりづらくなってしまう。そこで、類似成分を持つ語形に関しては、かなり大胆にまとめてみた。音声表記は IPA で、大文字の N はその直前の母音が鼻音化していることを表す。声調表記は平声・上声・去声・入声の順に、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで示し、陰陽の区別がある場合にはそれぞれのローマ数字の後ろに陰調はａ、陽調はｂを付した。軽声はＱで表している。

A.“蚂蟥”系諸語形

1）蚂蟥：“蚂蟥”のほか“蚂蟥子”[ma^{Ⅱ} oN^{Ⅰb} tsɿ^{Q}]（湖南新化）も含む。

2）妙蟥系：“□蝗”[miau^{Ⅲ} uoŋ^{Ⅰb}]・“妙蟥”[miau^{Ⅲ} vɔŋ^{Ⅰb}]（共に広西陸川）、
“□蝗”[miau^{Ⅰb} wuɔŋ^{Ⅰb}]（広西玉林）、“□蟥”[miɛu^{Ⅰa} vɔŋ^{Ⅰb}]（広東化州）

3）蚂蝳蟥：“蚂蝳蟥”[ma^{Ⅱ} ʂʅN^{Ⅲb} hɔN^{Ⅰb}]（江西于都）

B.“蜞”系諸語形

1）蜞：“蜞”[k^{h}i^{Ⅰb}]（福建武夷山）

2）湖蜞系：“蜞”の前に修飾語がおかれる語形。「湖」「蝴」「胡」「蜈」などが大部分を占めるので「湖蜞系」とした。ほかに“牛蜞”[ŋəu^{Ⅰb} k^{h}i^{Ⅰb}]（福建建寧）、“沙蜞”[sAu^{Ⅰa} k^{h}Ai^{Ⅰb}]（広東連州）、“雨蜞”[huo^{Ⅲb} k^{h}i^{Ⅰb}]・“水蜞”[tsuoi^{Ⅱ} k^{h}i^{Ⅰb}]（共に福建福州）、
“□□”[ŋɐu^{Ⅰa} ki^{Ⅰb}]（広西平南）などを含む。

3）蜞+修飾語：“蜞”の後ろに修飾語がおかれる語形。一地点を除いて第二音節の声母が n、t などの歯茎音なのが特徴。
“蜞□”[k^{h}ei^{Ⅰb} na^{Ⅱa}]（広東広州）、“蜞蝻”[k^{h}i^{Ⅰb} nam^{Ⅰb}]（広東恵州）、
“蜞胆”[k^{h}i^{Ⅰb} tɔŋ^{Ⅱ}]（広東連県星子）、“蜞□”[k^{h}ai^{Ⅰb} tɔ^{Ⅰa}]（広東楽昌）、
“□到”[k^{h}i^{Ⅱ} tau^{Q}]（湖南臨武）、“蜞每”[tɕi^{Ⅰb} məŋ^{Ⅳ}]（湖南江永）

4）蟥蜞系：“蟥蜞”のほか、“蟥鸡”[uɔŋ^{Ⅰb} ki^{Q}]、“蟥鸡钳儿”[uɔŋ^{Ⅰb} ki^{Q} k^{h}iam^{Ⅰb} mi^{Q}]（共に江西黎川）なども含む。

C.“蚂蟥蜞”系諸語形

1）蚂蟥蜞系：“蚂蟥蜞”のほか以下の語形も含む。
“蚂蟥鸡”[ma^{Ⅰa} vɔŋ^{Ⅰb} kie^{Ⅰa}]（江西石城）、“□花子”[mɑ^{Ⅲ} f^{Ⅰa} tsu^{Ⅱ}]（江西宜豊）、
“蚂巴子”[ma^{Ⅱ} pa^{Ⅰa} tsu^{Q}]（江西上高）、“蚂□□仂”[ma^{Ⅱ} mɔŋ^{Ⅰa} tɕin^{Ⅰa} li]（江西東郷）、
“蚂蟥精”[ma^{Ⅱ} fɔŋ^{Ⅰb} tɕin^{Ⅰa}]（江西臨川）、“蚂蟆钳”[ma^{Ⅱa} uɔN^{Ⅰb} tɕ^{h}ieN^{Ⅰb}]（江西蓮花）、

“蚂蚂钳儿 [ma^{II} ma^{II} k^{h}ien^{Ib} na^{Q}]（福建邵武）

2）蚂蜞系：“蚂蜞”のほか以下の語形も含む。

“蚂蝵”[mo^{IIb} zɿ^{Ib}]（浙江玉環）、“马□”[mo^{IIb} zɿ^{Ib}]（浙江温州）、

“蚂子”[ma^{IIIa} tsu^{Q}]（江西高安）

D.“蚂螺蜞”系諸語形

1）流蛭（螺蜞？）：“流蛭”[lo^{Ib} k^{h}i^{IIIa}]（福建順昌）

2）蚂loN蜞系：“麻郎蜞”[ma^{Ib} lɔN^{Ib} tɕ^{h}i^{Ib}]（江西上猶）、“马卵蛴”[ma^{II} loN^{II} tɕ^{h}i^{Ib}]（江西贛県）

3）黄蛉钳：“黄蛉钳”[fɔŋ^{Ia} liɪN^{Ib} tɕ^{h}iɛN^{Ib}]（江西永豊）

E. “玛瑙”：“玛瑙”[ma^{II} nau^{II}]（江西全南・定南・龍南）、“玛瑙”[ma^{II} nɔ^{II}]（江西安遠）

F.“蚂鳖”系諸語形

1）蚂鳖系：“蚂鳖”のほかに“水鳖”[suei^{II} piɐʔ^{IV}]（河北張家口）、“水鳖”[ʂuei^{II} pie^{Ia}]（河北承徳）、“蚂鳖子”[ma^{II} piɛ^{Ia} tsɿ^{Q}]（河南信陽）、“马鳖虫”[ma^{II} piɐʔ^{Ia} tʂ^{h}uŋ^{Ib}]（河南獲嘉）を含む

3）蚂鞭系：“蚂鞭”[ma^{II} piæ^{I}]（河北平山）、“麻鞭”[ma^{Ib} pian^{Ia}]（河南霊宝）

G.“蚂贴”系諸語形

1）蚂贴系：“蚂贴”[ma^{Ia} t^{h}ie^{Q}]（河北承徳）、“马贴”[ma^{II} t^{h}iɛ^{Q}]（河北平谷）、“马铁”[ma^{Ia} tie^{Q}]（内蒙古海拉爾）、“肉蚂贴”（河北豊潤）、“水□”[fei^{II} tie^{Ib}]（安徽阜陽）

2）马蹄系：“马蹄”[ma^{II} t^{h}i^{Q}]（吉林長春・吉林通化・遼寧錦州）、

“蚂涕”[ma^{Ia} t^{h}i^{Q}]（黒龍江哈爾濱）

3）蚂皮系：“蚂皮”[ma^{II} p^{h}i^{Q}]（河北保定・山東済寧）、“蚂皮叮”[ma^{II} p^{h}i^{Q} tiŋ^{Ia}]（山東徳州）、“蚂蚍”[ma^{II} p^{h}i^{Ia}]（山東新泰）、“蚂蚍”[ma^{II} p^{h}i^{Q}]（山東金郷）、“马蚍”[mɑ^{II} p^{h}i^{I}]（山東博山）、“扒皮”[pa^{Ia} p^{h}i^{Q}]（天津）、“□皮子”[ua^{III} p^{h}i^{Ia} tsɿ^{Q}]（河北滄州）

H.“蚂条”系諸語形

1）蚂条系：“蚂条”[mɑ^{II} t^{h}iɑo^{Q}]（山東牟平）、“蚂挑”[ma^{II} t^{h}iau^{II}]（遼寧丹東）

2）皮条系：“水皮条”[ʂuɛi^{II} p^{h}i^{Ib} t^{h}iɔu^{Ib}]（河北陽原）、“皮条虫”[p^{h}i^{Ib} t^{h}iɔ^{Q} tʂ^{h}uəŋ^{Ib}]（寧夏銀川）、“皮条虫”[p^{h}i^{Ib} t^{h}iɔu^{Q} tʂ^{h}uŋ^{Ib}]（寧夏中衛）

I.“肉钻”系：“肉钻子”[ʐou^{III} tsuaN^{Ia} tsɿ^{Q}]（山東利津）、“肉钻子”[ʐou^{IIIa} tsuan^{Ia} tsɿ^{Q}]（河北昌黎）、“肉钻儿”[ʐou^{III} tsuaɚ^{Ia}]（河北楽亭）、“肉钻儿”[ʐou^{III} tsuɐr^{Ia}]（河北唐山）、“肉钻儿”[ʐou^{III} tsuɑr^{Ia}]（河北豊潤・山西臨県）、“蚂拉钻”[ma^{III} la^{Q} tsan^{Ia}]（山東栄城）、“金钢钻儿”[tɕiɐŋ^{Ia} kɔ^{Ia} tsour^{III}]（山西離石）

J. “蚂虼丁子”系：“蚂虼丁子”[mɑ^{II} kɤ^{Ib} tiŋ^{Ia} tsɿ^{Q}]（江蘇贛楡）、

“麻葛得”[ma^{II} kə^{Q} tei^{Ia}]（山東費県）

K. その他の語形（地図上では省略）

遼寧丹東：“水蚯蚓”［suei^{II} tɕ^{h}iou$^{I\,a}$ in^{II}］
河北平山：“抽子”［tʂ^{h}aɔ^{II} tsɿ^{Q}］
山東青島：“蚂□”［ma^{II} t^{h}iaN^{III}］
山東莒県：“孑腚”［tɕie$^{I\,b}$ tiŋ^{Q}］
山西大同：“吸蚂”［ɕiəʔ^{IV} maʔ^{IV}］
山西臨汾：“□□子”［tɕiəu$^{III\,b}$ tɕiei$^{I\,a}$ tsɿ^{II}］
“水蝎子”［ʂuei^{II} ɕie$^{I\,a}$ tsɿ^{Q}］
浙江玉環：“田溜溜”［? liɤ$^{I\,b}$ liɤ$^{III\,a}$］
湖北紅安：“沙褡子”［sa$^{I\,a}$ ta^{IV} tsɿ^{Q}］
湖南嘉禾：“□□”［ɔŋ$^{I\,b}$ tʃ^{h}i$^{I\,a}$］
広西合浦：“□骨鱼”［mau^{II} kvɐt$^{IV\,a}$ ɲu$^{I\,b}$］

3、地理的分布の特徴

標準語形“蚂蟥”が全国に広く分布しているが、そのほかの語形を見ると、おおよそ長江を境に南北対立が見られる。以下、南方・北方に分けて考察していく。

3—1　南方の分布

南方に特徴的な語形として“蜞”が挙げられる。現在でも単音節で使われているのは福建武夷山だけで、通常修飾語を伴う二音節語になっている。粤語およびその影響が濃い地点では「蜞+修飾語」という形で現れ、その他の地点では「修飾語+蜞」という形で出てくることが多い。後者における修飾語には同源であると思われる「湖」「胡」「蝴」「蜈」がほとんどだが、「水」「雨」「牛」「沙」なども見られる。“蜞”は『説文解字』「蟣,蝨子也。一曰齊謂蛭曰蟣」および『爾雅』「蛭, 蟣」（郭璞注:「今江東呼水中蛭蟲入人肉者爲蟣」）に見られる「蟣」に由来すると考えられる（『集韻』「蜞, 渠之切」;『広韻』「蟣,渠希切」）。つまり、現在東南部に広がっている“蜞”はかつて長江下流域から山東のあたりまで分布していたが、北方では完全に駆逐されたのだと推測される。

長江の南では、標準語形の“蚂蟥”と南方の“蜞”とが複合した“蚂蟥蜞”や、“蚂蟥”と“蜞”とが混交した“蚂蜞”が見られる。“蚂蜞”についてここでは混交と考えたが、“蚂蟥蜞”系の語形に“□花子”［ma^{III} f$^{I\,a}$ tsu^{II}］、“蚂巴子”［ma^{II} pa$^{I\,a}$ tsu^{Q}］、“蚂蚂蜞”［ma^{II} ma^{Q} tɕ^{hQ}］”、“蚂蚂蜞”［ma^{II} ma^{II} tɕ^{h}i$^{I\,b}$］などが存在し、第二音節に *hua- >*fa- >*pa- >*ma- のような弱化が起こっていると推定できることから、“蚂蟥蜞”の第二音節が脱落した可能性もある。同時に、“蚂蜞”の第一音節は修飾語と考えることもでき、そうだとすると“蚂蜞”系語形は“湖蜞”系語形だということになる。“蚂蟥蜞”系と“蚂蜞”系の南限は、現時点では江西・福建・湖南あたりまでで、広東・広西には分布が見られない。しかし、広西には“蚂蟥”が点在しているので、資料に取られていないだけだという可能性はある。さらに、“蟥蜞”という語形が上述の語形の間に分布しているが、“蚂蟥蜞”の「蚂」が脱落してできたとは考えにくいので、暫時“湖蜞”のひとつのタイプとしてみなすこととする。全国的に見て、「蚂+語幹」は広く分布しているが「蟥+語幹」という形が見られないこと、“蟥蜞”系の語形が“蚂蟥蜞”系や“蚂蜞”系とは異なり広東・広西にまで分布していることも、この推測の根拠である。しかし、“蟥蜞”系の語形には、“湖蜞”系と違い、後述する「蜞」の弱化が起こっている地点があるので、“湖蜞”系とは暫時区別して考える。

江西省中部および南部に“麻郎蜞”[ma$^{\mathrm{I\,b}}$ lɔN$^{\mathrm{I\,b}}$ ʨ^{h}i$^{\mathrm{I\,b}}$]”（上猶）、“马卵蛴”[ma^{II} loN^{II} ʨ^{h}i$^{\mathrm{I\,b}}$]（贛県）、“黄蛉钳”[fɔŋ$^{\mathrm{I\,a}}$ liɪN$^{\mathrm{I\,b}}$ ʨ^{h}iɛN$^{\mathrm{I\,b}}$]（永豊）という語形が見られる。カタツムリの言語地図では江西省と福建省に“蜞”系の語形が分布しているが、その江西省における語形は以下の如く上猶・贛県の「ヒル」の第二・第三音節と非常に似ているのである。

“冷蜞”（贛州）、“冷其”（尋烏）、“南蛴”（全南）、“赖蛴”（会昌）。

橋本貴子氏の解説によれば、南方では本来ナメクジを指す“蜒蚰”でカタツムリを表す地域があるという。ヒルとナメクジはともにじめじめしたところに住んでおり、形状も似通っている。このため、元々ナメクジとカタツムリの区別がない地域では、ヒルの語形をもってナメクジとカタツムリを表すようになったのではないだろうか。福建省の三地点ではカタツムリを“猢蜞螺”（永安）、“蜞螺”（武夷山）、“钳螺”（建甌）ということから、上述の江西省の四地点の「蜞」の修飾語である「冷」「南」「赖」なども「螺」から来ている可能性がある。この仮定が正しければ、後にナメクジとカタツムリを区別するために修飾語として「螺」をつけるようになったと考えられる（武夷山ではヒルを“蜞”と呼ぶことに注意）。その後、「螺」の音声が変化し、「背中に背負っているまきがい」という意味を表す機能が失われてしまうと、今度は逆にカタツムリを表す“冷蜞”等の語形でヒルのことをも示すようになり、その結果、両者の区別を保持するために、ヒルを表す語のはじめに「麻」「马」（この両者は元々同一形式。前者は元々上声だった第一音節の声調が第二・第三音節の陽平に同化した結果、「麻」と表記されたもの）や「黄」などの修飾語をつけるようになったのではないだろうか。これらの地点でナメクジをどう言い表すのか不明なのが残念である。なお、福建の順昌ではヒルを“流蛭”[lo$^{\mathrm{I\,b}}$ k^{h}i$^{\mathrm{III\,a}}$]と言うが、当地では「流」は「螺」と同音であり、第二音節も声調以外は「蜞」に符合する。そこで、地図上では“流蛭(螺蜞?)”として示した。

広東省との省境近くの江西客家語には“玛瑙”という語形が見られる。ヒルの光沢や模様などから命名したのかも知れないが、「蚂」と「玛」が同音であることと、上述のように江西中部・南部に“蚂+螺蜞”に由来する可能性のある語形が存在し、“玛瑙”と“蚂+螺蜞”の第二音節が音声的に類似していることを考えると、“蚂+螺蜞”の“蜞”が脱落した後に民間語源により生み出された可能性も否定できない。

「蜞」にかかわる音声変化について二点述べておきたい。一つは「蜞」の声母の弱化である。“蚂蟥蜞”系、“蚂蜞”系の語形では「蜞」が弱化して声母の有気成分が脱落した結果、資料上「鸡」あるいは「子」と表記されている地点がある。「鸡」は声母が無気音化した後、民間語源がはたらいて（「田鸡」からか？）声調が陰平に再構成されたのであろう。あるいは、話者には「鸡」という意識はないのに、弱化の程度が少ないため（軽声とは言えない）、調査者が高さが似ている陰平調であると判断し、このように表記したのかも知れない。「子」は弱化の結果、話者が接尾辞と認識したものと考えられる。湖南省新化にも“蚂蟥子”[ma^{II} oN$^{\mathrm{I\,b}}$ ʦɿ^{Q}]という語形があるが、江西省と異なり第二音節が弱化していないことと、周辺に“蚂蟥蜞”系の語形が見られないことから、地図上では“蚂蟥”系として処理した。もう一つの音声変化は「儿化」で資料上「钳」と表記されている。「儿化」と声母の弱化が同時に起こっている地点では「精」などと表記されている。「精」は上述の「鸡」と同様、声母が無気音化した後、民間語源がはたらいて（「狐狸精」などからか？）声調が陰平に再構成されたものか、あるいは弱化の程度が少ないため、調査者が高さが似ている陰平調と判断したものであろう。

南方に特徴的な“蚂蟥”系語形として“妙蟥”と“蚂蟮蟥”がある。“妙蟥”系の語形は、広東・広西の省境附近に分布しているが、語源は不明。興味深いのは、第一音節の声調で、陸川客家語では去声、化州客家語では陰平に入っている。玉林粤語では陽平とされているが、資料上では「陽平字あるいは陽

上字が後ろに別の音節を伴うときには21調に変調する」という説明があるだけで、“□蝗”の第一音節が陽上からの変調でないという根拠は示されていない。つまり、この第一音節は陽上であっても良いのである。周知のとおり、客家語の次濁上声字の白読層は陰平調と合流しており、化州客家語と玉林粤語の第一音節の声調は同源であると考えられる。問題は陸川客家語の去声であるが、全濁上声字と一緒に去声に合流した「例外」なのかも知れない。“妙蟥”系語形の第一音節は声母と声調の一致から考えて“蚂”と何らかの関係があるものと思われる。江西于都には、“蚂蟥”、“蚂蟥蛴”とともに“蚂蟮蟥”[ma^{II} ʂʅN$^{III\,b}$ hɔN$^{I\,b}$]という言い方がある。当地ではミミズのことを“[ɕiN^{II}]”と言い、また上声が陽平の前におかれると陽去と同じ調値に変化するという変調規則がある。ここから推測するに、“蚂蟮蟥”の第二音節は「ミミズ」で（ヒルとミミズの形状が似ていることからだろう。遼寧丹東にも“水蚯蚓”[suei^{II} tɕ^{h}iou$^{I\,a}$ in^{II}]という語形がある)、“*蚂蟥蟮”（ヒルミミズ）という形の第二音節と第三音節に音位転換が起こったものと思われる。

３－２　北方の分布

河北・河南・安徽・山西・陝西にかけて“蚂鳖”系の語形が分布している。河北平山・河南霊宝にはヒルの形状から連想したのであろうか、第二音節が「鞭」に変化している例が見られる。“蚂鳖”系の東側には、ほぼ京杭運河を等語線として“蚂皮”系の語形が広がる。なお、天津には“蚂皮”の声母に同化が起こったと思われる“扒皮”という語形が見られる。“蚂鳖”系の北側、河北の東北部には“蚂贴”系の語が分布し、その北側、東北地方には“马蹄”系の語形が見られる。「鳖」「贴」（その他の表記もあるがこの二字で代表させる）はともに入声音であり、韻母もよく似ている。ここでは、“蚂贴”系・“马蹄”系が“蚂鳖”系・“蚂皮”系の外側に分布するように見えることと「蛭」の反切とに注目して、これらの語形が「马蛭」に由来する可能性を検討したい。「蛭」は『広韻』で「蛭,之日切,又丁悉切,丁結切」であり、このうちの「丁結切」に由来する *tiV(C) のような語形から変化したものが安徽阜陽“水□”[fei^{II} tie$^{I\,b}$]、内蒙古海拉爾“马铁”[ma$^{I\,a}$ tie^{Q}] ではないだろうか。後になって類音牽引により、「張りつくもの」というような民間語源がはたらいて声母が有気音化して *t^{h}iV(C) のような形になり“蚂贴”系の語形が生まれたのであろう。これが一方では、韻母の弱化が起こって *t^{h}iとなり（“马蹄”系)、もう一方では、「马」の声母mの調音位置に「蛭」の声母tが同化されて *p^{h}iV(C) という形になった。この *p^{h}iV(C) の韻母が弱化して *p^{h}i となったのが“蚂皮”系で、類音牽引により「すっぽんのように吸いついたら離れない」という民間語源がはたらいた結果、声母が無気音化して *piV(C) となったのが“蚂鳖”系だと考えられる。しかし、この推定は語形の地理的分布による証拠が弱く、現地調査を基にした地点補充による検証が俟たれる。

北方に比較的まとまった分布としては上記のほか、「肉钻」系の語形が河北東部・山西西部・山東省（東部・西部に各一点）に見られる。「肉に穴をあける」というような発想から生まれたのであろうか。

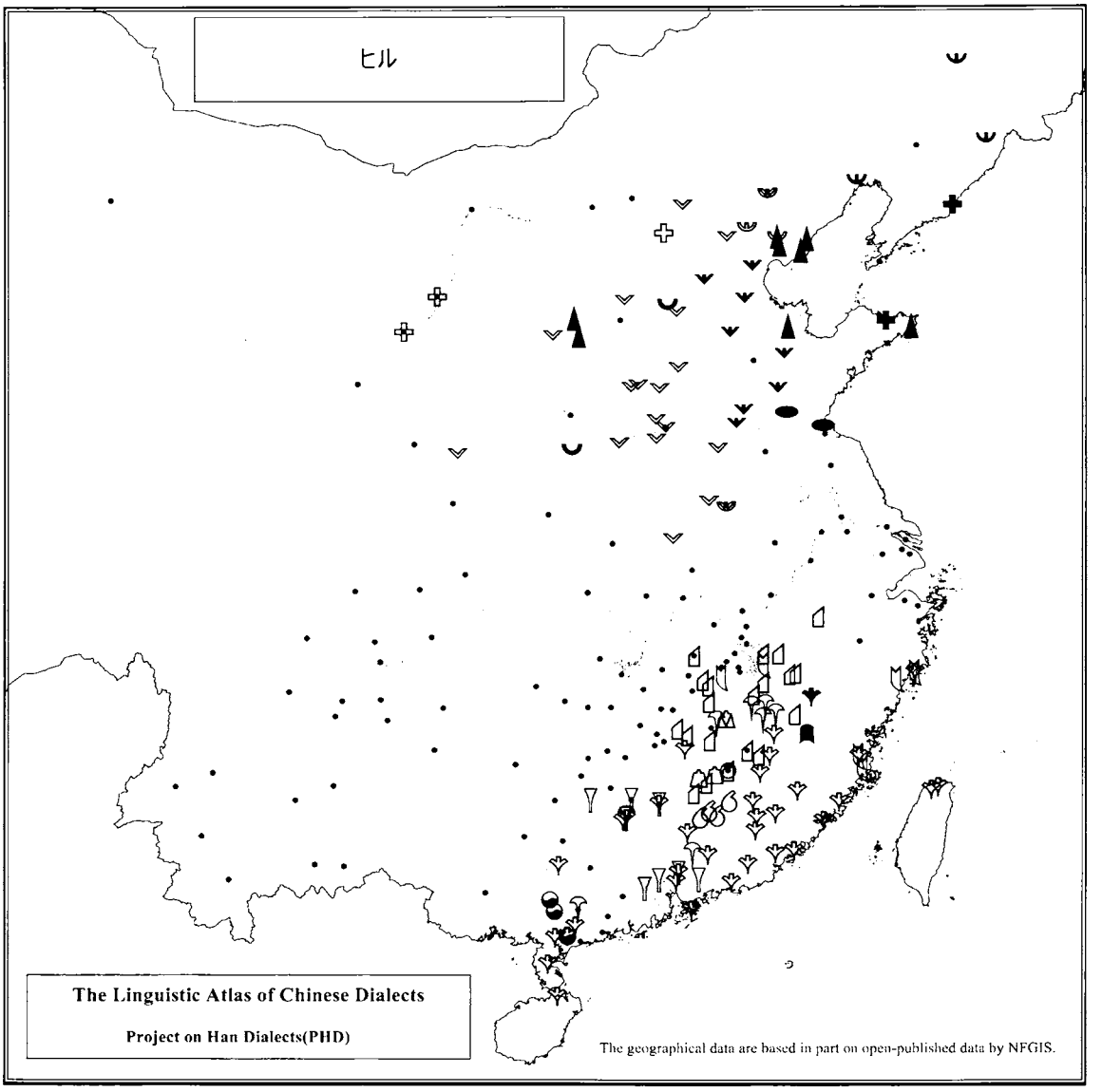
これ以外の語形については分布が少ないので解説は省略する。

[参考文献]

橋本貴子 2006.　カタツムリの地図　　本報告書所収

岩田礼 1995.　漢語方言に於ける地域差と分布の型　-方言分布の静態と動態-
『中国の方言と地域文化（2）：漢語方言地図集』

岩田礼 2003.　方言地図の作成とその解釈　-中国言語地理学序説（続）-
『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第7輯



- 蚂蟥系
- 妙蟥系
- 蚂蝳蟥
- 蜞
- 湖蜞系
- 蜞 + 修饰语
- 蟥蜞系
- 蚂蟥蜞系
- 蚂蜞系
- 流蛭（螺蜞?）
- 蚂 loN 蜞
- 黄蛉钳
- 玛瑙
- 蚂鳖系
- 蚂鞭系
- 蚂贴系
- 马蹄系
- 蚂皮系
- 蚂条系
- 皮条系
- 肉钻系
- 蚂蚆丁子系

方言地図「シラミ」の分析

八木堅二

1. 地図作成の目的

本稿は多田、岩田 1999の後を受け、「シラミ」の語形の分布について資料を増補し、解釈を行う。多田、岩田 1999においては、「ノミ」との共通性を念頭においた論の方向付けがなされているが、本稿では主に「シラミ」地図の内部における音声変化を中心に論を進める。また、データ数の多寡にかなりの偏りがあるため、本稿は資料の豊富な地域を中心に、いくつかの特徴的な現象に関し問題点を指摘し、考察を加える。(注①)

2. 語形分類の方法

「シラミ」の語形バリエーションは(まとまった分布を形成するものについては)かなり少ない。用意した地図は三種類あり、「シラミ」を表す語彙の分布を概観するもの(【地図 A】)と、個別の特徴的な音韻現象に関するもの(【地図 B】【地図 C】)である。以下、【地図 A】の分類の原則について説明を加えることにしよう。

【地図 A】シラミの語形の系統:シラミの語彙分布の大勢を占めるのは語形が「虱+X」の形式のものである。その状況を鑑み「虱+X」の形式の後部要素 X の語頭子音を中心に分類する。「シラミ」を表す語彙の分布の概観を兼ねる。(丸括弧をした語形分類に関しては後述する。)

(1)"虱子系":語幹「虱」が有り、「虱」以外の要素が後(ほとんどは接尾辞)。「虱子」、「虱的」、「虱得」、「虱了」、「虱则」、「虱蚤」、「虱嘞」、「虱虮则」、「虱仔」(さらに第二音節の語頭子音を下位分類:z系、t系、l系、その他)……北方系

(2)"虱母系":語幹「虱」が有り、「虱」以外の要素が後(ほとんどは接尾辞)。「虱母」、「虱婆」、「虱[女+麻]」、「虱[麻+女]」、「虱[也+女]」(注②)、「虱婆子」、「虱婆娘」、「虱每」(さらに語頭子音を下位分類:m系、p系、n系、(b系))……南方系

(3)"虱系"(「虱」単独系):語幹「虱」が有り「虱」以外の要素を持たない。:「虱」、(「虾」)

(4)"白虱系":語幹「虱」が有り「虱」以外にも要素を持ち、その要素が前。:「白虱」、「母虱」、「老白虱」、(「百虱子」、「发仙」、「猫虱」、「皮虱」、「木虱」、「老米颠」、「老母猪」「母虱」)

(5)その他1:「头虱」、「三角虱」、(「狗虱」):語幹「虱」が有り「虱」以外の要素が前に来るもので、"白虱系"に属さない者。(「狗虱」については資料の誤りである可能性がある。(東莞方言詞典))

(6)その他2:語幹に漢字語形「虱」を持たない。:「大老滚」(青海省)、「大胖牛」(山西省)、「富贵虫」(江西省)、「死死」(湖南省保靖)(今回は分布のみを示し、議論の対象とはしない。)

3. 地理的分布の特徴

【地図 A】

語形の大半が漢字語形「虱」を語幹に持つことが、「シラミ」の方言分布の大きな特徴と言える。その中でも"虱子系"、"虱母系"、"虱系"が大規模な分布を示す。「虱」を語幹に持たないものは

少なく、あっても大きな勢力をもたない。また、語幹に「虱」を持っても、「虱」以外の要素が前に来るものは少数である。ただし「老白虱」、「白虱」、「头虱」は、数箇所で分布が見られる。

全体的な分布は明瞭にわかれ、およそ長江以南、湖南省以東に“虱母系”が分布し(南方系)、それ以外の地域(広義の官話区)に“虱子系”が分布する(北方系)。そして、渭河・黄河中流域、長江中流域と浙江省、及び珠江・北江流域に「虱」単独系が分布する。一見すると「虱」単独系が、“虱子系”“虱母系”をはさんで、「ABACA 分布」とも言えそうな分布を形成し、興味深い。

以下、第二音節の声母に着目して下位分類を行う。

(1)“虱子系”

(甲)[ts-]系(あわせて[tʂ-][z-][tθ-]):普通話と同じ形式[ts-]が中国全土に普遍的に分布する。漢字語形は基本的に「子」である。南方に点在する「虱子」系もすべて[ts-]である。阳原・锦州・连云港ではそり舌化して[tʂ-]となる。山東半島南の付け根、即墨・诸城では[tθɳ]となる。山西省北部と内蒙古では[z-]となるもの見られる。これらは「子」の漢字音として、それぞれの地域における一般的な現象である。

涟水において、「虱蚤」[tsɔ]という表記が報告されている(『普通话基础方言基本词汇集』)。第二音節が、「ノミ」を表す「蚤」で表記されているのが興味深い。本稿ではこの「蚤」を連想による「子」の音韻変化と考えここに分類する。涟水で「X＋蚤」の形式を取るものには他に「虼蚤」(ノミ)「虮蚤」(シラミの卵)「蚊蚤」(カ)がある。第二音節の語音はいずれも[tsɔ]である。「蝎子」(サソリ)壁虎子(ヤモリ)などの「子」[tsɳ]とは区別されており、「ノミ」と「シラミ」の類似性から[tsɔ]の語音形式が採用され、同じく血を吸う小昆虫としての「カ」に[tsɔ]の語音が与えられたという可能性が考えられる。一方、一般的にあまり類似性の見いだせない「シラミ」と「蚊」に共通の「蚤」という表記が与えられていることは、「蚤」が実質的な意味よりも、接尾辞としての機能を強く担っていることを示していると考えられる。

(乙)[t-]系(あわせて[r-][l-]):山西省東部及び河北省西部周辺にまとまって見られる。少し離れるが、商丘(河南省)・太平县(安徽省)・牟平(山東省)などにも見られる。音形は[tə] [tə?]。漢字語形は「子」「得」「的」となる。[l-]となるものが、その近隣で見られる(林县・沁县。漢字語形は「了」[lɤ]、「嘞」[lə?])。烟台(山東省)[rə]。これらは接尾辞「子」の語頭子音として、各地域における一般的な現象である。

(丙)[ø-]系(語頭子音無し):漢字語形は「虱子」となるが、「子変韻母」の現象によって第二音節「子」の語頭子音が脱落し(声母ゼロ)、さらには第一音節と合流して一音節化するもの(狭義の「子変韻母」)がある(【地図 B】で議論)。これらは接尾辞「子」の語頭子音として、各地域における一般的な現象である。

(丁)その他:「虱仔」(海口):海口には[tak kia][tɑk vo](「虱母」)の両形式が存在する。

「虱虮则」[sə? tɕi tsə?](江苏省宜兴):「虮」(シラミの卵)の語形が含まれているのが珍しい。現在のところ孤例。

(2)“虱母系”

概ね湖南省以東、長江以南に分布し、第二音節語頭子音m、p、n三系が鼎立している。(「虱母」「虱婆」「虱[也＋母]」でそれぞれを代表させる。またこれらの接尾辞、「母」、「[女＋麻]」、「婆」、「[也＋女]」等のすべて代表して本稿では“母”と表記する))

(甲)「虱母」「虱[女＋麻]」「虱[麻＋女]」:第二音節の語頭子音m系を代表する。語音形式は

[sa mo] [saʔ mo] [sə ma] [sap bu]など。(福建省を中心に分布する第二音節の語頭子音[b-]のものは、中古音明母mがb化したものであり、閩南語の一般的な音韻現象であるので、m系に含める。)福建省を中心に、江西省との境界を越えて分布し、「虱婆」(第二音節語頭子音p系)と対峙する。江西省内の「虱婆」圏内にも点在する。広東省の北部と南部にも広がり、珠江・北江一帯のn系をはさんで分布する。m、p、n三系統の中で、もっとも勢力がある。

(乙)「虱婆」(第二音節語頭子音p系)

湖南省と江西省にまとまって分布する。[sə pɔ][ɕie pʰo][sɛ bo]など。北方語形「虱子」や"虱母(m)系"が圏内に点在する。

「虱婆子」[sə po tsɿ]など:洞庭湖の南、長沙一帯にまとまって分布する。(長沙一帯の「子」尾の特徴)p系統中に点在する例外形には、第二音節語頭子音が/m-/、/v-/、/u-/となるものがある。

(丙)「虱[也+女]」(第二音節語頭子音n系)

珠江三角州を中心とする珠江・北江一帯に分布する。[sɐt na][sɐt dNa]など。第二音節語頭子音が dN となるものもあるが、大勢は前者。広東省一帯に分布する「虱[女+麻]」を押しのけて分布するようにも見える。「虱」単独系が併存していることにも注目される。

主要な方言資料を概観すると、"虱母系"の第二要素"母"の分布は概ね「鶏母」「猪母」の分布と平行しているようである。一方で「鶏母」「猪母」の"母"が雌性を示す実詞であるのに対し、「虱母」の"母"が雌性を示しているとは考えにくく、接尾辞として用いられていると思われる。それは対応する「虱公」という形式が存在しないことからも明らかである(『客贛方言比較研究』には「虱公」という語形が報告されている。地点名、音声表記不明。680 頁)。"母"が接尾辞として用いられる(雌性を示さない)語彙には、他に「官婆」(臭虫)「扬翼婆」(蝶)「蛊婆」(ゴキブリ)「擦婆子」(フンコロガシ)「蚤[女+麻]」(ノミ)などが報告されている(『客贛方言比較研究』681頁)。

(3)"虱系"(「虱」単独系)

(甲)北方の「虱」単独系:「虱子」が大勢を占める官話区で、「虱」単独形が山西省南西部、河南省北西部、陝西省、甘肅省の渭河、黄河流域に帯状に分布する。その中で注目されるものには[-i]韻尾を有する「虱」の音型がある(後述【地図B】(3))。

(乙)長江中流域の「虱」単独形:湖南省北部から浙江省中部の沿海部まで、基本的には長江の南に帯状に分布する。鄱陽湖周辺には大きな勢力を維持し、長江の北にも分布し(安徽省宿松)、南は江西省中東部、福建省との境(黎川)にまで深く切り込んでいる。北方系の「虱」単独系と顕著に異なるのは、入声を保存している点である。

(丙)珠江、北江流域及広西の「虱」単独形:珠江、北江流域を中心に「虱」単独系が点在し、広西の北方にも報告例がある。「头虱」を「虱」から派生した「虱」単独系のバリアントと見なせば、「虱母」系の周辺にぐるりと「虱」単独系が並ぶことになる。

(4)"白虱系"

上海を中心とする長江河口付近に若干まとまって分布する。接頭辞「老」のついた形式も同地域に分布する。音形は「白虱」[bɑʔ səʔ]「老白虱」[lɔ bɑʔ səʔ]のようになる。

「白虱」と音形の類似するものに、「木虱」[bat sat](泉州)、「猫虱」[ba sak](海康)、「皮虱」[pʰi

sɛ](怀宁。安徽省)「母虱」[mu sɐt](広西省北海市合浦。「廉州話」)があげられる。(上記以外の地点では、「猫虱」「木虱」「狗虱」の指示対象は本論で扱う(人体に寄生する)「シラミ」とは異なる場合が多い。木虱は特に「臭虫」を指す場合が多い。また、人体に寄生するシラミと動物などに寄生するシラミは区別されることが多い。)「猫虱」「皮虱」「木虱」「母虱」いずれも第一音節が唇音で始まり、第二音節が「虱」となっている。

浙江省金华に「发仙」[fɤa sie]という形式が存在する。資料によると、「旧時、髪を食べる虫と考えられていた虫」とある(『金華方言詞典』)。「头虱」との意味による類推の可能性も考慮する必要があるが、「白虱」との音声的類似性も指摘できよう。金华では「虱」[sə?]という形式も同用される。金华の方言では、山摂字は白読では鼻音韻尾と入声韻尾が脱落する。「虱」は臻摂字だが、上述のように山摂字と振る舞いをおなじくする地点もあり、「仙」の本字が「虱」であった可能性は排除されない。

「老白虱」との音形の類似が指摘できるものに、「老米颠」[filɔ mi tie](上海)、「老母猪」[lɔ mu tʂu](徐州)がある。

「猫虱」と「木虱」に関しては、それぞれの地点で「虱母」[sak bɔ](海康)、「虱母」[sap bu](泉州)の語形が併存して見られ、第一音節と第二音節が転換しているようにも見受けられる。

漢字語形があてがわれる以前において、[虱＋m]系(現在の母系)に対応する[m＋虱]系のような形式が存在したと考えることはできないだろうか。[虱＋m]系やその他の形式におされ、淘汰されていった[m＋虱]系の子孫として“白虱系”にあげた「木虱」や「皮虱」、「(老)米颠」、「(老)母猪」などをとらえることはできないか。ただし、接尾辞“母”は南方における一般的な特徴であるので、慎重な考察が必要である。

[虱＋m]系＞虱母・虱婆

[m＋虱]系＞白虱・木虱・猫虱・母虱

(5)「头虱」、「三角虱」、(「狗虱」)

長江下流域と広西、湖南省に見られる。日本語でもケジラミ、頭ジラミなどというように、「虱」単独系に修飾成分(シラミがわく場所)が附加され、意味の増強が行われたものと考えられる。同じ方式で、「白虱」、「猫虱」、「皮虱」などについても説明しなければならない可能性がある。「三角虱」とは、虱の形による意味の補強(有縁化)と言えるかもしれない。

【地図 B】

山西省、河南省付近において語形「虱子」と「虱」が対立している。この境界附近において注目される事象について考察を加える。

(1)「子変韻母」(注③):「虱子」の一音節化。所謂「子変韻母」で、次の三地点がある。

郑州[ʂou]・原阳[ʂəu]・和顺[sʅːɤu]

韻尾が[-u]となり、長母音化するなどし、一音節化することを本稿では「子変韻母」の大きな特徴として捉え一分類としたが、次のような語形が近隣で見られることも注目される。

cf 原平[ʂɔ ə]:第一音節の入声韻尾?が脱落し、第二音節「子」が弱化している。(『原平方言志』p27 参観)

cf 博山[ʂʅ ɤ]:博山(山東省)では接尾辞「子」「儿」「里」等が/ə/となる。一音節化しているのかど

うかが不明(『博山方言研究』p24~)。

以上、cf であげた原平と博山の例は、読音が簡略化されているという点では、「子変」共通する現象(或いはその前段階)と捉えることができるかもしれない。

また、子変韻によって、もと「虱子」だったものが、漢字表記では「虱」単独系で記されている可能性はないか。「虱」単独系の分布範囲との関わりが重要と思われる。

(2)「虾」[ɕia]は「文白異読」か「子変韻母」か。

山西省南西部、乡宁で変則的な漢字語形「虾」[ɕia]が記録されている(『乡宁县志』)。本稿では、「虾」の語源を「虱」とみなし、「虱」単独系に分類した(解釈1)。ただし、「虱子」が語源であった可能性も否定できないため、今二つの解釈を挙げておく。

解釈1:乡宁において中古同音の「瑟」の字音は[se]であり、「虱」も韻母が[-e]である。(「虱」は音節表の例字として挙げられていたため声母不明)。山西省や内蒙古などでは、「虱」の韻母が/-a/となることは多いが、「虾」[ɕia]のようにi介音を持つことはない。しかし、北接する吉县では(語形は虱子だが)[ʂa tsʅ]となっていて、[ɕia]と[ʂa]の音声的な近さを指摘できるかもしれない。また、吉县では「虱」に[ʂa](白読)、[sɛ](文読)の対立があり(『吉县方言志』)、乡宁における[ɕia]と[se](「瑟」と「虱」を同音とみなした場合)の対立を吉县と平行する文白異読の現象と見なすことはできないだろうか。また、「臭虫」(語幹に「虱」を有することが多い。山西省における語形の多くは「壁虱」)が「切虾」[tɕiə ɕia]となることからも、「虾」[ɕia]は「虱」の白読形であると考えることができる。

解釈2:一方、山西省には「子変韻母」の現象を有する地点があることから、「虾」が「子変韻母」の現象による「虱子」>「[ɕia]」の変化(一音節化)の結果生じた漢字語形とは考えることはできないだろうか。

(3)韻母/-ei/

渭河流域の「虱」単独形に多くみられる特徴に「虱」が複母音([-ei][-ɐi]など)となって韻尾/-i/を持つことがあげられる(以下、/-ei/で代表。主母音のほとんどは[e])。この/-ei/が分布する地域と華北の入声を保存する地域は、隣接し、かつ重なり合うことがない(相補的)。一方西南官話区や、甘肃省・新疆などには「虱子」系でかつ語幹「虱」が/-ei/となるものが散見するが(地図上の、マークでは□に点が入る)、そこでは中古同音の「瑟」がともに/-ei/に属す。また西南地域(吉首・毕节・汉源)では中古t入声字(山摂字が多いが)が多く「瑟」「虱」と同じ/-ei/に属している。以上のことからこの[-i]は入声と関係が深いのではないかと考えることができる。ただし、西安・商县・宝鸡・天水・汉中などでは中古 t 入声字は多く/-ie/に属し、/-ei/に属す者は「瑟」「虱」のみである。(cf 南方(閩東に多い)では[sɛi?](南城)[sei?](福州)[seik](长乐)などとなることがある。)

(4)「虱」単独系が保存された理由について

この山西省付近の渭河・黄河流域に「虱」単独系が分布する(今は、問題を山西省付近に絞る)理由のひとつとして、韻母が/-ei/となったことにより「子尾」が付加されにくくなったということが考えられないか。普通話(北京語)における儿化時の/-i/尾脱落規則(小孩儿など)との対応、子変という現象の本質(発音の簡略化)とのかかわりにおいて興味深い。

【地図C】

第一音節の語尾(「虱」の入声韻尾について)-k、-pを中心に検討する。

江蘇省・浙江省・福建省・江西省・広東省及びその近隣には入声を保存する。中古t入声字であった「虱」は、それらの地域で[-t][-ʔ][-p][-k]及び入声調類のみ存在し開音節という形で存在している。そのうち、[-t]は古形を保存したもの、[-ʔ]は入声が弱化した際に一般的に見られるもの、「入声調類のみ」はさらに弱化が進んだものと考えられ、特に不可解な点はないと思われる。以下、[-p][-k]について考察する。

[-p]:「虱」にp入声を有している地点は、龙海・顺昌县埔上・龙岩・甫田・厦门・泉州・永春・台北([sap bu][sap bo]など)・石城・建宁・从化([sap ma]など)、である。これらの地点は福建省中南部を中心に分布する(主に閩南)。全ての地点でptkの入声を保存しており、p入声字が特異な発音ではないことが分かる。また、山臻攝入声韻尾は概ね[-t](もしくは[-ʔ])となっていることから、第二音節の唇音声母に同化する形でp入声が生じたと考えられる。(甫田では前音節韻尾と後音節声母が同化、類化する連読音変(『闽语研究』462頁)が紹介されている。また、埔上では、閉鎖音韻尾は不安定で、山摂入声は[-p]と、臻摂入声は[-k]と混乱を生じやすい(『闽语研究』448 頁)という指摘もあり、注目される。)

[-k]:「虱」にk入声を有しているのは、长乐・宁德・古田・周宁・福安(闽东)・都昌・余干・(江西北部)・东莞(广东)・平南・陆川・蒙山县西河(广西东部)・海口(海南)である。このうち、閩東諸地域と东莞では、入声字の[-k]への合流が進んでいることから説明できよう。以下の地点には問題が残る。

都昌[sɛk]・余干[sɛk ŋ](江西省北部)・平南[ɬak po]・陆川[sɐk]・蒙山县西河[tʰiak]・海口[tak kia][tɑk vo](海口の前者は第二音節語頭子音との同化と考えることもできるが、後者には問題が残る。)

4. 地図外の問題点

今回地図化することができなかったが、特に特徴的で興味がもたれる事柄に、山西省の「虱」字の韻母の帰属がある。以下その特徴を挙げておく。

・[-i]韻尾を有する「虱」が報告される地点(北方に限る)において、同韻(/-ei/を代表とする)への古t入声字の帰属には次の3パターンがある。

(A)「虱」以外に古t入声字の[-i]韻尾への帰属なし:永济・(新绛):(他地域で「虱」と同韻母となる古t入声字(舌、折、彻など。いずれも薛韻)は/-ie/などに帰属)(cf 运城[a]系)

(B)「虱」「瑟」以外の古t入声字の[-i]韻尾への帰属なし:(古t入声字は/-ie/などに帰属)西安・商县・宝鸡・天水・汉中など

(C)「虱」「瑟」以外の古t入声字が多く帰属(cf 运城[E]系・临汾・灵宝:単独系[-i]韻尾なし):吉首・毕节・汉源

・运城[ʂa/sE]・万荣[ʂa]・灵宝[sʏ]・洛阳[sæ]の「虱」単独系:洛阳において「虱」の振る舞いは上の(B)と同じである。中古音で同韻の「瑟」が同音であるため、特殊な音韻変化ではないと考えられる。「虱」「瑟」以外の古t入声字とは韻母が別れる。灵宝[sʏ]では(C)と同じく、「虱」と同じ韻母に古t入声字が多く帰属している。运城では、[ʂa](白読)の場合は(B)型となり、[sE]の場合は(C)型となる。

・左权[sa]の「虱」単独系:左权では単音節語を多く保存する(「蝇」「蚊」「虮」など)。中古で同じ櫛韻に属す「瑟」「失」「室」は[səʔ][ʂəʔ][ʂəʔ]となり、また同じ「虱」であっても、「壁虱」となる時は[sʅ]

と発音され、[sa]の特殊性が伺われる。左权では白読時の入声の脱落が報告されており(「辣」(曷韻)[la?-la]・「热」(薛韻)[zɐ?-zɤ]など)、白読の可能性が考えられる。(隣接する和顺では「子変」による一音節化が報告されているが、その関わりに興味がもたれる。

・山西省において、「虱」と「瑟」の読音が異なる地点は多く、孟县・清徐・孝义・介休・左权・中阳・临汾・新绛・运城などがある。このうち孝义・介休・中阳・临汾では、語頭子音のみが異なり、「虱」では ʂ となり、「瑟」では s となる。それ以外の地点では、韻母がことなる。

・山西省では、普通話「臭虫」は「壁虱」となることが多いが、左权・长治では「虱」の発音が異なっている。

注

①「虱」中古音:臻攝櫛韻開口審母(仮の二等、生母)三等韻。中古音で同音の常用字に瑟、蟋などがある。

②単独で表記できなかった漢字:[女+麻]:女偏に麻。[麻+女]:麻の下に女。[也+女]:也の右に女。也の二画目のはねは「女」の下にもぐる。

③本稿における子変韻母の定義:「子変韻母」とは、基本韻母の読音を変えることによって、普通話における軽声の接尾辞「子」を表現する。他に「子」尾の読音を変えることによって同様の機能を果たす「子尾音変」、声調を変えることによって同様の機能を果たす「子尾変調」などがある(『山西方言調査研究報告』88 頁)。

[参考文献]

多田恵、岩田礼 1999:ノミ[跳蚤]、シラミ[虱子].『中国における言語地理と人文・自然(5):漢語方言地図集(稿)第3集』

詹伯慧 1981:『现代汉语方言』、湖北人民出版社

侯精一、温端政 1993:『山西方言调查研究报告』、山西高校联合出版社

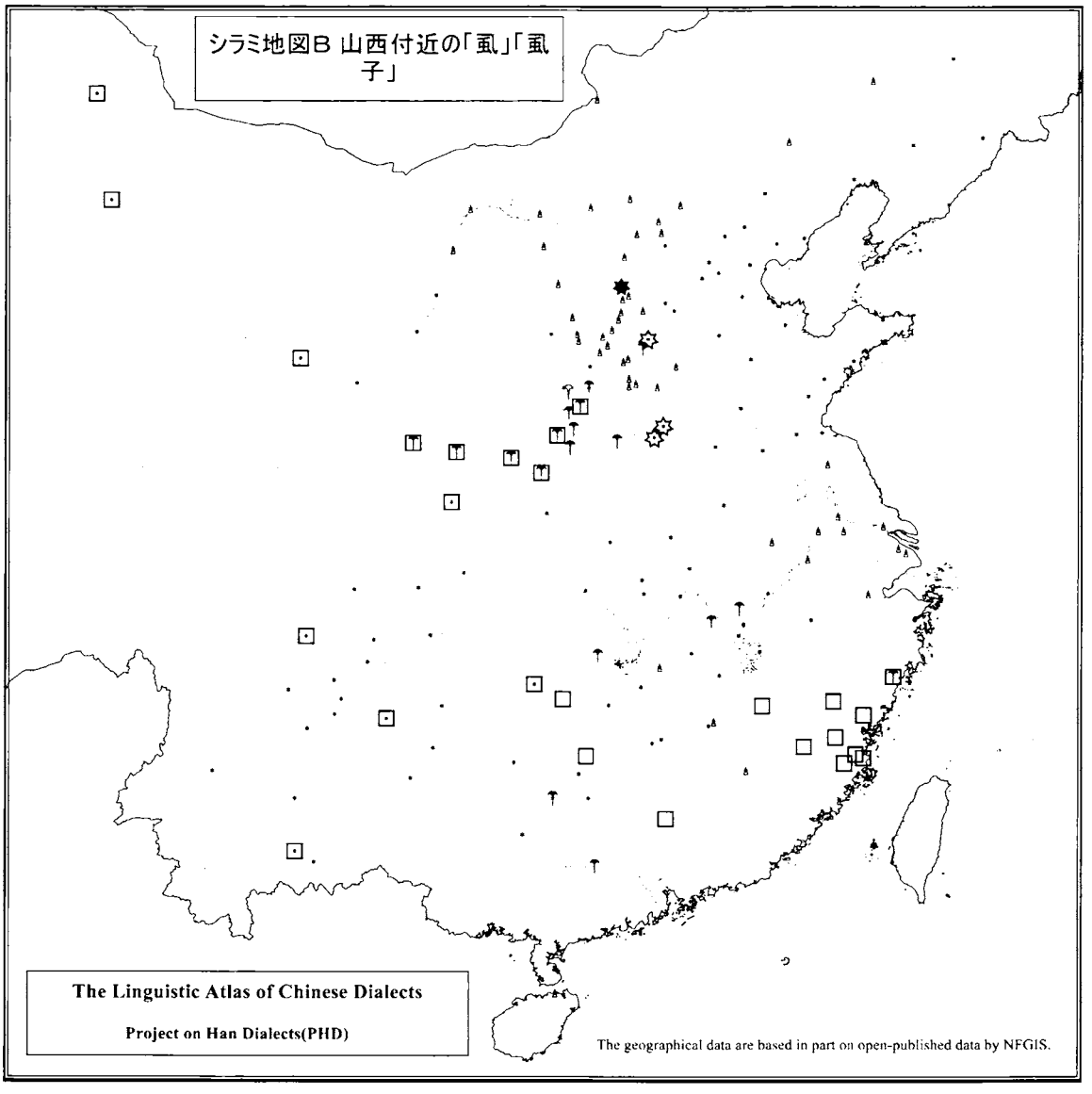
乔全生 2000:『晋方言语法研究』、商务院书馆

——— 1995:「山西方言“子尾”研究」『山西大学学报』 1995. 3

岩田礼 2003:「方言地図の作成とその解釈－中国語源地理学序説(続)－」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第7輯 2003 年

太田齋 1995－1996 等:北方方言怪音例集(1)～(6)『外国学研究XXXI』 1995、『神戸外大論叢』1995－1996 巻 46、47

- (1) 虱子 ts
- (1) 虱子 tʂ
- (1) 虱子 z
- (1) 虱子 t
- (1) 虱子 r
- (1) 虱子 l
- (1) 虱蚤
- (1) 虱子 ゼロ
- (1) 虱子子変
- (2) 虱母 m
- (2) 虱母 b
- (2) 虱婆 p
- (2) 虱婆子
- (2) 虱 [也 + 母]n
- (3) 虱单独系
- (4) 白虱
- (4) 老白虱
- (4) 老米颠
- (4) 老母猪
- (4) 木虱
- (4) 猫虱
- (4) 发仙



- 虱子系統
- 虱単独系（語末子音無し）
- 虱子 ゼロ
- 虱子子変
- 虱 /-ei/ （第一音節）
- 虾
- 虱入声（虱子系）

○ 虱 t 入声

▲ 虱 ʔ 入声

虱 p 入声

虱 k 入声

ダイズ、アズキ、ソラマメ、エンドウの語形中の“大”と“小”について

村上之伸

1　はじめに

ダイズ、アズキ、ソラマメ、エンドウは現代の中国においてよく見られるマメ科の植物である。生態的な特徴から二分するならば、夏作であるダイズ・アズキ類と冬作であるソラマメ・エンドウ類とに分かれる。これらはさらに豆の大きさの違いを加えると、以下のようにまとめることができる。

夏作　ダイズ（大）		アズキ（小）
⇳①		⇳②
冬作　ソラマメ（大）	⇔③	エンドウ（小）

同じ語形が方言によって異なる植物を表すことがある。矢印はそのような語形が存在する場合に付けた。具体的な語形は、ダイズとソラマメにみられる“大豆”、アズキとエンドウにみられる“小豆”、ソラマメとエンドウにみられる“豌豆”、“寒豆”、“蚕豆”である。本稿ではこれらの語形に注目し、このような状態になった原因について考えてみたいと思う。

2　語形分類の方法

ダイズとアズキの語形は以下の通り。

- 括弧内は“豆”が省いてあり、地図上では前の語形と同じ記号を用いる。
- 接尾辞は無視する。

	ダイズ	アズキ
（修飾成分が付かない）	豆	
（大きさに関する成分）	大豆	小豆
（色に関する成分）	黄豆 白豆 白黒豆 黒豆 青豆（青稞）	红豆 赤豆 红赤豆
（大きさと色に関する成分）		红小豆 小红豆
（食物）	豆腐豆（腐豆）	饭豆

ソラマメとエンドウの語形は以下の通り。

- 括弧内は“豆”が省いてあり、地図上では前の語形と同じ記号を用いる。
- 接尾辞は無視する。
- 斜線のある語形は後の“豆”がない語形も含むという意味。

	ソラマメ	エンドウ
(蚕)	蚕豆	蚕豆
(豌)	豌豆（弯）	豌豆
(寒)	寒豆	寒豆
(大きさに関する成分)	大豆 大豌/豆（腕，弯）	小豆 小豌/豆（细豌） 小寒/豆（水寒，寒寒） 小安豆
(その他)	胡豆（葫） 佛豆 罗汉豆 倭豆 槐豆（淮） 川豆 虎豆（老虎，虎鸟） 福州豆（福）	安豆 冬豆 雪豆（雪花） 麦豆（麦林，麦前，麦熟，麦根，麦仔，麦黄，麦间） 麦豌（麦丸，麦弯）*"豆"が付かない 荷兰豆(荷奶，呼仁，胡仁，河南)

3，1 ダイズの"大豆"とソラマメの"大豆" [地図1，3]

ダイズの語形"大豆"は河南、安徽、山東、江蘇など北方を中心に分布している。"豆"と併用される地点も多いが、そこでも他の豆と区別する時には、明確にする必要があるため必ず"大豆"を用いるようである。ではどうして"大豆"なのかというと、それはアズキが"小豆"であるからである。"小豆"に対して"大豆"なのだ。地図を見れば共に北方に集中して分布しているのがわかるであろう。両者は生態的に似ていたため、大きさを表す形態素を修飾成分として使うことで語形を区別しようとしたのである。

問題となるのはソラマメの"大豆"である。山西、寧夏、甘粛、河北辺りに広く分布するこの語形は、ダイズの"大豆"とちょうど山西と河南の省境で分かれている。このような分布状況からソラマメの"大豆"はダイズの"大豆"が歴史的に変化したものであると推測する。ソラマメはダイズより大粒の豆であるから、ダイズより"大豆"というのに適した植物であると考えたのであろう。つまり比較する対象が変化した。本来、ダイズとアズキの関係でダイズに用いられていた"大豆"が、ソラマメとダイズの関係でソラマメに用いられるようになったのである。これにより"大豆"がソラマメ、"小豆"がアズキという植物の生態からみるとちょっとおかしな関係に変わってしまった。この変化により、当地において"大豆"を使えなくなったダイズは"黄豆""白豆""白黒豆""黒豆"といった色を修飾成分とする語形に変わった。

長江流域にみられるソラマメの"大豆"についても説明をしておく。これらはすべて「山西と同じことが個別的に起こった」と解釈することも可能だが、浙江杭州周辺の"大豆"については官話の影響も否定できないし、湖北の1地点は周囲のソラマメの語形に"大豌豆"があることから、「"大豌豆"→"大豆"」と説明することもできる。いずれにしてもこの分布からソラマメの"大豆"がダイズの"大豆"よりも古くから北方に存在していたということを証明することはできないと思う。

3, 2 アズキの“小豆”とエンドウの“小豆” [地図2, 4]

“小豆”は北方の語形である。ほとんどの地点ではアズキを指すが、甘粛の一部ではエンドウを指す。地図の分布からアズキの“小豆”がエンドウに変化したと考えられる。このように変化したのはソラマメを“大豆”といっていたからである。つまり、元来、ダイズとの比較で使われていたアズキの語形“小豆”が、ソラマメが“大豆”となったことで、比較する対象を失い、ソラマメと生態的に似た特徴をもつエンドウの語形に移ったのである。一方アズキの“小豆”は地点によっては“红小豆”のように“红”を修飾成分として付け、ダイズの語形と色で区別するようになった。

3, 3 “大豆”と“小豆” [地図3, 4]

“大豆”と“小豆”の意味するものがどのように変化したかをまとめたのが以下の表である。東から西に向かってダイズ・アズキ類がソラマメ・エンドウ類に変化していく過程が理解できよう。

	西部（甘粛）	中部（山西）	東部（河南）
“大豆”とは	ソラマメ ←		ダイズ
“小豆”とは	エンドウ ←		アズキ

この変化は北方における「マメの歴史」からみても理解できる。ダイズとアズキは古くから中国に存在していた豆類である。一方、ソラマメとエンドウは外来種で、特にソラマメに関しては次のような報告がある。

「クーベロ(1984)によると、ソラマメの最も東の伝播地域である中国や日本へは後述する大粒系の系統が紀元1200年ごろに、おそらく“シルクロード”を経てもたされた(p.72)」前田(1987)

ここから、ダイズとアズキを“大豆”と“小豆”で区別していたところに、ソラマメが伝播し、それにより「ダイズより大きな豆」として“大豆”がソラマメの語形に使われるようになった、という推測が成り立つ。“小豆”がエンドウになったのはもちろんその後で、分布が狭いので最近の変化ではないかと考えられる。

“大豆”がソラマメを指すようになってからダイズは色を修飾成分として用いた語形に変わる。ダイズの変化だけを見ればこれは一種の明確化ということにならないだろうか。つまり、“大”を用いた「相対的な語形」から色を修飾成分として用いた「絶対的な語形」への変化である。“大豆”はアズキを区別するのに用いられた語形であるが、それよりもその豆の色を直接修飾成分として用いたほうが指すものが明白になるのだから、自然な変化のように見える。

同じ観点で漢語方言全体についてみると、ダイズとアズキの地図に色を修飾成分として用いた語形が広く分布しているのがわかる。これも「大きさから色への変化」すなわち明確化の結果なのかもしれない。ソラマメとエンドウの地図にはほとんど現れないのに対して、特徴的である。

4、1 ソラマメの“大豌豆”とエンドウの“豌豆” [地図1, 5]

修飾成分が完全に一致しているわけではないが、“大豆”との歴史的関係で重要なので、ここにとりあげる。ソラマメが“大豌豆”で、エンドウが“豌豆”となるのは、甘粛南部に集中している。ソラマメとエンドウの語形を大きさの修飾成分で区別しようとした。周辺には囲まれるようにソラマメの“大豆”があり、その東部にはダイズの“大豆”も見える。以前は“大豆”であったが、エンドウとの関係を明確にするために“大豌豆”となったと考えられる。大きさを表す修飾成分で語形を区別する

点はソラマメが“大豆”で、エンドウが“小豆” となる甘粛の北部の形に似ているが、変化の方向が異なる。すなわち北部ではソラマメの語形にエンドウが合わせたのに対し、南部ではエンドウの語形にソラマメが合わせた形となる。

4，2 ソラマメの“豌豆”とエンドウの“豌豆” ［地図5，6］

ソラマメが“豌豆”となるのは、湖南に集中している。その西側にソラマメの語形“胡豆”が広く分布していてことから、“豌豆”は“胡豆”が変化したものと考えたい。つまり、北方の語形“豌豆”が新しく入ってきた時、湖南ではエンドウに“麦豆”など固有の語形、ソラマメには“胡豆”が用いられていた。“胡” と“豌” が音声的に近かったこと、両植物の生態的特性と似ていたことからソラマメに“豌豆”を用いるようになったのではないか。この語形が定着すると周囲のエンドウに“豌豆”を用いる地点では同音衝突がおきる。エンドウが“小豌豆”となったり、ソラマメが“大豌豆”となったりしているのは回避した結果である。

4，3 ソラマメの“蚕豆”とエンドウの“蚕豆” ［地図5，6］

エンドウが“蚕豆”となるのは浙江である。解釈としては前節の湖南に近い。つまり北方からソラマメの語形“蚕豆”が新しく入ってきた時、“佛豆”、“罗汉豆”など浙江固有の語形が存在しており、“蚕豆”はソラマメの生態的特性と似ていたエンドウの語形に用いるようになったと考えたい。

4，4 ソラマメの“寒豆”とエンドウの“寒豆” ［地図5，6］

ソラマメが“寒豆”で、エンドウが“小寒豆”となるのは上海周辺である。西側にはエンドウに“寒豆”を用い、ソラマメに“蚕豆”を用いる地点が囲むように分布することから、以前、上海周辺でもエンドウに“寒豆”を用いていたが、ソラマメの“寒豆”が入ってきたことにより、同音となり、エンドウが“小寒豆”に変化した、と推測できる。つまり元来“寒豆”はエンドウに用いる語形であったということになる。分布から“豌豆”や“安豆”と関係がある語形であることがわかる。冬作の植物という意味で“寒”を用いたのであろう。ではソラマメの“寒豆”はどのようにして生まれたのであろうか。村上(1997)は浙江省のソラマメの語形の内、仏教に関する語形“佛豆” “罗汉豆” と地名に関する語形“倭豆” “淮豆” “川豆” は全て“胡豆”から説明できるとした。“寒豆”もまた“胡豆”から説明できないであろうか。エンドウの“寒豆”と“胡豆”が音声的に近く、いずれも冬作の植物というところからの連想で、両者は同音となり、エンドウは区別するために“小寒豆”となったと考えられる。

5、まとめ

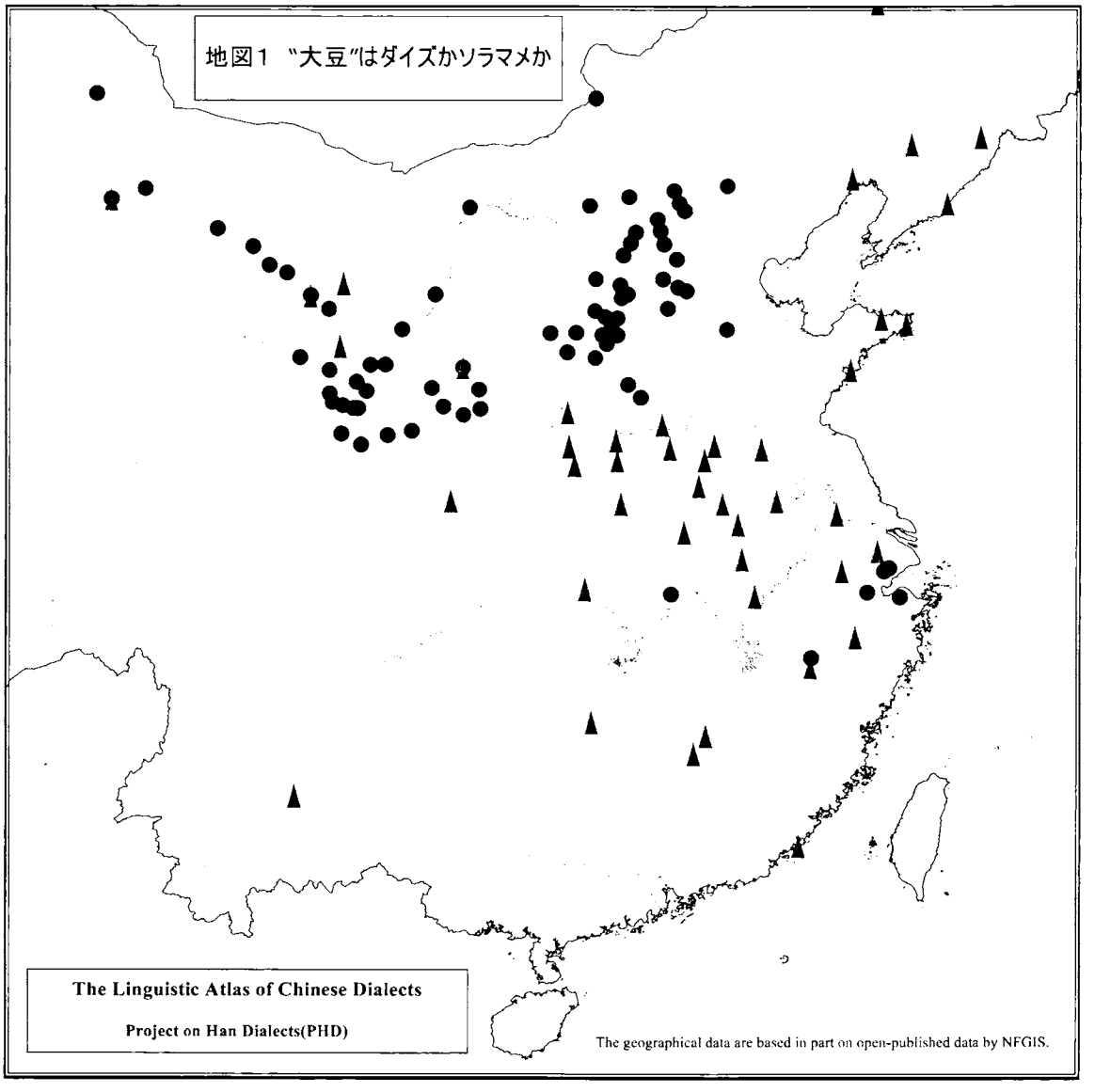
4種類の豆について、同じ語形でありながら方言によって指すものが異なる場合を取り上げて説明したが、そのほとんどに“大”と“小”が関わっている。“大”と“小”は、ダイズ・アズキ類では使われなくなる方向に変化していたが、ソラマメ・エンドウ類では逆で使われる方向に変化していた。

*アズキのデータの一部は遠藤雅裕氏から頂きました。記して感謝いたします。

［参考文献］

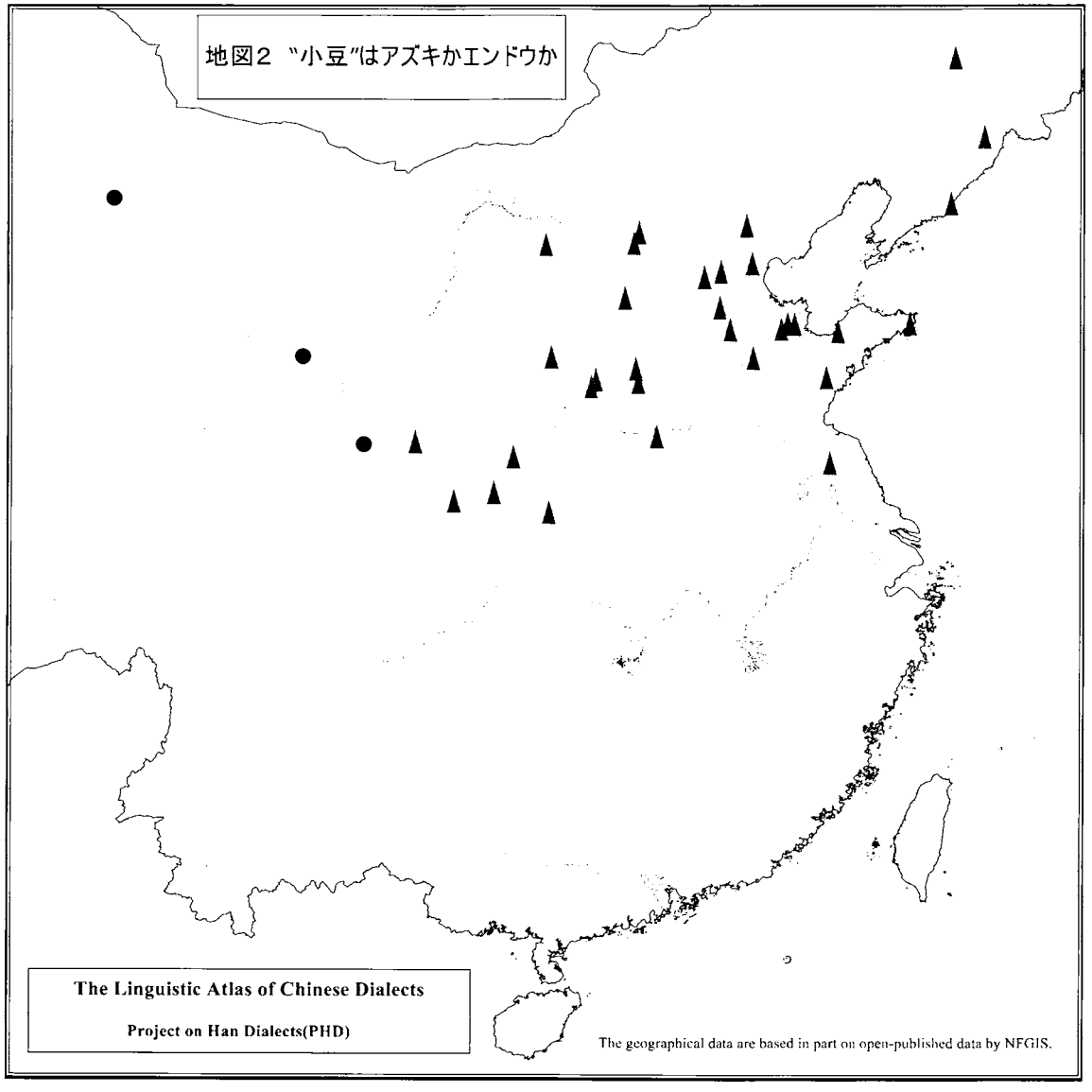
前田和美 1987.《マメと人間—その一万年の歴史》古今書院

村上之伸 1997. 浙江省における語彙「蚕豆」の分布とその解釈 《麗澤大学紀要》第65巻 181－193.


地図1 "大豆"はダイズかソラマメか
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

▲ ダイズ

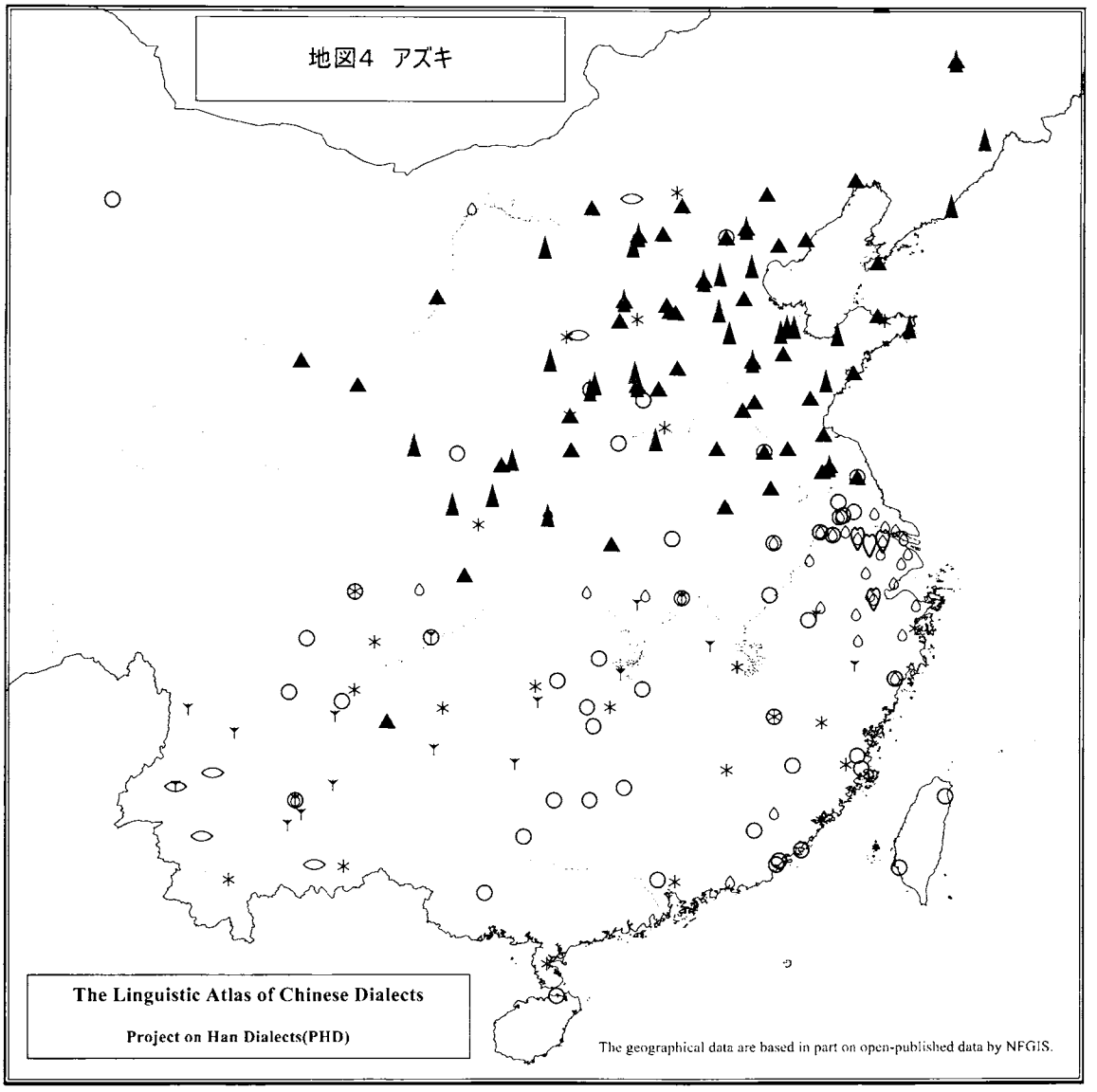
● ソラマメ


地図2 "小豆"はアズキかエンドウか
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

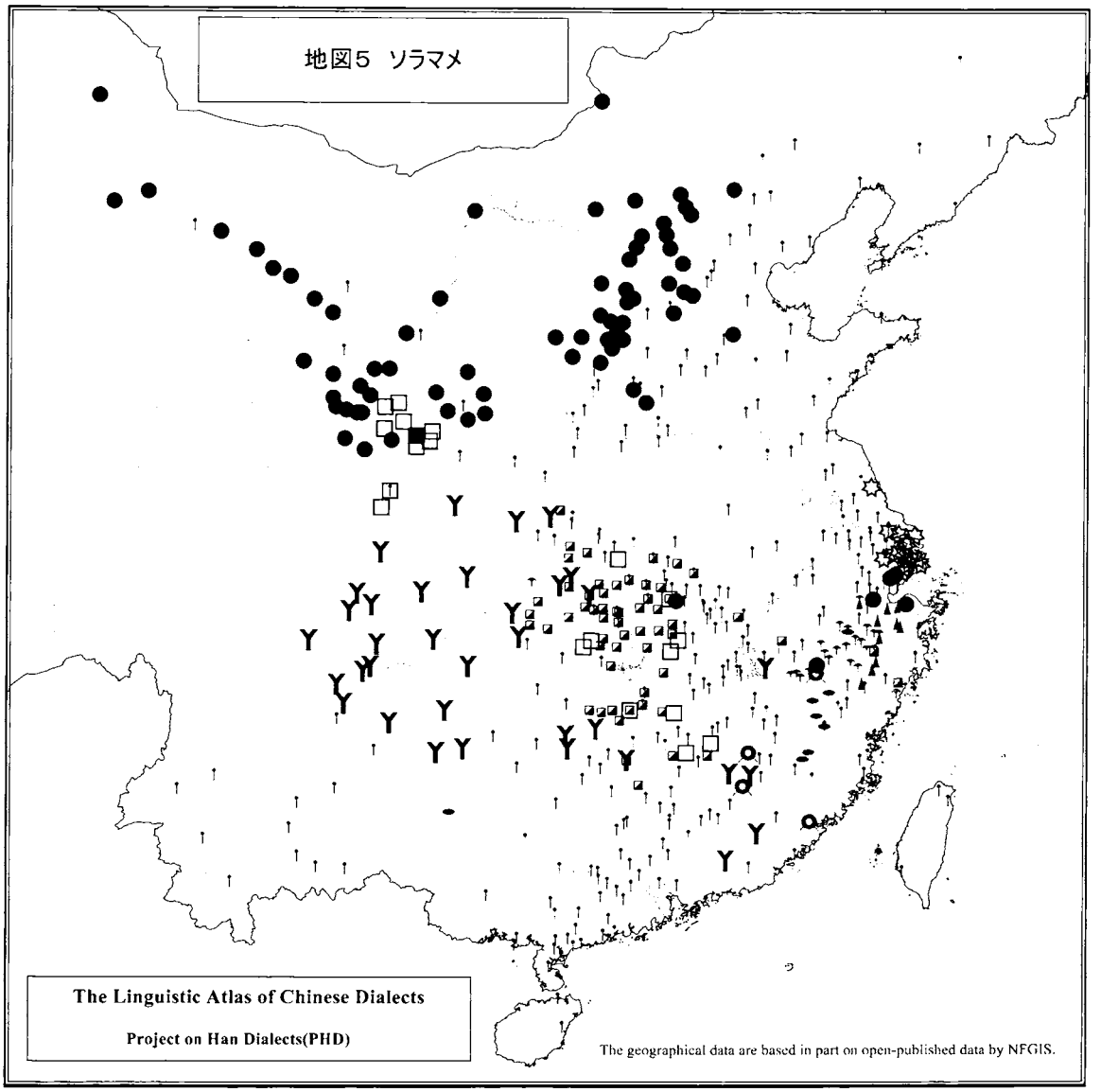
▲ アズキ

● エンドウ

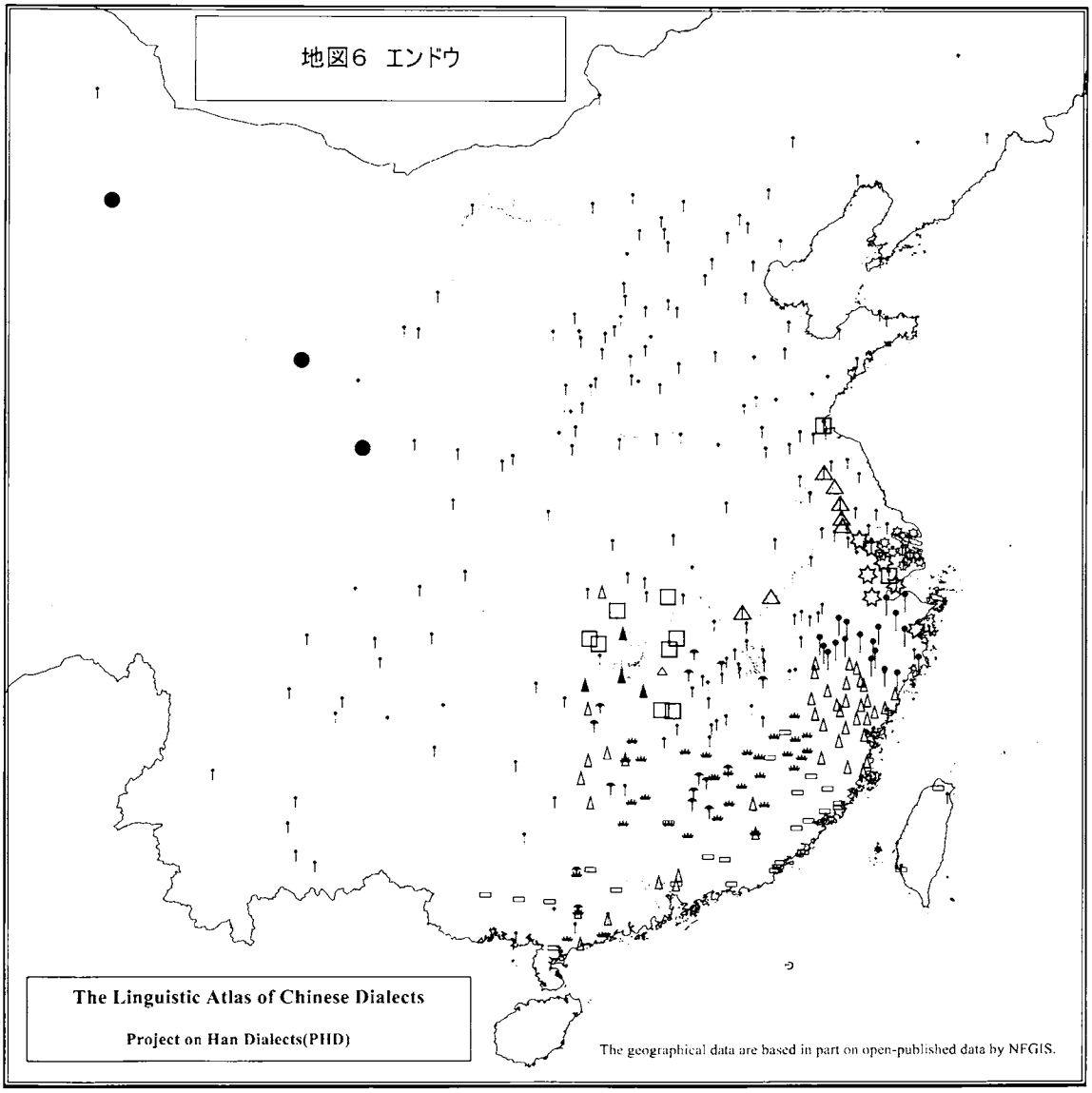
- 豆
- 大豆
- 白豆
- 黄豆
- 黑豆
- 白黑豆
- 青豆
- 豆腐豆
- 其他



▲ 小豆
▲ 红小豆
○ 红豆
◊ 赤豆
⬭ 小红豆
♡ 红赤豆
ϒ 饭豆
✳ 其他



- 大豆
- 蚕豆
- 胡豆
- 佛豆
- 罗汉豆
- 倭豆
- 槐豆
- 川豆
- 福州豆
- 虎豆
- 寒豆
- 豌豆
- 大豌豆



豌豆
麦豆
麦豌子
冬豆
雪豆
荷兰豆
寒豆
小寒豆
安豆
小安豆
小豌豆
蚕豆
小豆

「ジャガイモ」「サツマイモ」の地図

鈴木史己

1. 地図作成の目的

ジャガイモとサツマイモは、ともに南米原産のイモで、ほぼ同じ時期に中国に伝来したとされてきた。両者ともに1600年前後にヨーロッパの船舶によって華南海岸にもたらされたというが、それを確定しうる絶対的な証拠はない。1596年刊行の李時珍『本草綱目』では、サツマイモの項はあるがジャガイモの項はない。また、『ジャガイモ・サツマイモ』(農業技術大系，作物編5，農山漁村文化協会，1975)によると、基本的にジャガイモは冷涼な気候を好むのに対し、サツマイモは温暖な気候を好む。中国への初上陸地が華南海岸であれば、華南の温暖な気候に適したサツマイモの伝播のほうがより早かったであろうと推測される。しかし、これらは推測の域を出ず、ジャガイモとサツマイモの伝来時期の先後関係について、文献から確定的事実を引き出すことは難しい。

この地図を描くことによって新たな事物に対処して新語が形成されるメカニズムを探り、併せて、両者の伝播時期の先後関係にも関心を払って行きたい。

2. 語形分類の方法

中国在来のイモ、あるいは形状の似たものを語幹とし、それに修飾成分を付加した語形が大部分を占める。語形を修飾成分と語幹に分け、それぞれに着目した地図を作成した。なお、語幹のみで成り立つ語形は修飾成分ゼロと考える。

[地図 A] ジャガイモの修飾成分

「土」、「山药」、「地」、「马铃」、「洋」、「荷兰」などがある。なお、「山药」について、「药」は常に「山」と結合するため、「山药」で一つの項を立てた。

[地図B] ジャガイモの語幹

主なものでは「芋」、「薯」、「山药」、「豆」、「蛋」、「蔓菁」がある。形状を示す「豆」、「蛋」は、語幹というよりも後置付加成分に近いが、便宜上語幹に分類した。しかし、「山药」について、「药」は常に「山」と結合するため全体で一つの語幹と見なし、「豆」や「蛋」が後置成分として付加されている場合(ex 山药蛋、山药豆)も優先的に「山药」に分類した。「蔓菁」について、「蔓」という成分を含む語形(ex 地蔓、山蔓)も「蔓菁」の「菁」が脱落したものと解釈して「蔓菁」に分類した。

[地図C] サツマイモの修飾成分

「红」、「白」、「地」、「山」、「番」などがある。なお、「山药」については、前述のように「山」と「药」は不可分なので、地図の凡例では「山」を修飾成分にもつ他の語形とは別の項を立てた。分析では他の「山」を修飾成分にもつ語形と同様に扱う。

[地図 D] サツマイモの語幹

「芋」、「薯」、「山药」、「苕」、「瓜」、「萝卜」、「茄」、「黍」、「葛」がある。なお、「山药」について、地図Bと同様に全体で一つの語幹と見なした。ちなみに、サツマイモに関しては「山药」に他の成

分が付加されることはない。形状を示す「瓜」、「萝卜」、「茄」といったものも、付加成分の性格が色濃いが、地図Bと同様に語幹に分類した。

［地図 E］ ジャガイモとサツマイモ

ジャガイモとサツマイモに共通してみられる特徴的な成分に着目した地図である。表1は分類をまとめたものである。

(1)「地」系

修飾成分「地」を有する語形である。ジャガイモは「地蛋」または「地豆」、サツマイモは「地瓜」という語形がこの系統に類する。

(2)「山药」系

「山药」を含む語形である。ジャガイモは「山药」、「山药蛋」、「山药豆」、サツマイモは「山药」がこの系統に類する。

(3)「洋」系

サツマイモの「山」＋‘イモ’または「番」＋‘イモ’と、それに修飾成分「洋」を付加して成立するジャガイモの語形を便宜上「洋」系とする。なお、「番」の漢字表記は「番」と「蕃」があるが、「番」で代表させる。

表1

	ジャガイモ	サツマイモ
(1)「地」系	地蛋／地豆	地瓜
(2)「山药」系	山药／山药蛋／山药豆	山药
(3)「洋」系	洋山芋／洋山薯	山芋／山薯
	洋番芋／洋番薯	番芋／番薯

3. 地理的分布の特徴

［地図 A］

ジャガイモの修飾成分は、(1)‘土地のもの’を表す成分、(2)‘外国’を表す成分、(3)修飾成分ゼロの三系統に分類でき、(1)・(2)の二系統がほぼ全国に広く分布する。

(1)‘土地のもの’を表す成分(「土」、「地」、「山药」)

もともとは中国在来のイモ類(ex サトイモ、ヤマノイモ)を指した語形であるため、ジャガイモの栽培が定着してはじめて成立しうる語形である。華北東部はこの系統の語形が大多数を占める。

・「土」系：常に「豆」と結びついて「土豆」という語形で河北・河南・遼寧・吉林各省に分布する。他の語形と併用されていることが多く、長江流域の官話地域にも分布がみられる。

・「地」系：「地豆」または「地蛋」という語形で山東省を中心として分布している。渤海を挟んで山東半島の向かい側にある遼東半島にも分布する。

・「山药」系：山西省・河北省に分布する。

(2)‘外国’を表す成分(「洋」、‘外国人’、「荷兰」)

華北東部以外の地域の語形はほとんどが‘外国’を表す成分をもち、特に華南沿岸部と長江流域に顕著にみられる。

・「洋」系：長江下流域を中心にして長江沿いに分布する“長江型”の分布を示し、長江流域以外でも雲南省や陝西省以西にみられる。

・‘外国人’系：福建省にみられる。いずれの語形も「番」・「蕃」という成分をもつが、修飾成分は「番」（外国）だけではなく「番人」・「蕃囝」（外国人）である。福建省ではサツマイモを「番薯」というため、差別化を行ったということが考えられる。
・「荷兰」系：常に「薯」と結合して「荷兰薯」という語形で広東省に分布する。
・「马铃」系：「薯」または「芋」と結び付いて、主に南方に分布する。‘鈴なりになるイモ’の意とも考えられるが、‘マレー’の音訳と解釈してこの系統に分類する（岩田礼 1995 参照）。
（3）修飾成分ゼロ
修飾成分ゼロの語形は「薯」系（「薯仔」「薯崽」）と「芋」系（「芋头」）の二つがあり、いずれも‘イモ’を表す語形で分布は長江以南に偏る。地点数は多くないが、前者は「荷兰薯」、後者は「洋芋」の分布地域とほぼ一致するのが特徴といえる。

［地図B］
語幹は（1）‘イモ’を表すもの、（2）‘イモ’以外の‘丸いもの’を表すものの二系統に大別できる。後者と「山药」は華北東部に、「山药」を除いた‘イモ’はそれ以外の地域に分布している。
（1）‘イモ’を表すもの（「芋」、「薯」、「山药」）
「芋」と「薯」はどちらも‘イモ’の総称を表すものである。「芋」はほとんどが修飾成分「洋」と結びつき、“長江型”分布を示す。「薯」は華南に分布がみられ、北方には分布しない。「山药」系はもともと中国在来のヤマノイモを指すもので、山西省・河北省に分布がみられる。
（2）‘丸いもの’を表すもの（「豆」、「蛋」、「蔓菁」）
「豆」系：黒竜江・遼寧・河北・山東各省に分布し、湖北省や江西省といった南方地域にもみられる。他の系統との併用地点も多い。
「蛋」系：山東省・安徽省北部に分布している。「山药」系に「山药蛋」という語形が多いことを考慮すると、華北東部のかなりの地域を占めることになる。
「蔓菁」系：‘カブラ’を指すもので陝西省北部から山西省中部にかけて分布がみられる。

［地図C］
ジャガイモと共通する（1）‘土地のもの’を表す成分、（2）‘外国’を表す成分、（3）修飾成分ゼロの三系統に、（4）‘外皮の色’を表す成分を加えた四系統に分類できる。
（1）‘土地のもの’を表す成分（「山」、「地」）
・「山」系：「芋」、「薯」、「药」と結合する。「山芋」、「山薯」は江淮地方に、「山药」は山西省と雲南省に分布する。
・「地」系：常に「瓜」と結びついて「地瓜」という語形で山東省に分布する。
（2）‘外国’を表す成分（「番（蕃）」、「洋」）
「番（蕃）」が主で、ジャガイモで地点数の多かった「洋」は陝西省南東部の商県にみられるだけである。
・「番」系：浙江・福建・江西・広東各省に広く分布し、台湾でもこの系統である。サツマイモが伝来したとされる華南沿岸部を中心にした地域、つまり‘外国’のものということが問題意識の対象になりうる地域に分布しているということになる。
・「洋」系：「洋红薯」という語形で、下に挙げる1地点しかみられない。この調査地点では赤色品種を指す「红薯」・「红苕」が併用されており、「洋红薯」は白色品種を指す。赤色のサツマイモが主

流で白色品種は‘他の地域’のものということであろう。
cf) 商県 洋红薯[iɑŋ xuəŋ su] 張成材 1990『商県方言志』
(3)修飾成分ゼロ(「薯」、「苕」、「芋头」)
‘イモ’を表すもの(「芋头」「薯」)とそれ以外(「苕」:野えんどう)があり、いずれも海岸部には分布が見られない。「芋头」は山東省西部・安徽省、「薯」は江西省、「苕」は長江中・上流域に集中した分布がみられる。
・「芋头」:「山芋」の分布地域の西縁にほぼ一致する。それはまた語幹「芋」の西縁でもあり、それ以西は語幹「薯」の分布地域となる(地図D参照)。異なる語幹との境界であるために語幹のみの語形が成立しえたと考えたい。下に述べるように、「芋头」の分布地域の南縁には修飾成分ゼロの「薯」が分布することもそれと平行する現象であろう。
・「薯」:「番薯」の分布地域の北西縁を取り巻くように分布しているのが特徴といえる。この付近は「番薯」と「红薯」との境界にあたるので共通部分「薯」を単独でサツマイモにしたと考えられる。また、北縁には修飾成分ゼロの「芋头」が分布する。
・「苕」:岩田礼 1995 では、「苕」と「薯」の関連性について述べておられる。前述のようにサツマイモの‘イモ’以外の語幹は一般に付加成分の要素が強いが、修飾成分ゼロの「苕」が分布することは「苕」が語幹としての性格を備えていることを意味し、‘イモ’系語幹の「薯」と交換可能になる。岩田礼 1995 の仮説を裏づけるものとなろう。
(4)‘外皮の色’を表す成分(「红」、「白」、「黄」)
「红」が主で、中国内陸部に分布して沿岸部にはみられない。「黄」は雲南省に2地点、「白」は北京周辺と雲南省に集中した分布がみられるが、大概は「红」との併用地点であり、品種の違いが関係することが推測される。
地点数は少ないが興味深い語形として「红白薯」、「白红薯」、「红红薯」がある。「红白薯」は天鎮の語形で、この地では「红薯」で外皮の赤い品種を、「白薯」で白い品種を指す。「白薯」に修飾成分「红」を付加したという形式であり、「红白薯」において「白」は‘白い’という色彩の問題意識が失われている。「白红薯」、「红红薯」は東安の語形で、両者が併用されている。語頭の「白」と「红」が色を表す修飾成分、「红薯」が語幹という形式であるが、ここでは「红薯」=‘赤いイモ’という語源意識は既に失われている。いずれも修飾成分が本来の意味を失ってサツマイモの通称を表す固有の語形として定着している例に挙げられる。
cf) 天鎮 红白薯[huɤɣ pɛə ʂu] 謝自立 1990『天鎮方言志』
東安 白红薯[bo ʁuŋ ʑy] 红红薯[ʁuŋ ʁuŋ ʑy] 鮑厚星 1998『東安土話研究』

[地図D]
地図Bのジャガイモの語幹と同様に、‘イモ’を表すものと‘イモ’以外の語幹の二系統に分けられる。
(1)‘イモ’を表す語幹(「芋」、「薯」、「山药」)
‘イモ’の総称である「芋」と「薯」は、「芋」は江蘇省・安徽省付近に限定されるのに対し、「薯」は中国東南部に加えて、華北の山西省にも分布している。「山药」は山西省・雲南省に分布する。
(2)‘イモ’以外の語幹(「苕」、「瓜」、「萝卜」、「茄」、「黍」、「葛」)
いずれも細長い形状をもち‘細長いもの’の象徴として採用された成分で、‘丸いもの’を語幹とすることが多いジャガイモときれいに一線を画している。中でも、「苕」と「瓜」は地点数が多く、

「苕」は長江流域と陝西省に、「瓜」は山東省と東北地方にそれぞれ分布する。

［地図E］

サツマイモの語形に何らかの操作を加えることでジャガイモの語形になるという形式が多く、サツマイモの伝播のほうが早かったであろうということがこの地図からうかがわれる。語形の形式が南北で傾向が異なり、北方では後置成分で区別する傾向があるのに対し、南方では前置成分（修飾成分）で区別する。

(1)「地」系：ジャガイモ＝地蛋／地豆、サツマイモ＝地瓜

山東省のほぼ全域において、ジャガイモ・サツマイモともに修飾成分「地」をもつ。後置成分は、ジャガイモは「蛋」または「豆」のいずれも丸い形状をイメージさせるものであるのに対して、サツマイモの「瓜」は細長い形状をイメージさせる。ジャガイモは比較的球形に近く、サツマイモは比較的細くて長い印象があるために、こうした後置成分をそれぞれに用いることで差別化したのであろう。ここではジャガイモとサツマイモの伝播の先後関係はみえない。

(2)「山药」系：ジャガイモ＝山药／山药蛋／山药豆、サツマイモ＝山药

山西省・河北省に分布がみられる。他の付加成分のない「山药」という語形の分布を見ると、ジャガイモでは山西省から河北省北部、サツマイモでは河北省南部にみられ、明確な地理的相補分布が成立している。ジャガイモの「山药」系は河北省南部にも分布するが、いずれも「蛋」または「豆」という成分が語尾に付加されており、サツマイモの語形に抵触することはない。つまり、河北省南部において形式上ではサツマイモの語形に後置成分を付加することでジャガイモの語形が成立しているということになる。これについては4. で再度詳しく論ずる。

(3)「洋」系：ジャガイモ＝洋山芋／洋番芋、サツマイモ＝山芋／番芋

サツマイモの語形「山芋」・「山薯」は江淮地方に、「番芋」・「番薯」は浙江・福建・江西・広東各省にそれぞれ分布する。ジャガイモは、長江下流域・江淮地方において、サツマイモの語形に修飾成分「洋」を付加した形で分布し、地理的にはサツマイモの語形と同傾向の分布を示す。サツマイモの語形をもとにジャガイモの語形が成立しているという形式は(1)「地」系、(2)「山药」系と同様である。しかし、北方に分布する(1)・(2)はサツマイモの語形に後置成分を付加する形式で区別しているのに対し、南方の(3)「洋」系は前置成分を付加する形式で区別している（下の表2を参照のこと）。

注）現時点のデータで、「山药」系は前置成分を有する形式が平谷にみられるが、ヤマノイモと

そのため、この地域ではジャガイモ・サツマイモにヤマノイモを加えた三者の関係を考える必要がある。

後置成分のない「山药」は、山西省から河北省北部にかけてはジャガイモを、河北省南部ではサツマイモを、山西省南部ではヤマノイモを指す。山西省におけるジャガイモの語形に注目すると、中部から南部では「山药蛋」が分布し、北部では「山药」と「山药蛋」が併用される地点が多い。しかし、その併用地域の中でも、西側は「山药」が単独でみられることが多い。これは、東側ではサツマイモの「山药」地域と接しているので、同語衝突を避けたのであろう。

山西省中部・南部においてジャガイモの「山药」が分布しないのは、ヤマノイモの「山药」が根強いからである。以下に山西省の主な地点のジャガイモ・ヤマノイモの語形を挙げる。先に挙げる地点ほど、北に位置する。

		ジャガイモ	ヤマノイモ
北	大同	山药[sæ yaʔ]	长山药[tʂʰɒ sæ yaʔ]
↑	忻州	山药[sɑN iɛʔ]	长山药[tʂʰɑN ʂɑN yɔʔ]
↕	离石	山药[sæ iəʔ] 山药蛋儿[sæ iəʔ tar]	长山药[tsʰɔ sæ iəʔ]
↓	太原	山药蛋[sæN ieʔ tæN]	山药[sæN ieʔ]
南	临汾	山药蛋儿[ʂan yɔ tʰɐr]	山药[ʂan yɔ]

『普通话基础方言基本词汇集』

「山药」がジャガイモを指す北側の調査地点ではヤマノイモの語形の語頭に修飾成分「长」が付加されており、逆にヤマノイモを指す南側の調査地点ではジャガイモの語形に後置成分「蛋」が付加されている。

サツマイモの「山药」地域のヤマノイモの語形はどうか。以下に河北省南部のサツマイモ・ヤマノイモの語形を示す。

	サツマイモ	ヤマノイモ
保定	山药[ʂan iau]	菜山药[tsʰai ʂan iau]／麻山药[ma ʂan iau]
石家庄	山药[ʂan iau]	白山药[pai ʂan iau]
平山	山药[ʂæ iɛ]	菜山药[tsʰæ ʂæ iɛ]

『普通话基础方言基本词汇集』

ここでは「山药」がサツマイモを指すため、ヤマノイモの語形の方に修飾成分が付加されている。

以上のことを踏まえると、山西省・河北省の「山药」をめぐる地理的分布は表3のようになる。

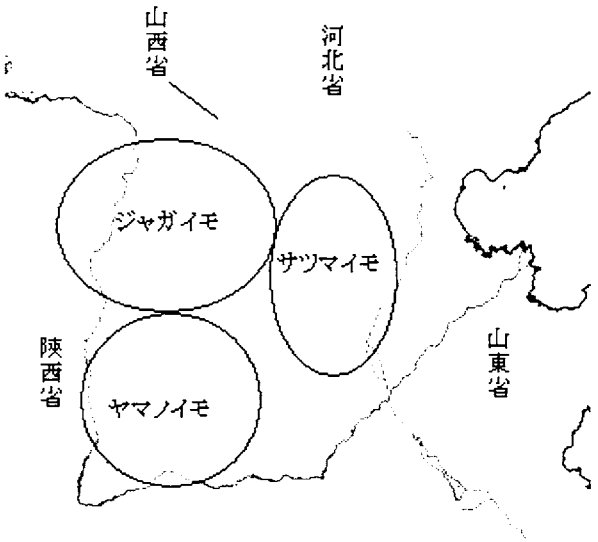
表3

	山西省北部	山西省中・南部	河北省南部
ジャガイモ	山药	山药蛋	
サツマイモ	红薯		山药
ヤマノイモ	长山药	山药	菜山药／麻山药／白山药

他の成分のない「山药」は、いずれの地域でもジャガイモ・サツマイモ・ヤマノイモの3項目のうちの一つしか指していないのが見てとれる。現代では山西省においてサツマイモに「山药」系はみら

れないが、清代の方志には大同の「回子山药」や五台の「回回山药」といった語形が記載されるという(『清史資料』第七輯p259-260 より)。通時的な変遷については今後の課題として考えていきたい。図1は現代の山西省・河北省における他の成分のない「山药」の指示対象を地図上に大まかな領域で示した概観図である。

図1
「山药」の指示対象概観図



5. ジャガイモの修飾成分「洋」の来歴

長江下流域を拡大した下図2を見ると、「洋」+「山」+'イモ'と「山」+'イモ'(以下両者をあわせて「山」+'イモ'系と表記する)、「洋」+「番」+'イモ'と「番」+'イモ'(同「番」+'イモ'系)はほぼ分布地点が一致している。つまり、ジャガイモの語形はサツマイモの語形を語幹として修飾成分「洋」を付加することで成立している。

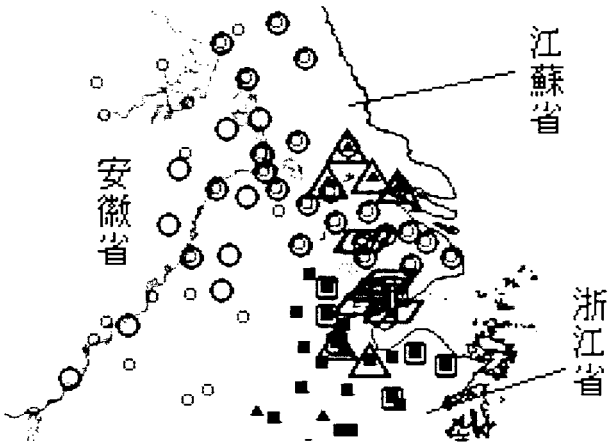
サツマイモの語形の分布を見てみると、「山」+'イモ'は江蘇省・安徽省に分布し、長江下流域において"長江線"を越えて「番」+'イモ'を南北に分断するような分布を示している。「山」+'イモ' はもともと中国在来のイモを指した呼称だから、栽培が定着して在来のイモとの勢力が逆転した後につけられうる比較的新しい語形である。それに対して、「番」+'イモ'は文献にも南方の呼称として記されている語形で、サツマイモの呼称としての固有の歴史を有する。長江以南はすべて「番」+'イモ'だったが、サツマイモ栽培が盛んになるにつれて「山」+'イモ'が南下して"長江線"を越え、"北方方言江東侵入型"の分布を示すに至ったのである。

では、修飾成分「洋」を付加するという発想の来歴はどうであろうか。ジャガイモの'外国'を表す成分に注目すれば、「洋」+「山」+'イモ'は「洋」のみであるのに対し、「洋」+「番」+'イモ'は「洋」と「番」の二つを重ねている。後者はいわば'外国の外国のイモ'という不自然な形式であるが、じつは'外国のサツマイモ'といっているにすぎない。サツマイモで「山」+'イモ'と「番」+'イモ'が対立していると同時に、サツマイモに「洋」を付加して成立するジャガイモの語形でも「洋」+「山」+'イモ' と「洋」+「番」+'イモ'が対立しているのである。不自然な形式の「洋」+「番」+'イモ'が自然発生するとは考えにくい。おそらく、江淮地方の「山」+'イモ'系を用いる文化がサツマイモに修飾成分「洋」を付加することでジャガイモの語形にするという文化を有していたもともとの地域だろう。ジャガイモの「洋」+「番」+'イモ'とサツマイモの「番」+'イモ'の分布地域の共通部分が、後者の分布地域に比べてかなり小さく、北部に限られることも根拠の一つとなる。サツ

マイモの「山」＋‘イモ’はジャガイモの「洋」＋「山」＋‘イモ’とともに南下し、「番」＋‘イモ’は分断されながらも文化的紐帯の強さによって北の一角にその形を留めたが、「洋」を付加する文化は受容せざるを得ず、「洋」＋「番」＋‘イモ’という奇妙なジャガイモの呼称が成立したのだ。なお、「洋」＋「山」＋‘イモ’はジャガイモ栽培の習慣とともに北方地域から南下した可能性が高い。ジャガイモが初めて伝来したのは華南沿岸部だが、冷涼な華北や山地で真価を発揮する作物だからである。

「山」＋‘イモ’系の影響はそれだけにとどまらない。語幹に注目すれば、江淮地方の「山」＋‘イモ’系の語幹は「芋」であるのに対し、「番」＋‘イモ’系の語幹は「薯」が主流で、もともとは「山芋」と「番薯」の対立であったと考えられる。しかし、「山」＋‘イモ’系の分布地域に接する「番」＋‘イモ’系は「山芋」の影響を受けて「薯」ではなく「芋」が語幹になったことが地図から読みとれる。同様に「山芋」も「番薯」の影響を受けざるをえず、語幹「薯」を受け入れた「山薯」という語形がみられる。

図2　長江下流域拡大図



凡例　ジャガイモ:○＝洋山芋　（大平行四辺形）＝洋山薯　△＝洋番芋　□＝洋番薯
　　サツマイモ:○＝山芋　（小平行四辺形）＝山薯　▲＝番芋　■＝番薯

ジャガイモの「洋番薯」、「洋番芋」の分布地域はサツマイモの「番薯」の分布地域の北部に限られ、それ以外の地域では「洋芋」が分布している。これらの地域では、サツマイモを語幹にするという語源意識が「山」＋‘イモ’系の分布地域を離れると失われたのであろう。サツマイモの「番薯」が卓越する文化圏にあっては、ジャガイモは「芋」、サツマイモは「薯」という意識も生まれてくる。ジャガイモの「洋芋」が分布している地域に「芋头」や「芋豆」という語形が、サツマイモの「番薯」が分布している地域に「薯」が何地点かみられるのはこのためで、同じ事がサツマイモの「山芋」と「芋头」においてもいえる。

［参考文献］

『ジャガイモ・サツマイモ』農業技術大系，作物編5，農山漁村文化協会，1975.
『清史資料』第七輯，中国社会科学院歴史研究所清史研究室編，中華書局，1989.
岩田礼 1995.　サツマイモ，ジャガイモ，トマト，石鹸，自転車－新来事物の呼び方－『中国の方言と地域文化(2):漢語方言地図集』. 平成5-7年度科学研究費総合研究(A)，研究成果報告書-第2分冊

○ 「土」系 ex 土豆，土豆子

▱ 「山药」系 ex 山药，山药蛋

「地」系 ex 地豆，地蛋

「蔓菁」系 ex 山蔓菁，地蔓青，蔓菁

「马铃」系 ex 马铃薯，马铃芋

▲ 「洋」系 ex 洋芋，洋山芋，洋番薯

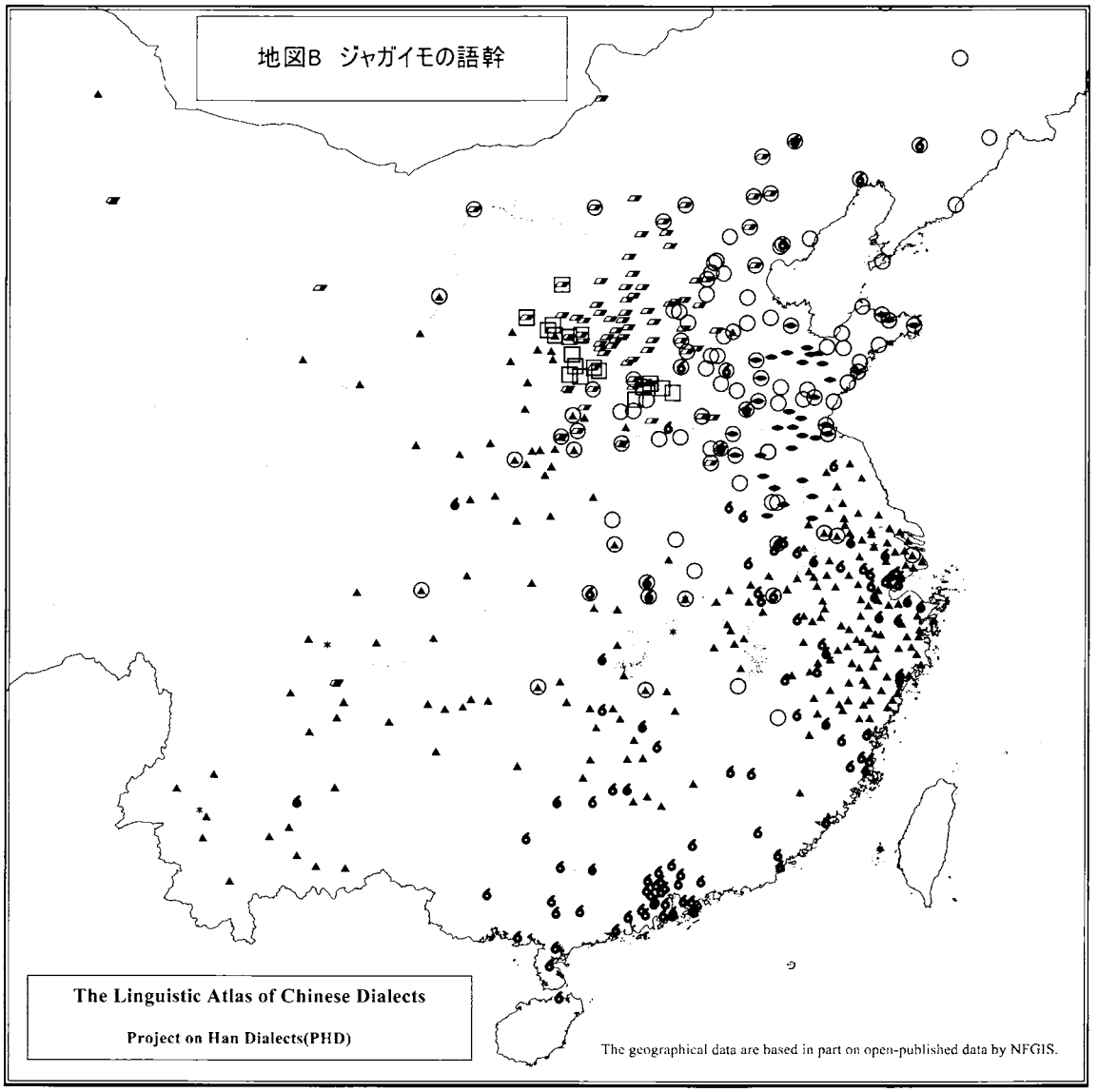
「荷兰」系 ex 荷兰薯

‘外国人’系 ex 番人芋，番囝薯

薯仔，薯崽

芋头，芋豆

* その他



▲ 「芋」系 ex 洋芋，洋山芋，芋头

6 「薯」系 ex 马铃薯，荷兰薯，洋番薯

▰ 「山药」系 ex 山药，山药蛋

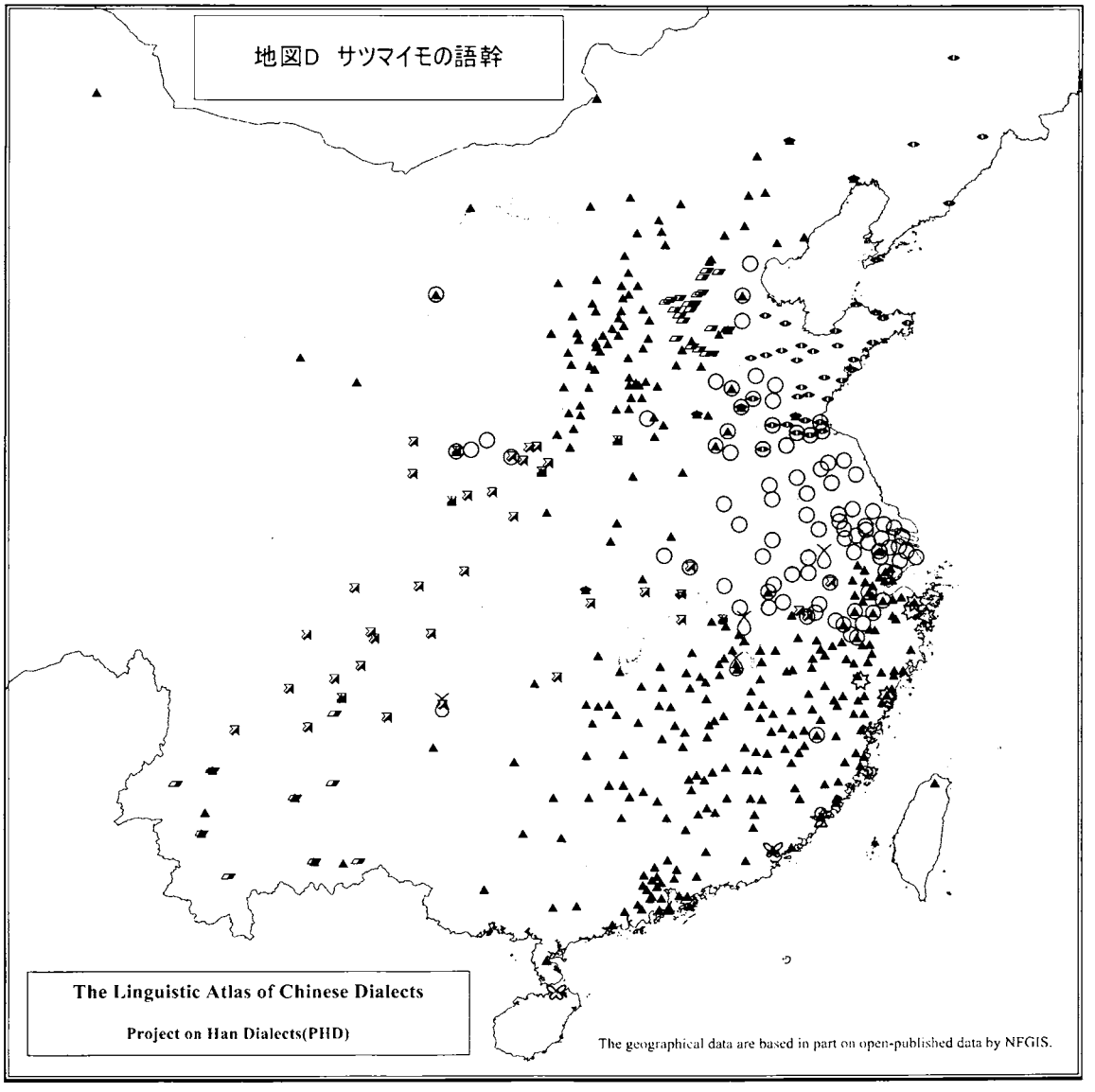
⬬ 「蛋」系 ex 地蛋

○ 「豆」系 ex 土豆，地豆

□ 「蔓菁」系 ex 山蔓菁，地蔓青，蔓菁

＊ その他

- 「红」系 ex 红芋，红薯，红苕
- 「白」系 ex 白芋，白薯，白苕
- 「黄」系 ex 黄山药，黄薯
- 红白薯
- 红红薯 / 白红薯
- 「地」系 ex 地瓜
- 「山」＋ ‘イモ’ ex 山芋，山薯
- 山药
- 「番」系 ex 番芋，番薯
- 洋红薯
- 芋头
- 薯，薯子
- 苕，苕儿
- ＊ その他



○ 「芋」系 ex 红芋，山芋，番芋

▲ 「薯」系 ex 薯，红薯，番薯

▰ 「山药」系

◪ 「苕」系 ex 红苕，白苕

⬬ 「瓜」系 ex 地瓜

♁ 「萝卜」系 ex 山萝卜，地萝卜

✡ 「茄」系 ex 番茄

♀ 「黍」系 ex 番黍

🦋 「葛」系 ex 番葛

∠ ジャガイモ：地蛋

地豆

山药

山药蛋

山药豆

洋芋

洋山芋，洋山薯

洋番芋，洋番薯

サツマイモ：地瓜

山药

山芋，山薯

番芋，番薯

“くるぶし”とその関連語彙

小橋優子

0. 地図作成の目的

足首の関節にあるくるぶしは、一見目立たない身体部位だが、その方言形は多様である。現在までのデータでは約150種の語形がある。それを一つ一つ採り上げるわけにはいかないが、その中で頻度の高い語形を採り上げ、中国における“くるぶし”の方言について出来るだけ正確な地図を作成することで変化の様相を明らかにしていきたい。

作成した地図は3枚である。各地図について語形分類の方法と分布について説明し、その後一部の語形についての考察を述べる。

1. “くるぶし”の方言地図

1－1 地図1 くるぶし:総合地図

この地図に現れた５つのタイプには無縁語と有縁語があり、また語構成（各形態素の位置）もかなり異なる。しかし、くるぶし”を表す語形が全国的にどのような分布をするのかが一目瞭然な地図である。

語形分類の方法と分布の特徴

“くるぶし”を表す語形全体の分布状況を示すため、以下の5タイプに分類した。

- 「踝」系･･･踝骨　踝子骨　踝拉骨　滑拉骨　划拉骨　踝子疙瘩など
- くるみ系･･･核桃(胡)　核桃骨　脚核桃　核桃疙瘩　桃核など
- k-k 系([ku kuai]又は[kuai ku])･･･孤拐　骨拐　脚孤拐　／　拐骨　拐孤　脚拐骨　拐子骨など
- 「螺」系･･･螺蛳骨　螺丝骨　螺丝拐　脚螺蛳骨　螺翅骨　螺拐など
- 目・眼系･･･脚眼　脚目　脚眼骨　脚眼珠　骰目など

「踝」系については、「踝」の発音に[xuai]と[xua]の 2 系統があったが、ここではその違いを採り上げない。「滑」「划」については音声的な類似から「踝」系に分類した。[ku kuai]、[kuai ku]は、声母の共通性に着目して、以下“k-k 系”と呼ぶことにする。

この地図では大きく分けて 3 つの分布領域があることがわかる。

1) 北方･･･「踝」系・くるみ系・k-k 系
2) 長江付近･･･「螺」系
3) 南方･･･目･眼系

北方

・無縁語である「踝」を有する語形が北部全体に広がっている。ただし、山西省（晋語地域）や内蒙古自治区、甘粛省にはあまり分布していない。“くるぶし”の標準語形は「踝」又は「踝骨」である。うち、単音節形が現れるのは、広東省・海豊県と河北省・邯鄲県の

2 地点だけである。また「踝」系の分布は全国的ではなく、官話地域の中でも淮河より北側に分布するだけであり、全体的に見ると有縁化した語形のほうがより勢力が強いように見える。

・「核桃」に代表される、“くるみ”に関する語を使った語形が陝西省中部から黄河下流域にかけて分布している。

・k-k 系の語形が山東省、河北省、山西省に集中しており、また寧夏回族自治区や甘粛省にもみられる。この語形は「踝」を有する語形と連続して分布しており、「踝」の少ない地域を埋めるように分布する。両形併用で、地図上ではマークが重なっている地域も多い。

長江付近

・「螺」系の語形が長江を挟んで南北に広く分布している。北は陝西省南部や河南省南部から、南は江西省、貴州省、雲南省に及ぶ。少し離れて上海付近にも分布する。

・北方に見られた k-k 系の語形が江蘇省、安徽省にも多く分布している。また、雲南省にも数地点で現れている

南方

・「眼」や「目」を第二音節に有する語形が、江蘇省南部から広西壮族自治区にかけての沿岸に広範囲に分布している。閩、客家東部では「目／mu／」、客家西部や粤では「眼／yan／」の対立がある。これは“目(め)”を表す語形の地図と同じ対立関係である(秋谷 1995 参照)。しかし“足の目”という意味では共通している。これらは南方に古くから存在する語形であって、その有縁性から長く保たれてきたのだろう。

この地図では浙江省、湖北省西部、安徽省北部、広西壮族自治区の語形の分布が少ないが、データ自体が少ない、またはこの地図での分類に該当しないため空白となる。

1－2 地図 2 くるぶし:k-k 系と螺系

総合地図のうち、k-k 系及び「螺」系を下位分類した。この 2 タイプに共通する点は、「拐」という成分を持つことである。語形の成立過程がわかりにくいこの 2 タイプの共通点に着目し、これらの成立過程を探ることが目的である。

語形分類の方法と分布の特徴

A. k-k 系 ([ku kuai]又は[kuai ku])

1. [ku kuai](孤拐，骨拐，鼓拐)、「脚」+ [ku kuai](脚孤拐，脚箍拐，脚囤拐)
   山西省、河南省南部、山東省と、それより少し南の江蘇省、安徽省南部に集中して分布している。その他、黄河流域の寧夏以西、南方では雲南や江西省にも数地点ある。
2. [kuai ku](拐骨，拐孤)、「脚」+ [kuai ku](脚拐骨)
   山西省西部、河南省北部、湖南省北部と雲南省に少数分布している。
3. [kuai x-](拐核，拐胡，拐踝)
   「拐踝」「拐胡」等の語形が甘粛省に存在する。「踝骨」と「拐骨」の混交型、あるいは「踝骨」から「拐骨」への転換点である可能性もある。
4. 「脚」＋[ku]＋X(脚骨槐，脚孤孤，脚股)

「脚」+[ku kuai]から派生したものであろう語形をまとめたもの。ほとんどが[ku kuai]タイプの語形の周囲に分布している。

5.「脚」＋[kʰu]＋骨(脚骷骨)

上海付近に有気音の[kʰu]があらわれる。これらは「骷」(ひざぼね、されぼね)と表記されており、上記の「脚」＋[ku]＋X タイプとは語源が異なる可能性が高い。ここでは一部で独自に形成された語形と判断する。

B.「螺」系

1. 螺＋[sɿ]＋骨(螺丝骨，螺蛳骨)　脚＋螺[sɿ]＋骨

2. 螺＋[sɿ]＋拐(螺丝拐，螺蛳拐)　脚＋螺[sɿ]＋拐

以上 1 と 2 は、淮河以南の内陸部全体に広がっている。最終成分の「骨」と「拐」を分けて表示したのは、「くるぶし」の地図で非常に重要な意味をもつ「拐」の分布を見るためである。

3. 螺＋[tʂʰɿ]＋骨(螺翅骨，螺齿骨，螺牙骨など)

河南省、陝西省南部、湖北省北部に「翅」、「齿」([tʂʰɿ])を有する語形が 8 地点存在する。また、発音は不明だが、「刺」や「牙」と表記される語形が河南省に分布している。襄樊市においては、「踝子[tsɿ]骨」、「螺翅[tsʰɿ]骨」、「螺丝[sɿ]骨」の三語形併用である。

4. 螺＋[ts-]＋X(螺爪，罗啄，螺崽子骨など)

湖南省中部には「爪」、「崽」(声母[ts-])を有する語形が分布している。

5. 螺＋[iɛn]＋X(螺眼骨，螺阳骨，螺蛳屌子など)

江西省南部、湖北省東部には、「螺」のあとに「碾」や「眼」を有する語形が存在する。これらの地点のすぐ南に「眼」系の語形が広がっているので(地図 1 参照)、「螺」系と「眼」系の混交型であると推測する。

6. 螺＋拐

湖南省西北部には「螺」のすぐ後ろに「拐」を有する語形が洞庭湖から南へ伸びている。

1－3 地図 3 “くるぶし”と“肘”、“頬骨”、“外反母趾”の関係

[ku kuai]は“肘”、“頬骨”、“外反母趾”等を表す語形にも共通して現れる。地図 3 は[ku kuai]が何を表すかを示したものである。“肘”については、[ku](「孤」「骨」)を有さず、[kuai](「拐」)だけを有する語形の分布も示した。なお、[kuai ku]は肘、頬骨、外反母趾には現れない。

現在の辞書的な意味の「孤拐」は、〈方〉 1.頬骨。顴骨 (かんこつ)。 〔顴骨。〕 2.足の親指と小指の付け根の横に突き出した部分〔脚掌两旁突出的部分。〕(『中日辞典』第 1 版　小学館・商務印書館共同編集　小学館 1992／亀甲括弧内『现代汉语词典』) である。2.に関しては、中国の臨床医学では“拇趾外翻”と呼び、出っ張った骨を指すようだ (中国保険協会ホームページ『治疗拇趾外翻应该赶早不赶晚』の内容「有的人大脚拇趾向第二脚趾挤，而大脚拇趾根部鼓出一个包，使得前脚形成一个难看的三角形畸形，这就是北京人俗称的“脚孤拐”。临床医学将这种脚部畸形称为“拇趾外翻”。」より。出所：北京青年报　著者不明 http://www.chc.org.cn/2005-10/20051014133552.htm ここでは「脚孤拐」となっている)。日本語ではこの部位を“外反母趾”と呼ぶ。

語形分類の方法と分布の特徴

1. くるぶし(地図2参照)

[ku kuai]，脚＋[ku kuai]，拐子，拐子骨，脚＋拐子

2. 頬骨

[ku kuai](孤拐，骨拐)，脸＋[ku kuai](脸孤拐，脸骨拐，脸拐子など)

3. 外反母趾

[ku kuai](孤拐)，脚＋[ku kuai](脚孤拐，脚骨拐など)，拐子骨

4. 肘

[ku kuai](孤拐儿)，手＋[ku kuai](手孤拐)，手拐(手拐子，手拐儿を含む)，第一成分に「拐」(拐肘，拐肘头子など)，最終成分に「拐」(倒拐，手倒拐，胳肘拐子など)

[ku kuai]だけで2つ以上の身体部位を指す地点はないようだ。2つ以上の部位に用いられる場合でも、必ずどちらかに修飾成分がついている。そのため、意味の混同は避けられているが、山西省太原市近郊など、非常に近い地域で異なる意味を持つ[ku kuai]が存在することはある。“外反母趾”は元々データがあまりない。データが得られた地点では“くるぶし”のことを「踝～」というものがほとんどである。

この地図では、数の上では圧倒的に“くるぶし”を指す[ku kuai]が多い。これだけを見れば“頬骨”や“外反母趾”を指す[ku kuai]は“くるぶし”から影響されたものと見ることも出来るだろう。

ここでそれぞれの「～拐子」という語形に注目してみる。江蘇省揚州の“くるぶし”を表す「拐子」と南京市の“外反母趾”を現す「拐子骨」のみ分布が隣接しているが、それ以外は散らばっている。「拐子」の辞書的な意味は1.工字形の綿糸巻き具　2.松葉杖　3.〈方〉足の不自由な人　4.誘拐者、詐欺師(『中日辞典』第1版　小学館・商務印書館共同編集　小学館 1992)であるが、ここでは“まがった”或いは“出っ張った”と捉えた方がよかろう。「拐子骨」は「踝子骨」の語構成に影響されたものである可能性が高い。

最後に、“肘”に現れる最終成分[kuai](「拐」)と“くるぶし”の[ku kuai]系に焦点を絞ると、それらは北方から連続して江蘇省から長江に流れていくように分布している。また、地図2の「螺」系につく最終成分「拐」と“肘”の「拐」を重ね合わせてみると、ほぼ一致することがわかる。このことから、“肘”に現れる最終成分「拐」の方が歴史が古く、身体部位の形状や役割が似ていることから“くるぶし”に影響し、「螺」系に最終成分「拐」が現れた。或いは、「拐」に“出っ張ったもの”としての意味合いが強く、この地域では肘にもくるぶしにも「拐」が用いられた、とも考えられる。

それでは、[ku kuai]とは何者であろうか。次にその成り立ちを追う。

2. 考察

これまでみてきた語形のうち、その歴史的由来が最も問題なのはk-k系である。それはどこから現れ、どのような歴史を持つのか、そのもの自体はどのような意味を持つのか、考察していく。

2－1 考察 1:k-k 系の語源

k-k 系の成り立ちについて、2 つの視点から 2 つの可能性を挙げる。その一つは[kuai ku]から[ku kuai]に変化したもの、もう一つは逆に、[ku kuai]から[kuai ku]に変化したものである。

a）音声的類似と同音衝突：kuai ku > ku kuai の可能性

太田（2002）では「孤拐」[ku kuai]は「踝骨」[xuai ku]から[kuai ku]を経て変化したものである可能性が高いとしている。以下にその内容を挙げる。

まず、その変化の過程は「踝骨」[xuai ku]より

xuai ku → kuai xu …①

→ kuai ku …② → ku kuai …③

①声母転置

太田（2002）は、甘粛省天水県の語形「拐核」 [kuai2 xu1]等を採り上げている。これは「踝骨」の「踝」[xuai]の声母と「骨」[ku]の声母が入れ替わったものと見ている。この地域では「孤拐」[ku kuai]タイプの語形が優勢で、且つ周囲に「踝[xuai](子)骨」の分布がないため説得力の弱さがあるが、これ以外の有効な解釈がないのと、このテーマの別の語形を説明できることから採用している。

②声母の双声化

[kuai ku]タイプの語形は「踝骨」の声母の双声化によって生まれたと説明している。

③kuai ku の音節転置

②で起こった声母の双声化から、さらに音節の転置が起こって[ku kuai]タイプの語形が生まれたと説明している。連音変化によって語源が曖昧になり、語構成について配慮されることもなくなってしまった結果とみている。(2 巻 pp.39 - 44)

私見であるが、もし[kuai ku] が[ku kuai] より古いとすれば、前者から後者への音節転置には、上記以外にも以下のような理由が考えられる。

[kuai ku]と発音される「拐骨」「拐孤」には『汉语方言大词典』（p 3227）によると、次のような意味を持つ地域がある。

拐孤……①性情乖僻，不好相处（偏屈で、付き合いにくい）。 北京冀鲁

②贫占便宜（得をしようとする）。 冀鲁官话

③心术不正（心がけが悪い）。 冀鲁官话

拐骨……①多指性情怪僻，行为不近情理的老年人（偏屈であり、行いが情理にもとる老人を指すことが多い）。 中原官话

②心术不正，性情怪僻的人（心がけが悪く、偏屈な人）。 冀鲁官话

上の例はいずれも人間の性格について負のイメージがあるものである。

ここで xuai ku > kuai ku > ku kuai という変化が成り立つと仮定すると、[kuai ku]は主に晋語地域に分布していることにもとづけば、この地域で発生した[kuai ku]が河北省、山東省にも入ってきたが、その地域においては元々「拐孤」等の同音の語形が存在したため、衝突を避けたことにより音節の転置が起こったのではないか、とも考えられる。

[kuai ku]>[ku kuai]の音節転置が起きた語形は、東方では山東省から江蘇省へと伝播し、さらに長江沿いに伝播した。淮河以南への侵入を果たした［ku kuai］系の語形は、もと江蘇省にあったであろう「螻」系の語形と入れ替わった。地図 1 において、「螻」系は長江河口付近にも分布する。江蘇省、安徽省では、「螻」系／[ku kuai] 系／「螻」系のＡＢＡ分布が見られることがその根拠である。

雲南省に分布するものは明代以降、雲南省が中国領土になった後にもたらされたものであろう。また、湖北省や湖南省に分布するものは数回に及ぶ客家の南下によってもたらされたものか。ただし、雲南省に「踝」系の語形が存在しないことが気になるところである。

ｂ）文献より：ku kuai > kuai ku の可能性

文献的事実にもとづけば、上とは逆に ku kuai > kuai ku の変化が起きたと考えた方が自然である。宋代以降の白話小説に現れる k-k 系の語は「踝」の数に比べると非常に少ないが、「孤拐」「骨拐」「拐孤」が見つかった。それらの中には同じ著者による使い分けが見られることもあり、興味深い。それぞれの文脈に即した意味を歴史の流れで分類してみると、以下のようになる。具体的な例文は末尾に載せる。（括弧内は作品数）

	孤拐	骨拐	拐孤
元	できもの（1）		
明	くるぶし（2） 足首（1） 性情が悪い（1） 頬骨（1）		
清	くるぶし（2）…脚孤拐を含む 頬骨（4）…孤拐脸・孤拐面を含む 性情が悪い（1）	性情が悪い（1）	性情が悪い（1）
近現代	くるぶし（1）…孤拐骨 性情が悪い（1）		

明の吴承恩は『西遊記』の中で「孤拐」＝くるぶしの部位、「孤拐面」＝頬骨の突き出た顔、という使い分けをしている（そのほかの用例については文末に一括して載せる）。動詞との組合せで最も多く表れる形式は「打孤拐」で、文脈からは仕置きをしている場面で“くるぶし”を叩く様子がうかがえる。一つの問題は、「孤拐」が“くるぶし”を指しているのか“足首”を指しているのか判別がつきにくいことである。“足首”のことを北京語では「脚脖子」と言うが、山東省東營県や天津市静海県では“くるぶし”を「脚脖子」という。明の項目の“足首（1）”は、文脈からどう考えても“足首”であるものを挙げている（関連文献資料 5.“足首”参照）。

文献の中には「孤拐」[ku kuai]に「骨」「面」などの成分が付く語形もある。このことから、「孤拐」[ku kuai]に“突き出た、ふくれた”などの形容詞的要素があることがわかる。これはもともと[ku kuai]が形容詞で、時と共に名詞化されてきたと考えた方が自然である。

以上の結果から[ku kuai]の語義変化を推定すると、

形容詞　　名詞

突き出た・膨れた　→　できもの・はれもの　→　くるぶし・頬骨への転用

となる。“性情が悪い”という意味については、全くの憶測であるが、名詞化する過程でさらに別のルートが生まれ、そのルートでは形容詞の「古怪」に牽引されたか、或いは“厄介なもの”のように捉えられ、人の性情に当てはめた可能性も考えられる。また[ku kuai]から[kuai ku]への変化については、文献では“性情が悪い”という意味のみ現れていることから、部位を表す[ku kuai]と区別するために音節を転置させ[kuai ku]となったと見ることもできよう。因みに、陝西省から山東省にかけて“くるぶし”の語形末尾によく現れる「疙瘩」にも並行的な関係が見られる。辞書的な意味には名詞の“できもの”“塊状のもの”以外にも、“悩み”、“面倒である、厄介である”などがある。上の表を見てわかるように、この推定は少ない資料の中から得たもので、且つそれらの作品の年代、著者の出身はばらばらである。そのため客観的な確実性は低いが、一つの考え方として提出しておきたい。

2－2 考察 2: k-k 系と「螺」系の関係

b）の文献資料にもとづけば、[ku kuai]など k-k 系の語形は、「踝骨」[xuai ku]からの変化でできた語ではなく、あらかじめ存在するものであったことになる。この視点からもう一度地図 2 を観察してみると、「螺(X)拐」が長江中・下流域に広く分布していることが注目される。そこで[ku kuai]と「螺」系の関係について以下のように考える。

元は「螺」系の分布する地域にも[ku kuai]を有する語形が存在し、南方を除く地域に広く分布していた。湖南省、湖北省に存在する語形はその名残である。長江周辺地域ではその後、[ku kuai]に“くるぶし”自体を指す意味が薄れた、又は「拐」という語を用いる語彙が多くあり、それぞれをきちんと判別するために、“くるぶし”には似たような形状の「螺蛳」が用いられるようになった。それらは後に長江沿いに伝播した。

こう推定するならば、[ku kuai]系の分布と「螺」系の最終成分「拐」の分布を繋げると、きれいな長江型分布をなすこと、混交型であろう「螺拐」が存在すること、雲南省に k-k 系は存在しても「踝」系が存在しないことなどがうまく説明ができる。さらに地図 3 から見ると、[ku kuai]は“出っ張ったもの”という意味でいろいろな身体部位に使われていることがわかり、足の出っ張った部分である“くるぶし”に使われていることも納得できる。

3. まとめ

どのような経緯でk-k系が衰退し、「螺」が“くるぶし”に採用されたかについては、有力な類音牽引の例も見つからず、はっきりしない。张爱玲《十八春》では「但是她可以看见她的一双手现在变得这样苍白，手腕瘦得柴棒似的，一只螺蛳骨高高地顶了起来。」とある。この「螺丝骨」はおそらく“手首の出っ張った骨”で、[ku kuai]だけでなく、「螺蛳骨」もそれが指す部位に方言差があることがうかがわれる。

要するに、k-k 系は地域によってさまざまな部位を示しており、くるぶしや肘や頬骨などの部位をひっくるめて“出っ張ったところ”と認識されているようだ。“足の～”、“顔の～”といった修飾成分がつきやすいのは、お互いをしっかり区別するためであろう。またそれぞれの語形をしっかり区別している場合でも、たとえば陝西省太原では「拐子骨」は

“くるぶし”、「孤拐」は“外反母趾”だが、江蘇省南京市では「孤拐」が“くるぶし”で、「拐子骨」が“外反母趾”であるというように、方言によって使い分け方に差がみられる。

今後、“くるぶし”だけでなく、“頬骨”や“外反母趾”に関する方言データが充実することが望まれる。また人々がこれらの身体部位についてどのような認識をもっているか、いわば民俗学的な情報も必要である。

[参考文献]

太田斎 2002『漢語の身体名称に見られる特殊変化－“踝”の諸語形をめぐる憶説－(1)～(3)』　神戸外大論叢第53～54巻（神戸市外国語大学研究会).

秋谷裕幸 1995「目（眼睛）—全国規模のＡＢＡ分布—」『中国の方言と地域文化（2）漢語方言地図集』pp.54～56.

[関連文献資料]

k-k系の用例（「孤拐」「骨拐」）

1.“できもの”

刘唐卿（元）「降桑棋蔡順奉母」第二折　『全元戯曲』第二巻　人民文学出版社（1990）p.581

「（太医云）我会医胸膛上生着孤拐，（糊突虫云）我会医肩膀上害着脚疔。」

2.“くるぶし”

吴承恩（明）『西游记』第十五回　人民文学出版社（1955）p.190

「行者道：“仲过孤拐来，各打五棍见面，与老孙散散心！”二神叩头哀告道：“望大圣方便，容小神诉告。”」

俞万春（清）『荡寇志』第七十二回　人民文学出版社（1981）p.22

「说不了，只见两个人搀着那鸟教头走出庙来，打得鼻塌嘴歪。原来被丽卿扫坏了孤拐骨，行走不得，一步一颠的扶出来，口里叫道：“衙内与我作主!”」

3.“頬骨”

西湖渔隐主人（明）『欢喜冤家』第二回　『中国古代禁毁小说珍秘本集成』(2000) p.19

「你倒杀人，俺们在此陪工夫。还不快说！我们私下先打他一顿，再去见差人说话。他若不说，待我拿去夹他的孤拐，自然说了。」

吴承恩（明）『西游记』第二回　人民文学出版社（1955）p.21

「祖师道：“你虽然像人，却比人少腮。”原来那猴子孤拐面，凹脸尖嘴。」

曹雪芹（清）『红楼梦』八十回校本--第六十一回　人民文学出版社（1958）p.675

「林之孝家的道：“他是园里南角子上夜的，白日里没什么事，所以姑娘不大相识．高高孤拐，大大的眼睛，最干净爽利的。”」

4.“性情が悪い”

冯梦龙（明）『醒世恒言』第二十卷　人民文学出版社（1956）p.420

「我的女儿从小娇养起来，若嫁你恁样无籍，有甚出头日子！这里不是你安身之处，快快出门，饶你一顿孤拐。若再迟延，我就要打了。」

蒲松龄（清）『醒世姻缘传』第九十四回　上海古籍出版社（1980）p.1341

「若得作践相妗子一场，也还可杀杀水气，谁知不惟不能遂意，反差一点点没叫一伙管家娘子捞着挺顿骨拐。这样没兴一齐来的事，岂是薛老素受得的？」

5.“足首”

陆人龙（明）『峥霄馆评定通俗演义型世言』第十一回

「甘毫急了，沸反叫饶命。道：“以后我再不敢来了，若来跌折孤拐。”花纹道：“再来烂出眼珠。”」

□ 「踝」系

くるみ 系

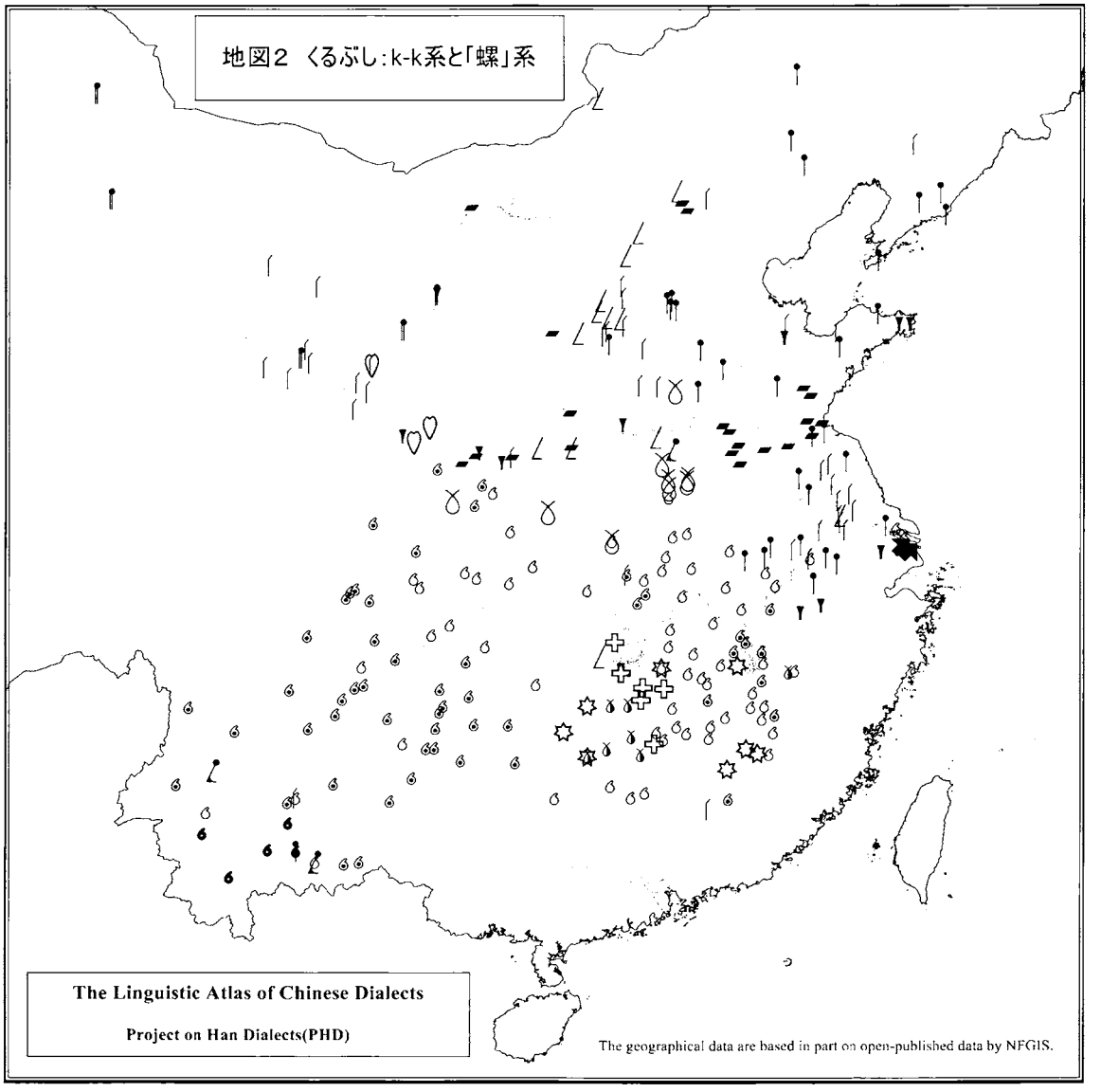
[ku kuai] 又 は [kuai ku]

「螺」系

日系

眼系

その 他



[ku kuai]

脚 +[ku kuai]

[kuai ku]

脚 +[kuai ku]

拐核，拐胡，拐踝

脚 +[ku]+X

脚 +[k^hu]+ 骨

螺 +[sʅ]+ 骨

脚 + 螺 +[sʅ]+ 骨

螺 +[sʅ]+ 拐

脚 + 螺 +[sʅ]+ 拐

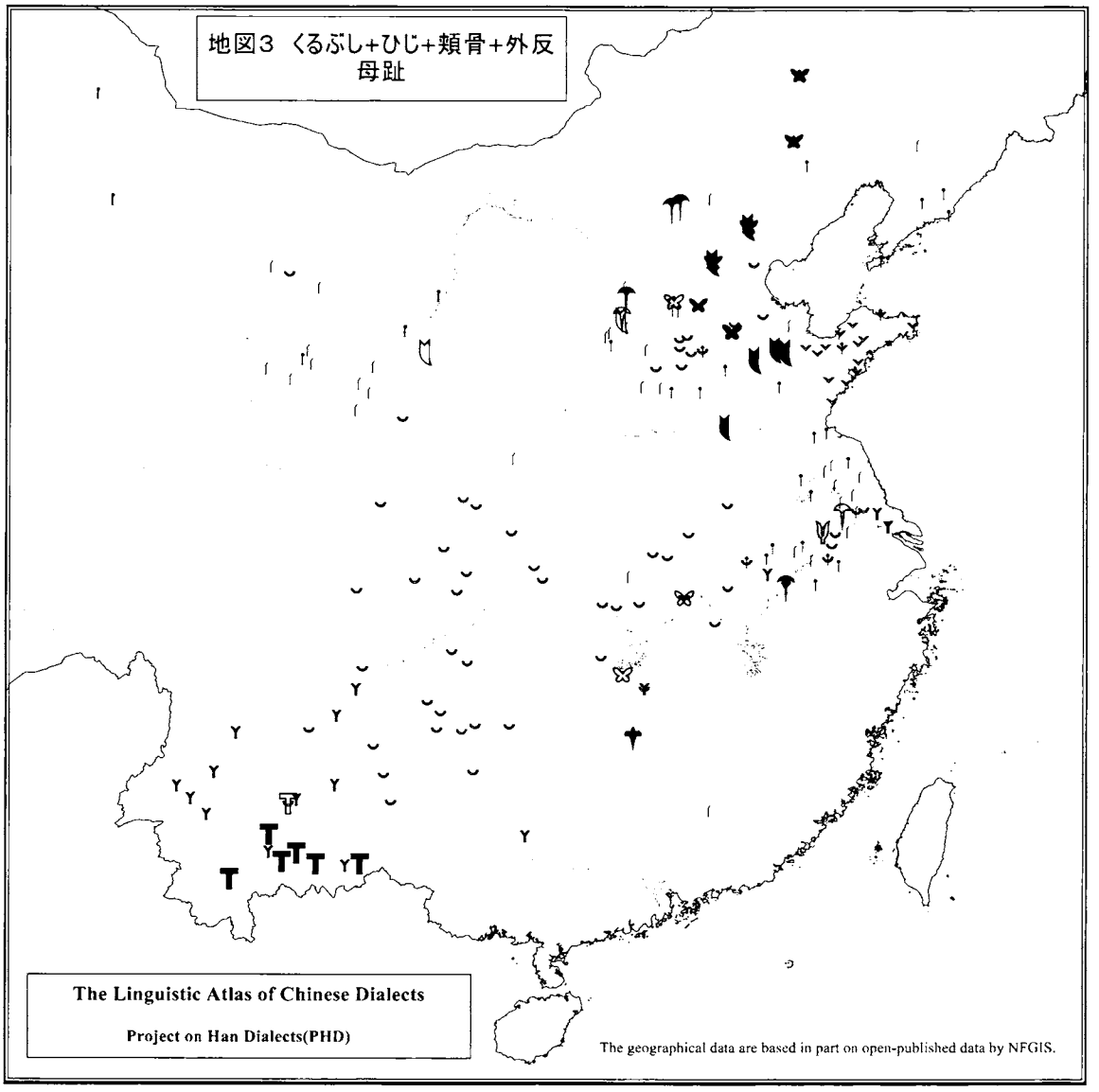
螺 +[$tʂ^hʅ$]+ 骨

螺 +[ts-]+X

螺 +[iɛn]+X

螺 + 拐

疙瘩系



- くるぶし： [ku kuai]
- 脚 +[ku kuai]
- 拐子，拐子骨
- 脚拐子
- 頬骨： [ku kuai]
- 脸 +[ku kuai]
- 脸拐子
- 脚孤拐： [ku kuai]
- 脚 +[ku kuai]
- 拐子骨
- ひじ： [ku kuai]
- 手 +[ku kuai]
- 第一成分 に「 拐 」
- 最終成分 に 拐
- 手拐，手拐子，手拐儿

動詞「あるく」、「はしる」を表す語形について

三木夏華

1. 地図作成の目的

普通話で「あるく」は“走”、「はしる」は“跑”という語形で表される。つまり、足を用いて移動を表す動作が速さによって使い分けられていることを意味する。ここでは、諸方言におけるこの二つの動作の対立の有無、及び具体的にどのような語形で表されるかに着目して地図を作成した。

2. 語形分類の方法

地図 A:「あるく」を表す語形の分布状況を調べた地図。“开＋X”とは开舔”、“开赵” の二種である(湖北安陸のみ)。

地図 B:「はしる」を表す語形の分布状況を調べた地図。“跑+X”は“跑崩儿”、“跑趟子”、“跑步”の三語形である。“打+X”には“打跑”、“打跑步” “打决子”、“打猎”が含まれ、“打飞脚”とは別に分類した。l系語形は“□ [la]”、“捋 [lɔt]”の二種で、“溜”、“蹓”と同定できないため、別の語形として分類した。

地図 C:“走”が「あるく」「はしる」のどちらを表すのか、意味の分布を調べた地図。

地図 D:“跑”が「あるく」「はしる」のどちらを表すのか、意味の分布を調べた地図。

地図 E:“行”が「あるく」、“走”が「はしる」を表す地域の分布を調べた地図。

地図 F:“走”が「あるく」、“跑”が「はしる」を表す地域の分布を調べた地図。

3. 地理的分布の特徴

地図 A:福建、広東、江西、広西の東部、湖南の南部に“行”が分布し、それ以外の地域では北方、長江流域を中心に“走”が広く分布する。大きく分類すると、“行”と“走”の南北対立といえよう。ただし、江西、湖南の南部、浙江、福建の北部、南西部などでは“行”と“走”が併用される。江蘇南部では“跑”が集中し、雲南、広西、安徽、山西に点在しているが、その多くは“走”と併用されている。“波”[pɤu]は常州市にのみ見られるが、周辺が“跑”の分布地域であることから、おそらく“跑”の系統に属するものと考えられる。“趟”は安徽の南東部から浙江にかけて分布する。“杠”は安徽の東部、中央に数箇所見られ、来源は不明だが、“行”が音声変化したものである可能性も捨てきれない。“车[tsʰɛ]” は四川西部二箇所のみに見られる語形だが、語音、声調から分析しても、他の語形と同定できないので、個別に分類した。

地図 B:福建、湖南西部、江西の南部、広東の西部、広西の東部に“走”が分布し、これらの地域より北側、及び四川、雲南などの西南地方では広く“跑”が使われる。ただし、“跑”は江西、湖南の東部で大きく“走”の分布地域を割り込んで分布している。“波”は江蘇南西部、江西の北東部に見られるが、“跑”と併用される、または周辺が“跑”の分布地域であるため、“跑”の音声変化したものと考えられる。“逃”は浙江南部、江蘇南西部に集中し、“跳”は浙江南部、西部、安徽南部、江西の北東部に分布する。“奔”は江蘇南部に集中するほかは浙江西部、安徽南部、江西の北部に点在するが、ほとんどの地域が“跑”と併用される。“溜”は地図からは確認しにくいが、江蘇省金壇、宜興、靖江の三地点に見られ、すべて“跑”と併用されている。 “打”を動詞に持つ語形は湖南の北東部から江西の北部に存在するが、その中でも“打飞脚”が最もまとまった分

布を見せ、湖南の北東部から南東部にかけて集中している。“蹽”は河北の北東部に分布する。“趵”は雲南特有の語形である。“蹩”は福建沿岸部、江西との省境、広東の北部、西部に点在する。

地図C:福建、広東の西部(ただし、東部は資料が少ない)、湖南の西部、江西の南部に、“走”が「はしる」を表す地域が広がり、安徽、浙江、山西にも点在する。それ以外の広範囲の地域で“走”は「あるく」を表す。二つの意味分布の境界線は福建と浙江の省境から江西の南部、湖南を通り、広西まで続く。ただし、福建南部、江西南部、湖南、広東に二つ意味を併用する(つまり、「あるく」と「はしる」の区別をしない)地点が点在する。

地図D:浙江南部、福建、広東、湖南の西部を結ぶラインより北側で、“跑”が「はしる」を意味する地域が広がる。ただし、陝西、四川、江蘇北部、貴州、雲南については資料が少ないため、詳しい分布状況は分からない。“跑”が「あるく」をあらわす地点は江蘇南部に集中し、湖北、雲南、広西、安徽、山西、寧夏にも点在する。また、それらの地点の多くで“跑”が「あるく」「はしる」の両方の意味で併用されているのが分かる。

地図E:この地図は“行”が「あるく」を表し、なおかつ“走”が「はしる」を表す地域の分布を明らかにするのを目的に作成したが、以上の条件を満たす地域は福建、広東と福建の省境、広東の南西部、江西の中部から南部、湖南の西部、広西の北東部から南西部に分布する。

地図F:この地図は“走”が「あるく」を表し、なおかつ“跑”が「はしる」を表す地域の分布を明らかにするのを目的に作成した。以上の条件を満たす地域は、浙江中部から南部、福建、広東、広西、湖南の西部を除いた全域といえる。ただし、地図Dでも述べたとおり、“跑”に関する資料が足りないため、内陸部、西南部などでは分布状況が不明な部分が多い。

4. 考察

4.1 語形の地理的分布

地図Aを見ると「あるく」の語形は種類が少なく、江蘇南部に集中する“跑”を除けば、“走”が北方系、“行”が南方系という分布が明確に見える。一方、地図B「はしる」を見ると、各地域独自の語形が発達しているため種類が多く、複雑な様相をみせる(各語形については次の節で考察する)。しかし、最も分布地域の広い語形のみに着目すれば、“跑”が北方系、“走”が南方系という構図が見えてくる。さらに地図E、Fを用いて二項目の語形の組み合わせを見ると、「あるく:“走”、はしる:“跑”」が北方系、「あるく:“行”、はしる:“走”」が南方系であることがわかり、南北の境は福建と江西の省境から広東と江西の省境を経て湖南の中部にまで伸びる。

4. 2語形の意味派生

4. 2. 1“行”と“走”

“行”は《说文解字》に“人步，趋也”とあり、“趋”は“走也”とある。また、“走”は《説文解字》では“趋也”とある。《释名・释姿容》では“徐行曰步，疾行曰趋，疾趋曰走”とある。つまり、“行”は本来「(小走りも含めて)あるく」で、“走”は「はしる」の意味であったと考えられ、古典文献でも同様の意味で使われる。

有澹台灭明者，行不由径。 《论语・雍也》

兔走触株，折颈而死。 《韩非子・五蠹》

ここで地図Eを見ると、“行”が「あるく」、“走”が「はしる」を表す地域が前述の通り、南方に存在するが、これらの地域では“行”、“走”を本義で用いているということがわかる。

また、“走”は「(追っ手などから)にげる」の意味にも使われている。

颍考叔挟以輈走。《春秋左氏传・隐公十一年》

さらに“走”を「あるく」の意味で使用し始めたのは、王力(1980)によるとだいたい明代からだという。そこで、明代の特定の作品、例えば《水浒传》に着目すると、香坂順一(1995)によれば、《水浒传》において「あるく」を意味する“走”はすでに“行”よりも用例数が多いという。特に会話文では“行”の用例は少ないとあるから、当時から“行”を書面語、“走”を口語として使い分ける傾向が見られたといえる。現在、“走”を「あるく」の意味で使用する地域は、地図Cからも分かるように南方を除いて広範囲に及ぶ。

4．2．2“跑”

“跑”は《说文解字》には記載されておらず、比較的新しい語形と考えられる。《广韵》(1008)には“跑，足跑地也。蒲爻切。”とあり、獣などが足で地面を掘ることが本義であるのが分かる。王力(1980)によると、“跑”はその後、馬が駆けることを表すようになり、さらに人が走る意味を持つようになったのは明代だという。明代の作品について具体的に挙げると、香坂順一(1995)によれば、《水浒传》おいて「はしる」を意味する“走”はすでに存在せず、すべて“跑”が用いられているという。

また、“走”と同様に、“跑”も「にげる」の意味で用いられる。

胆小的丢了面跑下楼来了，大胆的立住了脚看。《三遂平妖传 第24回》

ここで地図Dを見ると、現在では“跑”が「あるく」を表す地点も存在することが分かる。“跑”が「あるく」を表す地点のうち、「はしる」の意味と併用している所も少なくないことは先に述べたが、それらの地点の“跑”の語義を《现代汉语方言大词典》を用いて、関係のある部分のみまとめると、以下のようになる。

揚州 ①はしる ②にげる ③あるく　　杭州 ①はしる ②あるく

武漢 ①はしる ②にげる ③あるく　　上海 ①はしる ②あるく

銀川 ①はしる ②にげる ③あるく

烏魯木斉 ①はしる ②にげる ③あるく

つまり、六地点中、四地点において“跑”が「はしる」「にげる」の意味を持った上で、「あるく」にまで意味が派生していることが分かる。これは、4．2．1で述べた“走”の意味派生の過程とも一致し、移動を表す動詞と「はしる」「にげる」「あるく」の三つの意味との関係の深さが窺える。

4．2．3その他の語形

(1)「はねる」の意味を持つ語形

地図Aの「あるく」を表す語形に“趒”、地図Bの「はしる」を表す語形に“跳”、“趵”がある。まず、“趒”は《说文解字》に“雀行也”とあり、段玉裁の注に“今人概用跳字”とあるので、“跳”と同義と見なせる。本来、雀の歩く動作を示したが、そこから「はねる」の意味で用いられるようになったようだ。“趵”も「はねる」を意味し、“跳”と同義である。湖南の北東部から南東部にかけて見られる“打飞脚”も同じ系統とみなせば、本来「はねる」を表していた語形が「はしる」「あるく」へ意味が派生するという傾向が存在すると考えられる。

(2)“车”、“蹄”

“车”は四川西部で「あるく」を表す語形だが(地図A参照)、《现代汉语方言大词典》によると他地域の方言では以下のような動詞の意味を持つ。

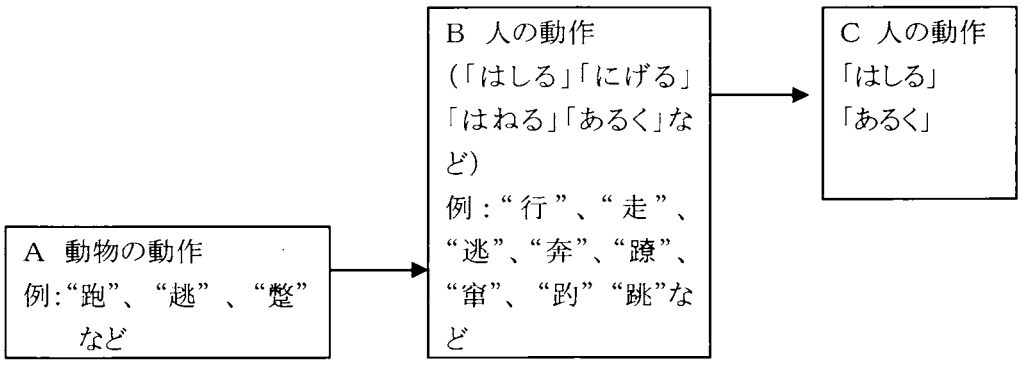
広州・南寧	車で轢く	建甌	機械が動く 人が振り返る
雷州	機械を動かす	福州	身体の一部を動かす
金華・厦門	車で運ぶ 物を押す	長沙	身体の一部(目など)をまわす
南京・済南	水車などで水を引く	成都	振り返る 場所を離れる

つまり、“车”は地域によっては車や機械による動きだけでなく、人の動作までを網羅しうる語形だということが分かる。その中で人の移動にまで意味が派生したのが、四川であろう。

“车”と同様、名詞から派生した語形に“蹄”があり、福建、江西で「はしる」を表す(地図B参照)。これは中国全体の方言を見ても、雷州で「蹴る」を表す以外は動詞の用例は少ないが、恐らく交通手段として使われた動物の身体の名称から移動を表す動作へと意味が派生したと考えられる。

4.2.4 まとめ

「あるく」「はしる」を表す語形は大まかに分類すると、①「動物(人を含む)の動作を表す動詞」、②「交通手段となるものの名称を表す名詞」の二つから派生したものに分けられる。両者の中で①が圧倒的に多く、以下の図のような意味変化をたどる。

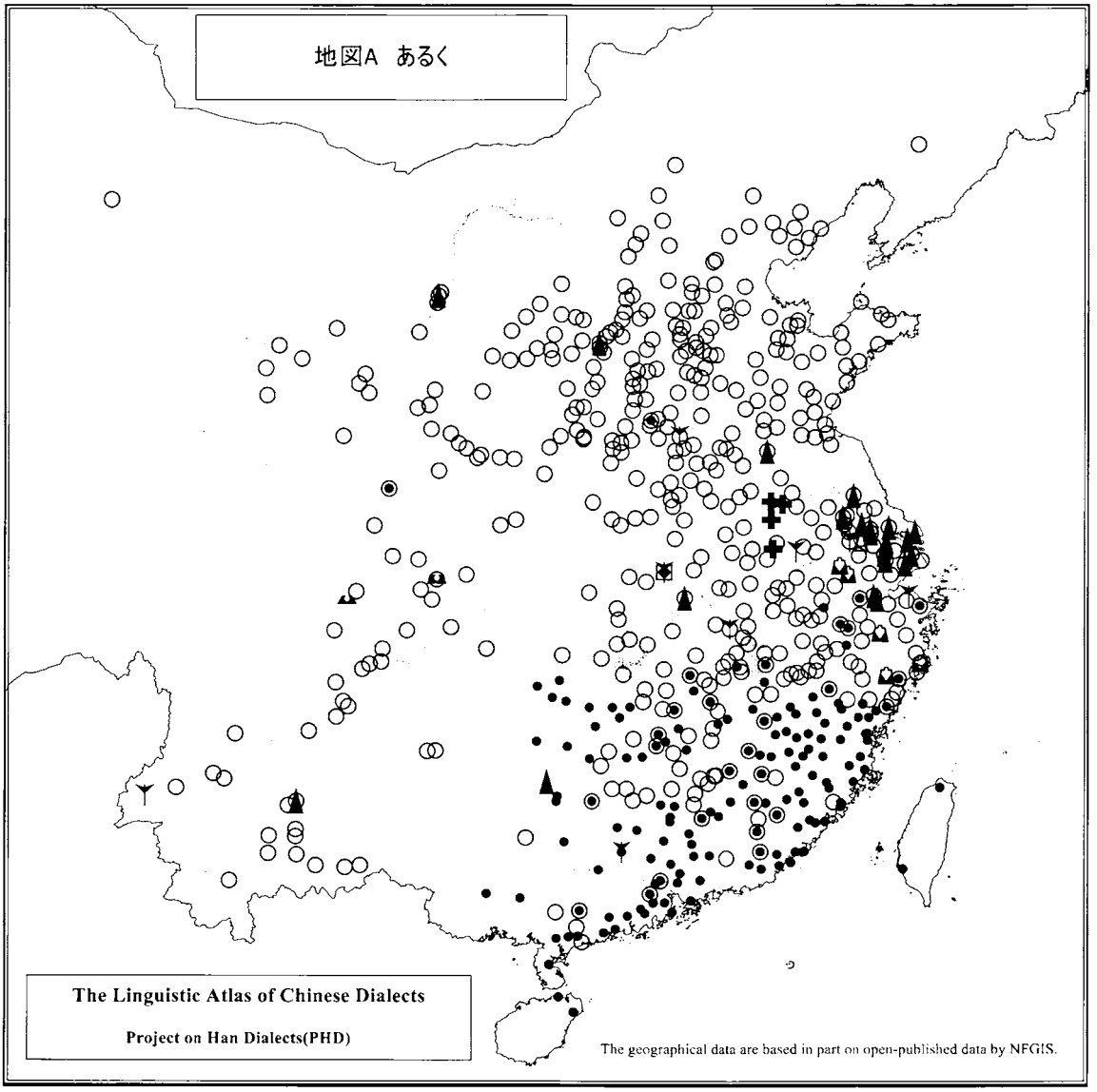


つまり、動物の動作を表す少数の語形(A)は意味が変化してすべて人間の動作を表す意味範疇の中に集約され(B)、その人間の動作を表す意味の中から「はしる」「にげる」の意味に集約されたのが、地図に現れた現在の姿(C)である。(B)から(C)への意味派生のパターンについて言えば、“走”、“跑”のように「はしる」から「にげる」の意味を経て「あるく」に派生するものもあれば、“跳”のように「はねる」から「はしる」に派生して、そこで意味の変化が終わっているものなど多種多様である。

②の「交通手段となるものの名称を表す名詞」から派生した語形は例が少なく、“车”、“蹄”だけで、厳密に言えば“蹄”は「交通手段となる動物の身体の一部の名称」である。この二つは前述の通り、まず名詞の持つ意味に関係する動詞に意味が派生し、さらに移動を表す動作へと変化して「あるく」、「はしる」の意味になると考えられる。

参考文献

香坂順一 (1995) 「《水滸》語彙と現代語」 光生館
王力 (1980) 《汉语史稿》 中华书局
李荣主编《现代汉语方言大词典》 江苏教育出版社



○ 走

● 行

▲ 跑

△ 波

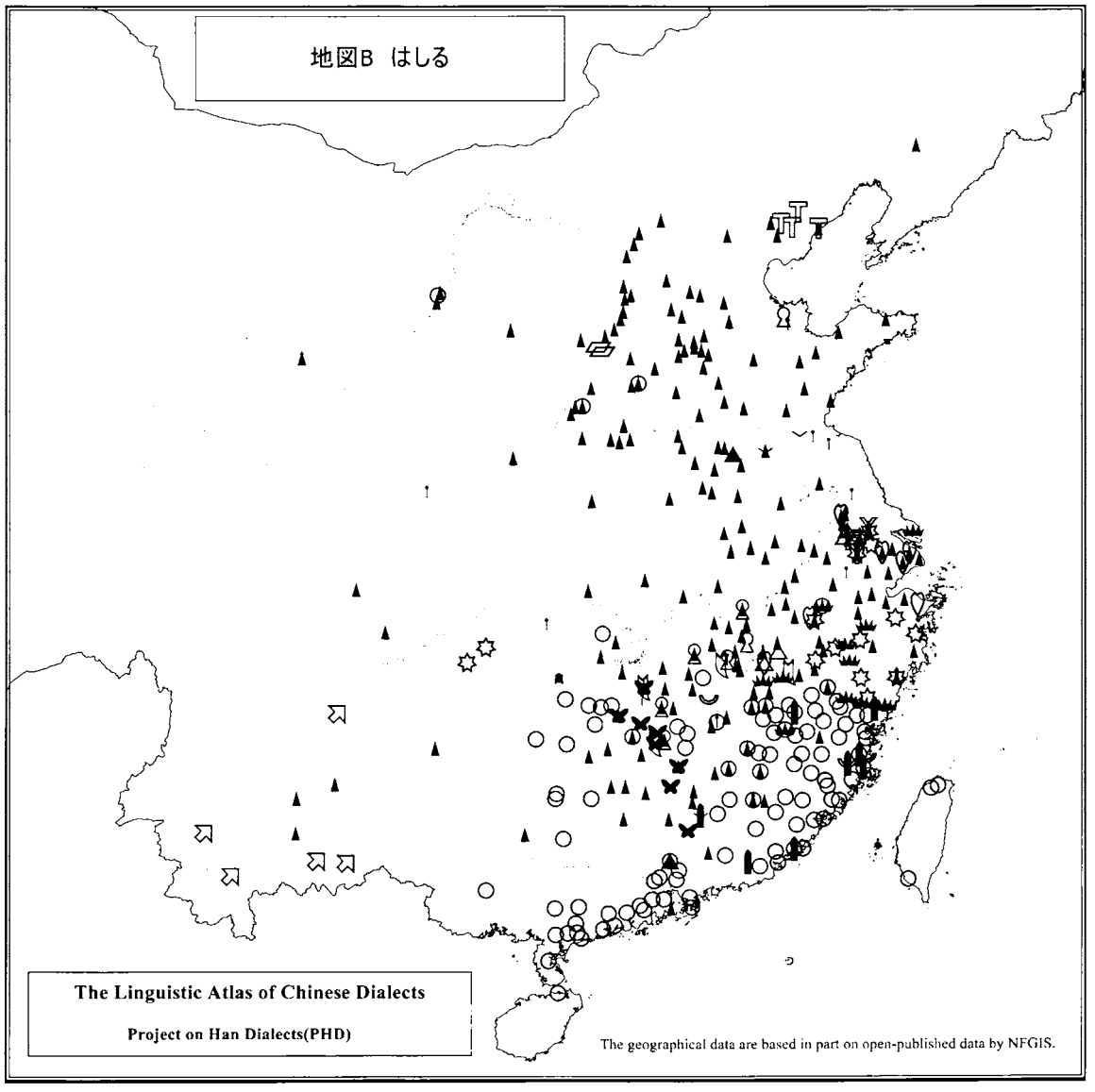
⌂ 趒

✚ 杠

⌂ 车

◈ 开＋ X

Y その 他



▲ 跑

▲ 跑＋ X

○ 走

跳

逃

△ 波

奔

趵

驰

蹄

窜

溜

蹚

丨-系（“溜”、“蹚”以外）

打飞脚

打＋ X

跛跋 [pəʔ tɕɪəʔ]

[p i e]

† その他

地図C "走"の意味分布
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

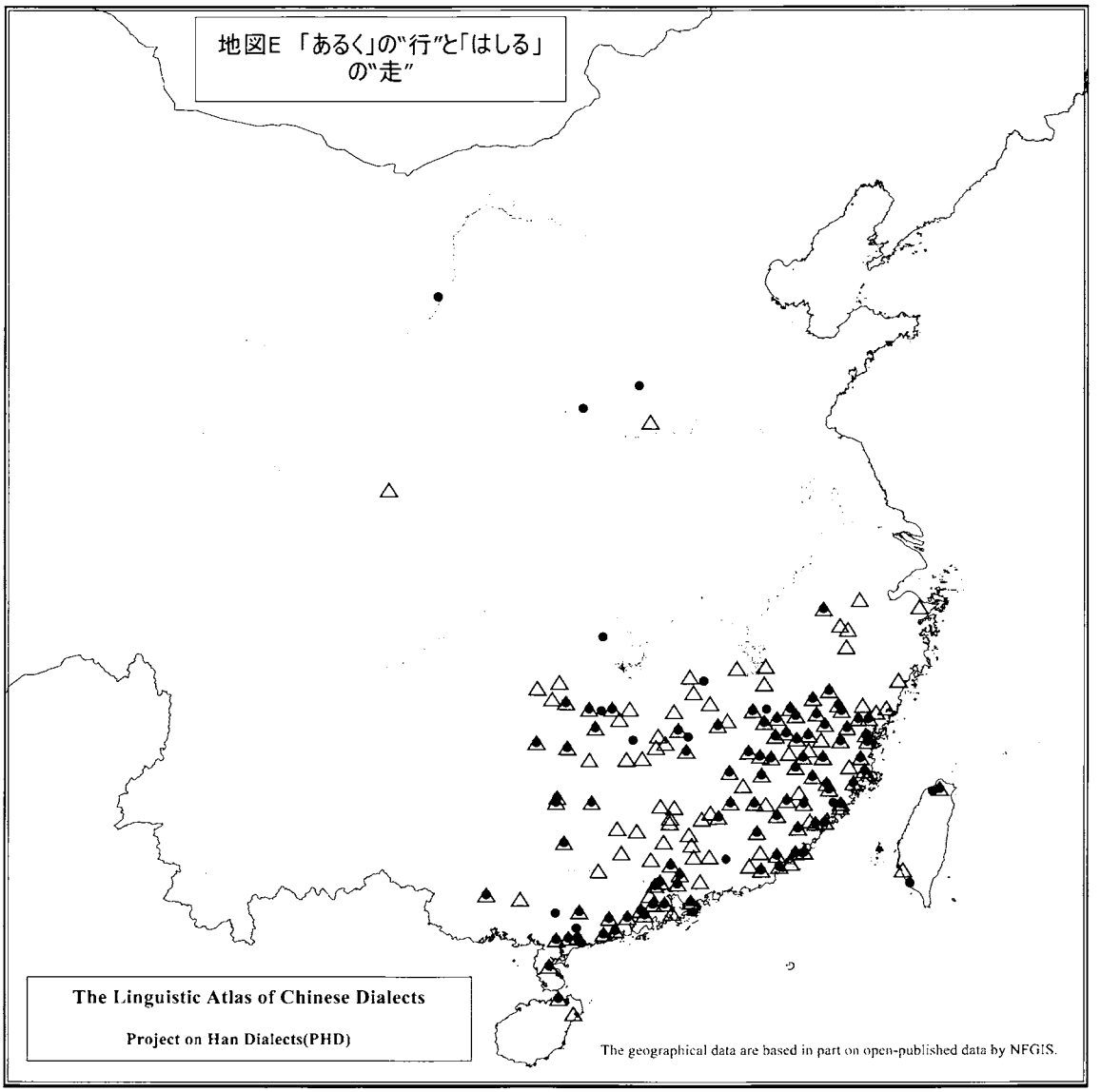
ᴗ　歩く

□　走る

地図D "跑"の意味分布
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

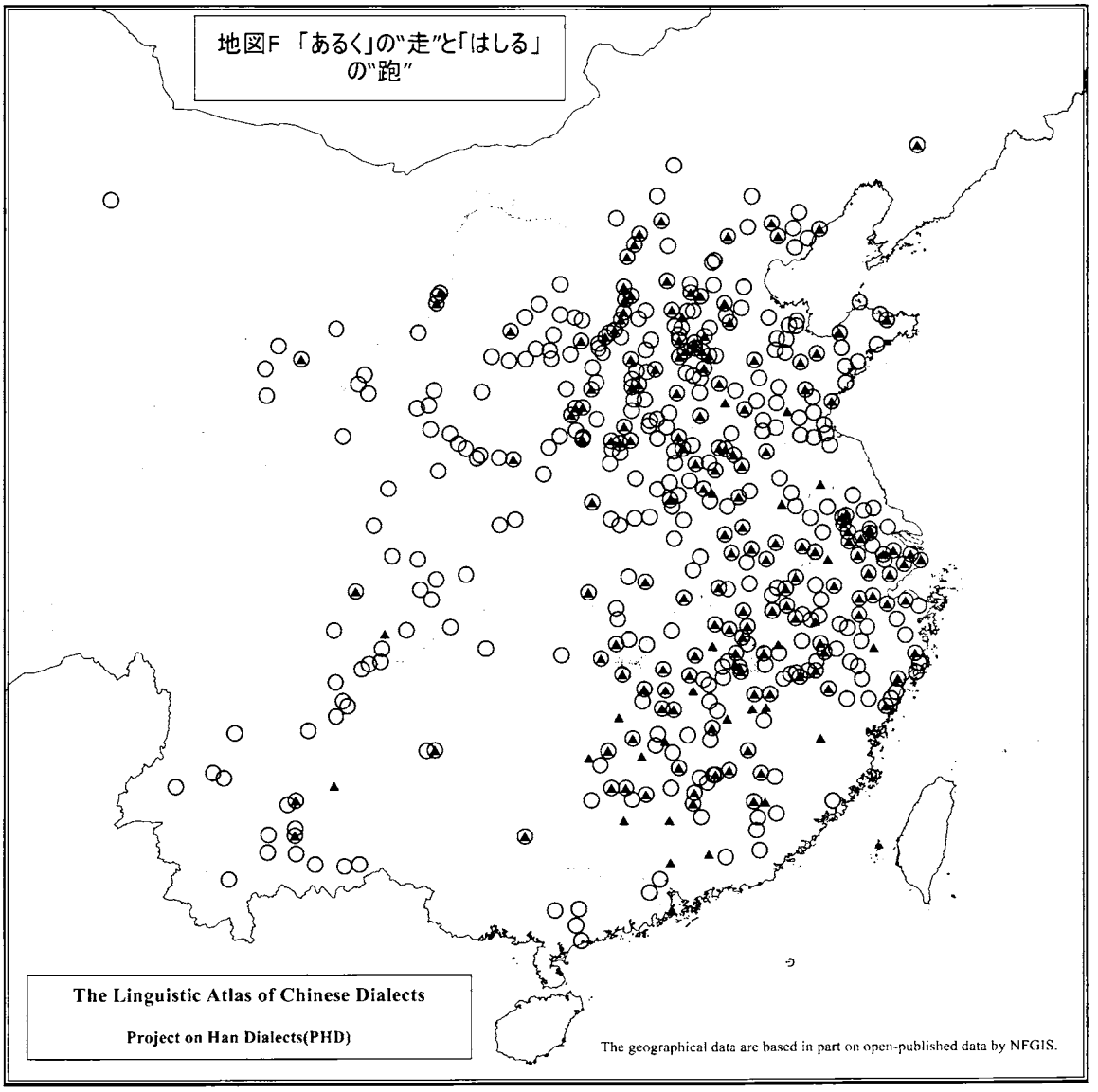
○　走る

Y　歩く


地図E 「あるく」の"行"と「はしる」の"走"
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

△　あるく － “行”

●　はしる － “走”


地図F 「あるく」の"走"と「はしる」の"跑"
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

○　あるく ― “走”

▲　はしる ― “跑”

漢語顏色詞的地理分布

遠藤雅裕

1．動機和理論基礎

我們的研究主要根據 Birlin & Kay 1969 的基本顏色詞（Basic Color Terms：略稱 BCT）的假說。其假說大致如下；

(1) 在各個語言之間 BCT 所指的領域互不相同，而其焦點（foci，即原型顏色）的一致性卻很高。

(2) 在各個語言之間 BCT 的數量不同，但不是完全沒有限制，而是有一定的限制的。最多的擁有 white、black、red、green、yellow、blue、brown、pink、purple, orange, grey 的 11 個詞，最少的擁有 white、black 的兩個詞。

(3) BCT 的增加有一定的順序（參看下圖）。這種 BCT 編碼化順序與文化發展相對應，即文明越發展，BCT 越多。下圖意味著“>”的後面階段包含了“>”的前面所有的詞，比如，第 IV 階段的語言擁有 black、white、red、grue(blue and green)、yellow 等詞。Kay, Berlin, Maffi & Merrifield1997 又提出了更加精細的編碼化順序，不過其基本框架沒有變化。

I	II	III	IV	V	VI	VII
macro-white		greu > yellow		green		purple
	> macro-red >			> or	> brown >	pink
macro-black		yellow > grue		blue		orange

基本顏色詞編碼化順序 (Kay1975, Witkowski & Brown1977)

根據上述的研究成果，我們從歷史和共時的層面研究了漢語的 BCT，得出了如下的結論。

(1) 漢語方言 BCT 的演變過程基本上符合 B & K 所假定的 BCT 編碼化程序，而 grey 編碼化早於 brown。

(2) 閩南語、吳語、廣西六甲方言等南方方言的編碼化慢於北方方言。換言之，南方方言的 BCT 少於北方官話。尤其在寒色領域的範疇化因方言而異。

雖然得到了如上的結論，但是對(2)的情況不描繪地理分布就無沒法得到更正確的結論。因此，我們著手了描繪分布地圖的工作。

爲方便起見，我們暫且將把連綿不斷的顏色空間分爲 black, white, red, yellow, blue, green, grey 等範疇，並描繪了每個範疇顏色詞的分布地圖。

漢語 BCT 是內部一致性很強的詞彙系統，其成員，在方言之間沒有多少出入。恐怕因爲有這樣的因素，不少方言志、方言報告等都沒有記錄與普通話相同的詞，因此顏色詞資料零零星星，極爲不足，而且其內容也參差不齊。這些報告都存在著“量”和“質”的問題。有的報告只收錄複合詞（“雪白”、“紅通通等”），有的報告收錄得不全面不系統，缺少幾個

核心的 BCT，還有的報告收詞，竟未加解釋，比如，只收“青”，沒有其所指的內涵。因爲碰到這樣的問題，所以不能說我們蒐集到的資料很完美。雖然如此，最近收錄顏色詞的報告也有所增多，因此也可以說，描繪顏色詞地圖的時機到來了。

2. 各詞形和其分佈情況

從各領域的分布情況來看，可以總結爲；寒色領域（black、green、blue）分歧較多：暖色領域（white、red、yellow）一致性很強。暖色領域分別用“白”“紅”和“黃”，尤其是 yellow 領域，僅有“黃”一個詞。其次是 white，除了“白”之外，幾乎看不到別的詞（安徽績溪縣有“素”，但是和“白”並用）。下面對這兩個領域以外的情況進行一下介紹。

2.1. black（地圖 1）

主要有“黑”“烏”“青”等詞。其中“黑”的分布領域最廣，除了東南部以外，遍佈於在全漢語區各地，主要是官話、晉語、吳語（北部）、粵語、湘語區。“烏”集中在東南部，是吳語（南部）、閩語、客語、贛語區的共同詞。“黑”和“烏”的界線不那麼明顯，可以指出“烏”的分布區裡也有零星散佈著“黑”，界線附近較爲多，而且還有“烏黑”的複合詞。這樣的情形顯示可能有北方方言“黑”的滲透。除此之外，可以指出，湖南、江西、廣東、廣西地區呈現了“黑”“烏”的 ABA 型分布。

專表 black 的“青”主要出現在浙江南部。其他地區，尤其是官話區的“青”其形容、搭配對象頗有限制。比如，內蒙古赤峰方言的“青”專表布料的黑色。“元色”“玄色”等在江蘇南部、浙江北部等地零星分布。這些詞相當特別，根據迄今所見到的資料，浙江桐鄉的表 black 的詞似乎只有“元色”。如果“元色”真的當作 BCT 的話，對 B&K 假說來說，應該算是一個反例。

2.2. red（地圖 2）

如上所述，指 red 領域的詞主要是“紅”，幾乎沒有別的詞。但是福建、台灣和雷州半島零星散佈著“赤”。“赤”是古代五色系統的成員，後來大約在六朝時期爲“紅”所代替。這些“赤”的分布是古代 BCT 的殘留。

2.3. green（地圖 3）

主要有“綠”“青”兩種詞。“綠”幾乎分布在全漢語區各地。專表 green 的“青”出現在福建南部、臺灣、兩廣等地方。這些地方，“綠”字幾乎不被使用。因此這些“青”可以說是 BCT。其他“青”都是表自然綠色的。“綠”“青”並用的情況也隨處可見。“青”也和“赤”一樣，是古代的 BCT 之一，其所指領域後來分成“綠”“藍”等。和“赤”不同的是“青”還沒有徹底被淘汰掉。臺灣高雄用物質名稱（“草仔色”）。

2.4. blue（地圖 4）

主要有“藍”“青”等詞。“藍”幾乎分布在全漢語區各地，但是臺灣的“青”遠遠超過“藍”。專表 blue 的“青”出現在福建南部和臺灣、雷州半島。這個分佈情況與專表 green 的“青”的情況一樣，其實這個“青”包括 green 和 blue 領域的 BCT，這些地區藍綠不分。

2.5. grey（地圖 5）

主要有“灰”，除了東南沿海地區之外，幾乎分佈於全漢語區各地。除此之外，還有“火灰色（火煤色）”“鳥鼠仔色”“烏灰色”“醭色”等詞，都零星分佈於東南沿海的閩語區。這些詞，儘管有程度的不同，但都和物質有關係；“灰”當然指“灰燼”ash，“火灰色”“烏灰色”亦復如此：“鳥鼠仔”是“老鼠”：“醭”與發霉有關。其中有幾個“灰色”的詞形。表物質的名詞必須得加上“色”這個語素，否則不能充當顏色詞。雖然看不出各個報告的記錄準則和水準，如果在顏色詞項目之中只收錄“灰色”這個詞形，而沒有“灰”的話，這個“灰色”和單獨的“灰”相比，其 BCT 的地位應該要低一些，或者不能算是基本詞。這些加上“色”的形式大致分布在東南沿海地區。這也許並不是偶然的。

2.6. 總結

總結整體情形，可以說全漢語區的絕大部分差不多都有表 black、white、red、green、blue、grey 的詞。比較特別的是東南沿海地區，即南部吳語、閩語、客語、贛語區。

(1) 表 black 用“烏”。

(2) 零星分布古代 BCT“赤”。

(3) 保留 grue 的範疇。

(4) grey 還沒有編碼化或者晚於其他方言。

總體說來，證明了南方沿海方言的編碼化程度慢於其他方言。

3. 餘論

如上所述，就分佈情況來說，東南地區和其他地區之間有著明顯的不同。下面對如下幾個顏色詞的問題分別進行一下探討。

3.1. “青”（地圖 6、地圖 7）

眾所周知，“青”是古代五色之一，原來包括 green-blue 領域，甚至還包括 black 領域。以後，其領域爲“藍”“綠”等詞所代替。大體可以說，現在在口語層面擁有“藍”“綠”“青”方言的 BCT 是“藍”“綠”而不是“青”。但是沒有完全被淘汰，有的還被保留著 BCT 的地位，比如，臺灣閩南語的“青”包含 green 和 blue，廣東、廣西的部分方言專指 green，而臺灣、廣東的部分方言專指 blue（參看地圖 6）。浙江南部地區，“青”專指 black（參看地圖 1）。與此相反，在官話裡，“青”幾乎出現在固定的語境中，使用範圍沒有南方方言那麼廣泛。總而言之，東南沿海地區零星散佈著 BCT 的“青”。

地圖 7 表示了“青”的所指範圍的情況。兼顧 green-blue-black 的“青”大部分分布在長江中下游以南。“青”兼顧 green-blue 的情形集中出現在長江下流以南地區。但是這一地區的顏色詞系統中還同時出現“藍”和“綠”。再考慮到筆者的田野調查結果，就可以說，這一地區的 BCT 是“藍”“綠”而不是“青”。

目前，因資料有限，不能得出一個可靠的結論。但是可以指出，南北之間存在著較爲明顯的差別。而且閩語區最爲明顯。除此之外，北方地區還呈現“青”的圓圈狀的分佈情況（參看地圖 7）。這種分布狀況雖然較爲疏散，而且不能否認因資料的不足所致的可能性，但是也可以使人聯想到張光宇 1996 所指出的“北方有中原與環中原之別”的大類傾向（張光宇 1996:28）。過去在北方地區，以中原爲中心，很多先進文化輻射四周。很多語言變化也將中

原爲震央，其變化波及週邊。BCT 系統在歷史上所發生的變化，比如 red 領域的[赤>紅]的興替，grue 領域的再範疇化（即 grue 領域分成兩個領域，分別爲“藍”“綠”等詞所表示）等，可能亦復如此。

這種分佈情況正符合語言的“波形擴散說”，而一方面也可以以“基層語言說”來解釋。眾所周知，中國南方原爲百越之地，他們的語言與漢語不同。漢族人從北方移入南方後，出現了語言的雙層結構，即少數統治階層的語言（漢語）和多數被統治階層的語言。統治階層的漢語也會影響到土著語言，但一方面土著語言會影響到統治階層語言（諏訪 2000）。“青”的保守性也有受到其基層語言影響的可能性。現在南方的一些少數民族語言中只有一個表 green-blue 領域的詞。總而言之，我們認爲，北方語言波及南方以後，沒有單純地波及到各地，而受到很多土著語言的影響，“青”的保守性也許是其中例證之一。

3.2. “烏”（圖表 8）

“烏”是南部吳語、閩語、贛語、客語共同的 BCT，與北方系的顏色詞“黑”明顯不同。觀察一下整個 BCT 系統，不難發現其他成員大約相同，而表 black 的詞卻不同。分佈情況亦與其他顏色詞明顯不同，不能單純地以波形擴散說來解釋。我們認爲，“烏”的產生有兩個可能性；一是由漢語內部產生：一是基層語言說。

“烏”原指烏鴉，其顏色純黑，會很容易被擴大到顏色領域使用。因此，也可以說，BCT“烏”源自漢語詞。換言之，“烏”是由漢語內部自然產生的。比如，『古今韻會舉要』“烏”字條說“又俗爲黑色曰烏”。既然韻書採用了這種字義，就不能說它是臨時性的比喻擴展。而且是宋元庶民大眾在口頭上常用的詞。奇怪的是北方卻沒有“烏”，因此它不會是北方移民直接從北方帶進來的，可能是在南方獨自形成的。

用基層語言學說來解釋，可以說是南方語言影響到漢語，形成了較爲特殊的、在北方找不到的 BCT。但是，還沒有釐清其形成和擴散過程。我們認爲一種可能性是這樣的：“烏”字起源於長江中下游。永嘉之亂後，司豫移民和青徐移民到達長江流域，和當地人民交流過程中習染當地土著語言。這土著語言當中有“烏”。而後，這些漢人移民又南遷。隨著他們的移動，BCT 的“烏”也擴散到各地。“烏”的分布範圍正重複於表烹飪器物“鍋”的“鼎”、“鍑”的分布範圍（參看石崎 1999）。諏訪 2000 指出，南方民族語言原來就有表“鍋”的名詞，而後來北方人帶來的漢語受到土著語言的影響開始使用這些詞，並用“鼎”“鍑”來寫。“烏”也許同樣如此。爲何只有表 black 的“烏”進入漢語 BCT 系統而其他顏色詞卻沒有，這是一個很大的謎。但是只憑目前所掌握的資料，還難以下一定的結論。需要今後再做進一步的探索和分析。

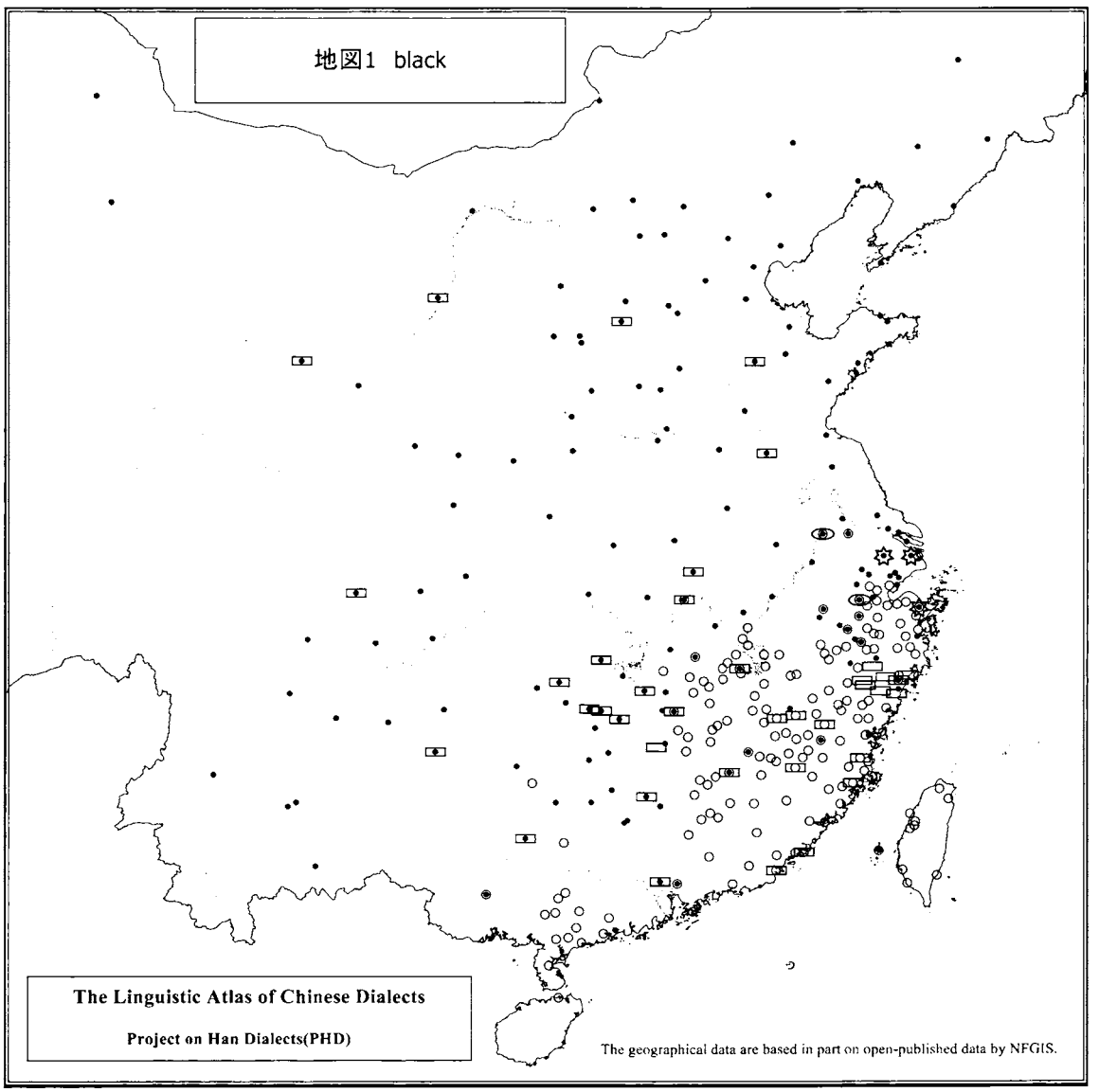
[參考文獻]

Berlin, Brent and Paul Kay 1969. *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution.* Berkeley: University of California Press.

Hardin, C. L. and Luisa Maffi (ed.) 1997. *Color Categries in Thought and Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kay, Paul 1975. Synchronic variability and diachronic change in basic color terms. *Language and Society* 4(3), 257-270.

Witkowski, Stanley R. and Cecil H. Brown 1977. An explanation of color nomenclature universals. *American Anthropologist* 79(1), 50-57.
張光宇 1996.《閩客方言史稿》,南天書局.
石崎博志 1999.なべ[鍋]、なべぶた[鍋蓋]《中國における言語地理と人文・自然地理—漢語方言地圖集(稿)第三集》5（岩田禮編）:106-111.
諏訪哲郎 2000.「鍋」と「鍑」「鼎」の分布をめぐって－波狀擴散說と基層言語差說の檢討—《中國における言語地理と人文・自然地理》7:66-88.


地図1 black
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

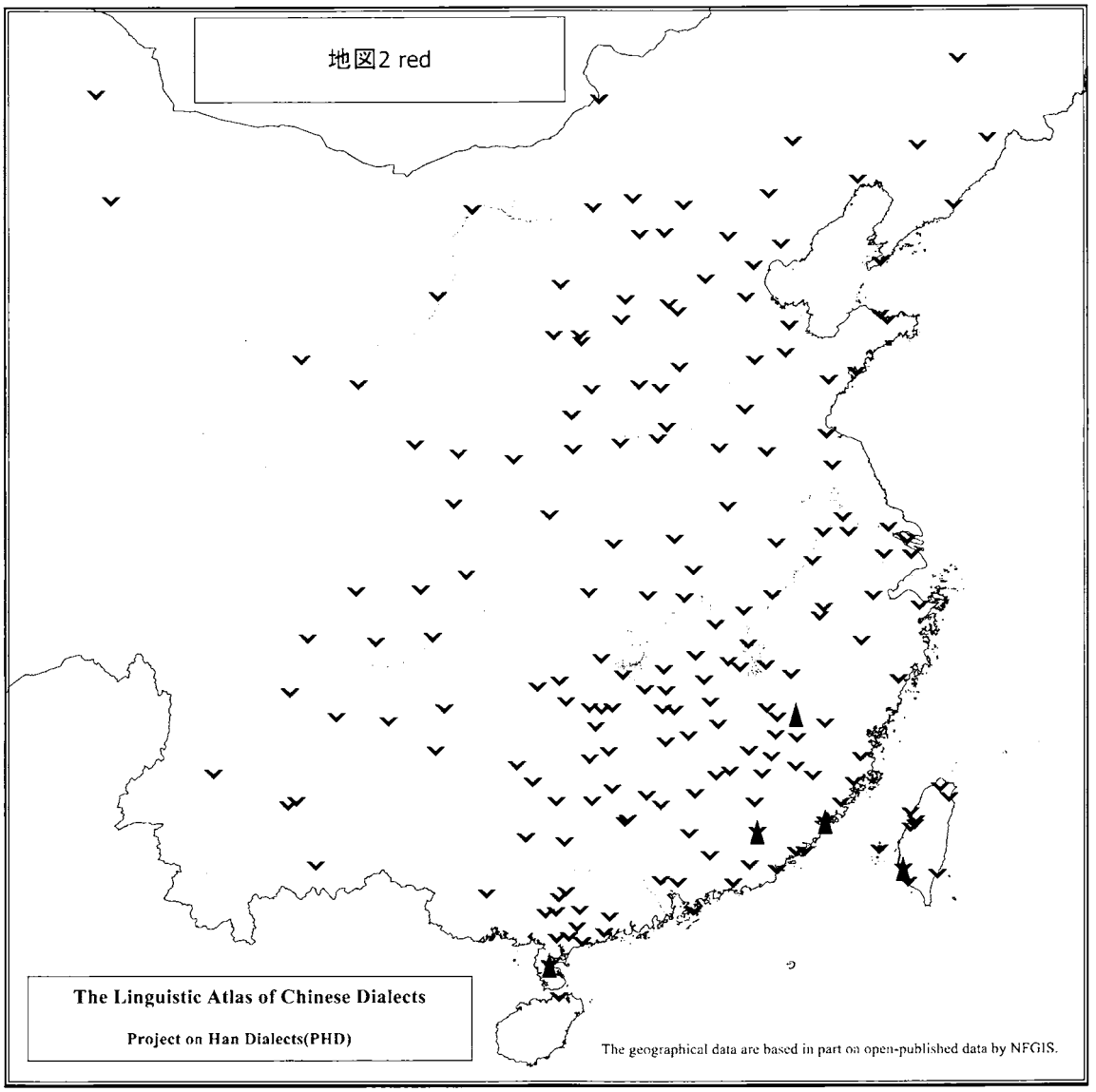
○ 烏

• 黑

▭ 青

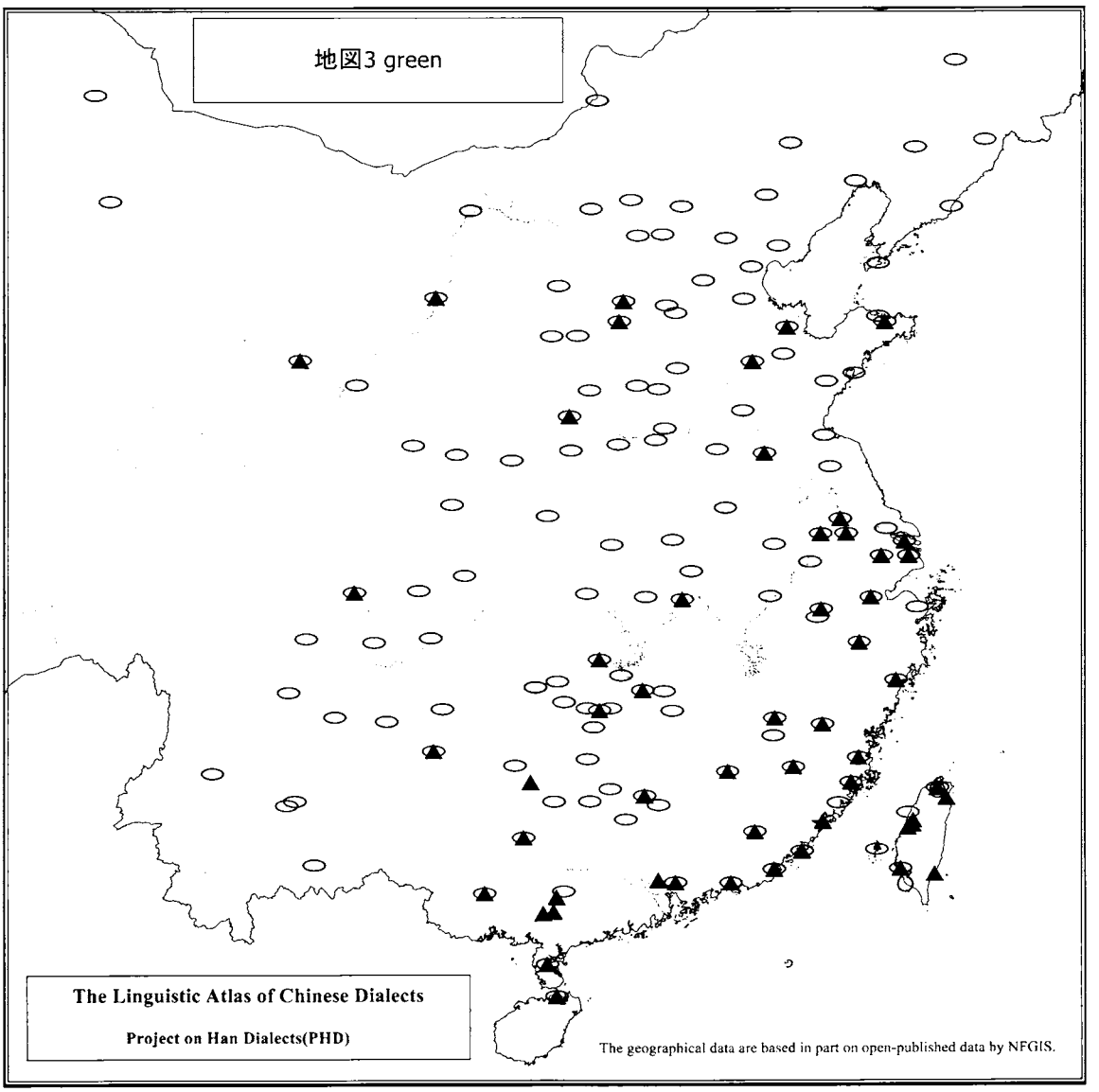
⬭ 乌黑

✡ 玄色


地図2 red
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

红

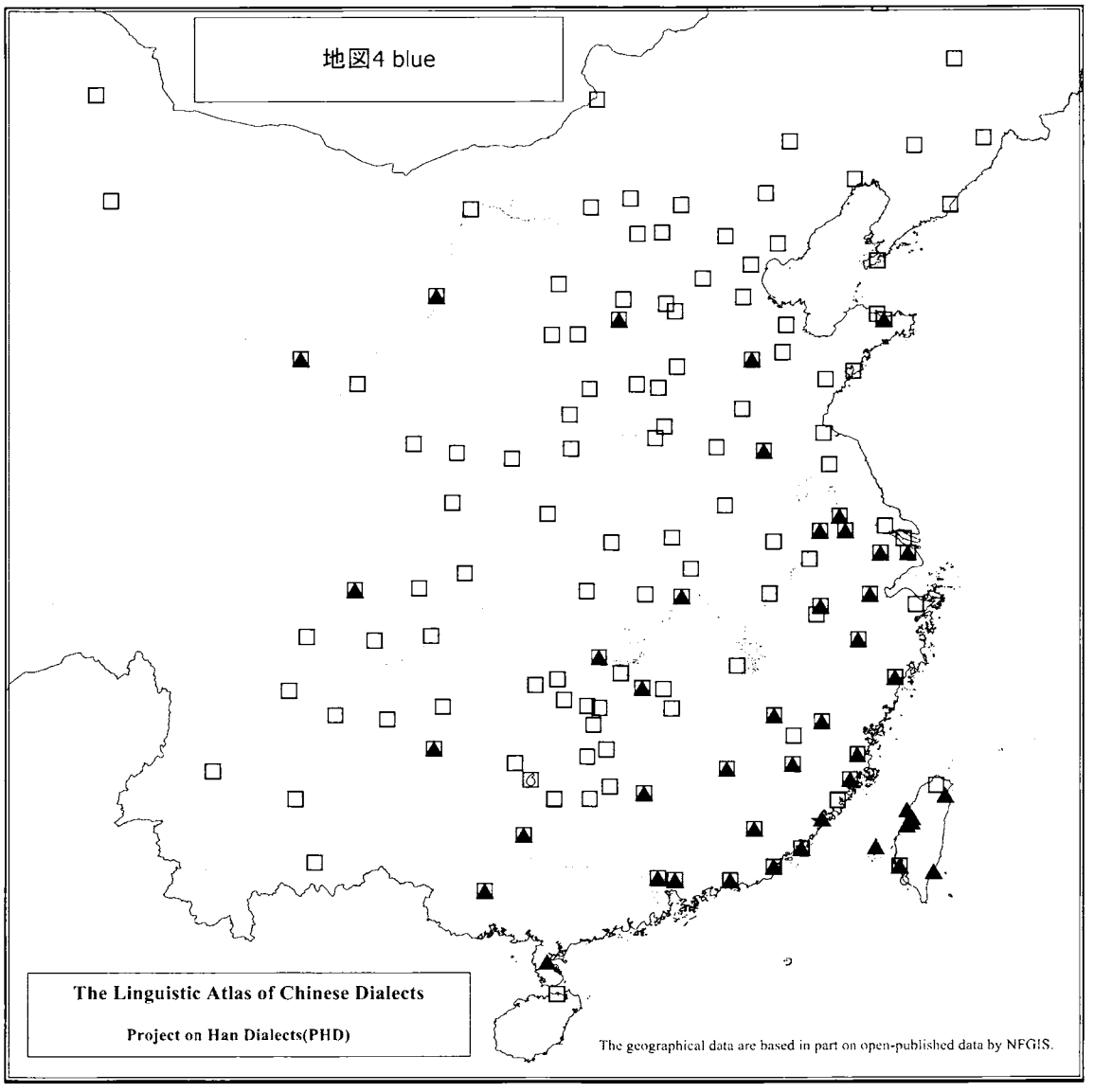
赤


地図3 green
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

▲ 青

⬭ 绿

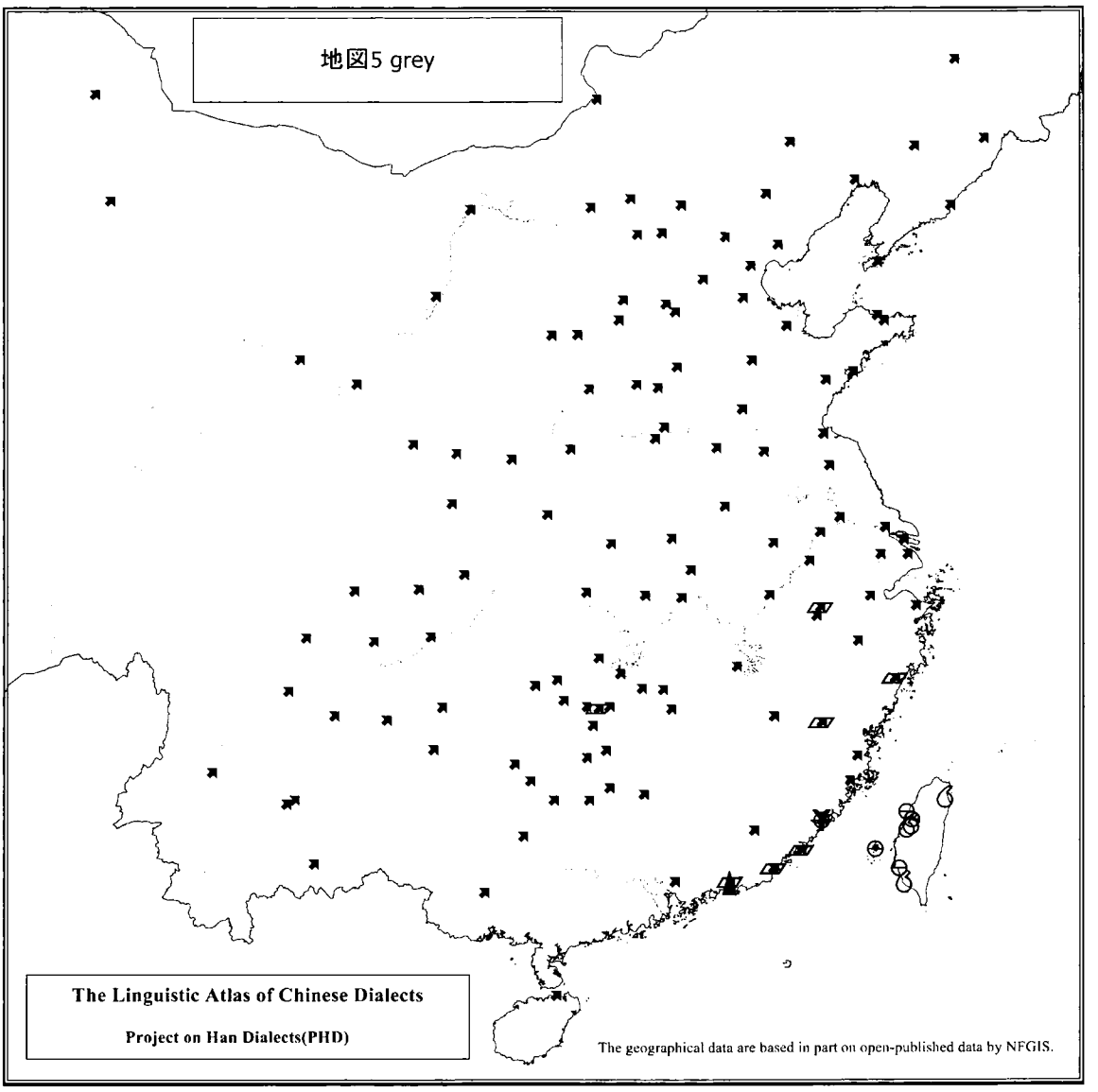
6 其他


地図4 blue
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

▲ 青

□ 蓝

ɔ 其他



灰

火灰色

灰色

乌灰色

醭色

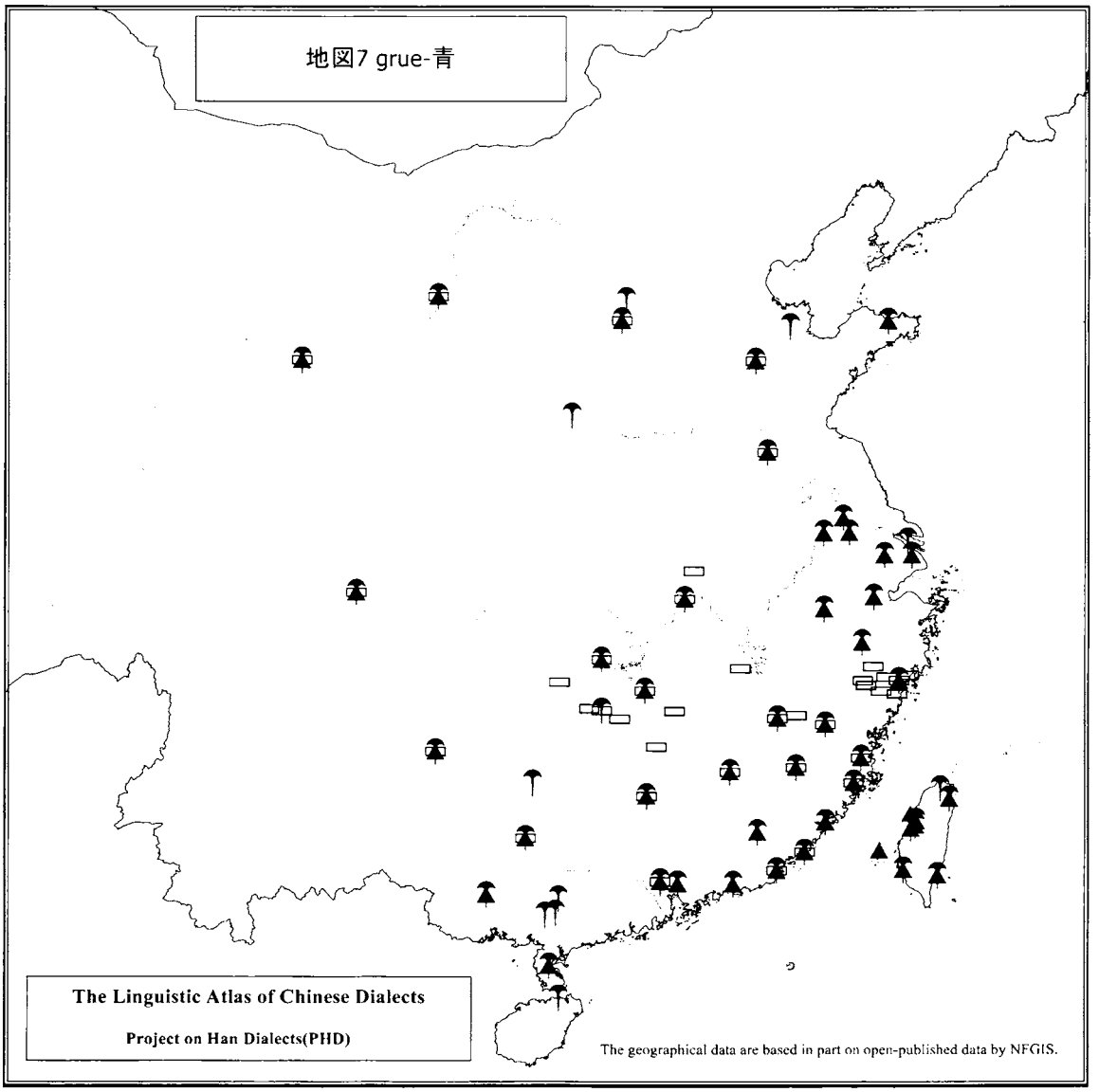
鸟鼠仔色

緑 green

○ 青 green

蓝 bule

□ 青 blue



▲ 青 (blue)

青 (green)

▭ 青 (black)

地図8 黑-乌
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

● 黑

○ 乌

△ 乌黑

漢語諸方言におけるウマの類別詞について[1]
── 禽獣類別タイプとの関係を中心に ──

中川裕三　冨永清美

0. はじめに

ウマを数える時に、北京方言では一般に"匹"という類別詞が用いられることは、周知の通りであるが、漢語方言全体でウマにどのような類別詞が用いられうるのかということになると、実はよく分かっていない。本稿では、ウマにどのような類別詞が用いられるのかということについて、約 1000 地点の個別方言に関するデータを繋ぎ合わせ、漢語諸方言における全体像を明らかにする。そしてそれを、各方言における禽獣類別タイプとの関係から考察することにより、漢語諸方言におけるウマの類別詞の使用状況を合理的に説明しようと試みるものである。

1. 先行研究

まず、ウマの類別詞に関する先行研究について、一般にウマ専用と考えられている"匹"を中心に概観してみたい。[2]

1.1."匹"の通時的研究

文献における"匹"の類別詞としての用法の出現に関して、王(1958)は、ウマの"匹"の出現は他の禽獣の類別詞よりも比較的早く、すでに先秦時代には存在していたとし、次のような西周金文の例を挙げている。

孚人萬三千八十一人，孚馬□匹，孚車卅兩，孚牛三百五十五牛，羊卅八羊

この例文に現れるウマ・ウシ・ヒツジのうち、"匹"が用いられているのはウマのみで、ウシ・ヒツジにはそれら自身を表す名詞がエコー類別詞(echo classifier)として用いられている。エコー類別詞とは、たとえば日本語で「部屋一部屋」というように、名詞をそのままコピーした類別詞のことを指す。なお、この文ではヒトにも"人"がエコー類別詞として用いられている。[3]

劉(1965)も"匹"の出現は比較的早かった(《書・文侯之命》:"馬四匹")とする。しかし、その適用範囲は比較的広く、ウマ以外の獣類にも用いられていたが、後にそこから次第に縮小し、南北朝時代にようやくウマ専用として定着した、と指摘している。次は、ウマ・ウシの両方に"匹"が用いられている例である。劉(1965)はこのような現象について、過渡期の言語の一部に起こった一時的失調状態だと考えている。

萊人使正輿子賂夙沙衛以索馬牛皆百匹（《左傳》襄公二年）

---

[1] 本稿は科研会議(2005 年 9 月 11 日、於北海道大学)で口頭発表した内容を発展させたものである。口頭発表時のタイトルは次の通り。「禽獣の類別詞とウマの類別詞の関係について」

[2] "匹"の獣類以外の用法については本稿では扱わない。

[3] エコー類別詞はすでに商(殷)の甲骨文字に現れているが、ウマの"匹"が出現したのはそれより遅れて周になってからだという。Yau(1988)参照。

当時の輸送や戦争におけるウマの重要性を考えると、ウマ専用の“匹”が他の禽獣の類別詞に先んじて最も早くに生まれたことは、容易に理解できる。その後、何らかの理由でウシ等の獣類がそのメンバーとして加わった時期があったとしても、やはり“匹”のプロトタイプは一貫してウマであったのではないだろうか。

1.2.“匹”のメンバー

“匹”がウマのために造られた類別詞であることは間違いなさそうであるが、現代語では、“匹”はウマ以外の獣類にも用いられることがある。王(1955)は現代語ではロバにも“匹”が用いられるとし、郭(1962)はラクダとロバに“匹”が用いられる例を挙げている。また、Chao(1968)でもロバに“匹”が用いられるとしている。ところが劉(1965)では、“匹”のウマ以外の獣類の用法の存在を認めながらも、最も主要なのはやはりウマを数える用法であり、ロバを“匹”で数える用法は普通話では根拠のないことだとしている。

この点について、Tai(1992)(1994)が原型理論(prototype theory)の立場から説明を試みている。Taiは、Wang Lianqingが北京出身者を対象に行った調査によって得られたデータ、すなわち一部の被験者は“匹”の用法をラバ・ラクダにまで拡張したが、ロバにまで拡張したのは1人だけであったというデータに基づき、“匹”のプロトタイプはウマであり、ラバ・ラクダはその次、ロバは最も周辺的であるとした。つまり、“匹”のカテゴリーはウマを中心としたプロトタイプ効果を呈しており、ラクダ・ラバ、さらにロバへと拡張されるのは、それらがウマと<形>や<機能>の上で類似していることに起因するとする。

“匹”のカテゴリーにおけるこのようなプロトタイプ効果は、中川(1999)が、獣類を数える際どのような類別詞を用いるかということについて、20 人の北京出身者に対して行ったアンケート調査でも確認されている。次は中川(1999)の【順位表】から“匹”の部分を抜き出したものである。1人も“匹”を用いるとしなかった動物については省略した。

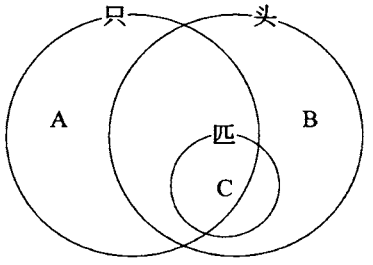
順位	1	2	3	4	5	5	7	7	7	10	10	10	13	13	13	13	13
動物	马	狼	骆驼	骡子	河马	驴	鹿	豹	狗	狐狸	海豚	海豹	犀牛	狮子	猪	大象	羊
人数	20	18	14	10	6	6	3	3	3	2	2	2	1	1	1	1	1

この【順位表】では、当該動物に“匹”を用いると答えたインフォーマントの数は「ウマ→ラクダ→ラバ→ロバ」の順で減少しており、Tai(1992)(1994)のプロトタイプ効果と基本的に一致している。要するに、少なくとも北京方言では“匹”はウマの専用類別詞として機能しており、“匹”が用いられるその他の獣類は、<形>や<機能>の上でウマと類似していると認識されたために周辺的メンバーとして加わっているものと考えられる。その他の方言の“匹”についてはよく分からないが、おそらく周辺的メンバーに若干の異同はあっても、ウマがプロトタイプであることには違いないであろう。[4]

[4] この【順位表】では、ウマ・ラクダ・ラバ・ロバだけでなく、Taiが指摘していなかったオオカミがウマの次、カバがラバとロバの間に位置し、その他の獣類も下位に加わっている。それらに“匹”が用いられる動機付け(motivation)については、さらなる調査が必要である。

1.3.“匹”と“只”“头”の関係

中川(1999)では、北京方言における“匹”と“只”“头”の関係は以下のようなものだと指摘している。北京方言では禽類をプロトタイプとした“只”のカテゴリーとウシ・ロバのような家畜をプロトタイプとした“头”のカテゴリーが、部分的に重なり合いながら、体系的に＜大小＞のスケールの上のあらゆる禽獣を分担して表している。そしてウマをプロトタイプとした“匹”のカテゴリーは次の図のように“只”“头”と重なっている。



A:小動物

B:大動物

C:ウマ及びウマと類似性が認められる動物

Tai(1992)(1994)は、大多数の漢語方言では、類別詞の使用に関して、動物は無生の事物や組織とは区別されるとした上で、“只”が禽獣のカテゴリーの汎用類別詞(general classifier)で、“匹”がウマ、“条”がイヌ・ウシ、“头”がウシ・ウマ・ブタ、“口”がブタの専用類別詞(specific classifier)であり、専用類別詞は汎用類別詞の“只”より優先される、としている。[5]

中川(2004)の調査によると、“只”ですべての禽獣を類別しうる方言も確かに多数存在するが、漢語方言の中には、禽獣の類別に関して、それとは異なったタイプの方言もまた多数存在することが分かっている。禽獣類別のタイプについては、第3節で詳しく考察する。

Tai(1992)(1994)はまた、多くの方言では、ウマに関して、“只”と“头”は口語に用いられ、“匹”はより正式な文語的会話に用いられる、という指摘も行っている。この指摘は、換言すれば、一つの方言の中で“只”または“头”と“匹”が併用されることがあるが、両者の指示対象は同じでも、文体が異なっているということである。中川(1999)のアンケート調査でも、ウマに“匹”を用いると答えた20人のうち4人が“头”との併用を認めている。

ここで、先行研究の指摘を整理すると、次のようになる。

①発生から現在に至るまで“匹”はウマの専用類別詞である。

②“匹”のカテゴリーはウマを中心としたプロトタイプ構造である。

③方言によっては、ウマの専用類別詞の“匹”がその方言における禽獣の汎用類別詞より優先されて用いられる。

④ウマの専用類別詞の“匹”とその方言における禽獣の汎用類別詞が併用される場合、両者は文体が異なっている。

近年、個別方言の記述が進み、類別詞に関するデータも充実してきてはいるが、その一つひとつのデータは断片的で、体系性に欠けることが多いのが実情である。しかし、たとえ断片的なデータであっても、それらを総合し、繋ぎ合わせれば、そこからこれまでにない情報を引き出すことが可能になるかもしれない。そこで本稿では、約1000地点の方言においてウマにどのような類別詞が用いられるのかということについて文献調査を行った。次節では、その調査結果に基づき、漢語諸方言におけるウマの類別詞の使用状況の全体像を見てみたい。

[5] Taiは“只”は有生性(animacy)という認知カテゴリーのデフォルトマーカーだと考えている。

2. 漢語諸方言におけるウマの類別詞

調査の結果、ウマに用いられる類別詞に関して、漢語諸方言を次の9つのタイプに分類できることが分かった。このうち“条”以下は、Tai(1992)(1994)でウマの類別詞として指摘されていなかったものである。

“匹”:ウマを“匹”で類別しうるタイプの方言
“只”:ウマを“只”で類別しうるタイプの方言
“头”:ウマを“头”で類別しうるタイプの方言
“个”:ウマを“个”で類別しうるタイプの方言
“条”:ウマを“条”で類別しうるタイプの方言
“块”:ウマを“块”で類別しうるタイプの方言
“行”:ウマを“行”で類別しうるタイプの方言
“兜”:ウマを“兜”で類別しうるタイプの方言
“拉”:ウマを“拉”で類別しうるタイプの方言

この9つのタイプの方言の分布状況を示したものが[地図1]である。[地図1]に現れた分布は概ね次の通りである。なお、資料的な制約から、1000 地点すべてのウマの類別詞が明らかになっているわけではない。地図上の空白地帯は資料的空白と見なされる。

“匹”は北方、南方を問わず漢語方言全体に広く分布している。

“只”は主として華南の南方方言地域に分布しているが、北方では唯一北京にも見られる。[6]

“头”は福建北部を中心に、隣接する浙江南部、江西東部、広東北部、貴州に点在するほか、北方では唯一吉林にも見られる。

“个”は主として北方に広く分布している。安徽中部に1地点、湖南北部と南部に1地点ずつ点在するほか、広東の珠江デルタ地域に数地点まとまった分布が見られる。

“条”は広東の珠江デルタ地域から広東北部にかけて数地点まとまって分布している。そこから広東東部、広西東部、福建北部、浙江中部にかけて点在し、湖南南部と北西部にも1地点ずつ見られる。

“块”は陝西南部に1地点見られるのみである。

“行”は福建北部に1地点見られるのみである。

“兜”は広東西部に1地点見られるのみである。

“拉”は広東北部に1地点見られるのみである。

このように、[地図1]上で漢語方言全体を見渡すと、ウマに用いられる類別詞の種類は多いが、いくつかの類別詞はある程度まとまった分布状況を呈していることが分かる。一部例外はあるものの、揚子江以北はほとんど“匹”と“个”のみだといえる。一方、南方はかなり複雑であるが、“只”の分布域と“头”の分布域ははっきりと区別できる。

同一方言における類別詞の併用は次の通りである。併用は、基本的に[地図1]上の判子の重なりで表されている。併用には優先順位のある場合も含まれており、その点については地図上では区別できない。なお、地図上は判子が重なっていても、同一地点で複数の異なった方言に跨っているものは併用とは見なさない。[7]

---

[6] 北京方言でウマに“只”を用いることについては《汉语方言词汇・第二版》のデータに基づいている。しかし、中川(1999)の調査では、ウマに“只”を用いるインフォーマントは1人もいなかった。

[7] この点に関しては、地図上では判断できないので、この地図の元データで確認した。

“匹”と“只”の併用
“匹”と“头”の併用
“匹”と“个”の併用
“匹”と“条”の併用
“只”と“条”の併用

3. 禽獣類別タイプ

第1節で述べたように、中川(1999)の調査結果から、少なくとも北京方言では“只”と“头”が禽獣の汎用類別詞として機能しているといえる。しかし、約 1000 地点の漢語方言を対象にした中川(2004)の調査から、方言によって禽獣類別の状況は大きく異なっていて、“只”と“头”の関係から見た場合、漢語方言には次の3つのタイプの方言が存在することが分かった。

“只头”型:“只”で禽類と小動物、“头”で大動物を分担しうるタイプの方言
“只”型:“只”ですべての禽獣を類別しうるタイプの方言
“头”型:“头”ですべての禽獣を類別しうるタイプの方言

先のTaiの用語を借りると、“只头”型の方言では“只”と“头”、“只”型の方言では“只”、“头”型の方言では“头”がそれぞれの方言における禽獣の汎用類別詞ということになる。[8]

しかし、我々が汎用類別詞としてすぐ想起するのは、北京方言で常用される“个”である。Tai(1992)(1994)では、広東と海南のいくつかの方言において、すべての種類のモノの汎用類別詞である“个”がいくつかの動物にも用いられる、と指摘している。

そこで、この禽獣の汎用類別詞という観点から、約 1000 地点の個別方言に関するデータを再分析したところ、漢語諸方言には、先の3つのタイプのほか、次の3つのタイプの方言が存在することが明らかになった。

“个”型:“个”ですべての禽獣を類別しうるタイプの方言
“块”型:“块”系(“块”“俄”“槐”“乖”“外”“骨”)ですべての禽獣を類別しうるタイプの方言[9]
“条”型:“条”ですべての禽獣を類別しうるタイプの方言

以上の6タイプの分布を示したのが[地図2]である。ここに現れた6タイプの分布は概ね次の通りである。

“只头”型は北方を中心に、南方の湖南、貴州、広西、雲南にかけて広く分布し、浙江、江西、福建西部、南部にかけても連続的な分布が見られる。また広東南部にも1地点見られる。

“只”型は主として華南の南方方言地域を中心に“头”型を取り囲むように分布している。

“头”型は福建北部を中心に、隣接する浙江南部、江西東部にかけてまとまって分布し、湖南南部と海南島にも1地点ずつ見られる。

“个”型は主として北方に広く分布しているが、貴州東部、湖南西部、南部、浙江南部にも点在し、広東の珠江デルタ地域に数地点まとまった分布が見られる。

“块”型は山西中部に集中して分布している。

“条”型は福建の“头”型の分布域と湖南北西部にそれぞれ1地点ずつ見られるのみである。

この[地図2]と先の[地図1]を重ね合わせると、各地点における禽獣類別のタイプとウマの類

[8] “只”型の方言の中には“只”が禽獣だけでなく「対の片方」や「器具」にまで拡張され、普通話の“个”のような汎用類別詞として機能しているものもある。中川(2002)参照。
[9] これらの類別詞はいずれも普通話の“个”に相当するもので、方言によって呼び方は違っても機能面で類似しているので、本稿ではそれらを一括して“块”系として扱った。《汉语方言语法类编》参照。

別詞の関係が明らかになる。[地図1]における“匹”の分布域はこの6タイプすべての分布域と重なっていて、“只”の分布域は“只”型、“头”の分布域は“头”型、“个”の分布域は“个”型の分布域とそれぞれ重なっていることは一目瞭然である。しかし、この2枚の地図をざっと見比べただけでは、実際に[地図1]のどの判子と[地図2]のどの判子が重なっているのかを判断することは難しく、正確な分析を行うことができない。よって次節では、ウマの類別詞ごとに禽獣類別のタイプとの関係を整理し、さらに詳しい分析を試みる。

4. ウマの類別詞と禽獣類別タイプの関係

次の表は、ウマの類別詞と禽獣類別タイプの関係、すなわち、ウマに用いられうるどの類別詞が禽獣類別のどのタイプの方言で実際に用いられているのか、ということを示したものである。当該のウマの類別詞の使用が“X”型に属す方言で確認されたものは「＋」、確認されなかったものは「－」で示してある。「－」は、“X”型の方言では当該の類別詞を用いる方言が実際に存在しない場合と、ただ単にデータがない場合の両方を含んでいる。なお、ウマの類別詞ごとの禽獣類別タイプとの重なりを[地図3～7]で示したので、そちらも参照されたい。

	“只头”型	“只”型	“头”型	“个”型	“块”型	“条”型	
“匹”	＋	＋	＋	＋	＋	＋	[地図3]
“只”	＋	＋	－	－	－	－	[地図4]
“头”	＋	－	＋	－	－	－	[地図5]
“个”	＋	－	－	＋	－	－	[地図6]
“条”	＋	＋	－	＋	－	＋	[地図7]
“块”	－	－	－	－	－	－	
“行”	－	－	－	－	－	－	
“兜”	－	－	－	－	－	－	
“拉”	－	－	－	－	－	－	

“匹”の使用は6種類すべてのタイプの方言で確認された。“匹”の禽獣類別の各タイプに跨った幅広い分布は、“匹”が古くからウマ専用の類別詞として発達し、各タイプの方言で確固たる地位を占めていることの現れだと考えてよいだろう。([地図3]参照)

“只”が“只”型、“头”が“头”型で用いられるのは、それぞれの方言における禽獣の汎用類別詞がウマに用いられているということである。また“只”と“头”がいずれも“只头”型の方言で用いられうるということは、同じ“只头”型でも、ウマが小動物のカテゴリーに類別される方言では“只”が用いられ、大動物のカテゴリーに類別される方言では“头”が用いられるものと考えてよいだろう。([地図4][地図5]参照)

“个”が“个”型の方言で用いられるのも、その方言における禽獣の汎用類別詞がウマに用いられているということである。“个”が“只头”型の方言でも用いられることについては、“个”型と“只头”型の重なりによって説明できるのではないだろうか。“只头”型で“个”が用いられるいくつかの方言については、“个”型との判子の重なりが確認された。“个”型との判子の重なりが確認できていないものについても、実際には重なっている可能性が高い。([地図6]参照)

しかし、“条”に関しては少々状況が異なる。“条”が“条”型の方言で用いられることに関しては、先の“只”型における“只”、“头”型における“头”、“个”型における“个”の使用と同様、その地点

における禽獣の汎用類別詞がウマに用いられていると理解してよいが、“条”は“只头”型と“只”型と“个”型の一部の方言にも入り込んでいるのが確認された。そのような方言では、ウマに“条”を用いることができるのである。([地図7]参照)

今回調査した資料では“块”の“块”型における使用は確認されなかった。しかし、禽獣類別タイプは不明だがウマに“块”が用いられている方言が実際に存在すること、またウマに汎用類別詞が用いられているその他の方言の状況などから考えると、“块”型でウマに“块”が用いられる方言が存在してもおかしくない。

以上の考察から、[地図1]において見られたウマの類別詞の併用については次のように説明することができるだろう。

“匹”と“只”の併用は、“只”型の方言または“只头”型の方言における、ウマの専用類別詞“匹”と禽獣の汎用類別詞“只”の併用である。

“匹”と“头”の併用は、“头”型の方言または“只头”型の方言における、ウマの専用類別詞“匹”と禽獣の汎用類別詞“头”の併用である。

“匹”と“个”の併用は、“个”型の方言における、ウマの専用類別詞“匹”と禽獣の汎用類別詞“个”の併用である。

“匹”と“条”の併用のうち、一つは“条”型の方言における、ウマの専用類別詞“匹”と禽獣の汎用類別詞“条”の併用である。その他の“只”型または“只头”型の方言における併用は、“匹”がウマの専用類別詞であることは間違いないが、“条”についてはよく分からない。

“只”と“条”の併用は、“只”が禽獣の汎用類別詞であることは間違いないが、やはり“条”についてはよく分からない。

要するに、“匹”とそれ以外の類別詞の併用は、基本的に専用類別詞と汎用類別詞の関係になっているのである。

5. おわりに

本稿では、漢語諸方言におけるウマの類別詞について、禽獣類別タイプとの関係という観点から考察を行った。その結果、ウマにどのような類別詞を用いるのかということに基づき、漢語方言を次のようなタイプに分けることができる。

①ウマ専用の“匹”のみが用いられる方言

②禽獣の汎用類別詞のみが用いられる方言

③ウマ専用の“匹”と禽獣の汎用類別詞の併用が可能な方言

④その他の類別詞(“行”、“兜”、“拉”、“条”)が用いられる方言

①と②については、①のような方言では、少なくとも言語の上で、ウマに特別な地位を与えているということであり、②のような方言ではウマを特別扱いせず、他の動物と同等に扱っているということである。[10]タイプがまったく異なった①と②のような方言の存在を説明するためには、両タイプの方言におけるウマの社会的地位の比較といった言語外の観点からのアプローチが必要となるだろう。また、③のような併用については、それらの方言では両者が対立して排斥し合う関係ではないからこそ成り立っていると考えられる。それが果たしてTai(1992)(1994)のいうような文語対口語といった異なった文体の使い分けであるかどうかについては、今後個別方言を詳しく調査する

[10] ①のような方言では、“匹”によってウマを他の禽獣と区別した結果、ウマには汎用類別詞を用いなくなっているものと考えられる。

必要があるだろう。④の“行”“兜”“拉”については1地点ずつしか確認されていない上に、いずれも禽獣類別タイプが不明なので、やはり詳しい調査が必要である。また、“条”は元々細長いものに用いられる類別詞の一つであるが、その禽獣の用法についてはよく分かっていない。ウマだけでなくその他の禽獣の用法と合わせて調査が必要である。

なお、本稿で用いたアプローチは、他の禽獣の類別詞の分析にも応用可能である。今後は、現時点で記述が比較的進んでいると思われるニワトリ・ブタ・ウシ等の類別詞にも考察対象を広げてゆきたい。

[参考文献]

Chao, Yuanren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.

郭明昆　1962.『中国の家族制及び言語の研究』, 東方学会.

劉世儒　1965.《魏晋南北朝量詞研究》, 中華書局.

中川裕三　1999. 中国語における動物の類別について...“只”“匹”“头”のカテゴリーを中心に. 《中国 21》, Vol.6, 255-272.

.....2002. 類別詞“只”のカテゴリー拡張のメカニズムについて...漢語諸方言における用法の比較から.《慶谷壽信教授記念中国語学論集》, 好文出版, 199-208.

.....2004. 禽獣の類別詞“只”“头”について...通時的発展プロセスと現在の共時的分布との関係を中心に.《漢語方言地図集(稿)第4集》. 平成 13-15 年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書－第3分冊, 129-130, 145-151.

Tai,James H-Y. 1992. Variation in Classifier Systems Across Chinese Dialects: Towards a Cognition-Based Semantic Approach. *Chinese Language and Linguistics*, Vol.1 : Chinese Dialects, 587-608.

.....1994. Chinese Classifier Systems and Human Categorization. Chen,M.Y. & Tzeng,O.J.L. eds. *IN HONOR OF WILLIAM S-Y.WANG*, Pyramid Press, 479-494.

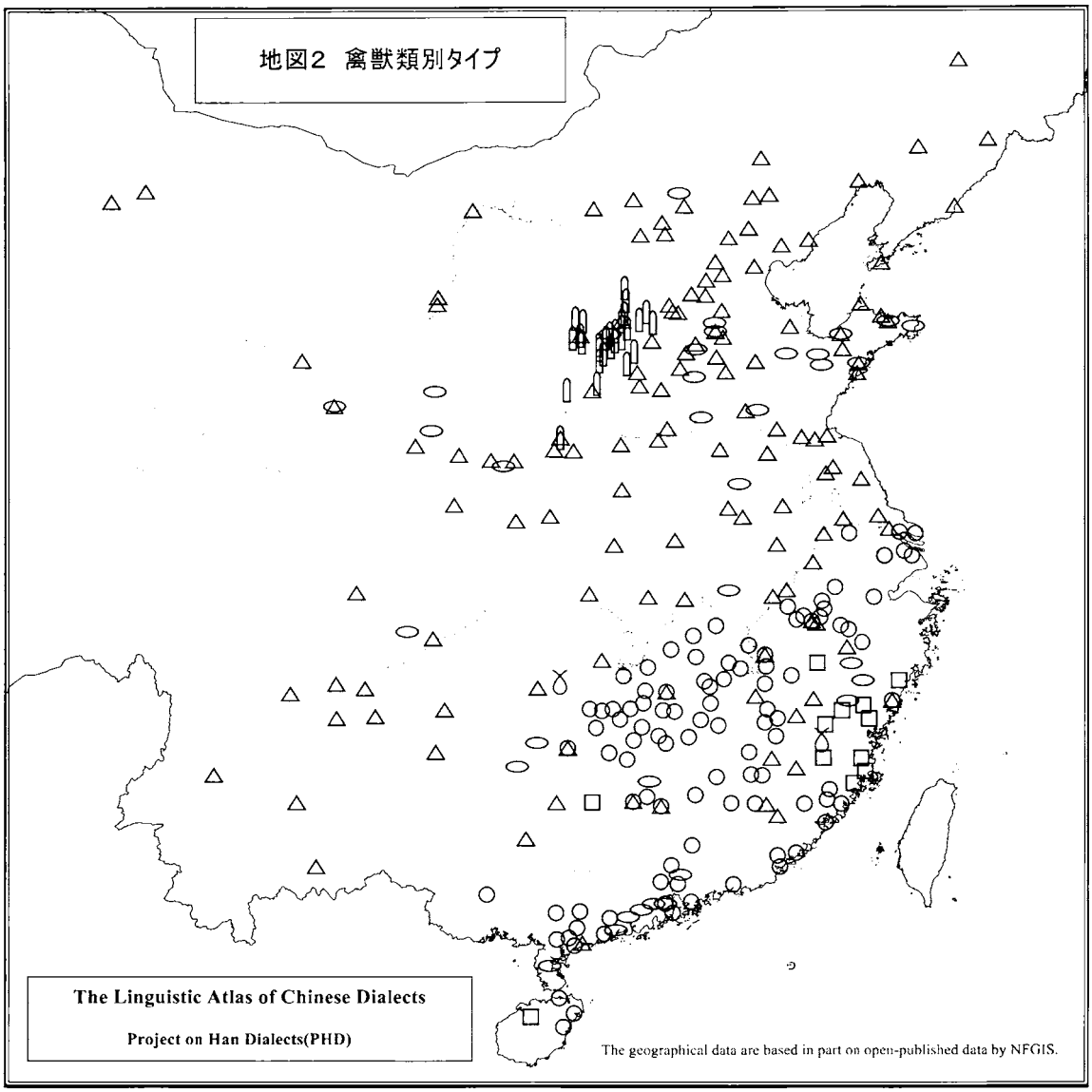
王力　1955.《有关人物和行为的虚词》.(《王力文集・第三卷》, 山东教育出版社, 1985, 391-487)

..... 1958.《汉语史稿》.(《王力文集・第三卷》, 山东教育出版社, 1988, 1-825)

Yau,S-C. 1988. A Cognitive Approach to the Genesis of Numeral Classifiers in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* , Vol.16, No.2, 264-277.

地図1　ウマの類別詞
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

匹
只
头
个
条
块
行
兜
拉



△ “只头” 型

○ “只” 型

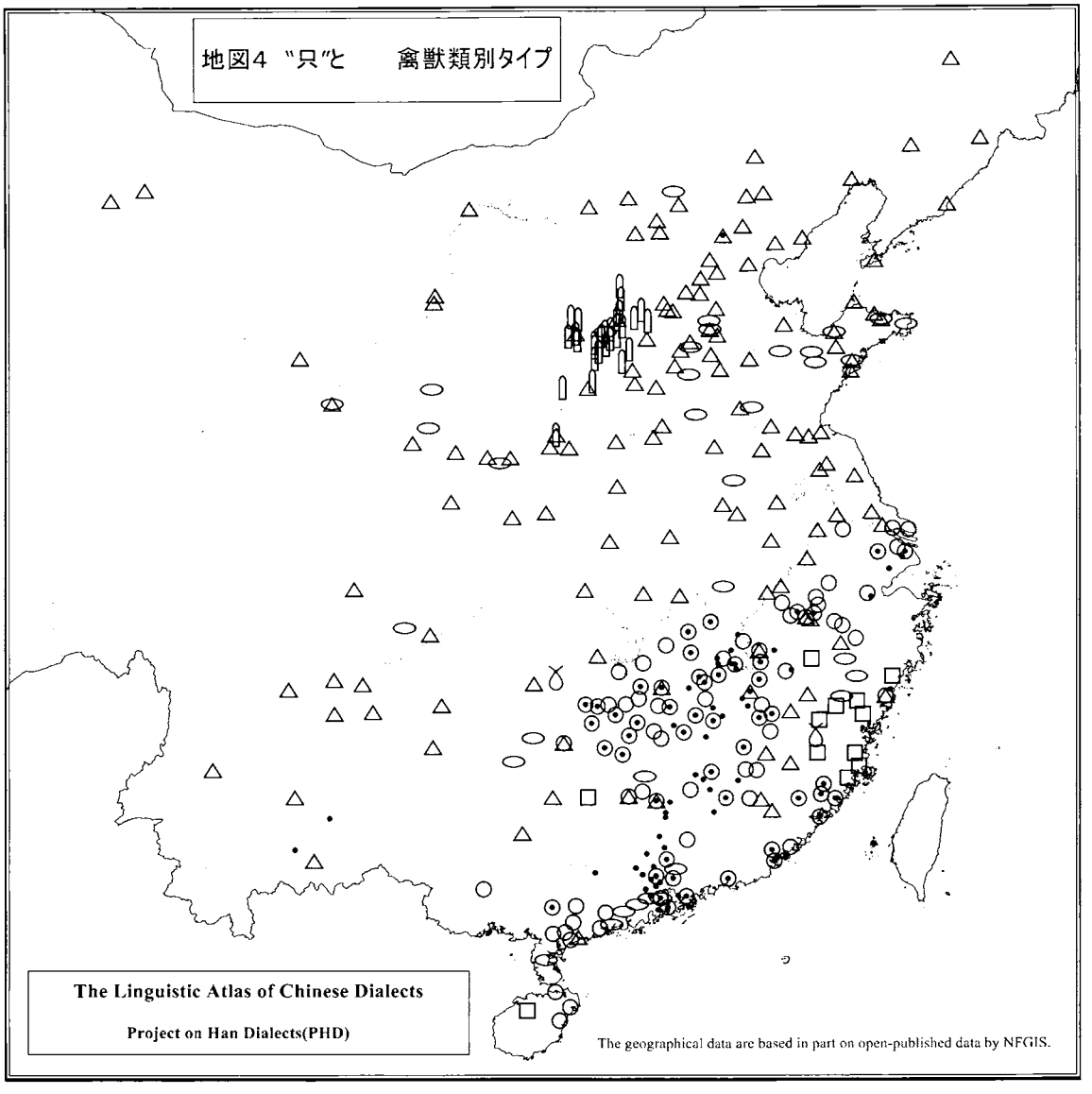
□ “头” 型

⬭ “个” 型

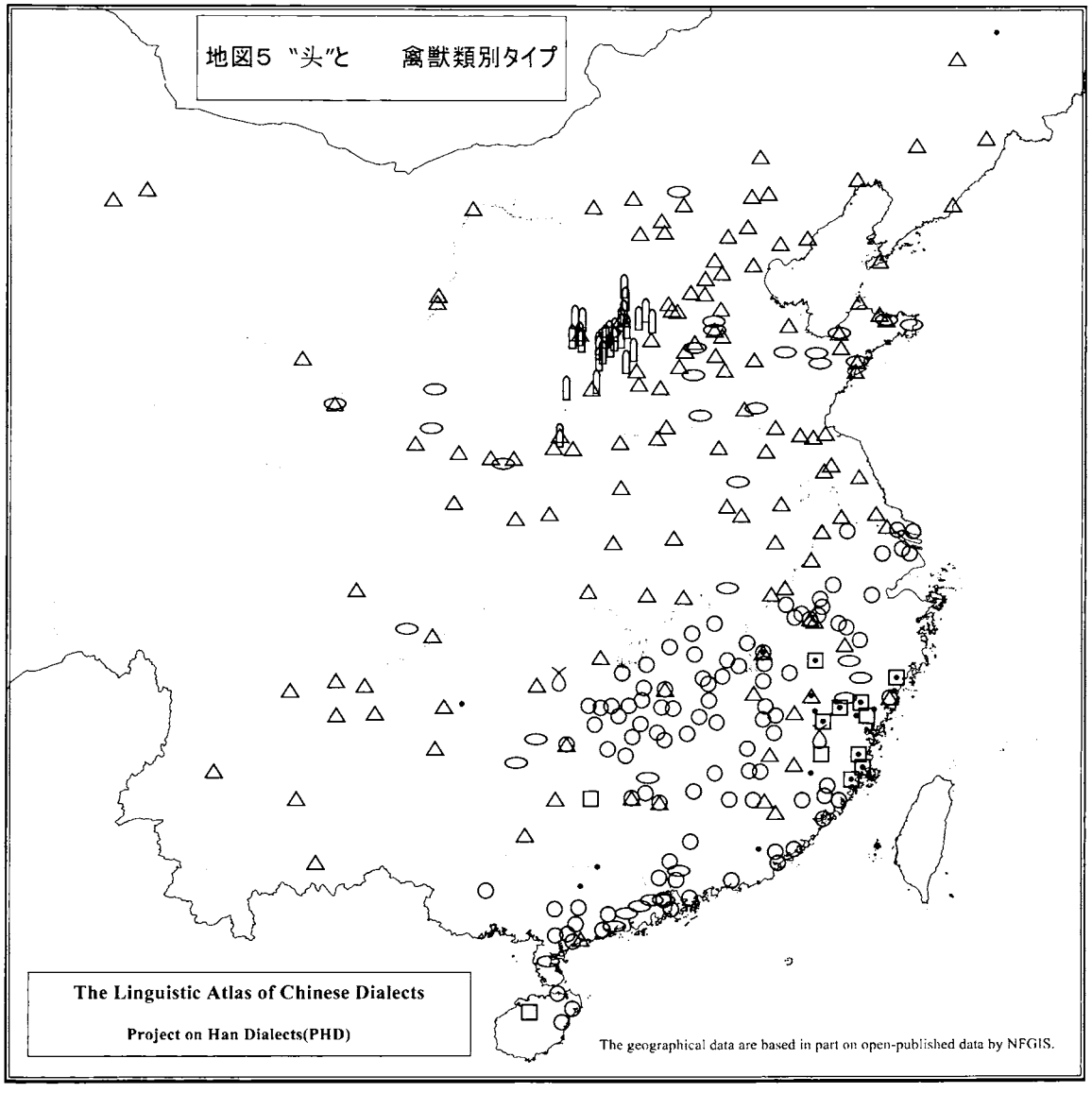
▯ “块” 型

𐄷 “条” 型

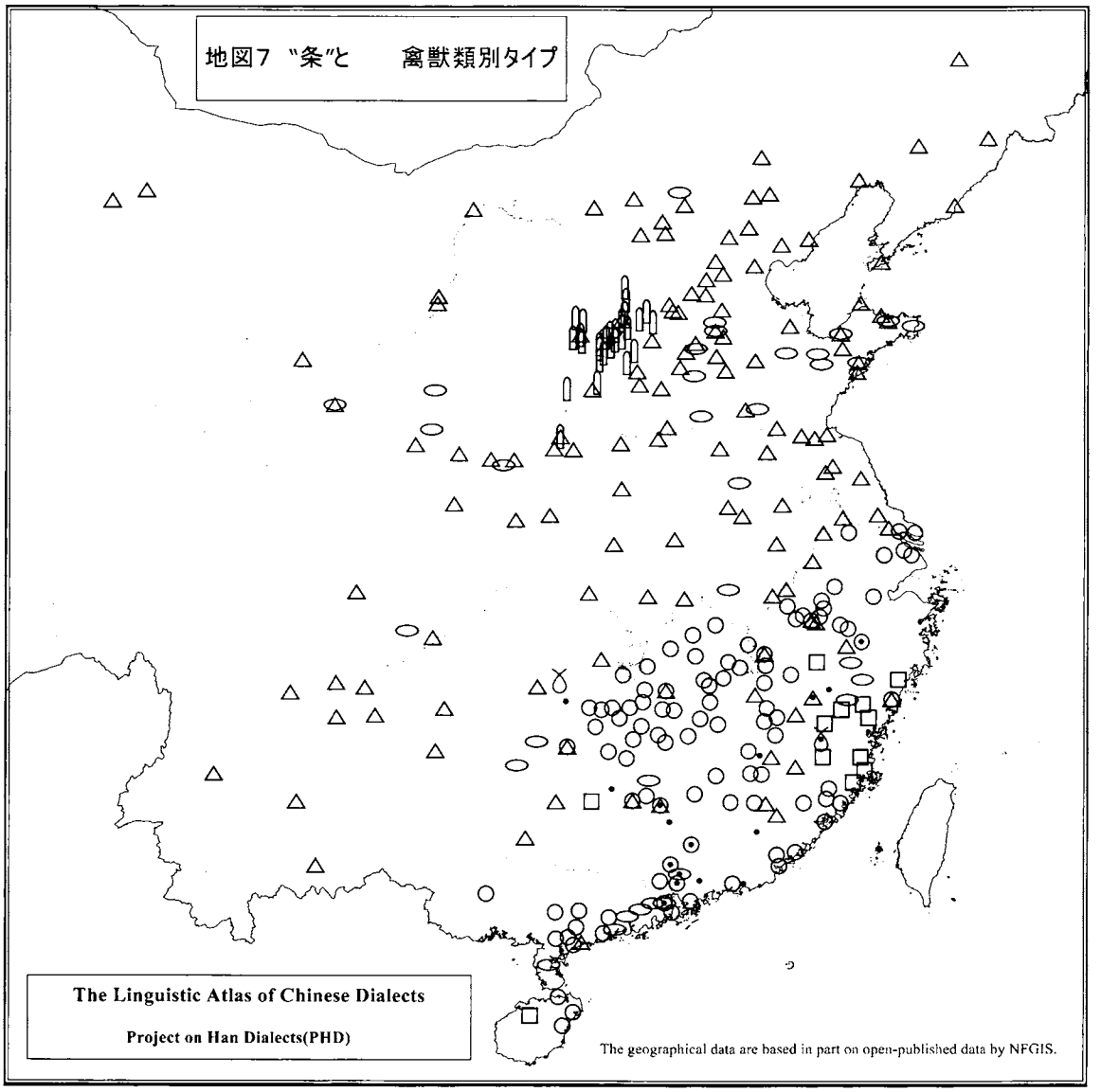
- 匹
- △ “只头” 型
- ○ “只” 型
- □ “头” 型
- ⬭ “个” 型
- ▯ “块” 型
- ⟆ “条” 型



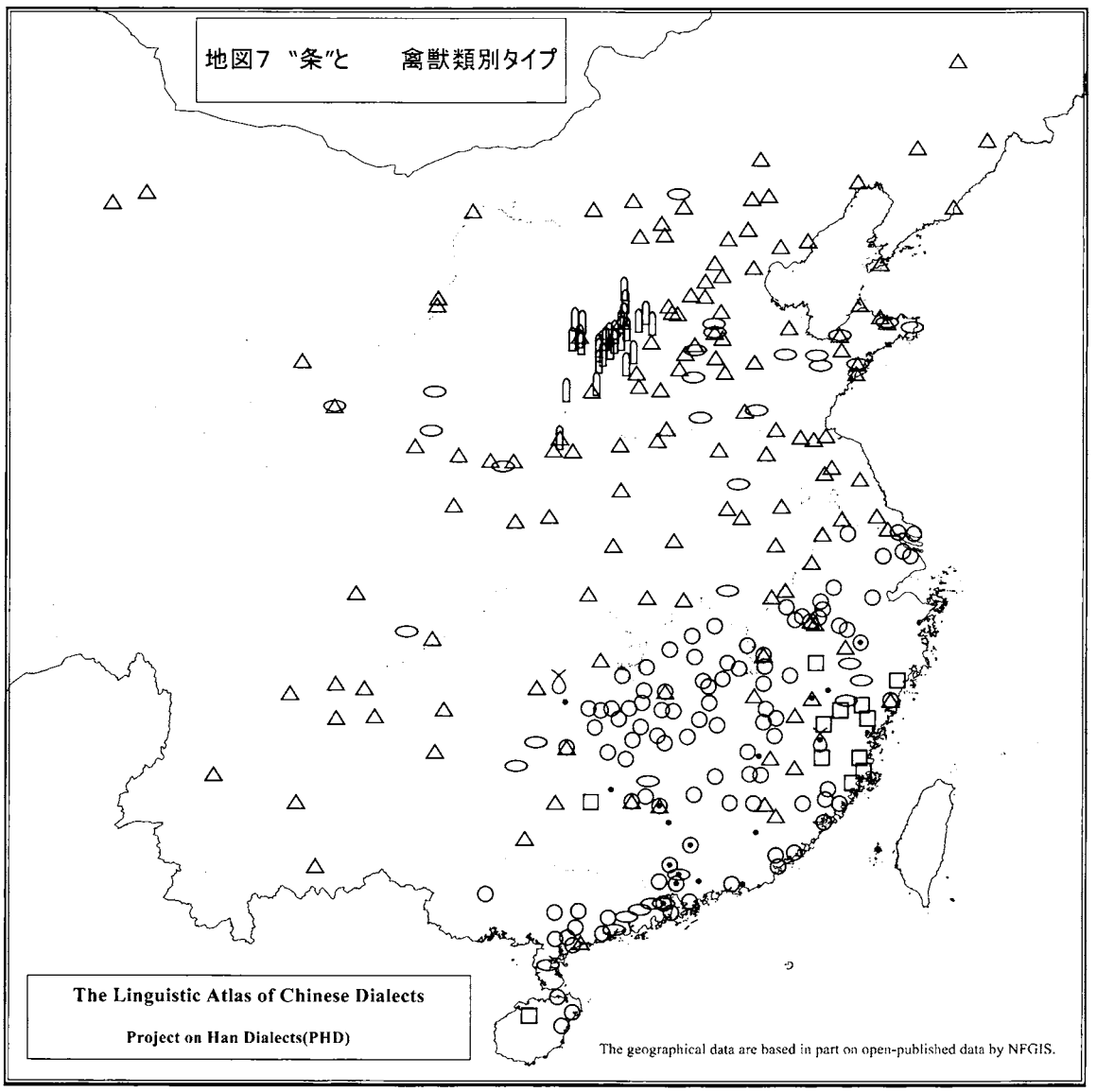
- 只
- △ “只头”型
- ○ “只”型
- □ “头”型
- ⬭ “个”型
- ▯ “块”型
- ᛉ “条”型



- 头
- △ “只头” 型
- ○ “只” 型
- □ “头” 型
- ⬭ “个” 型
- ▯ “块” 型
- ⟋ “条” 型



- 条
- △ “只头”型
- ○ “只”型
- □ “头”型
- ⬭ “个”型
- ▯ “块”型
- “条”型



- 条
- △ “只头” 型
- ○ “只” 型
- □ “头” 型
- ⬭ “个” 型
- ▯ “块” 型
- ᛉ “条” 型

＜主な語形＞V（O）起的, V 起 O

正系：　＜含まれる文字＞正[ts-](tsən, tsəŋ, tɕeiŋ), [tʂ-](tʂən,tʂəŋ), [ʦe], [ʧen]

＜主な語形＞正 VO など

咧系：　＜含まれる文字＞咧[l-](le, leʔ, liɛ, lɤ)、哩[l-](li, lEi, lei, lE), [ni]、累[lə]、喇[la]、啰[lo]、嘞[l-](le, lei, lɛ)

＜主な語形＞VO 着哩, VO 哩, VO 咧,VO 勒, 咧 VO,啰 VO など

その他：省略

2. 2. 地図2　持続

持続を表す語彙的な手段について調べた地図である。文中での位置は問わない。

地図の凡例に含まれる主な語形は以下の文字を含むものである。

在系：　＜含まれる文字＞在[tsʰ-](tsʰai, tsʰɛ),[t-](to, ti),[tʰẹi]、呐[hœŋ]、喺[hʁi]

＜主な語形＞VO 在、VO 到在、V 子在, VO 起在, V 呐度, V 呐处,V 喺度,V 喺处など

着系：　＜含まれる文字＞着[tʂ-](tʂə, tʂɻ, tʂɤ, tʂəɤ, tʂuə, tʂau, tʂɔ, tʂɻ, tʂɿ, tʂou, tʂu, tʂuo, tʂo,), [tʂʰ-](tʂʰɻ, tʂʰə), [ʦ-](tsɔ, tsə, tsɻ), [tsʰyo], [ʧ-](ʧau, ʧie), [t-](tøʔ, tə, tɛ, tɔ, tɤ, tɛə,), [lə], [ʦio], [ʦʰ-](ʦʰiɔ, ʦʰyoʔ), [d-](dɛ, də), [ʔdo], [zhou]

＜主な語形＞VO 着哩, VO 着呢, V 着など

住系：　＜含まれる文字＞住[tiu],[ʦ-](tsy, tsəɯ),[ʦye], [tsʰu], [ʧy]、了[N.D]、则[ʦ-](tsɛʔ, tsəʔ, tsEʔ)、之[tsi], [tʂɻ]

＜主な語形＞V 住, V 则, V 之など

到系：　＜含まれる文字＞到[t-](tao, tau, tɔ, tou, tɤ, tei, tə, taɔ,)、倒[t-](tɑo, tau, tɔ, tɑʌ, ta, tɔo, tie)、得[t-](tie, teɛʁ, tei, tə, tʁʔ)、的[t-](ti, tə, tɤ, tei, təi, tiʔ),[di]、呾[t-](ta, tɑo, tɒ)、地[ti]

＜主な語形＞VO 的, V 到 O, V 到, V 倒, V 的, V 地, VO 得など

辣系：　＜含まれる文字＞辣[lAʔ]、勒[l-](ləʔ, lAʔ, lʁʔ, lɛʔ)、来[liu]

＜主な語形＞V 辣, V 辣海, V 辣里, V 辣浪, V 辣拉, VO 辣海, VO 辣里, VO 辣浪, VO 勒海など

紧系：　＜含まれる文字＞紧[k-](kən, kʁn, kʁŋ, kieŋ)

＜主な語形＞V 紧 O など

是系：　＜含まれる文字＞是[N.D]、系[hæi]

＜主な語形＞V 是那, V 是那搭, V 了系など

起系：　＜含まれる文字＞起[ʦi], [ʦʰi], [ʃi], [kʰi], [ɕi], [hai]

＜主な語形＞V 起的, V 起 O, V 起在など

了系：　＜含まれる文字＞了[kei], [tei], [lə], [tɛi]

＜主な語形＞V 了, V 了 O, V 了系など

咧系：　＜含まれる文字＞咧[l-](le, leʔ, lae, lɛ)、哩[ni], [lɛ]、累[lə]、啰[lo]、嘞[le]

＜主な語形＞V 哩, V 咧, V 啰

その他：省略

＜主な語形＞V（O）起的, V 起 O

正系：　＜含まれる文字＞正[ts-](tsən, tsəŋ, tɕeiŋ), [tʂ-](tʂən,tʂəŋ), [ʈe], [ʈen]

＜主な語形＞正 VO など

咧系：　＜含まれる文字＞咧[l-](le, leʔ, liɛ, lɤ)、哩[l-](li, lEi, lei, lE), [ni]、累[lə]、喇[la]、啰[lo]、嘞[l-](le, lei, lɛ)

＜主な語形＞VO 着哩, VO 哩, VO 咧,VO 勒, 咧 VO,啰 VO など

その他：省略

2　2. 地図2　持続

持続を表す語彙的な手段について調べた地図である。文中での位置は問わない。

地図の凡例に含まれる主な語形は以下の文字を含むものである。

在系：　＜含まれる文字＞在[tsʰ-](tsʰai, tsʰɛ),[t-](to, ti),[tʰẹi]、响[hœŋ]、喺[hɐi]

＜主な語形＞VO 在、VO 到在、V 子在, VO 起在, V 响度, V 响处,V 喺度,V 喺处など

着系：　＜含まれる文字＞着[tʂ-](tʂə, tʂɻ, tʂɤ, tʂəɤ, tʂuə, tʂau, tʂɔ, tʂɻ, tʂɿ, tʂou, tʂu, tʂuo, tʂo,), [tʂʰ-](tʂʰɻ, tʂʰə), [ts-](tsɔ, tsə, tsɻ), [tsʰyo], [ʧ-](ʧau, ʧie), [t-](tøʔ, tə, tɛ, tɔ, tɤ, tɛə,), [lə], [tɕio], [tɕʰ-](tɕʰiɔ, tɕʰyoʔ), [d-](dɛ, də), [ʔdo], [zhou]

＜主な語形＞VO 着哩, VO 着呢, V 着など

住系：　＜含まれる文字＞住[tiu],[ts-](tsy, tsəɯ),[tɕye], [tsʰu], [ʧy]、了[N.D]、则[ts-](tsɛʔ, tsəʔ, tsEʔ)、之[tsi], [tʂɻ]

＜主な語形＞V 住, V 则, V 之など

到系：　＜含まれる文字＞到[t-](tao, tau, tɔ, tou, tɤ, tei, tə, taɔ,)、倒[t-](tɑo, tau, tɔ, tɑʌ, ta, tɔo, tie)、得[t-](tie, teɛɐ, tei, tə, tɐʔ)、的[t-](ti, tə, tɤ, tei, təi, tiʔ),[di]、哒[t-](ta, tɑo, tɒ)、地[ti]

＜主な語形＞VO 的, V 到 O, V 到, V 倒, V 的, V 地, VO 得など

辣系：　＜含まれる文字＞辣[lAʔ]、勒[l-](ləʔ, lAʔ, lɐʔ, lɛʔ)、来[liu]

＜主な語形＞V 辣, V 辣海, V 辣里, V 辣浪, V 辣拉, VO 辣海, VO 辣里, VO 辣浪, VO 勒海など

紧系：　＜含まれる文字＞紧[k-](kən, kɐn, kɐŋ, kieŋ)

＜主な語形＞V 紧 O など

是系：　＜含まれる文字＞是[N.D]、系[hæi]

＜主な語形＞V 是那, V 是那搭, V 了系など

起系：　＜含まれる文字＞起[tɕi], [tɕʰi], [ʃi], [kʰi], [ɕi], [hai]

＜主な語形＞V 起的, V 起 O, V 起在など

了系：　＜含まれる文字＞了[kei], [tei], [lə], [tɛi]

＜主な語形＞V 了, V 了 O, V 了系など

咧系：　＜含まれる文字＞咧[l-](le, leʔ, lae, lɛ)、哩[ni], [lɛ]、累[lə]、啰[lo]、嘞[le]

＜主な語形＞V 哩, V 咧, V 啰

その他：省略

後者の方言では、同一の言語形式が動作動詞と共起すれば進行を表し、状態動詞と共起すれば持続を表す。しかし、資料によっては一方の記述しかないために、同一の言語形式が進行と持続の双方を表しうるのか不明な場合もある。

また、進行と持続に関しては、どの語彙を用いるかと同様に、文中での位置が重要である。一つの言語形式を動作動詞の前に用いて進行をあらわし、状態動詞の後に用いて持続を表すという方言が複数存在する。(たとえば、粤方言における“响度,响处,喺度,喺处”や呉方言における“辣,辣海,辣里,辣浪,辣拉,辣海,辣里,辣浪,勒海”など)大雑把に言って南方では任意の言語形式を動詞の前に用いて進行、動詞の後に用いて持続を表し、北方では動詞の後に用いて進行と持続の双方を表すのではないかという仮説が立てられるが、この点に関してはまだより詳細なデータによる地図の完成を待たねばならない。

参考文献

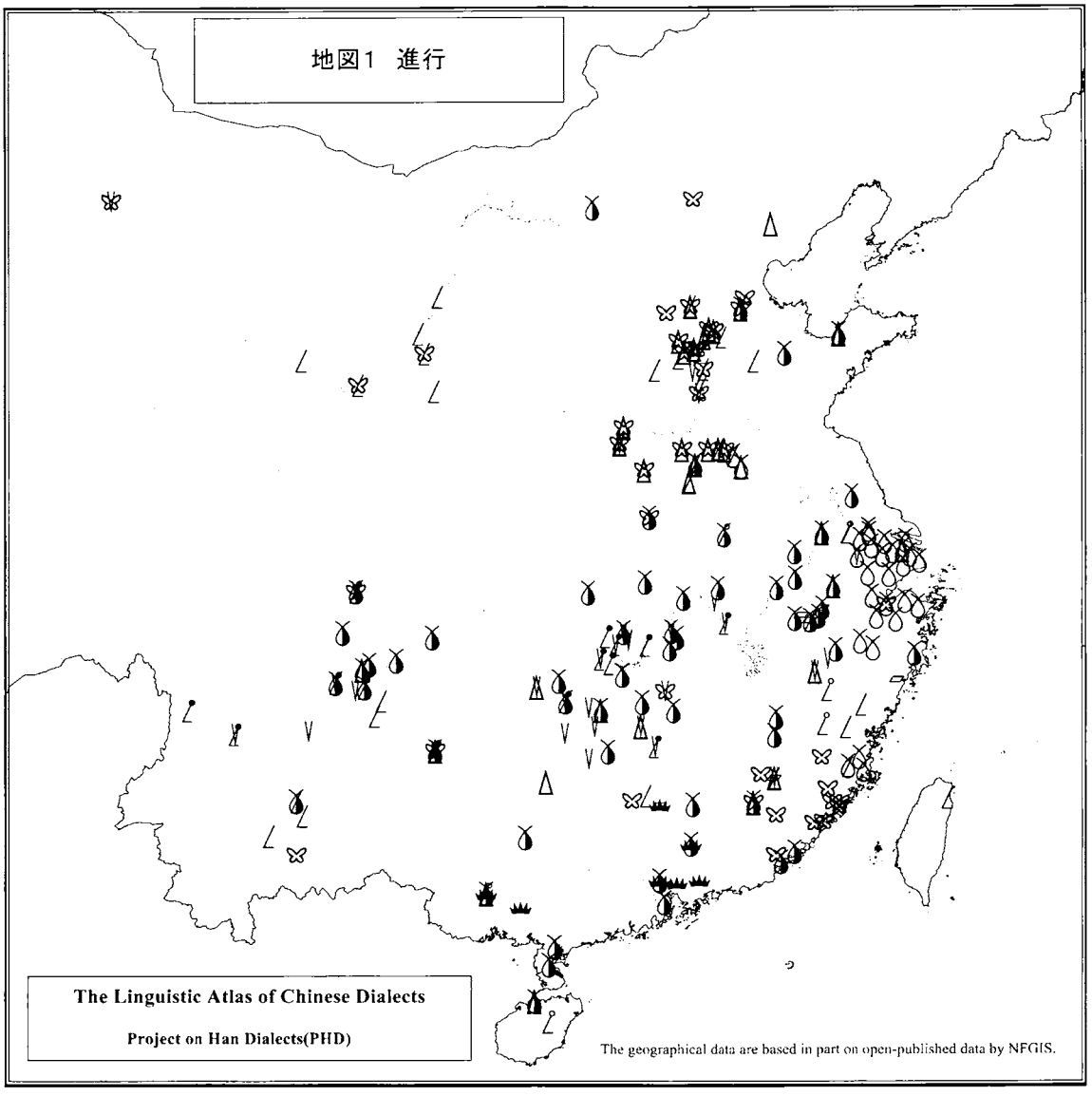
柯理思・太田斎 1992.「持続を表す動詞語尾」.《漢語諸方言の総合的研究(2):漢語方言地図(稿)》

後者の方言では、同一の言語形式が動作動詞と共起すれば進行を表し、状態動詞と共起すれば持続を表す。しかし、資料によっては一方の記述しかないために、同一の言語形式が進行と持続の双方を表しうるのか不明な場合もある。

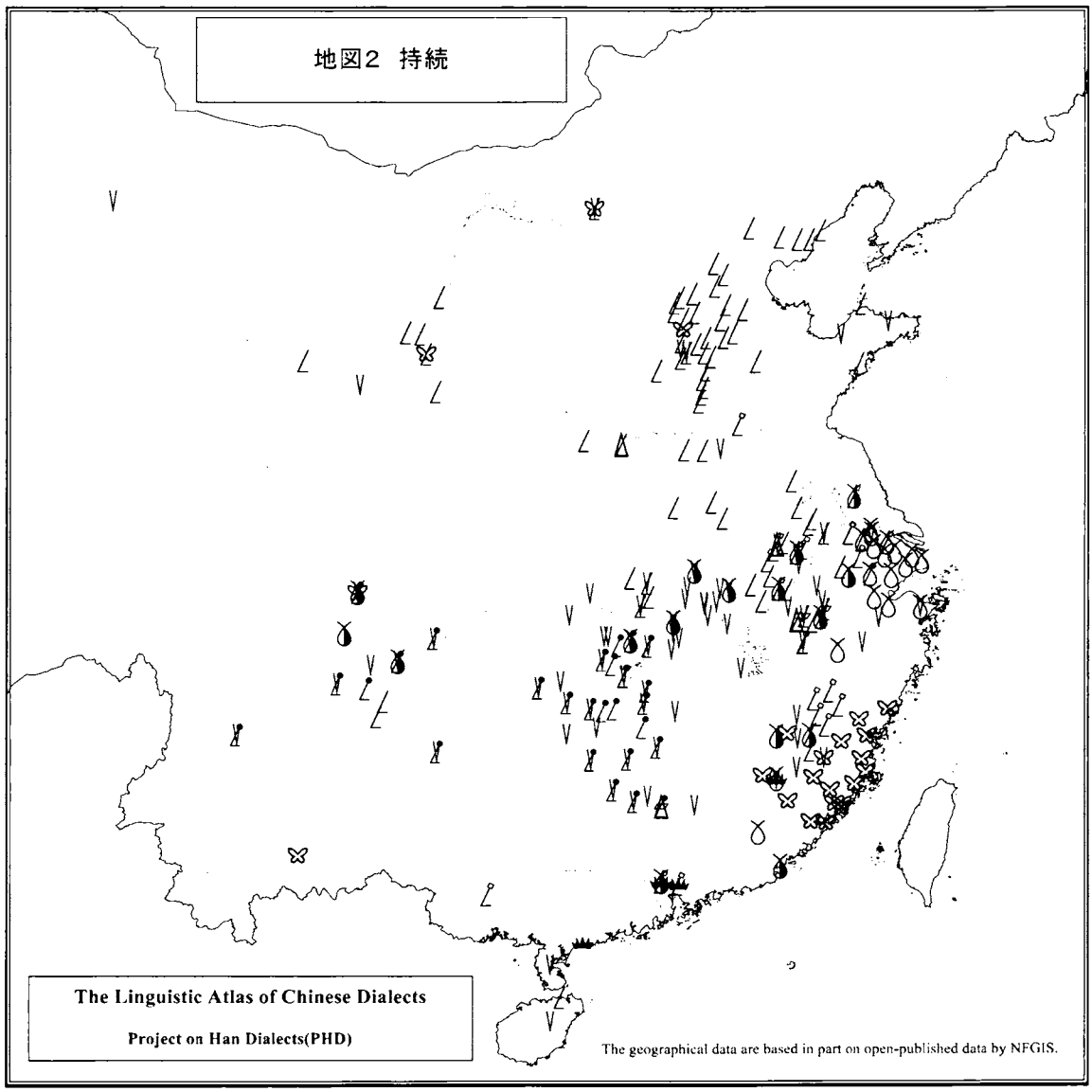
また、進行と持続に関しては、どの語彙を用いるかと同様に、文中での位置が重要である。一つの言語形式を動作動詞の前に用いて進行をあらわし、状態動詞の後に用いて持続を表すという方言が複数存在する。(たとえば、粤方言における"响度, 响处, 喺度, 喺处"や呉方言における"辣, 辣海, 辣里, 辣浪, 辣拉, 辣海, 辣里, 辣浪, 勒海"など)大雑把に言って南方では任意の言語形式を動詞の前に用いて進行、動詞の後に用いて持続を表し、北方では動詞の後に用いて進行と持続の双方を表すのではないかという仮説が立てられるが、この点に関してはまだより詳細なデータによる地図の完成を待たねばならない。

参考文献

柯理思・太田斎 1992.「持続を表す動詞語尾」.《漢語諸方言の総合的研究(2):漢語方言地図(稿)》



在系
着系
住系
到系
辣系
紧系
足系
起系
正系
咧系

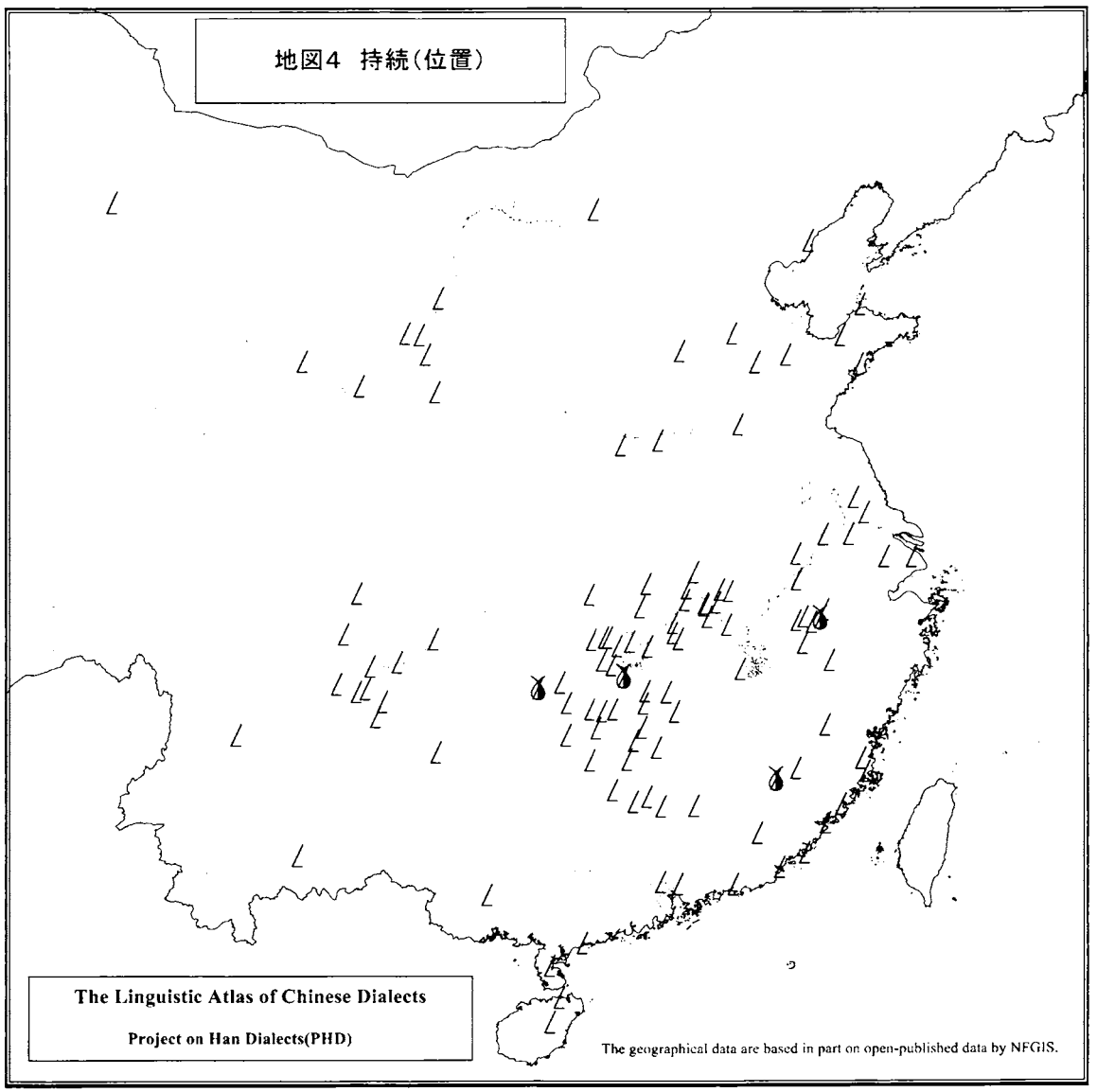


在系
着系
住系
到系
辣系
紧系
是系
起系
咧系
了系

地図3 進行(位置)
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

動詞の前

動詞の後


地図4 持続(位置)
The Linguistic Atlas of Chinese Dialects
Project on Han Dialects(PHD)
The geographical data are based in part on open-published data by NFGIS.

動詞の前

動詞の後

民俗項目の地域差*
－安徽・江蘇・浙江三省の婚礼・葬礼を例として－

山本恭子

1. 本稿作成にあたって

1.1. 調査対象地域

本稿では人生儀礼における婚礼・葬礼を例として、漢民族の民俗の「地域差」に焦点をあてて見ていく。対象地域は、安徽省・江蘇省・浙江省とした。この三省は言語の面から見てみると、華北から、華中、西南にかけて広く分布する「官話」地域とそれ以外を大きく南北に分ける言語境界線である「長江線」と、官話地域をさらに内部で分ける言語境界線である「淮河線」が 2 本とも通っている地域である。言語において大きな境界をもつこの地域における民俗はどのような差異、あるいは共通性を見せるのであろうか。それぞれの地点の状況を地図に表わし、そこから民俗項目に関する地域差について考えていきたい。

1.2. 地方志調査および地図化について

本稿では地点調査用文献として県志、市志、地区志、民俗志等の地方志を用いた（依拠資料については後頁の「地点調査用文献一覧」参照）。各々の資料において婚礼・葬礼についての記述には差があり、すべてに考察しようとする民俗項目についての情報が含まれているわけではない。また資料として用いた部分の年代は「建国前」、「解放前」、「旧時」等、曖昧な記述であり、それぞれの儀礼が行なわれた年代を正確に特定することはできない。しかし、ここでは対象地域における各地点の「地域性」に焦点をあて、その差異を見ることを目的とするため、年代の曖昧さ、社会的階級差、経済的格差による異なりは特に考慮せず、その地点において、ある民俗事象について記載されているという事実に着目した。

漢民族の民俗を地理的な分布状況と合わせて考えた研究として、平田昌司「カマド神を送る日（送竈）－行事の日付にみられる北方習俗の南漸－」,1995、蔡文高「明・清頃中国の洗骨改葬『中国地方志民俗資料彙編』を中心にその他の資料の分析から」,1997 が挙げられる。

いずれも一つの民俗項目に絞って全国を見ることにより、分布状況や、変化について述べられたものであるが、本稿では現在発行されている地方志を基礎資料とし、対象地域を絞ることにより、婚礼・葬礼において行われる民俗事象から、地域的な差異をもつ項目をできるだけ多く見出し、その分布状況から地域差について考えていきたい。

地図化にあたっては、『中華人民共和國分省地圖集』(1976,p.41-42,p.49-50,p.53-54)の三省の地図とその中の調査地点をトレースし、スキャナーでコンピューターに取り込んだ。各々の民俗地図については、「Jww cad Windows版Version 4.03g」を使用し、取り込んだ地図に調査地点のデ

---

* 本稿は愛知県立大学外国語学部に提出した卒業論文「漢民族の民俗境界線－安徽・江蘇・浙江三省の婚礼・葬礼を例として－」(2005 年 1 月)の一部である。

ータを表すマークを打点して作成した。[1]

1.3. 調査地域および調査地点

調査地域は安徽・江蘇・浙江三省、調査地点は下表に示した安徽省 49 地点、江蘇省 41 地点、浙江省 45 地点、計 135 地点である。表の番号は地点番号とし、調査地点地図(地図 1)と同一番号となっている。[2]

調査地点一覧

安徽省				江蘇省				浙江省			
1	安慶地區	26	旌德縣	1	常熟市	25	海州	1	安吉縣	26	平湖縣
2	安慶市	27	郎溪縣	2	常州市	26	南京市	2	白沙村	27	平陽縣
3	蚌埠市	28	利辛縣	3	大豐縣	27	南通縣	3	蒼南縣	28	浦江縣
4	長豐縣	29	臨泉縣	4	丹陽縣	28	啓東縣	4	常山縣	29	橋頭鎮
5	滁縣地區	30	靈璧縣	5	東海縣	29	沙洲縣	5	慈溪縣	30	青田縣
6	碭山縣	31	六安市	6	阜寧縣	30	泗陽縣	6	台洲地區	31	上虞縣
7	當涂地區	32	六安縣	7	贛榆縣	31	宿遷市	7	德清縣	32	嵊縣
8	肥西縣	33	蒙城縣	8	高郵縣	32	蘇州市	8	定海縣	33	肅山縣
9	阜南縣	34	寧國縣	9	高作鎮	33	太倉縣	9	洞頭縣	34	泰順縣
10	阜陽市	35	歙縣	10	灌雲縣	34	吳縣	10	東陽市	35	天台縣
11	固鎮縣	36	石台縣	11	海安縣	35	武進縣	11	奉化市	36	桐盧縣
12	廣德縣	37	舒城縣	12	海門縣	36	盱眙縣	12	富陽鎮	37	桐鄉縣
13	貴池縣	38	泗縣	13	邗江縣	37	鹽城縣	13	海鹽縣	38	温嶺縣
14	含山縣	39	宿縣地區	14	淮安市	38	揚中縣	14	湖州市	39	武義縣
15	合肥市	40	宿州市	15	江都縣	39	揚州市	15	嘉善縣	40	新昌縣
16	懷寧縣	41	太和縣	16	江寧縣	40	宜興縣	16	嘉興市	41	義烏縣
17	懷遠縣	42	天長縣	17	江陰市	41	張圩鄉	17	椒江市	42	鄞縣
18	徽州地區	43	桐城縣	18	金湖縣			18	金華市	43	余杭縣
19	霍邱縣	44	銅陵市	19	金壇縣			19	金華縣	44	雲和縣
20	霍山縣	45	銅陵縣	20	靖江縣			20	蘭溪市	45	舟山市
21	績溪縣	46	肅縣	21	句容縣			21	臨安縣		
22	嘉山縣	47	休寧縣	22	昆山縣			22	臨海縣		
23	界首縣	48	潁上縣	23	溧水縣			23	寧波市		
24	金寨縣	49	岳西縣	24	溧陽縣			24	寧海縣		
25	涇縣			25	連雲港市			25	磐安縣		

尚、文中の表記については、以下の 2 点を原則とした。

---

[1] 安徽省からの河道が途中で破線となっている部分は、『中國歷史地圖集 第七冊 元明期』(1982, p.47-48)によって確認した淮河の河道である。明代には洪澤湖に注ぎ込んだ淮河が江蘇省側に流れ出て廃黄河と合流し、黄海に注いでいたが、現在は運河建設によって変化し、河道として確認できないため破線とした。

[2] 江蘇省 25 は、海州の基礎資料とした『海州民俗志』が連雲港市とその周辺農村部を含む範囲の民俗について記載したものであり、ほぼ同地点であるため地点番号を 1 つにした。

①中国語表記の儀礼名・名称等については《 》でくくり、繁体字で表記し、説明を加える際は( )でくくる。地名、中国語文献書名も繁体字で表記する。
②各調査地点についての記述、および地点調査用文献の記述に基づく事項には地点番号を記す。各省の地点番号は(安＋地点番号)・(江＋地点番号)・(浙＋地点番号)と区別する。特に引用した部分以外はその他の注記をしない。

2. 民俗地図作成による試み

2.1. 婚礼民俗地図による試み

婚礼は男女が婚姻を結ぶための重要な社会的儀礼である。家庭を築き、家族を発展させていくことは宗族の発展に繋がっていく。新夫婦は婚礼儀礼を通して宗族や社会に婚姻の成立を認知され、宗族・社会の成員として受け入れられていく。

儀礼について詳細な規定をしているのが『儀礼』である。婚礼は『儀礼・士婚礼』に詳しく、さらに『儀礼』を再解釈したとされる『礼記』によると、婚礼は「納采」、「問名」、「納吉」、「納徴」、「請期」、「親迎」の「六礼」という六段階の儀礼を経ることによって行われる。「六礼」は各時代、各地域で行われ、伝えられていく中で、基本部分は残しつつ、時代と地域の違いに応じて変化していったと考えられる。

民俗地図作成にあたっては、地点調査用文献から婚礼の流れにそって《合婚》、《相親》、《定親》、《請期》、《送日子》、《過大禮》、《開面》、《嫁妝》、婚礼準備、《親迎》、女方への到着時、《上轎》時、女方からの出発時、男方への到着時、《拜堂》、《送入洞房》、《喜宴》、《鬧洞房》、《会親》、《回門》についてそれぞれの地点を見た上で、異なりが見られる以下の項目をとりあげ、各地点の状況を地図化した。

a) 《開面》を行う時期
b) 《迎娶》時、新郎の同行の有無
c) 男方到着後、新婦が轎から降りた後
d) 《回門》
e) 《回門》の回数と《滿月》後の《回門》

2.1.1. 《開面》を行う時期 (地図 2)

婚礼に際し、新婦が未婚の娘の装いから既婚者の装いへと変える儀式である《開面》が行われるが、男方からの迎えの轎が女方に到着して新婦がその轎に乗る前、婚礼のための身支度として行われる地点と、轎が男方に到着した後に行われる地点とに分かれる。また、男方で行う地点でも、婚礼の儀式である《拜堂》の前に行うという地点と、翌日以降の地点が見られる。新婦がどの時点から「既婚」の装いをし、「既婚女性」、「妻」という存在として見なされるのかが地点によって異なるということであろう。女方で行われる《開面》は女方の女性によって行なわれ、男方では男方の女性によって行われる。

地図には女方で行う地点を ○ 、男方到着後に行う地点を ● で示している。 * は新婦の《開面》について記載がない地点である。

(地図 2) 上の分布から、①安徽省では淮河以北に、江蘇省では長江以北の地域に男方に到着後に行われる地点が多く見られる。②これに対し、女方で行なわれる地点は、対象地域の中央部

と、安徽省の中でも河南省に近い地域、浙江省では沿岸部に分布していることが指摘できる。

2.1.2.《迎親》時、新郎の同行の有無（地図 3）

婚礼当日、または前日に男方は轎（花轎・大轎）を用意して新婦を迎えに赴く。その際、新郎自身が女方へ出向いて新婦を迎える《迎親》と、《媒人（仲人）》、《伴娘・喜娘（介添えの女性）》などが迎えに行き、新郎は家で新婦の到着を待つ《等親》の別がある。

新郎が自ら出向く《迎親》の始まりは配偶者を得るために男性が自ら女性の略奪に参加した「略奪婚」であるとされる。後に「迎娶婚」へ移行してからも途中の道には他からの略奪の危険があり、新郎が自ら迎えに行くことが必要であったと考えられている（『婚喪禮俗面面現』,p.38-39）。新郎が同行する《迎親》が行われる地点の方が古い形を残していると考えられるが、この変化については後に若干論じてみたい。

ここでは新郎の同行について地図に表わしてみる。同行する地点は ○ 、同行しない地点は ◆ で示す。新郎同行の有無が明確に記載されている地点以外については、前後の記述から判断した。たとえば浙江省泰順(浙 34)のように、前夜から花轎が女方に送られているにもかかわらず、女方での新郎についての記述がない地点は、新郎による迎えがないと判断した。このような同行なしと考えられる地点は ▲ で表示した。また、迎えの人について記述がない、あるいは記述からでは判断困難な地点については X で示している。＊ で示した「記載なし」は《迎親》についての記述がない地点である。

（地図 3）に見える分布の状況から、①新郎が同行する地点が多いのは江蘇省南部と浙江省である。②安徽省においては逆に同行しないという地点が多く見られるが、分布の区切りは判然としない。

2.1.3. 男方到着後、新婦が轎から降りた後（地図 4）

男方に到着し、新婦が轎を降りた後、そのまま《中堂（家の中心の部屋）》に入り、《拜堂》を行うという地点と、一旦、《新洞房（新郎新婦の部屋）》に入るという地点がある。後者の場合、部屋に入って短い休息を取った後に《拜堂》を行う地点もあるが、先に部屋での儀式を行う、あるいは翌日に《拜堂》を行う地点もある。

《拜堂》は天地、祖先、父母に向かって拝礼し、新郎新婦が夫婦となることを報告し、一族、社会に承認を得るための「公」の儀式であると考えられる。これに対し、《新洞房》では、《開面》や、新郎新婦が一緒にベッドに座る《坐富貴》、交杯酒を飲む《合巹》などの儀式が行われる。こちらは一組の男女が夫婦となる「私」の部分の儀式といえる。ここでは新婦が轎を降りた後、公私どちらの儀式が優先して行われるのかについて見ておくこととする。

轎を降りたあと、そのまま《拜堂》を行う地点を ＃ で、一旦部屋に入ってから（当日、或は翌日）《拜堂》を行う地点を ● で表示してある。＊ の地点には新婦が轎から降りた後の記述がない。

（地図 4）からは、轎を降りてから一旦部屋に入るという地域が、狭い範囲ではあるが、いくつか集中している様子がうかがえる。

2.1.4.《回門》（地図 5）

新婦の最初の里帰りである《回門》が行われるまでの日数は地点によって異なりが見られる。地点によっては複数回にわたって行われるところがあるが、ここでは「婚礼後、最初に帰る日」につい

て見ていくこととする。

2日目、或は当日に行われる地点を ＝ 、3日目を ●、4日目を ◆、5日目は △ 、6日目は ◎ とし、7 日目以降、1 か月までの間に行われる地点を □ で表示している。★ は《満月（1 か月）》を過ぎて初めて《回門》ができる地点である。＊ の地点には《回門》についての記述がない。

（地図 5）からは多くの地点で 3 日目《三朝》に行われていることがわかる。しかし、この地点は、特に集中しているわけではない。《三朝回門》という民国期以降、特に都市部に普及したとされる形(浙 37)が、広く分布しているのに対し、それ以外の日に行われるところは、古い形を残しているということではないか。この点については次の 2.1.5.と共に後に考えてみたい。

2.1.5. 《回門》の回数及び、《満月》後の《回門》（地図 6）

《回門》の時期について、王増永・李仲祥は、「民間の《回門》は当初は、婚礼の 1 か月後に行われていたが、その後、婚礼の簡略化に伴い、婚礼と《回門》の間隔はしだいに短くなっていった」（『婚喪禮俗面面現』,p.63）とする。地点調査用文献にも《満月》後に行われていた《回門》が、3 日目に行われるように変化したとの記述が見られる(安 3・浙 16,30)。ここから《満月》後に行われることにある種の意味があったと考え、《満月回門》を行う地点を示し、その分布状況を見ることにした。同様に簡略化を意味するものとして、《回門》の回数についての変化も起こっていると考え、それも地図に表示した。

《回門》を 1 回だけ行う地点は ○ 、複数回行う地点を ■ 、《満月》に行うという地点は★、《回門》について記載がない地点は ＊ で表示した。

（地図 6）には複数回の《回門》を行う地点と、《満月》に行う地点が一致するところがいくつか認められる。複数回の《回門》はこの地域の北部に多く分布し、浙江省では安吉(浙 1)の 1 地点にしか見られない。

2.2. 葬礼民俗地図による試み

次に葬礼について対象地域を見ていくこととする。

葬礼は、人が一生を終えた時、家族、親族、友人・知人らによって行なわれる儀礼である。具体的には、遺体を処置し、納棺し、棺を安置し、告別の式を執り行った後、墓地に埋葬するまでの一連の儀式を指す。

漢民族の葬礼は周代の『儀礼』、『礼記』に規定された儀礼から変化発展する中で、《停屍》、《招魂》、《吊喪》、《殯儀》、《送葬》という順序が形成されていった（『中國民俗学』,p.224-227）。さらにそれぞれの儀礼は、婚礼と同様、時代の変化に伴って、細かな手順などが形づくられていったと考えられる。

地点調査用文献からは、《送終》、死亡後の処置、服喪の服装、《報喪》、廟への知らせ、入棺、封棺、《開吊》、《點主》、出棺前の儀式、《路祭》、出棺、埋葬、邪気祓い、《復三》、《神主》、《做七》、忌明けについてデータを作成した。ここでは、対象地域内で異なりが見られる以下の項目を取り上げて地図化した。

a) 《壽衣》への着替え
b) 《買水》の有無
c) 出棺時、《老盆》を割る

d)《做七》

2.2.1.《壽衣》への着替え（地図 7）

《壽衣》は、死者のための衣服である。長寿を願い、60 歳以上になると自分自身、あるいは息子が《壽木(棺)》と共に、準備することもある。《壽衣》には上着、ズボン、靴、靴下、帽子を含み、上着、ズボンはそれぞれ肌着、中着、上着からなる。この《壽衣》への着替えは地点によって「臨終前」に行われるところと、「死亡後、納棺までの間」に行われるところに分かれる。

記号は ● を臨終前に着せるところとし、 ○ を死亡後に着せる地点とした。 * で示した地点には《壽衣》への着替えをさせる時期についての記述がない。

地図からは、江蘇省北部と安徽省北部では「臨終前」に着替えをさせ、浙江省では多くの地点で「死亡後」に着替えをさせていることがわかる。浙江省の 2 地点は、嘉興(浙 16)と寧波(浙 23)である。このうち寧波では「死後、《買水》、沐浴を行い、《壽衣》に着替えさせる」(浙 23)とあり、○を打点しているが、同時に「臨終前に着せるところもある」との記述もあり、●も打点している。嘉興の分布の理由は不明であるが、この地点を別にすると、臨終前に《壽衣》に着替えさせる地点は、長江以北とその流域に分布している。

2.2.2.《買水》の有無（地図 8）

《買水》は、死者の体を清める際、《孝子(死者の子)》が川や井戸に行き、硬貨を投げたり、紙銭を焼いたり、撒いたりすることによって川、或は井戸の神から清めの水を買うという儀礼である。これについてワトスンは、「南中国において井戸や小川の神から水を購入する儀式」(1994,p.26)としている。その分布についてナキャーンは「華北には出てこないが、福建省、浙江省においてその儀礼が見られる」(1994,p.67)とする。ここでは調査地域においてどのように分布しているのかを見てみたい。

地図では《買水》を行うとする地点を ● で表示した。 ○ は、臨終から納棺までの間に《買水》についての記述がない地点で、これらの地点では《買水》が行われていないと考えられる。* で示した地点には《買水》および、《壽衣》を着せることについての記述がない。

分布状況を見るとナキャーンが述べているように浙江省には《買水》を行う地点が見られるが、《買水》なしに遺体を清めた後、《壽衣》を着せるというところも少なくない。江蘇省では、臨終前に《壽衣》に着替えさせる地点が多く、《買水》を行うという地点でも、入棺前の儀式として行われるなど一様ではない。

その他《買水》を行う地点は、長江流域と浙江省を流れる銭塘江、富春江流域の南部に分布しているが、この 2 つの川に挟まれた地域には《買水》を行わずに《壽衣》を着せるという地点が見られる。

2.2.3. 出棺時、《老盆》を割る（地図 9）

遺体を《中堂》に安置したあと、枕もとには《老盆(紙銭を燃やすための灰盆、灰皿)》を置き、死者の後の世代の人たちが死者に捧げるために紙銭を焼く。この《老盆》は出棺の際、棺が大門に担ぎ出されたところで割られる。その行為は、単なる盆を割るということだけではなく、死者の財産継承権を象徴するものとされている地点があり(安 6,10・江 25)、葬礼の中でも大きな意味を持つ儀礼なのではないかと考えられる。

ところが、地方志を見ると《老盆》についての記述がまったくない地点が少なくない。「《老盆》を割る」については「閻魔王に水を浪費したと責められた時、死者が穴があいていたせいだと言い訳をするため」(安 41)という地点や、他地域ではあるが「死者が冥界で飲まされる《迷魂湯》[3]を飲まずにすむようにするため」(『北京風俗図譜 1』,p.96)とするところもある。

記号は ■ が《老盆》を割る地点、 □ は《老盆》を墓地へ持って行くという地点で、《老盆》について記載がない地点は ＊ で表示した。

《老盆》を割ることが財産継承権の象徴であるとすれば、それを示すことは家、宗族、社会において重要な意味を持つことであると考えられる。そのような儀式が行われている場合、記述が省略されるとは考えにくい。ところが前述のように、この儀礼が必ずしも財産継承権の象徴とはいえず、浙江省の地方志に一切記載がないことが、まったく行われていないためとは言い切れない。しかし、少なくとも記述のある地点においては重要な意味のある儀式であり、ない地点においては重要な意味を持つ儀式とはされていないと考えることはできるであろう。

《老盆》を割るという地点は安徽省、江蘇省の北部、特に淮河以北に集中している。江蘇省南部の一地点は蘇州(江 32)であるが、この地点では「出棺時に碗や甕を割る」とされ《老盆》という名称は見られない。

2.2.4.《做七》(地図 10)

喪家では死亡後、或は出棺後、或は《圓墳 (埋葬後 3 日めの墓参、墓祭) 》後、7 日ごとに供物を供えて祭を行う。この《做七》の間は最も重い服喪期間とされ、さまざまな禁忌がある。《做七》は《七七》まで行なうという地点の他、《一七》、《三七》、《五七》だけ行うという地点や、《三七》、《五七》までとする地点もある。また、7 日ごとの祭の中でも《一七》、《五七》、《七七》を《大七》として盛大に行うというところもある。

ここでは「七日」を数え始める時期については区別せず、「七日」を何回過ごせば重い服喪期間が終わると考えられているかということで分類した。

地図では ＃ を《七七(49 日)》まで行う地点、○ を《六七(42 日)》まで、■ を《五七(35 日)》まで、▽ を《三七(21 日)》まで行う地点とした。 ＊ は《七七》について記載がない地点と期間についての記述がない地点である。

地図を見ると、《七七》までとする地点は広く分布しているが、安徽省には《五七》までとする地点が多く見られる。江蘇省で《五七》となっているのは東海(江 5)と阜寧(江 6)の 2 地点である。また、《六七》までとする地点は江蘇省中部と浙江省の中部にそれぞれ集中している。

3. 民俗項目の地域差と変化

以上、安徽・江蘇・浙江三省の婚礼・葬礼について、民俗項目の地理的な分布を地図にして見てきた。次に作成した民俗地図から民俗の地域差と変化について考えてみたい。

3.1.民俗項目の地域差と地理的条件

民俗項目の地域差について、その分布状況と地理的な条件について見てみる。

---

[3] 《迷魂湯》死者が冥界で《王媽媽・孟母》に飲まされるという酒のようで酒でないもの。これを飲むと前世(過去)のことを忘れてしまうという。

地図には淮河、長江と浙江省を流れる銭塘江から富春江の河道を記入した。この淮河と長江という2本の川は地理的な境界であるだけではなく、そこに大きな言語境界線があることは既に知られたところである。

地図には川の流域に沿った分布を示すものや、川の両側で民俗が異なっているものが見られるが、これらは川が民俗の分布にひとつの役割を果たしていると考えられるのではないだろうか。

(地図 2)「《開面》を行う時期」は、長江流域の状況がはっきりしないが、この地図に見られるかぎり、《迎娶》の後、男方において行う地点は安徽省の淮河以北から江蘇省の長江にかけての範囲がひとつの分布地域と見なしてよいだろう。1 本の川そのものが境界線になっているのではないが、ひとつの境となっているといえるだろう。

また(地図 7)「《壽衣》への着替え」と(地図 8)「《買水》の有無」は、臨終前に寿衣を着せる地域と《買水》を行う地域がちょうど逆転した状態で南北に分布している。臨終前に《壽衣》を着せる地点ではほとんど《買水》が行われていない。臨終前に《壽衣》を着せ、なおかつ《買水》が行われているのは 2 地点である。そのうち江蘇省常州(江 2)では危篤時に《壽衣》に着替えをさせているが、《買水》は入棺前に顔を拭くために行われ、《壽衣》を着せる前の沐浴のためとは異なる。もう 1 地点の浙江省寧波(浙 23)の場合は、「臨終前に《壽衣》を着せるところもある」と記述されていることから、一般的には《買水》を行った上で《壽衣》を着せるということであろう。

わずかに例外の地点はあるが、臨終前に《壽衣》を着せるところでは《買水》の儀式が行われていないことから、この 2 つの項目によって分けられるところには、長江を境とするある種の民俗境界が存在すると考えたい。

また、(地図 9)「出棺時、《老盆》を割る」の分布の区切りには淮河の存在がポイントと思われる。淮河以南にも出棺時に《老盆》を割るという地点は見られるが、集中して分布しているのは淮河以北である。

地理的境界である河川と民俗の地域差との関係については、さらに多くの地点について細かな検証が必要である。しかし、いくつかの項目から、淮河、長江は南北に分布傾向が見られるものの境界となっている可能性を指摘しておきたい。

3.2. 民俗の変化

次に民俗の変化について地点調査用文献の記述と『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(上)』・『同(中)』(以下、本文中では『資料彙編 華東卷(上)』・『同(中)』とする)の記述から清代・民国期からの変化を見てみたい。

3.2.1. 「《迎娶》時、新郎の同行の有無」の変化

変化を表わす項目のひとつとして「《迎娶》時、新郎の同行の有無」について見てみる。前述のように、新婦を迎える際の方法は、新郎が同行する《迎娶》から同行しない《等親》へと変化をしたとされる。『資料彙編 華東卷(上)』・『同(中)』の各地方志の記述からはこの変化が、清代・民国期にすでに起こっていたことがうかがえる。以下、変化を示す記述を引用してみる。

a) 古婚禮以不親迎為譏,今則婿之親迎者絕少,唯姑自往迎之, 女家稍款以茶果。

昔の婚礼では《親迎》しなければ笑われたが、今では新郎が《親迎》する者はきわめて少なく、

姑が迎えに行き、女家では茶菓でもてなす。(原出典『江寧府志』清康熙 7 年)[4]

b) 親迎之禮,諸村鎮偶行之,士大夫家概不擧行。
《親迎》礼、村々ではたまに行われるが、士大夫家では概ね行われない。(原出典『直隸通州志』清乾隆 20 年)[5]

c) 惟昔年士大夫有作親迎者,今罕見。
昔は《親迎》する士大夫があったが、今はめったに見ない。(原出典『太和縣志』民国 14 年)[6]

d) 蓋古之六禮,先有納采,聞名,後有親迎,今三者皆廢。
古い六礼ではまず《納采》、《問名》があり、その後《親迎》があるが、今では皆廃れてしまった。(原出典『吳縣志』民国 22 年)[7]

e) 儀(議)婚必憑媒妁,納采,請期,奠雁悉如古禮,惟親迎未行。
婚儀は必ず媒妁を頼みとし、《納采》、《請期》、《奠雁》は古礼と同じに行われるが、《親迎》だけは行われない。(原出典『臨海縣志稿』民国 24 年)[8]

これらの資料から江蘇省江寧(江 16)では清康熙年間にはすでに《親迎》が行われることはきわめて少ない状況にあったことがわかる。(地図 3)では「おそらく新郎の同行なし」と分類したが、清代の状況からほぼ「同行なし」といえるであろう。また、浙江省肅山(浙 33)についても、民国 24 年には新郎の代理人が書状を持って迎えに行くとされ、新郎は「行くこともある」という状況にあった(『資料彙編 華東卷(中)』,p.642)。地点調査用文献には、新郎が轎の到着を迎えると記述されており(浙 33)、ここでも新郎が「同行する」から「同行しない」へと変化が進んでいる様子がうかがえる。

(地図 11)から清代・民国期に「新郎の同行あり」とする地点を見てみると、江蘇省の中南部から浙江省北部にかけて多く分布している。安徽省にも分布は見られるが、分布の集中した地域は見られない。

次に清代・民国期の記述と地点調査用文献の記述を比較してみる。浙江省北部においては、清代には新郎が行く(『資料彙編 華東卷(中)』,p.651)とされていた嘉興が「人を派遣するか、新郎が迎えに行く」(浙 16)と変化している。また、民国 21 年には「迎えに行く新郎もあれば、行かない者もあり、近親者が迎えに行くこともある」(『資料彙編 華東卷(中)』,p.740)とされた徳清が、「仲人や親族による迎え」(浙 7)となっている。安徽省霍邱では、清代において「士大夫の家では行う者もある」(『資料彙編 華東卷(中)』,p.978)とあり、新郎の同行は一般的ではないとしているが、地点調査用文献では仲人が迎えの役を果たし、新郎は家で待つとされている(安 19)。

このように清代・民国期の地方志の記述、各地点の変化から《迎娶》時の新郎については「同行する」から「同行しない」へとの変化が指摘でき、(地図 3)においては「新郎が同行する」という地点

[4] 『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(上)』,p.347.
[5] 『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(上)』,p.515.
[6] 『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(中)』,p.990.
[7] 『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(上)』,p.375.
[8] 『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(中)』,p.846.

に古い形が残っていると考えることができる。新郎が同行するという地点が多いのは江蘇省中南部から安徽省西北部にかけての地域である。

3.2.2.《回門》の変化

次に民俗の歴史的な変化について婚礼における《回門》について考えてみたい。

《回門》は、《三朝回門》といい、婚礼 3 日目に行われる地点が多い。しかし、各地方志において、以下に引用したように《回門》が行われる日について変化があったことを示す記述が見られる。

a)新婚男女滿月後,雙雙回娘家探視父母親長,叫做"回門",古代叫"歸寧"。(中略)此俗仍很流行,唯有回門的時間改在"三朝"進行。
新婚の男女は《満月》後、2 人で新婦の実家へ父母親族に会いに行く。これを《回門》といい、古代には《歸寧》といわれた。(中略)この習俗は今も多く行われているが、《回門》を行う時期は《三朝》に変わっていっている。(『安慶地区志』)[9]

b)市區形成後,新娘滿月回娘家"住對月"習俗日漸廢除。城里新娘多在三日回門,也有三天或六天由娘家來人探望新人,九天或十二天接回新娘到娘家。
市区が形成されてから、新婦が 1 か月で実家へ帰る《住對月》の習俗はしだいに廃れていった。都市部の新婦の多くは 3 日に里帰りをしたり、3 日、あるいは 6 日に実家の人が新夫婦に会いに来て、9 日あるいは 12 日に新婦は実家へ帰る。(『蚌埠市志』)[10]

c)回門　結婚後第九天或一月内,男女青年攜帶禮物同去女方家,女方父母受禮戶一一設宴招待新婿。今多結婚第三天回門。
《回門》 結婚後 9 日或は 1 か月内に新郎新婦は贈り物を携えて女方へ行く。女方の父母は贈り物を受け取り、宴を催して婿を招待する。今では結婚 3 日目に里帰りをする。(『金寨縣志』)[11]

d)"回門" 清代稱"對月"。即婚後一月夫妻雙雙回娘家,探望老人。(中略)民國時期通行三朝日回門。
《回門》清代には《對月》といった。婚後 1 か月、夫妻は一緒に新婦の実家へ帰り、年長者を訪ねる。(中略)民国時期には 3 日めの里帰りが一般的になった。(『桐鄉縣志』)[12]

(地図 6)では《満月》、すなわち 1 か月という期間を経た後に《回門》が行われることに着目し、地図化を試みた。ここでもその変化を確認するため『資料彙編 華東卷(上)』・『同(中)』から清代・民国期における《回門》が行われる日を見ておきたい(地図 12)。

調査地点中、『資料彙編 華東卷(上)』・『同(中)』に《回門》についての記載がある 27 地点のうち、《満月》、《彌月(月を越える)》に行うところが 20 地点見られる。その他に 2 日目、3 日目、翌年正月に帰るという地点があるが、圧倒的に《満月》、《彌月》に行われることが多い。地点調査用文献で

---

[9] 安慶市地方志編纂委員会 1991.『安慶地区志』,黄山書社, p.1156.
[10] 蚌埠市地方志編纂委員会 1995.『蚌埠市志』,方志出版, p.1178.
[11] 安徽省金寨縣地方志編纂委員会 1992.『金寨縣志』,上海人民出版社,p.693.
[12] 桐鄉市『桐鄉縣志』編纂委員会 1996.『桐鄉縣志』,上海書店出版社,p.1277.

は 2 日目から 6 日目の間に行われる地点が多く、《回門》を行う日が変化していることがわかる。

清代・民国期に比べ婚礼から短期間の間に《回門》を行うという変化が確認できる地点は 11 地点である。また、複数回が 1 回になったという地点が 2 地点見られる。

《回門》という名称についても変化を見ることができる。『清俗紀聞 2』では《回門》は「むこいり」とされ、新郎が女方に挨拶に行くもので、「嫁の里帰り」(古代の《歸寧》)とは別のものとしている(p.99)。しかし、烏丙安(『中國民俗学』,p.220)や、地方志の記述において《回門》と《歸寧》は同一の儀礼として用いられている(安 7・江 1,15,27・浙 35)。

清代、新郎が女方に挨拶に行く《回門》と新婦が里帰りをする《歸寧》が異なる意味を持つものであったとすれば、2 つを同様に用いる地点、あるいは婚礼から比較的短期間に 1 度里帰りを行い、以後の記述がない地点では、数度にわたる新婦の実家への挨拶、里帰りが簡略化されていったと考えることもできるだろう。

多くの地方志において婚礼についての記述は《回門》と《会親(両家の親族による宴)》で終了している。これは婚礼が《回門》、《会親》で完了すると考えられているためであろう。《滿月回門》から《三朝回門》への変化は、儀礼が簡略化されていく中、婚礼の終了、完了時期を早めるという意味を指摘しておきたい。

ここまで《回門》についてその変化を追ってきた。ここから(地図 5)および、(地図 6)に見られる《滿月回門》を行う地点、また、複数回の《回門》が行われる地点は古い民俗を残している地点だといえそうだ。安徽省、江蘇省北部については清代・民国期の記載が少ないが(地図 6)から確認できるように、複数回の《回門》と《滿月》の後に《回門》を行う地点が多く分布しており、古い民俗を残している地域といえる。

3.3. おわりに

以上、婚礼・葬礼の儀礼項目から民俗地図を作成し、それをもとに安徽・江蘇・浙江三省における民俗の地域差、および変化について考えてきた。

本稿で作成した三省の民俗地図からは、いくつかの民俗項目についてその分布状況から地域差を見いだすことができた。

民俗の変化についても「《迎娶》時、新郎の同行の有無」や、「《回門》」について見たようにさらに多くの項目について検討することにより、古い民俗を残す地域やそれぞれの地点における変化を明らかにしていくことができるだろう。

儀礼の「型」については、古来から拠り所、手本とされてきた『儀礼』、『礼記』があり、さらに朱熹の『家礼』やその他各地で用いられてきた手引書などによって守り伝えられてきたと考えられる。しかし、伝播の中で変化は起こっている。民俗の伝播は書物など文字で書かれたものだけに拠るのではない。地方志には《掌禮》、《伴娘》、《禮生》など、ナキャーンが「儀礼の専門家」(1994,p.68)とする婚礼や葬礼の現場に立会い、儀式の指揮をとる職業的、半職業的な人の存在が記されている。彼らは非日常的な儀礼である婚礼や葬礼に際し、方法、作法を教え、伝える役割も果たしていたであろう。書かれたものだけに拠るのではなく、伝える人が一般の人々との間に存在する場合、民俗の変化は彼らの影響が及ぶ範囲、移動できる範囲で起こっていく。その行動範囲がどのようなものであったのかは現在のところ不明であるが、急な事態に対応することができる存在であると考えるなら、村単位、或は幾つかの村を合わせた程度で、それほど広い範囲ではないだろう。民俗の変化についてはこの点についても合わせて考えていきたいと思う。

以上、民俗地図を作成し、それをもとに民俗の地域差、および変化について考えてきた。今後は地図化した項目や新たな項目についてさらに検討し、対象地域を拡大して地図化を詳細に試みることにより、民俗の地域差とその変化を探っていきたい。

地点調査用文献一覧*

地点番号 / 調査地点		文献名	著者・編者	出版社	出版年	参照ページ
安徽省						
1	安慶地區	安慶地區志	安慶地區志編纂委員会	黄山書社	1991	p.1154-1160
2	安慶市	安慶市志	安慶市地方志編纂委員会	方志出版社	1997	p.1693-1698
3	蚌埠市	蚌埠市志	蚌埠市地方志編纂委員会	方志出版社	1995	p.1177-1183
4	長豐縣	長豐縣志	安徽省長豐縣地方志編纂委員会	中国文史出版社	1991	p.643-644
5	滁縣地區	滁縣地區志	滁縣市地方志編纂委員会	方志出版社	1998	p.1215-1219
6	碭山縣	碭山縣志	碭山縣地方志編纂委員会	方志出版社	1996	p.461-463
7	當涂地區	當涂地區志	當涂縣志編纂委員会	中華書局	1996	p.597-600
8	肥西縣	肥西縣志	肥西縣地方志編纂委員会	黄山書社	1994	p.589-593
9	阜南縣	阜南縣志	阜南縣地方志編纂委員会	黄山書社	1997	p.512-515
10	阜陽市	阜陽市志	阜陽市地方志編纂委員会	黄山書社	1993	p.426-429
11	固鎮縣	固鎮縣志	安徽省固鎮縣地方志編纂委員	中国城市出版社	1992	p.388-390
12	廣德縣	廣德縣志	廣德縣地方志編纂委員会	方志出版社	1996	p.568-571
13	貴池縣	貴池縣志	貴池市地方志編纂委員会	黄山書社	1994	p.855-856
14	含山縣	含山縣志	含山縣地方志編纂委員会	黄山書社	1995	p.585-586
15	合肥市	合肥市志	合肥市地方志編纂委員会	安徽人民出版社	1999	p.3269-3274
16	懷寧縣	懷寧縣志	懷寧縣地方志編纂委員会	黄山書社	1996	p.831-833
17	懷遠縣	懷遠縣志	懷遠縣地方志編纂委員会	上海社会科学院出版	1990	p.558-560
18	徽州地區	徽州地區簡志	安徽省徽州地區地方志編纂委員会	黄山書社	1989	p.484
19	霍邱縣	霍邱縣志	霍邱縣地方志編纂委員会	中国廣播電視出版	1992	p.789-793
20	霍山縣	霍山縣志	霍山縣地方志編纂委員会	黄山書社	1993	p.789-790
21	績溪縣	績溪縣志	績溪縣地方志編纂委員会	黄山書社	1998	p.1044-1048
22	嘉山縣	嘉山縣志	嘉山縣地方志編纂委員会	黄山書社	1993	p.594-595
23	界首縣	界首縣志	界首縣地方志編纂委員会	黄山書社	1995	p.479-481
24	金寨縣	金寨縣志	安徽省金寨縣地方志編纂委員会	上海人民出版社	1992	p.692-694
25	涇縣	涇縣志	涇縣地方志編纂委員会	方志出版社	1996	p.845-848
26	旌德縣	旌德縣志	旌德縣地方志編纂委員会辦公室	黄山書社	1992	p.535-537
27	郎溪縣	郎溪縣志	郎溪縣地方志編纂委員会	方志出版社	1998	p.998-1001
28	利辛縣	利辛縣志	利辛縣地方志編纂委員会	黄山書社	1995	p.449-451
29	臨泉縣	臨泉縣志	臨泉縣地方志編纂委員会	黄山書社	1994	p.445-447
30	靈璧縣	靈璧縣志	靈璧縣地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1991	p.813-816
31	六安市	六安市志	六安市地方志編纂委員会	江西人民出版社	1992	p.485-486
32	六安縣	六安縣志	六安縣地方志編纂委員会	黄山書社	1993	p.674-676

* 「地点調査用文献一覧」作成にあたっては、太田斎(研究代表者) 2002.『歴史文献データと野外データの綜合を目指した漢語方言史研究 (1)新編中国地方志所録方言志目録 附:方言専志目録』平成 13-15 年度科学研究費基盤研究(B),研究成果報告書 を参考にした。

33	蒙城縣	蒙城縣志	蒙城縣地方志編纂委員会	黄山書社	1994	p.465-466
34	寧國縣	寧國縣志	寧國縣地方志編纂委員会	生活·讀書·新知三聯書店	1997	p.753-755
35	歙縣	歙縣志	歙縣地方志編纂委員会	中華書局	1995	p.631-634
36	石台縣	石台縣志	安徽省石台縣地方志編纂委員会	黄山書社	1991	p.555-557
37	舒城縣	舒城縣志	舒城縣地方志編纂委員会	黄山書社	1995	p.561-563
38	泗縣	泗縣志	泗縣地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.694-695
39	宿縣地區	宿縣地區志	安徽省宿縣地區地方志編纂委員会	中国人民大学出版	1995	p.532-534
40	宿州市	宿州市志	宿州市地方志編纂委員会	上海古籍出版社	1991	p.525-526
41	太和縣	太和縣志	太和縣地方志編纂委員会	黄山書社	1993	p.357-362
42	天長縣	天長縣志	天長縣地方志編纂委員会	社会科学文献出版	1992	p.531-533
43	桐城縣	桐城縣志	桐城縣地方志編纂委員会	黄山書社	1995	p.753-755
44	銅陵市	銅陵市志	銅陵市地方志編纂委員会	黄山書社	1994	p.1055-1058
45	銅陵縣	銅陵縣志	安徽省銅陵縣地方志編纂委員会	黄山書社	1993	p.578-579
46	肅縣	肅縣志	肅縣地方志編纂委員会	中国人民大学出版	1989	p.543-545
47	休寧縣	休寧縣志	休寧縣地方志編纂委員会	安徽教育出版社	1990	p.585-589
48	潁上縣	潁上縣志	潁上縣地方志編纂委員会	黄山書社	1995	p.435-437
49	岳西縣	岳西縣志	岳西县地方志編纂委員会	黄山書社	1996	p.474-475
江蘇省						
1	常熟市	常熟市志	常熟市地方志編纂委員会	上海人民出版社	1990	p.1047-1049
2	常州市	常州市志	常州市地方志編纂委員会	中国社会科学出版	1995	p.791-792
3	大豐縣	大豐縣志	大豐縣編修縣志委員会	江蘇人民出版社	1989	p.709-710
4	丹陽縣	丹陽縣志	丹陽市地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1992	p.865-867
5	東海縣	東海縣志	東海縣地方志編纂委員会	中華書局	1994	p.783-790
6	阜寧縣	阜寧縣志	阜寧縣地方志編纂委員会	江蘇科学技術出版	1992	p.432-433
7	贛榆縣	贛榆縣志	贛榆縣縣志編纂委員会	中華書局	1997	p.951-954
8	高郵縣	高郵縣志	高郵縣志编史修志領導小組	江蘇人民出版社	1990	p.696-699
9	高作鎮	高作鎮志	睢寧縣高作鎮志編纂委員会	新華出版社	1997	p.261-263
10	灌雲縣	灌雲縣志	江蘇省灌雲縣地方志編纂委員会	方志出版社	1999	p.896-901
11	海安縣	海安縣志	海安縣志編纂委員会	上海社会科学院出版	1997	p.921-925
12	海門縣	海門縣志	海門市地方志編纂委員会	江蘇科学技術出版	1996	p.853-857
13	邗江縣	邗江縣志	邗江縣地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1995	p.761-763
14	淮安市	淮安市志	淮安市地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1998	p.811-819
15	江都縣	江都縣志	江都市地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1996	p.943-944
16	江寧縣	江寧縣志	江寧縣地方志編纂委員会	檔案出版社	1989	p.832-834
17	江陰市	江陰市志	江陰市地方志編纂委員会	上海人民出版社	1992	p.1166-1168
18	金湖縣	金湖縣志	金湖縣縣志編纂委員会	江蘇人民出版社	1994	p.713-716
19	金壇縣	金壇縣志	金壇縣地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1993	p.728-729
20	靖江縣	靖江縣志	靖江縣志編纂辦公室	江蘇人民出版社	1992	p.772-773
21	句容縣	句容縣志	句容縣地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1994	p.828-829
22	昆山縣	昆山縣志	昆山市地方志編纂委員会	上海人民出版社	1990	p.798-801
23	溧水縣	溧水縣志	溧水縣編修縣志委员会	江蘇人民出版社	1990	p.612-613
24	溧陽縣	溧陽縣志	『溧陽縣志』編纂委員会	江蘇人民出版社	1992	p.863-864
25	連雲港市	連雲港市志	江蘇省連雲港市地方志編纂委員会	方志出版社	2000	p.2572-2574
25	海州	海州民俗志	劉兆元編	江蘇文藝出版社	1991	p.24-64, p.75-101
26	南京市	南京民俗志	南京市地方志辦公室	方志出版社	2003	p.131-141, p.153-158
27	南通縣	南通縣志	通州市地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1996	p.1143-1145

28	啓東縣	啓東縣志	啓東縣志編纂委員会	中華書局	1993	p.1017-1022
29	沙洲縣	沙洲縣志	張家港市地方志編纂委員会辦公室	江蘇人民出版社	1992	p.837-838
30	泗陽縣	泗陽縣志	泗陽縣地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1995	p.753-755
31	宿遷市	宿遷市志	宿遷市地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1994	p.886-888
32	蘇州市	蘇州市志	蘇州市地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1995	p.1162-1168
33	太倉縣	太倉縣志	太倉縣縣志編纂委員会	江蘇人民出版社	1991	p.826-830
34	灾縣	灾縣志	灾縣地方志編纂委員会	上海古籍出版社	1994	p.1089-1090
35	武進縣	武進縣志	武進縣縣志編纂委員会	上海人民出版社	1988	p.824-825
36	盱眙縣	盱眙縣志	盱眙縣縣志編纂委員会	江蘇科学技術出版	1993	p.789-790
37	鹽城縣	鹽城縣志	鹽城市郊区地方志編纂委員会	江蘇人民出版社	1993	p.2663-2668
38	揚中縣	揚中縣志	揚中縣地方志編纂委員会	文物出版社	1991	p.604-606
39	揚州市	揚州市志	江蘇省揚州市地方志編纂委員会	中国大百科全書出版社上海分社	1997	p.3138-3143
40	宜興縣	宜興縣志	江蘇省宜興市地方志編纂委員会	上海人民出版社	1990	p.774-780
41	張圩鄉	張圩鄉志	張圩鄉編纂委員会	新華出版社	1997	p.180-183
浙江省						
1	安吉縣	安吉縣志	安吉縣地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1994	p.546-547
2	白沙村	白沙村志	浙江江山定村鄉「白沙村志」編纂組	学林出版社	1991	p.120-124
3	蒼南縣	蒼南縣志	蒼南縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1997	p.711-714
4	常山縣	常山縣志	常山縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.586-588
5	慈渓縣	慈渓縣志	慈渓市地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.962-963
6	台洲地區	台洲地區志	台州地區地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1995	p.1056-1057
7	德清縣	德清縣志	『德清縣志』編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.599-600
8	定海縣	定海縣志	定海縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1994	p.787-789
9	洞頭縣	洞頭縣志	洞頭縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1993	p.119-122
10	東陽市	東陽市志	東陽市地方志編纂委員会	漢语大詞典出版社	1993	p.162-164
11	奉化市	奉化市志	奉化市編纂委員会	中華書局	1994	p.814-817
12	富陽鎮	富陽鎮志	富陽縣地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1993	p.415-418
13	海鹽縣	海鹽縣志	海鹽縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.864-870
14	湖州市	湖州市志	湖州市地方志編纂委員会	昆侖出版社	1999	p.373-376
15	嘉善縣	嘉善縣志	嘉善縣志編纂委員会	生活・讀書・新知 三聯書店上海分店	1995	p.981-982
16	嘉興市	嘉興市志	嘉興市志編纂委員会	中国書藉出版社	1997	p.1932-1937
17	椒江市	椒江市志	椒江市志編纂委員会	浙江人民出版社	1998	p.832-834
18	金華市	金華市志	金華市地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.1084
19	金華縣	金華縣志	金華縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.698
20	蘭溪市	蘭溪市志	蘭溪市志編纂委員会	浙江人民出版社	1988	p.680-682
21	臨安縣	臨安縣志	臨安縣志編纂委員会	漢语大詞典出版社	1992	p.763-765
22	臨海縣	臨海縣志	臨海縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1989	p.639-640
23	寧波市	寧波市志	寧波市地方志編纂委員会	中華書局	1995	p.2826-2836
24	寧海縣	寧海縣志	寧海縣地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1993	p.825-827
25	磐安縣	磐安縣志	磐安縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1993	p.521-522
26	平湖縣	平湖縣志	浙江省平湖縣縣志編纂委員会	上海人民出版社	1993	p.915-916
27	平陽縣	平陽縣志	平陽縣志編纂委員会	漢语大詞典出版社	1993	p.775-782
28	浦江縣	浦江縣志	浦江縣县志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.608-609
29	橋頭鎮	橋頭鎮志	永嘉縣橋頭鎮志編纂委員会領導小組	海洋出版社	1989	p.265-268
30	青田縣	青田縣志	青田縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.668-671
31	上虞縣	上虞縣志	上虞縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.735-737

32	嵊縣	嵊縣志	嵊縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1989	p.529-532
33	肅山縣	肅山縣志	肅山縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1987	p.974-976
34	泰順縣	泰順縣志	『泰順縣志』編纂委員会	浙江人民出版社	1998	p.722-725
35	天台縣	天台縣志	浙江省天台縣志編纂委員会	漢语大詞典出版社	1995	p.654-656
36	桐盧縣	桐盧縣志	桐盧縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1991	p.757-760
37	桐鄉縣	桐鄉縣志	桐鄉市『桐鄉縣志』編纂委員会	上海書店出版社	1996	p.1276-1280
38	温嶺縣	温嶺縣志	温嶺縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.822-824
39	武義縣	武義縣志	武義縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.665-668
40	新昌縣	新昌縣志	新昌縣志編纂委員会	上海書店出版社	1994	p.606-607
41	義烏縣	義烏縣志	義烏縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1987	p.582-584
42	鄞縣	鄞縣志	浙江省鄞縣地方志編纂委員会	中華書局	1996	p.1951-1957
43	余杭縣	余杭縣志	余杭縣志編纂委員会	浙江人民出版社	1990	p.788-791
44	雲和縣	雲和縣志	雲和縣地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1996	p.569-573
45	舟山市	舟山市志	舟山市地方志編纂委員会	浙江人民出版社	1992	p.753-757

参考文献

蔡文高 1997. 明・清頃中国の洗骨改葬『中国地方志民俗資料彙編』を中心にその他の資料の分析から. 成城大学文藝学部『成城文藝』1997.10, p.50-94.

平田昌司 1995. カマド神を送る日(送竈)-行事の日付にみられる北方習俗の南漸- 平田昌司(研究代表者)『中国の方言と地域文化(2) 漢語方言地図集』平成 5-7 年度科学研究費総合研究(A),研究成果報告書.

岩田礼 1995. 漢語方言に於ける地域差と分布の型 -方言分布の静態と動態- 前掲『中国の方言と地域文化(2) 漢語方言地図集』

スーザン・ナキャーン 1994. 華北の葬礼 -画一性と多様性-.『中国の死の儀礼』(ジェイムズ・L・ワトソン,エヴリン・S・ロウスキ編 西脇常記・神田一世・長尾佳代子訳),平凡社,p.51-85.

ジェイムズ・L・ワトソン 1994. 中国の葬儀の構造 -基本の型・儀式の手順・実施の優位-.前掲『中国の死の儀礼』, p.17-32.

丁世良・趙放 1992.『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(上)』,書目文献出版社.

丁世良・趙放 1992.『中國地方志民俗資料彙編 華東卷(中)』,書目文献出版社.

中川忠英 孫伯醇・村松一弥編 1966.『清俗紀聞 2 東洋文庫 70』,平凡社.

太田斎(研究代表者)2002.『歴史文献データと野外データの綜合を目指した漢語方言史研究(1)新編中国地方志所録方言志目録 附:方言専志目録』平成 13-15 年度科学研究費基盤研究(B),研究成果報告書.

内田道夫編 1964.『北京風俗図譜 1 東洋文庫 23』,平凡社.

王增永・李仲祥 2001.『婚喪禮俗面面現』, 齊魯書社出版.

烏丙安 1999.『中國民俗学 2 版』,遼寧大学出版社.

地圖出版社編 1976.『中華人民共和國分省地圖集』,地圖出版社.

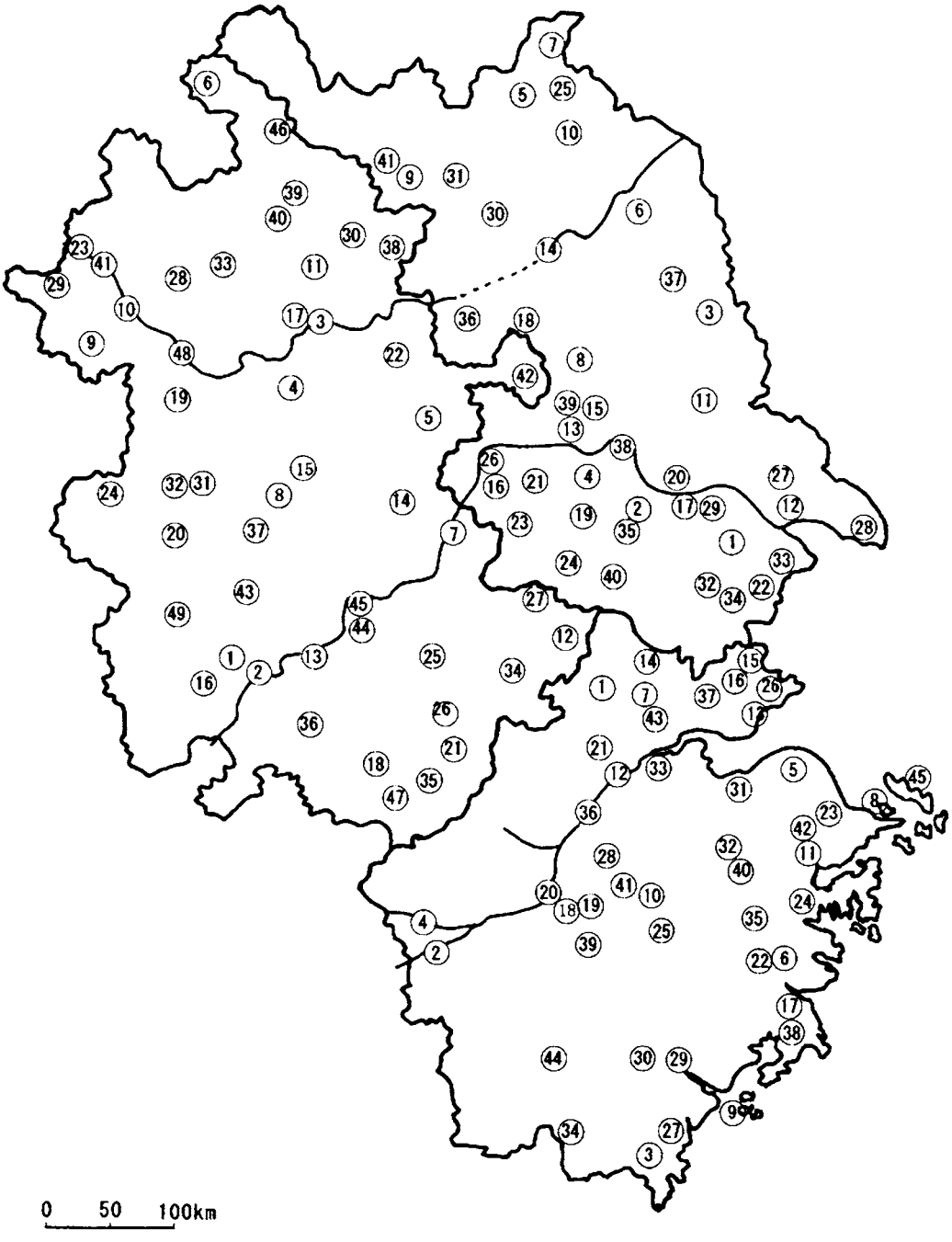
地圖出版社編 1990.『中華人民共和國分省地圖集第 4 版』,地圖出版社.

譚其驤主編 1982.『中國歷史地圖集 第七冊 元明時期』,地圖出版社出版.

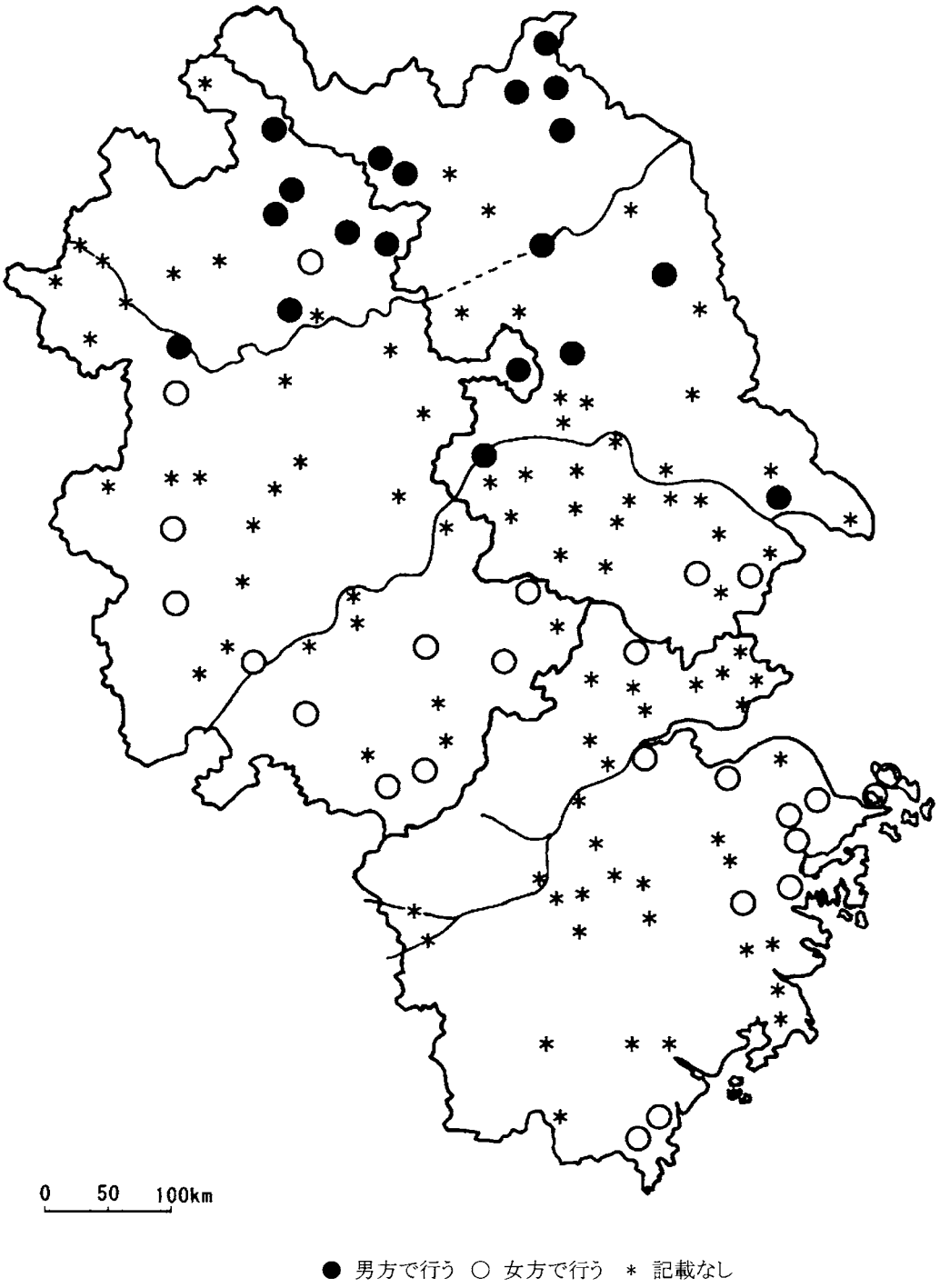
譚其驤主編 1987.『中國歷史地圖集 第八冊 清時期』,地圖出版社出版.

叶大兵・烏丙安 1990.『中國風俗辞典』,上海辞書出版社.

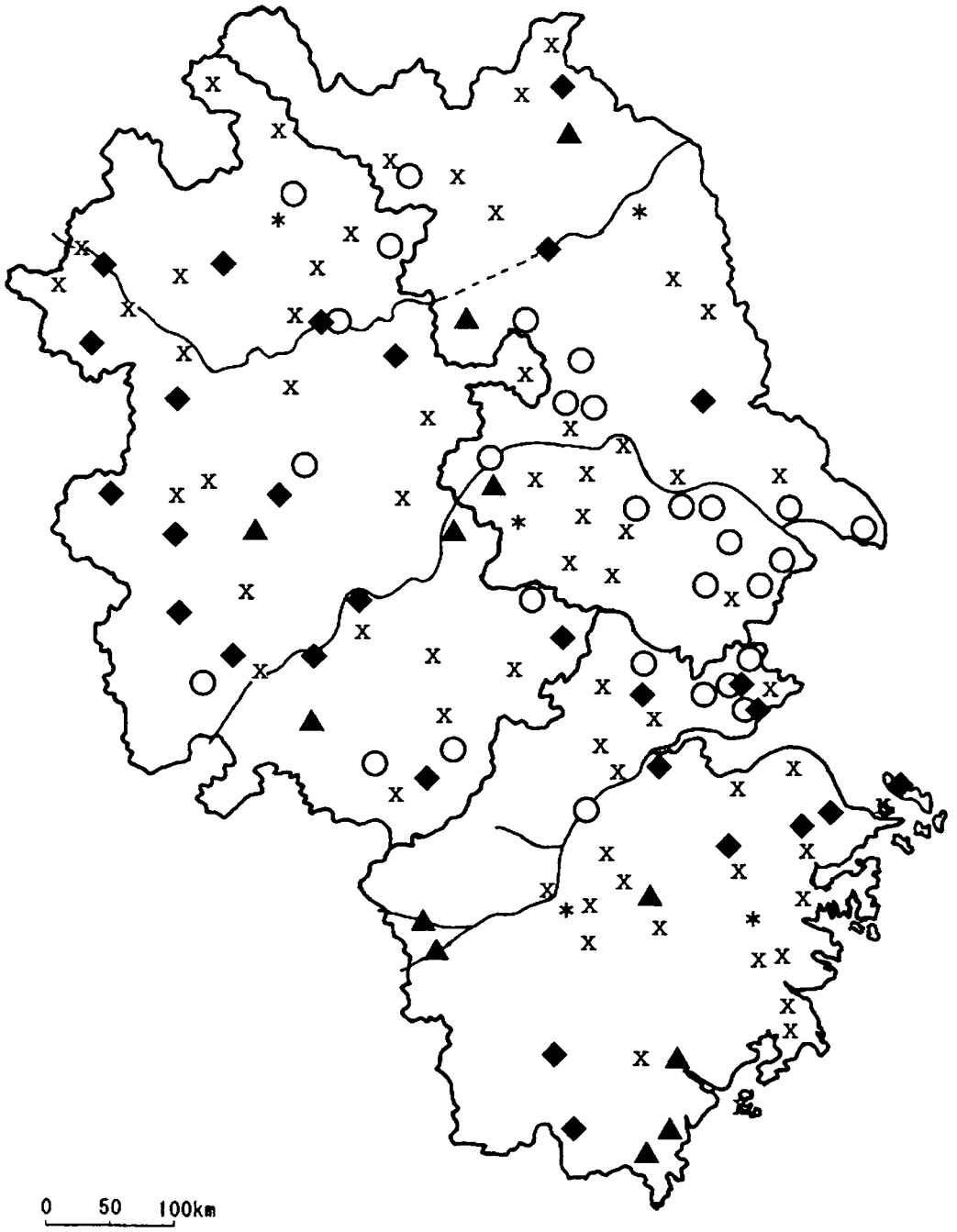
（地図 1）安徽・江蘇・浙江三省調査地点



（地図 2）《開面》を行う時期

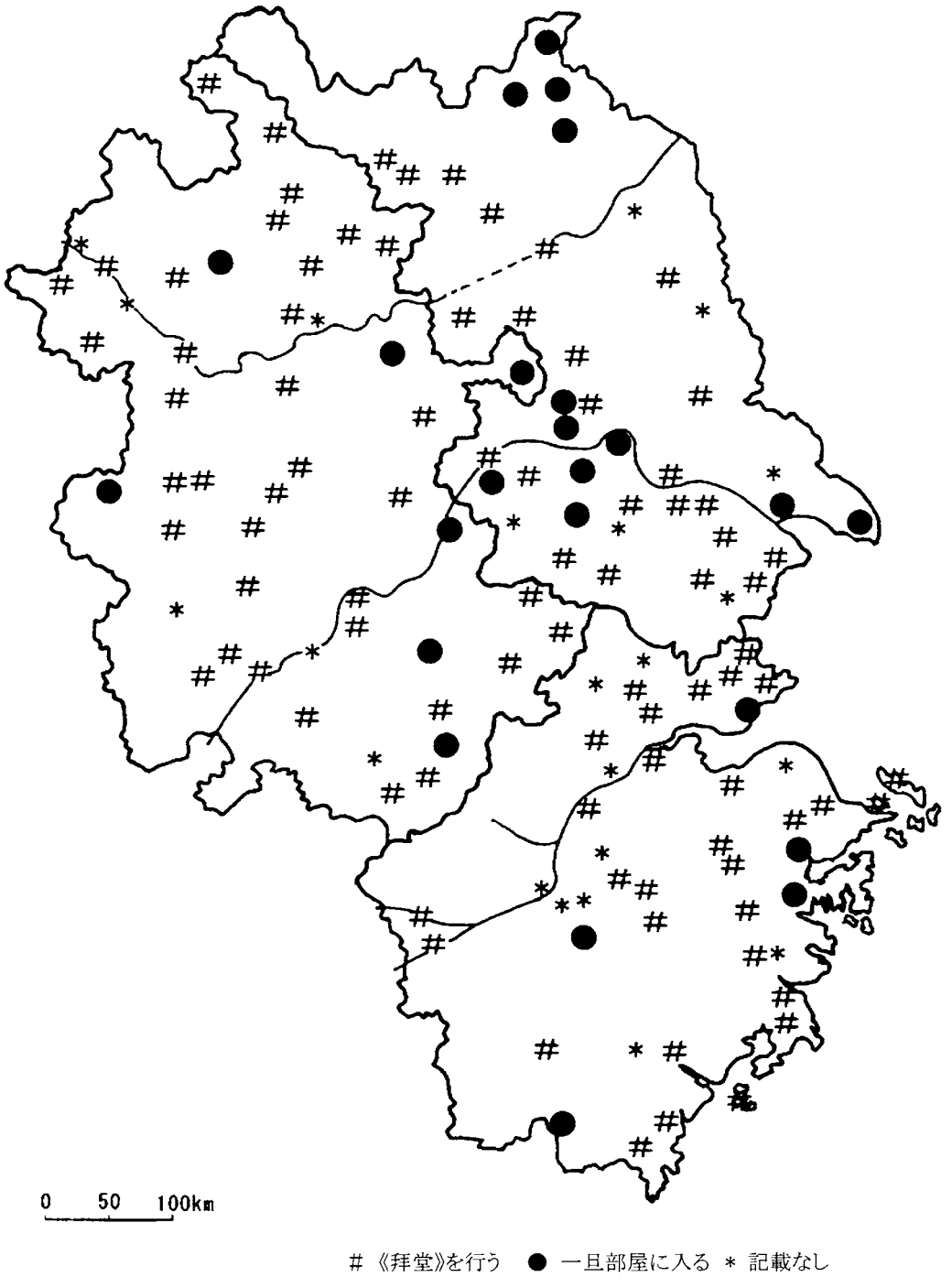


（地図 3)《迎親》時、新郎の同行の有無

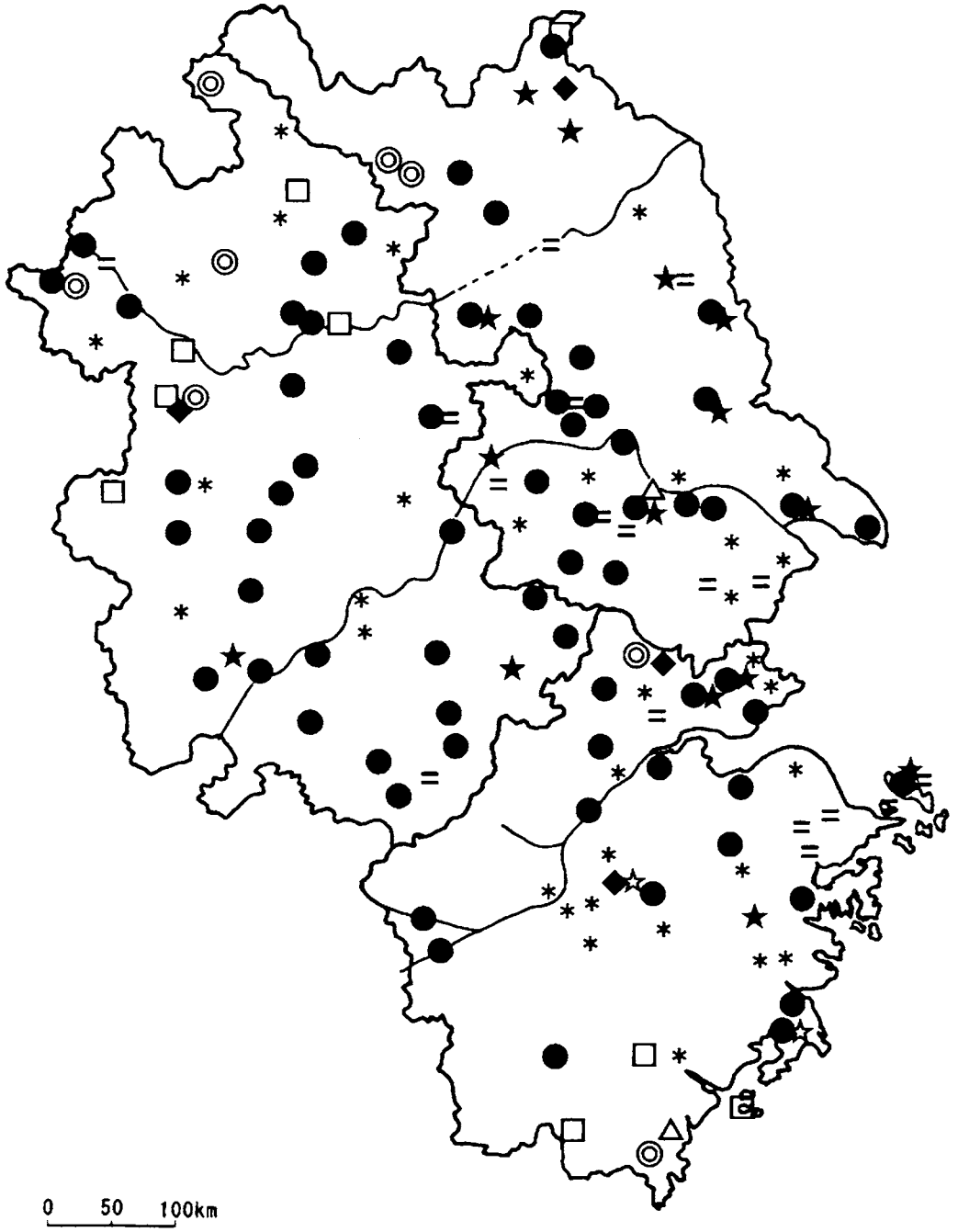


○ 同行する ◆ 同行しない ▲ おそらく同行しない
X 同行するかどうか不明 ＊ 記載なし

（地図 4）男方到着後、新婦が轎から降りた後

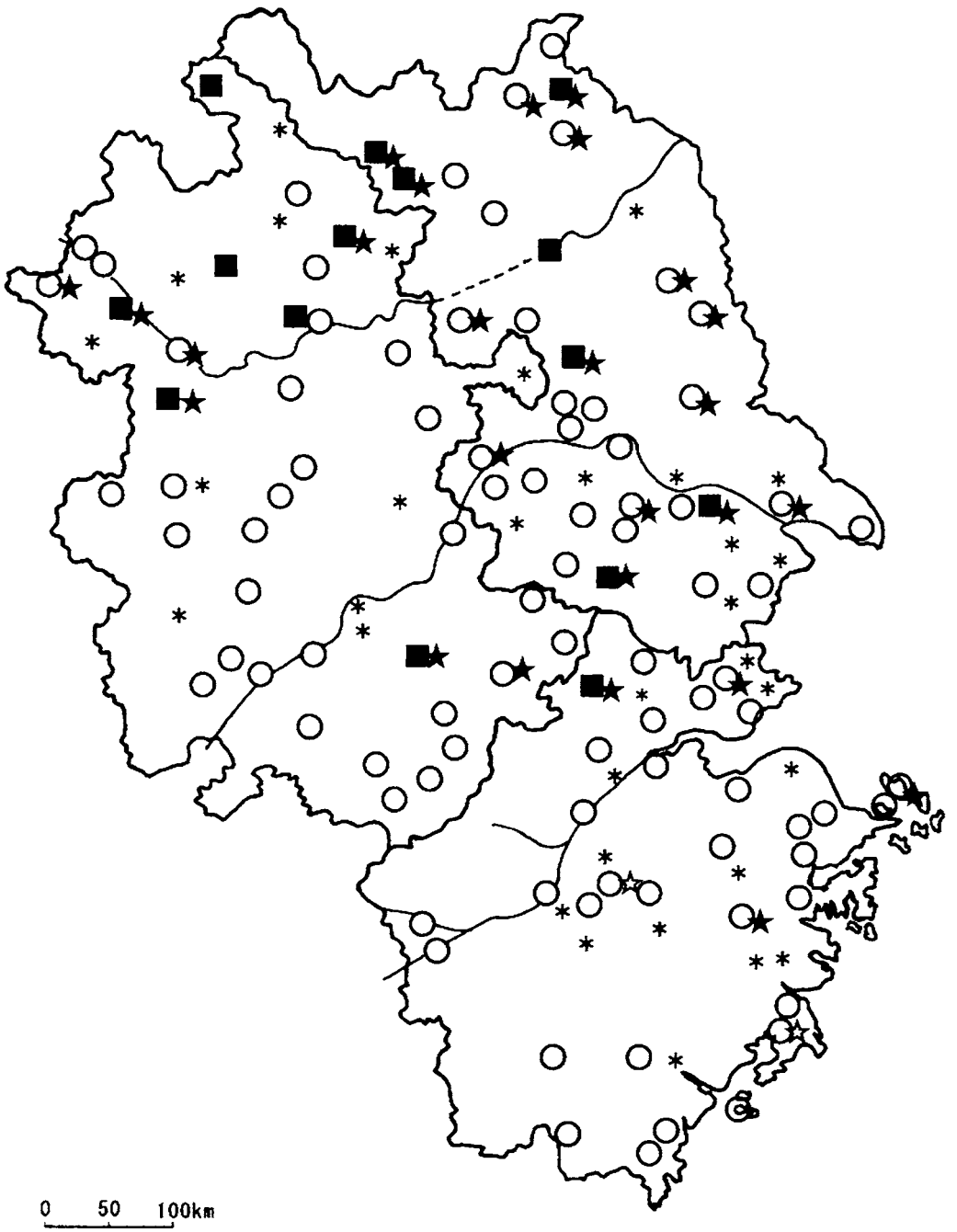


(也図 5)《回門》



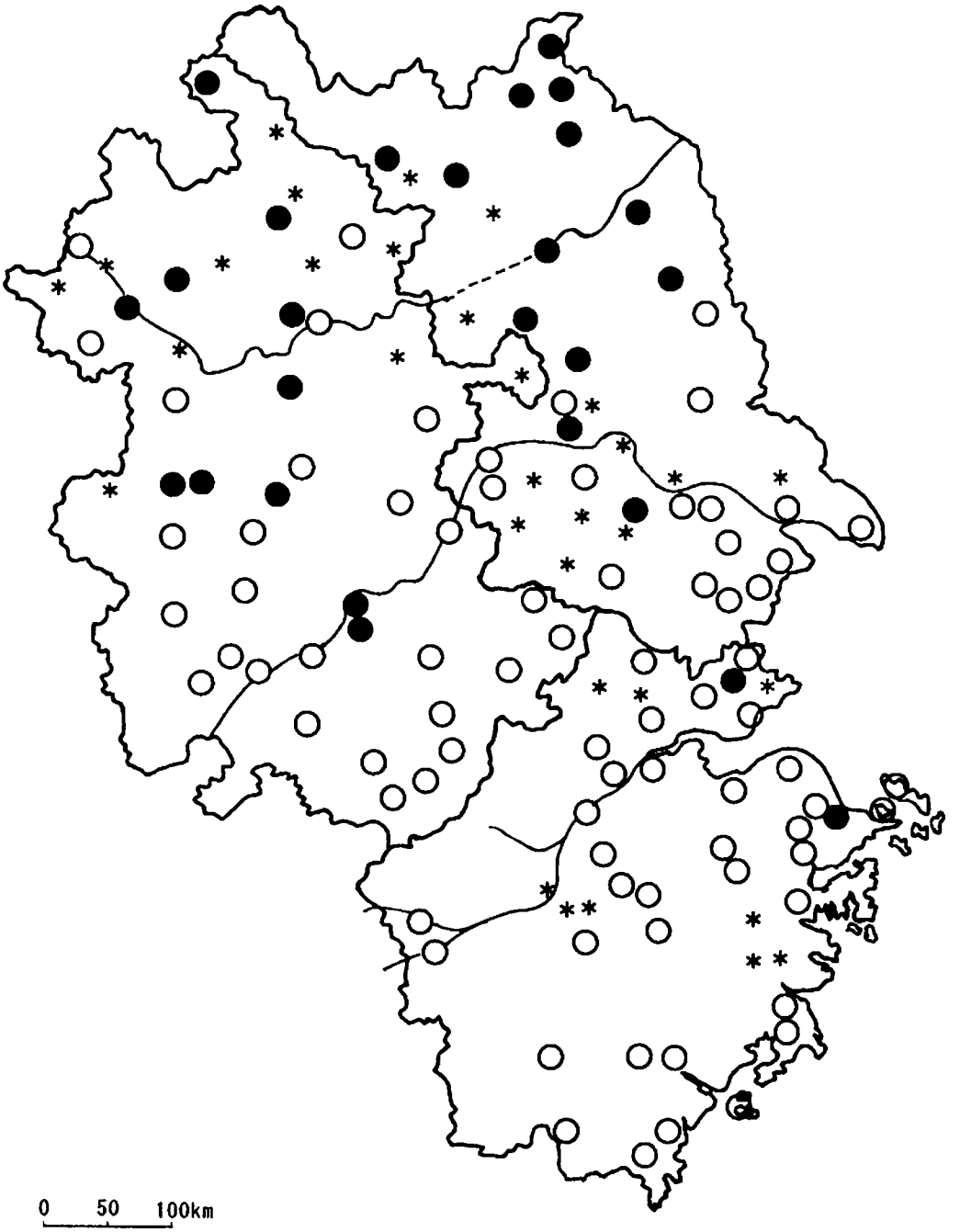
= 2日目、或は当日　● 3日目　◆ 4日目　△ 5日目　◎ 6日目
□ 7日目以降、1か月までの間　★《満月》後　＊ 記載なし

(地図 6)《回門》の回数及び、《満月》後の《回門》



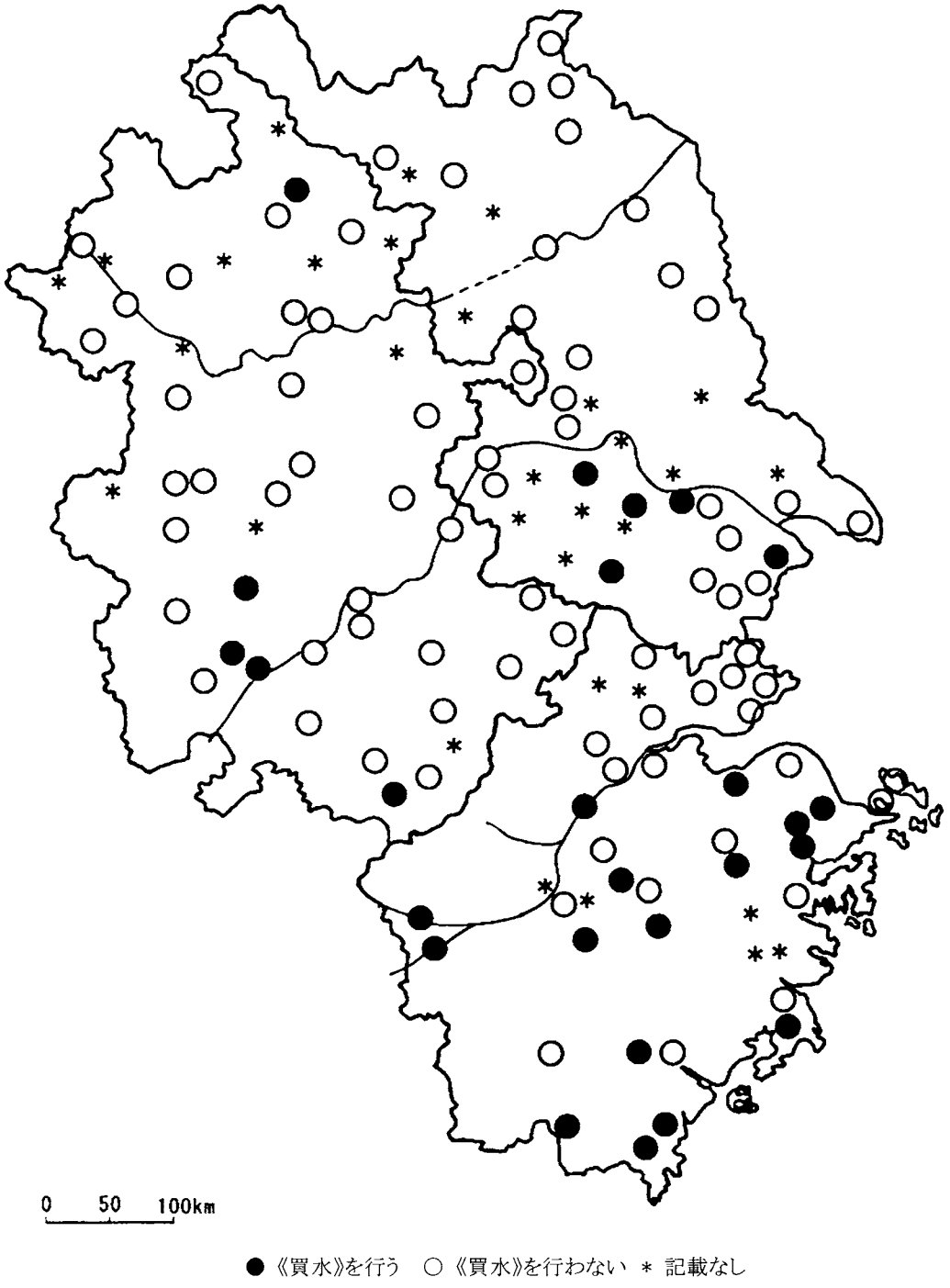
○ 単数回　■ 複数回　★《満月》後に行う　＊ 記載なし

（地図 7)《壽衣》への着替え



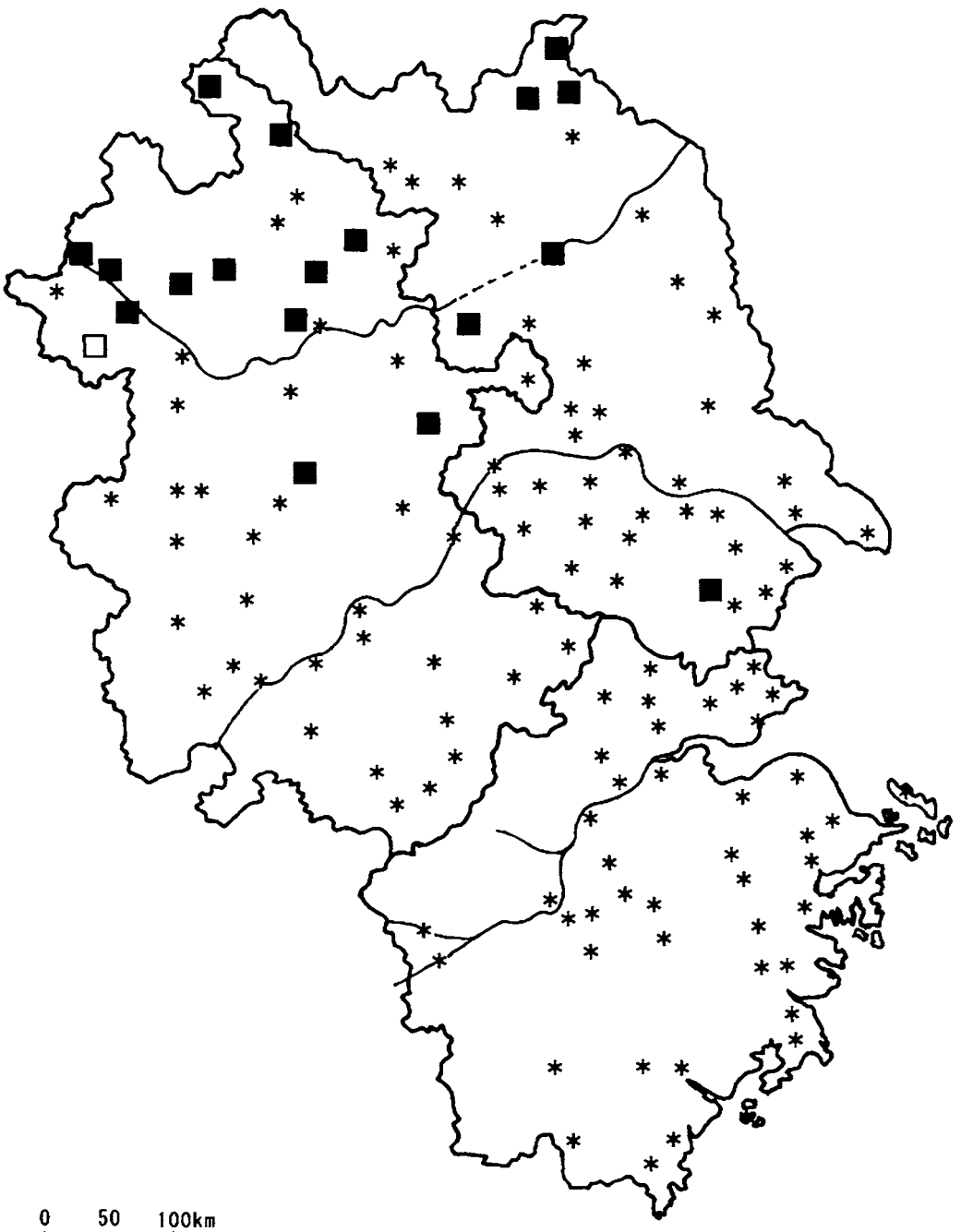
● 臨終前に着せる ○ 死亡後に着せる ＊ 記載なし

(地図 8)《買水》の有無



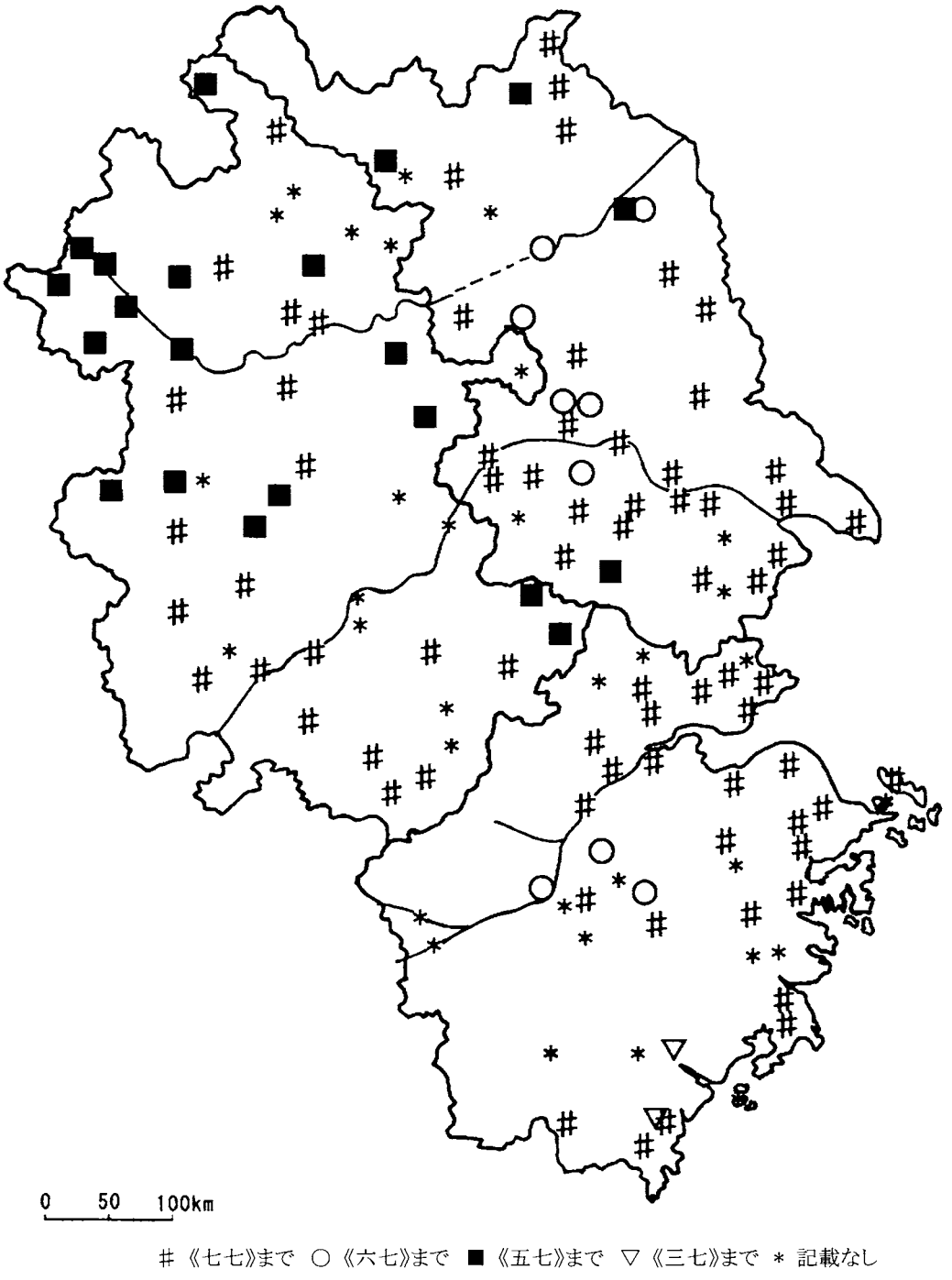
● 《買水》を行う　○ 《買水》を行わない　＊ 記載なし

（地図 9）出棺時、《老盆》を割る

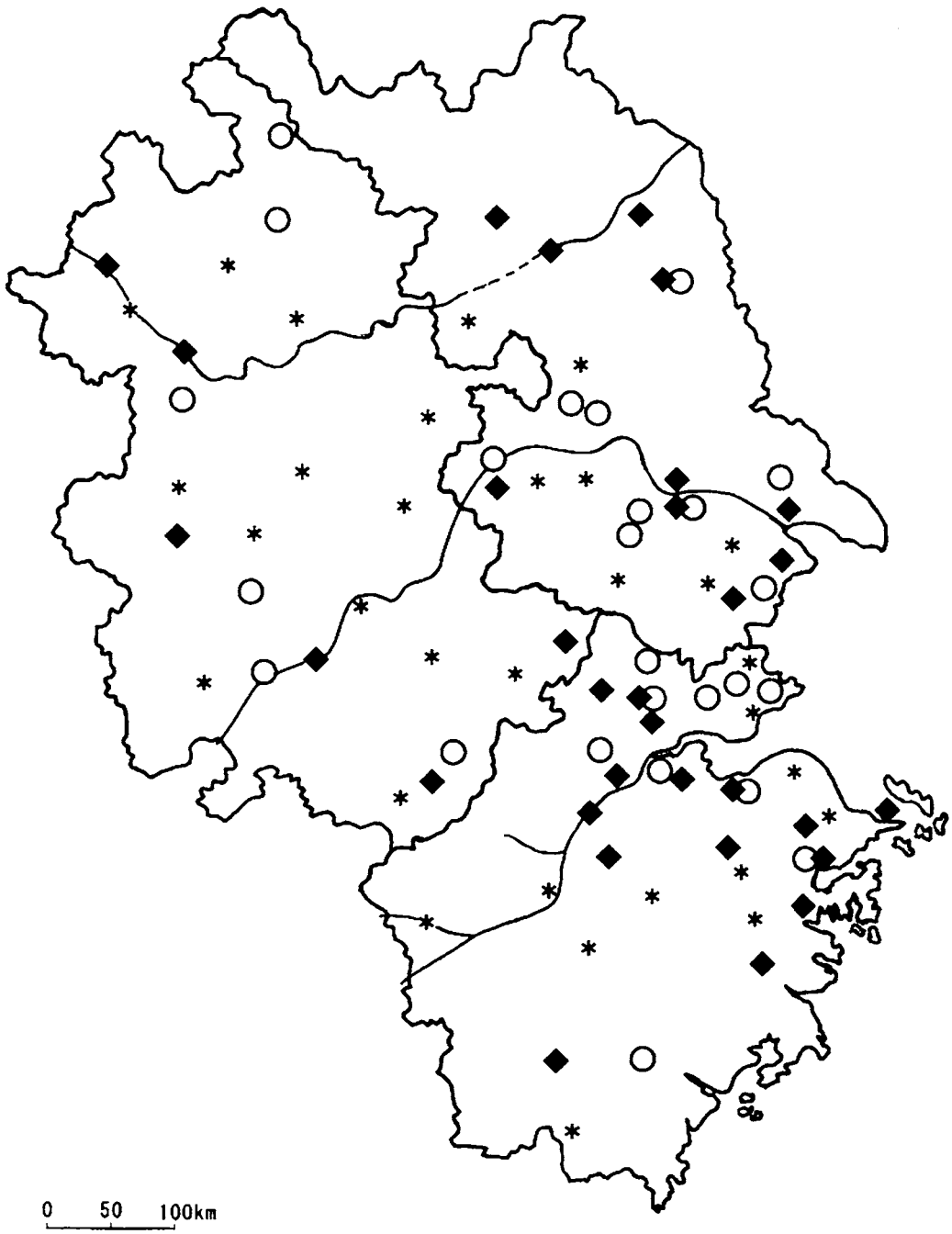


■《老盆》を割る □《老盆》を墓地へ持って行く ＊ 記載なし

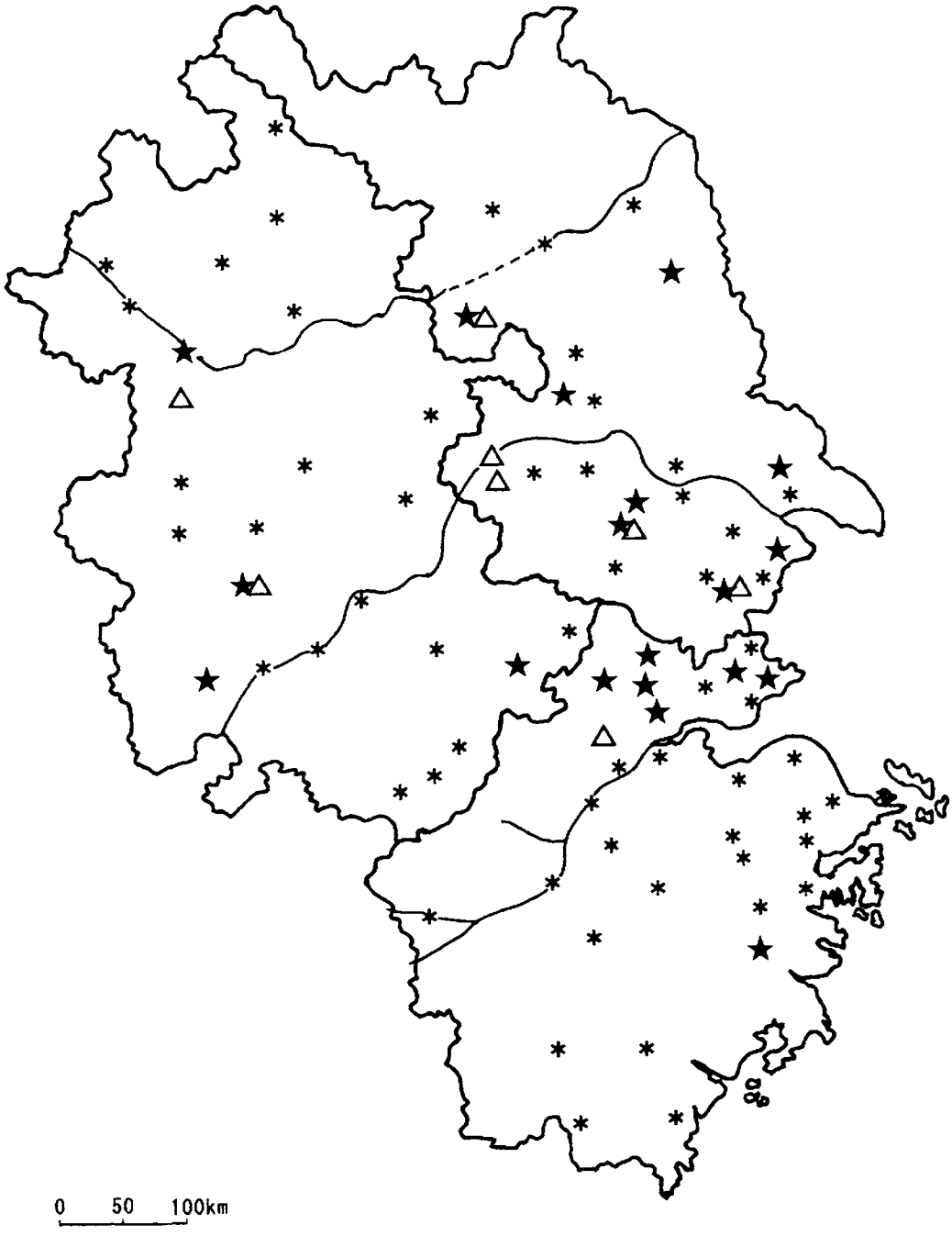
(地図 10)《做七》



地図 11）清代・民国期 《迎親》時、新郎の同行の有無



(地図 12)清代・民国期 《回門》



★《滿月》後に行う △《滿月》までに行う ＊ 記載なし